

奇譚クラブ

新時代の風俗雑誌



奇譚クラブ

発行所 東京 東京新聞社



☆ 縄を纏った女体美の探求 ☆

◎ 鎖を纏った女 ◎

豊満な白濁のような女体の肌を喰い入ったくさりな鎖し出す奇妙なコントラスト。鎖を纏った女体の美しさを追求して、ここに五枚一組の写真集二組を完成しました。

第一組（五枚一組）二百円（送料共）
第二組（五枚一組）二百円（送料共）

愛好者の方々の絶大な讃美を受けて貴重なコレクションとしての役目を果たして参りました本誌特約の纏られた女の写真は、随分引續いて参つた愛麗美と緊縛美の新作品を加えて参りましたが、今回更に新しい構想と斬新なアイデアにより、好事家御殿の傑作の完成に成功致しました。愛麗美サビレスとして東貴にて分譲したいと思ひますので多少に拘らず是非お申込下さるようお願い致します。

☆ 吊り三態特選集三枚一組 ☆

★ 一組 新作

隨着特約の吊り責め、鞭打、道具を用いたもの、鎖を用いたもの、等其の他緊縛の美しさの表現に意を注いだ作品を多く含めました。一度御覧下さい。

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

これは過去に一度も発表したことのない、特約撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから御覧することはありません。

三枚一組キヤビ本版五百円（送料共）

◎ 懸われる女 ◎

（シリーズ十二態）

緊縛美の断片



女にんを操

子玲当世



口絵 くすぐられる女

喜多玲子・画

口絵 緊縛美の考察

後手と高手小手について

(辻村 隆・構成)
塚本鉄三・撮影

集白の告白

搾衣 (續少年矯正院体験記) 獄 收一 (20)

神の酒を手に入れる方法 沼 正三 (23)

肥満体への郷愁 麻生津和夫 (26)

乗馬服と長靴と鞭 森本愛造 (30)

不思議な拷問 有馬稻高 (33)

私の新婚生活 島村康雄 (37)

開花の契機 信太蓉子 (41)

キヤメラ愛好會

岡田咲子 (114)

妓 (おんな) の影 (かげ)

泉 辰之助 (46)

交感 支配者と被支配者

藤安節子 (72)

責めの美的表現

波多野 新 (141)

(映画・演劇・小説に現れた責め)

らぶ・すれいぶ (第4回)

鬼山絢策 (78)

春婦哀歡 (飛田の娼婦たち)

花村鶴二 (56)

新裸体狂崇論

七條美樹子 (66)

ゆうべ見た夢 (續つた日記帳より)

川端多奈子 (54)

續・囚衣

古川裕子 (138)

キレー紙の女

佐々木 直 (38)

地獄繪行脚

長岡変一郎 (92)

美少年の死

岡 真史郎 (100)

恍惚境と法悦境

高取辰治 (110)

切腹史談 (三)

中康弘道 (148)

緊縛女優列傳

縛られた女優たち (三)

升岡 金吉 (156)

風流猿轡

吾妻 新 (160)

人獸交婚譚 異 婚抄

山崎 浩平 (163)

或る家庭教師の告白

角田 平八 (62)

淫 火

みだらび

(第四回)

松井 頼子 (168)
画・喜多玲子



玲子

後手と高手小手

による

緊縛美の考察



人を縛る際には後手に縛るといいうのが古来定石のようになっていたが、捕縛という目的から言えばこれは当然のことであろう。然し緊縛による女体の美しさの探求を目的とした場合は果して如何なものであろう。講談等ではすぐ高手小手に縛り上げて——という文句が出てくる。この高手小手というのを、漢和辞典でひいてみると、(人の両手をうしろ手にねじ上げてきびしく縛ること)とある。

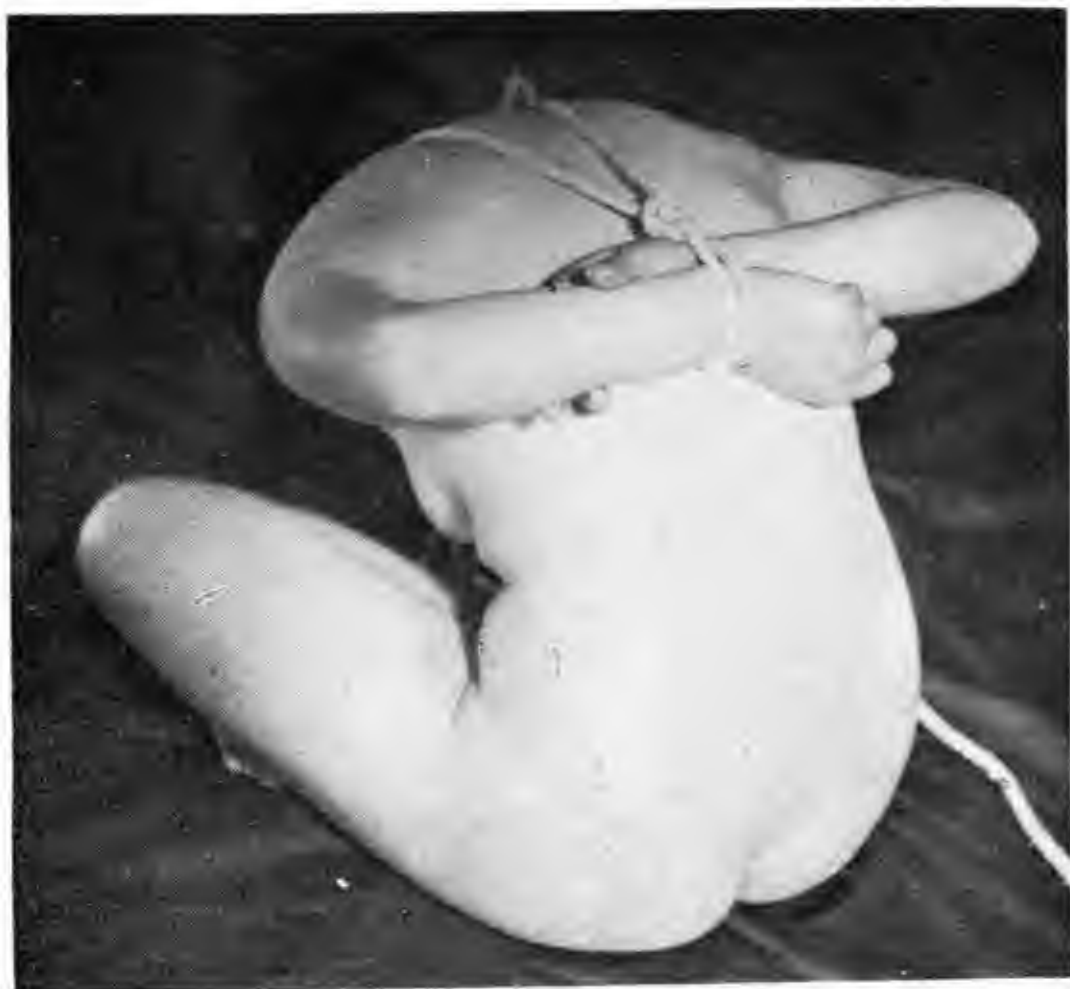
捕縛のかけ方についていろいろの方法が書き残されてあるが、これはあくまで逃亡を防ぐのを第一目的としているから、参考になることはなつても、緊縛美の追求を目的とした縛り方とは自ら違つたものがあるのは当然である。即ち肉体の線の美しさまでも崩してしまふ減茶苦茶に繩をぐる／＼巻きにするようなやり方は此の際敬遠することにする。

緊縛の中で最初に考えられることは肌にひし／＼と喰い込むばかりの繩目による強い緊縛感であろう。この点、両手首が最も頭に近く上げられている高手小手が後手の中でも特に珍重される所以であらうと思推されるが、以下実際に川端多奈子嬢を煩して各種の場合を考察してみることしよう。

成 映 構 撮 隆 三 村 鉄 辻 塚

先ずうしろ手に縛られた女の美しさ——について第一番に注目されるのは合された両手首にかゝつた縄であろう。これが同じうしろ手といつてもだらりとお尻のあたり迄力を抜いてたらしただけでは緊縛感は少しも出てこない。それで左の写真の通り、両手首に二重に巻いて括つた縄を首へ廻して肘は出来るだけ外廓へ張つた方が美しく見えるものである。

首縄をかけて両手首を水平に近く保持して更に手首を吊り上げるために前屈みにした所が参考の写真のポーズである。手首では比較に便のために



左手は伸し、右手は固く握つて貰つた。この際の二の腕や肩の筋肉の盛り上り等もクローズアップしたが発表のスペースがないのが残念である。下の写真では二の腕から胸へかけて二重に縄を巻いて出来る限り手首を上へ上げることに努めたが、このまゝでは肘が水平になる迄には至らなかつた。只二の腕から胸へ巻いた縄によつて腕に喰い込む細目が僅かに緊縛感をあらわしているが高手小手という狙いからは遠く離れている感じた。両手は出来るだけ力を入れて握つて貰つた。





こゝに着衣ではあるが高手小手に首縄をかけて、更に二の腕から両足首へ縄尻を連ねて手首を最大限上げた写真を示す。写真の下はそのまゝで横にころがした所である。共に両手首は水平以上に頭に近くなっている。着衣のため折角高手小手に縛り上げながら二の腕の肌に喰い込む縄目を見る事が出来ないのが、残念であるが、これはボーズの性質上悪しからず御諒承を乞うておく。





この写真は胸へ巻いた縄を解いて、両側の二の腕へ手首の縄尻を逆八の字に分けて括つてみた。手首の下るのを防ぐ意味だけで二の腕に吊り上げたのであれば、これは肘の上り方が少く高手小手というのには遠い。然し交叉された両手首、左右に張つた両肘、それに二の腕と手首とを連ねる縄とのシンメトリカルな美しさが後手に緊縛されることによつて、こゝに醸し出されている。後に示した写真にあるように縄を沢山使用したものより却つてこのように簡単な縛り方の方が緊縛感を現していると言うこともいえる。

後手の単調さを破るために竹の棒を一本肘に括りつけた。繩は丁度菱形になつて棒のために肘は一段と外側へせり出している。棒の使い方にまだ／＼各種の技法がある筈だが、對者に酷い苦痛を与えるようなものはとらない事にした。この点生ぬるいとか遊びであるとか遊戯であるとかの批評があると思うが、只今のところ一応それは甘んじてお受けしておく。



こんな縄の掛け方は如何
ですか、いさゝか縄が多過
ぎるくらいはありますが、
首へかけた縄で両方の二の
腕を締めつけ、更に両手首
へ連繫させたもので、胸に
は故意に全然縄を廻さなか
った。これは両腕がぐつと
せばめられて後に張られて
いるので後手の中でも緊縛
感が特に強くあらわれてい
るものの一つであると思う





これは右の写真の姿勢から前に押し倒した時にパチリとやったもので両腕は更に一層両側へ締めつけられ二の腕に縄目が喰い込んでいる。このまゝの姿勢では自分独りで起き上がることは不可能である。



肘に竹の棒を通した後手のまゝ、両膝を開かせ棒を持つて前に押し倒した姿勢で上体は頭で支えている。丁度土下座した恰好で両手だけが後手につちり縛られているのである。竹の棒がつかえるので横になる事も出来ず、さりとて上体を上げる事も出来ないという束縛の形である。両手首が深く交叉して括られているので肘に挿入された棒と相俟つて緊張の美しさがうかがわれる。

奇 譚 ク ラ ブ

四 月 号

(第七卷第四号通刊第五十四号)

新 時 代 の 風 俗 雜 誌

「僧院の所得」 中世紀から近世に到る寺院、就中僧院の生活が如何に糜爛を極めたものであつたかは女人禁制であるべき僧院の前に遊女が跋扈したり、寺院内で密通が行われる如きは敢て不思議でなかつた。これは僧院の火事によつて日常の所業が暴露された一瞬を描いたものである。



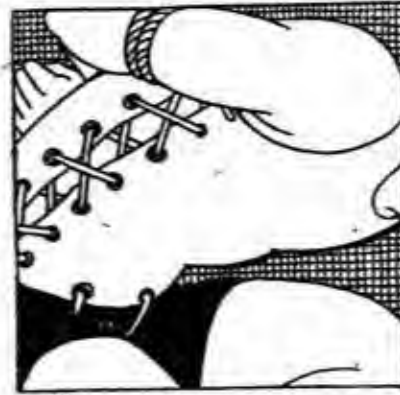


まえがき

誰でも自己のあから
さまな私生活の秘密
を公開するというこ

とは余程の勇氣と決断力のいることです。それが一瞬の激
情にかられてするとか憤怒によつて前後のみさかきもなく
書きなぐるものであつたら、まだしもの事、自己の過去現
在の行状を冷静に客観化してそれを文章に書き表すという

事は並大抵の決意では出来るものではありません。人は虚
栄心とか見栄外聞によつて生活していると云つても過言で
ない程なのですから、その意味でここに掲げた偽りない告
白記は唯一無二の貴重な文献として世に誇るに足るものだ
と信じます。我々は虚偽とか誇張とか宣伝とかには飽々と
してきました。この真実と真面目さに満ち溢れた文章こそ
それ等に対する無言の大きなレジスタンスだと思ひます。



搾

衣

(續少年矯正院体験記)

獄

收

一

この前の少年矯正院体験記を書きましたが、そのうちで一
番苦しかったことを書いて読者諸兄の御批評をいただきたい
と存じます。

前もつて申し上げますが、私の入れられた矯正院は某植民
地にあつたのと、又戦時中であつたのでその囚人に対する取
扱いは日本の内地とは大分異つていますのであらかじめ御承
知下さい。私が作業中釘をひろつた事より暗室の中へ後手に
縛られて入られた事は十一月号に書きましたが、何時も裸の

まま後手に縛られていると、手首がはれるだけは大げさ
なようですが足の様な大きさになります。それで痛いし又苦
しいし何とかゆるめてくれる様、看守に頼むのですがそうす
ると「よし」と答えて余計しめるので全く地獄でした。これ
が一番苦しいと思つて居りましたらこれ位の事は何でもない
程のひどい目にあわされたのです。

やつと暗室の刑が終り又監房にもどつた時もう手ははれる
だけはれて思うように動かせません、それでも翌朝になると



作業にひきずり出されるのです。そして土工をやらされます。鶴はしをもたされても、シャベルを持たされても使えるわけがありません。おまけに何日も暗い所に入れられて目の目も見ぬ矢先、急にしかも強烈な太陽の光に照されたのでは一たまりもなく意識不明となり倒れてしまったのです。処が看守の中では平素から私をよく思っていないのが此の時とばかり意識不明で倒れているものを承知の上で、靴でふんだりけつたりしたそうです。処がかすかに意識がよみがえり、「水をくれ」と言う意味のことを言つた様に思います。そうすると、よくもなんともないのに看守の目をごまかそうと仮病を使つたなどでもない奴だ今日は思い知る迄こらしめてやる。と言つて立てないのを其の場からひきずつて罰室迄連れて来ました。具合の悪いことに此処迄来た時は意識がどうやらよみがえつたので、増々仮病を使つたことにされ、押衣の罰を申し渡されました。

押衣とは囚人に対する戒具の一つです。戒具とは次の五つを言います。一、捕縄、これは囚人となれば誰もが用いられるもの。二、手錠、これも捕縄と同じです。三、連鎖、之は幾人も護送するとか作業させる時必要な場合用います。四、防声具、大声を発したりさわいだりする囚人に用いるものであるぐつわとは違い丁度口へびつたりはまるマスクの様なものです。五、鎮静衣、今はこう申しますが昔は押衣と申しました。普通の監獄で用いられるものはズツクの袋のようなもので囚人の首と足首を出してすっぽり袋の中へ押し込まれたようなものが現在では用いられている様で昔に比べれば

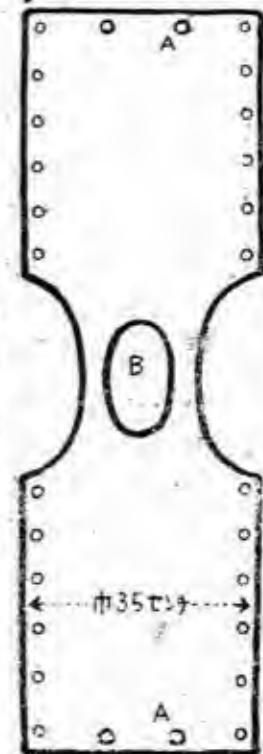
何でもありません。これは気狂病院でもよく用いるそうです。昔は丁度チョッキのようなもので手と足がすっぽりチョッキにはまる様なものと、胸をしめるものと二通りあつたようです。

さて私は押衣を着る刑を申渡され第一図の様なズツク製のものを持つて来られ、真中に首を入れると同時に後手に縛られました。どうするかと思つていますと、やがて細い麻縄をもつて来て両脇を編み始められた時にはぎよつとしました。図を見ればわかります通り之は後から聞いたのですが刑具の幅は三五幅しかありません。これが二枚で七〇幅です。そうすると私の胸囲は当時八五幅ですからどうしても十五幅不足です。つまり十五幅だけしめられるのです。刑具の幅は受刑者の胸囲により準備されますが、しめしるは両脇とも十幅とつてあるらしいのです。やがて一通り麻縄を通されいよいよ刑が行われました。先づ股の下を通つていて線をしめるだけしめそして止めます。すると股の下がやける様に痛いのです。次に看守が二人で左右より脇の下より順次下へ向つてしめるのです。しかも一度終つたら又一度というように次第／＼にしめられるのです。だんだん息が苦しくなります。すると今度は後手をもう一度きつく縛り上げます。そして再び脇の方を両方よりしめ上げます。もうズツクの刑具は体をしめ上げて、肌に食い込み目の玉が飛び出る程です。もう息をするのも苦しく、ただうめき声が出るばかりです。心臓が脈打つのもはつきり意識できます。脈もだんだん早くなり今にも心臓が破裂しそうです。頭はがんがなり目がくらみそうです。

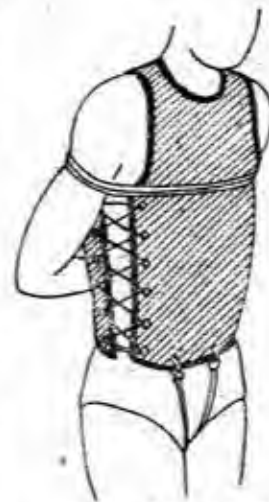


告白の倒錯

(A) この穴に麻縄を通し股の下をくぐらせてしめる
鳩目の金具の付いた穴ここに麻縄を通してしめる



(B) は首を入れる穴



袴衣の巾は受刑者の胸圍により異なりせめてこの種のしめしうをきつたものが用意されるのである

の囚人番号) がとても息が苦しくて返事どころではありません。今にも倒れそうです。

処が看守は「おかしくて返事が出来なければそのまま立つておれ」と言い柱につないで出て行きました。息はますます苦しく腋の下は油汗がにじみ出てきます。だんだんと意識がうすらいでゆきます。何時間たつたでしょう。実際は三十分位だつたそうです。いきなりけとばされはつとして目がさめると私はつながれたまま倒れて居り側には看守がおそろしい顔で立つて居ます。看守は「誰が寝てもよいと言つた又仮病を使うな、立て。」と言いはげしくけとばしますので一生懸命立とうとしますが息苦しくて立てません。全く地獄です。やつと正坐をしましたら、「よし、それ程なまけるなら思い知

看守は「こら、二十四号、貴様がなまけるからこんなことだ。解つたか返事しろ」と申します。(二十四号とは私

らせてやる」と言い二人して私の体を抱え正坐したまま、後手より足の拇指に縄をとり、股、もも、もしばり丁度荷物のようにかゝえ防火用水の中へザブンとほうり込まれました。何時も暑い所ですから水に浸けられることはさほど思いませんでしたが、又、首は水より出ているから大したことはないと思つて囚人根生とでも言いましょうか、勝手にしろと思つていました。所が次の瞬間恐るべき現象がおきたのです。つまり刑具がズツクですから水の中に入つて徐々に縮み始めたのです。そうでなくても苦しいのに一度に体がしまるのですからもうたまつたものではありません。息が丁度脈のようにはずんで来ます。もう目もかすみ目の前が真白になりかけると同時に今迄苦しかつた肌に食いこんでる刑具が何とも言えぬうつとりした気持になると同時に、丁度体がふつと軽くなつた様な気がして何とも言えぬよい気持になると一緒に何もわからなくなつてしまいました。つまりこの時先程目生えた私のマゾヒズムの為気絶する瞬間××したのです。

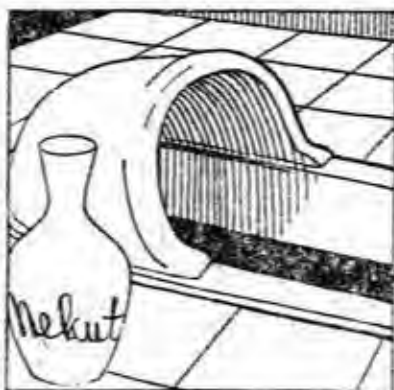
やがて気がつくとも真裸のまま刑具はとつてありましたが、(禪もなく) 手も足も縛られて湯の中へほうと込まれていました。矢張息が苦しくてなりません。後で又引出されて、「どうだ体の工合は」尋ねられた時いてもたつても居れぬ様な気持でしたのでその旨申しますと、又なまけるかとなくられましたがやがて医者の所へ全裸体のまゝつれてゆかれ診断された所、「狭心症」になつて居ること注射してもらいました。後で看守が「少々やりすぎたか」とか言つていましたが全く無茶な話です。おかげで十日間安静を命ぜられました



たが、三日位全く苦しく、よく水にたゝき込まれた夢を見てうなされてしうがありませんでした。十日もすればどうやら治りました。

全快してからも搾衣のおそろしさをしみじみ知ると同時に水責の中の快感が後に残つてしうがありませんでした。今も当時のことを忘れられません。今一つ読者の皆様に御批判を頂きたいことがあります。又この次にのべさして頂きたいよう。

とに角十一月号でのべました様に出獄後マゾヒズムの性癖



ネクター 神の酒を手に入れる方法

——芳野眉美君に——

沼 正 三

芳野君。「孤独なファンタジー」で知つた君の名を又「硝子便所」で見ました。「あゝ女の尿が飲みたい。」と君はためらわず書いています。その切実な心の声に打たれるものがあるので僕はこれを書く気になりました。君の文章に数年前の僕を見出したからです。僕は君を救いたい。然もそれは「昇華」などというごまかしではない。メフィストソエレスではないが君に望み通りの飲物を心ゆく迄飲ませてやろうというのです。僕は自分でこれを、ネクターとよんでいます。す

がぬけきらず毎日悩んで居ります。監獄で着せられたような赤のランニングシャツ（それも肌に食入るようなものでなくてはなりません）を着、サポーターでぎゆうと股をしめ、そして赤のパンツをはき体格のよい男性に後手に身動きも出来ないように縛り上げられ、監獄で受けたような拷問をして頂きたいのです。

どうかこういう条件のお好きな方のお便りをお待ちして居ります。

べての人の知らぬ珍味。一度味つたものは遂にその魅力から免れえぬ珍味。これは神の酒というにふさわしい。

僕は自分の体験を素直に書いてみる事にしましょう。それがそのまゝ君に対する秘法の伝授にもなるでしょうから。

大学時代、私は東京中野のある素人下宿に下宿していました。若い夫婦に子供一人の家族。主人は安サラーマンで、収入の不足を学生に部屋を貸して補っているというよくあるケースでした。四間家で私は一寸離れた六帖を借りていま



告白の倒錯

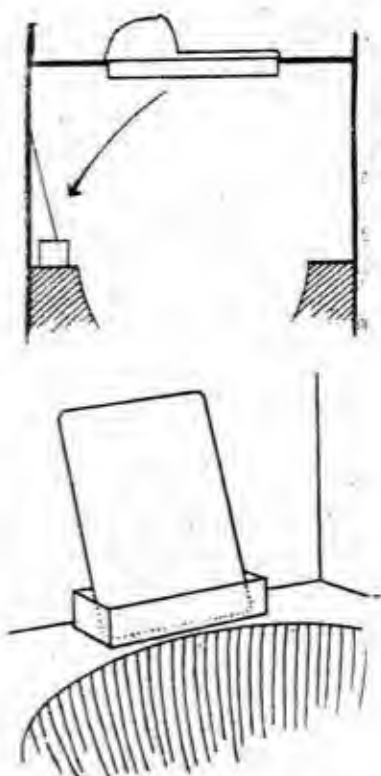
した。この細君が美人で、しかも主人を尻に敷いているひとでした。私の目の前でも主人を遠慮なくときつかう。朝起きるのも主人が早いし、帰つて来てからも家事を出来るだけ引受けている。細君は赤ん坊の世話というのが口実で尻が重い。御察しがつくでしょうが私はマゾヒストですからこういう支配的女性を見ると甚だしく魅力を感じるので。勿論私もまた彼女の指揮下に入るべく努力しました。朝主人と一緒に先に起きて、見かねて拭掃除を手伝うというような仕方ではじめましたが、それが何時か彼女にも当然の事として期待されるようになり、講義のない日は家にいる事が多いので、使い易いことが分つて来てからは全く下男扱いされたものです。それが私には楽しかった。然し今はそのことを書くというのではありませんからその詳細は省略しましょう。とにかくこの志願下男の毎日が続いた頃、私は彼女（S子としましょう）に対する隷属の意識を高めるべく色々の技巧を弄しました。外出の留守番を頼まれた間に押入から汚れ物をさがし出して怪しからぬ振舞に及んだこともあります。が、その技巧の第一は便所への仕掛だつたのです。ごくあり来りの建築で便所も大小便所が各四分の一坪宛、大便所は下に壺を埋めてその周縁をセメントでふさいであるといった普通の型でした。狭い家ですから、彼女が用便に入ると、戸がしまつていてもしぶきの音が聞えて来ます。芳野君、その度に私は君と同じように胸をとどろかしたことです。

私は先ず周縁のセメント部分の中、前方の部分に紙を散らして見ました。そして彼女の落ませたあとから入つて懐中電

燈で調べました。濡れています。つまり、S子の尿流は、すぐ下の便壺に入つてしまうのではなく（勢いのよい時だけでもせよ）、壺の前縁にも充分注がれるという事が分つたのです。電燈で調べると、その上の壁（つまり便所の床にある掃出し窓のすぐ下にある壁）は矢張りセメントでしたが、これも大分上の方まで濡れているのでした。そして、大切な事ですが、この壁の部分は勿論、前縁の平らな部分も普通に便器の上にしやがんだのでは見えないという事です。ですからこゝに何かの仕掛があつたとしても、特に便器から下をのぞき込まぬ限り分るものでないのです。（暗いから見えないということもあまり期待できません、目がなれて来ますから。）

私は先ず文房具屋で郵便整理用の壁吊りを買つて来ました。よくある奴です。幅十五櫃高三十五櫃位でハガキや封筒を三段位に仕訳けられるよう前面に袋がつけられ、柱に釘でつる様になつています。私はこれを祕かに便壺前方の幅七、八櫃のセメントの縁の上に立てかけて見ました。S子が便所に入つた時、いつもよりもペラペラとしぶきのする音が強いよう、胸がときめきました。がやがてS子は何事も知らずで来ました。一寸おいて入ります。こわごわ取出して見ると濡れて重い、見よ一番下の仕切りの袋にはこぼれるばかり入っています。然しこの時失敗したというのはこの容器はそれから飲むのに便利に出来てない事で、下手に傾けて私は服を濡らしました。あとで考えればストローを用意すればよかったのです。

第一回の実験の結果に氣をよくして、僕はもつと能率のよ



い採集容器
を考案しま
した。芳野
君。君は受
験生のよう
ですね。英
語の単語カ

ードを五、六〇〇枚も入れる金属製の容器（高五櫃位、幅七櫃位、長十八櫃位のブリキ製）を御存じでしょうか。あれを使いました。取付けの蓋を外してしまいます。これでたつぷり二合入るのです。これを〇の前縁のセメントの部分に置いて尿を受けるわけです。然し壁に当たった尿流は汚ないものを洗い落しますから、これは入れたくない。そこで、壁に代るものとしてセルロイド製の大型下敷（十八櫃×二十六櫃）を買って来ました。この幅が殆んど前のカード容器の長さと同じですが、もし下敷の幅が大きければ合う迄寸をつめます。そうすると、容器を床と壁との直角をなす所に横に置き、それに下敷を縦にして下方丈容器の中に入れ下方を多少（容器の縦幅丈）前に引出すと、下敷は少し斜に壁にもたれかかり鏡台の鏡みたいな角度に仰向くでしょう。これを使壺の前縁の水平部分と垂直の壁との角にそのまゝ移せば良いのです。セルロイドの面にあたった液体はそのまま容器の中に入ります。以上分り難いかも知れませんが図を見て下さい。

こんな簡単な二つのものの組合せで、芳野君、私はそれ以後毎日自由自在にS子のネクターを満喫する事ができたの

です。いつもすぐ入代りに入つては怪しまれますから、三度に二度位にし、時には冷え切つたのを飲んで見ますが、矢張ネクターの本当の味はおカンのついた時、即ちすぐ入れ代つた時です。ユリシーズの十五挿話に娼家の女主人ベラがベロバブルームにしびんの掃除を命じて、「ポツポと熱いのを飲んだらいい。」というところがありますが、ネクターはポツポと熱いのが一番いいのです。それからこれこそ文字通りの神酒というべき珍味は、飲酒した後のものです。S子は外の酒は駄目でしたがビールだけは大好きで、夏になると良く飲みました。このあとの容器の中の液体こそ、芳野君、君に味わせたいものの随一です。こればかりは筆でかけない本当に飲んだ人でなければ分りません。もともとホロ苦いしおからい液体に適度のアルコールが含まれ、一種異様の味わいです。又ズルフアミン剤のような化学薬品を使用した後のものは非常に苦いのが特徴です。月のものの間も一寸言い表わせませんが、味が変わります。

約三ヶ月毎日毎回呑み、その後は好きな時に飲むようになりました。人間は一日に七合七勺平均の尿を排出し、一回の量は一合六勺平均といわれます。僕の経験では夜明けの時には容器一杯二合なみなみとありましたし、あとは一日三、四回でしたが、必ずしも容器に一杯になつてなかつたようです。日によつてはS子の排出した全水分を飲んだのではないかと思ひますが僕の身体には少しの異常もありませんでした。通常の尿は無菌ですから、その方の心配は初めからせず、たゞ何といつても一旦人体が不要として排泄したものをもう一度



肥満体への郷愁

麻生津和夫

体内に摂取するのですから、その点で悪影響がないかと恐れ
たのですが直接血管にでも注射すればともかく、胃腸を経由
しての吸収には少しの危険も伴わぬ様です。

以上が僕の体験です。芳野君いかがですか。外の公衆便所
にうろつくより手近な便所にこの仕掛をされたらどうです。
自宅におられるのでは一寸困るかも知れませんが、それでも
お客さんで狙える人がありましよう。言う迄ありませんが
私はS子の所に来た女客のも充分味つています。その中には
ある事情でS子を訪れたA、K夫人（総理大臣に關係ある
有名な貴婦人）のもありました。これは今でも私の大切な思
い出の一つになつています。とにかく魅力を感じうる人と一
つ屋根の下に在る機会さえあればいいのです。東京の真中な
ら知らず、日本国中この仕掛のできない便所の方が少ない筈
です。一つ御注意申したいのは、この装置では下敷に尿流が
当る時はバラバラととても大きな音がします。大抵大丈夫で
すが、もし心配だつたら、予備工作として、先ず一、二回新
聞紙などを右の位置においてバラバラ音をさせ、（この時な

ら見られても何ともない）音に馴れさせておくと、いよいよ
仕掛けてもその時急に不思議に思うという事はないでしよ
う。大体育ちの良いレディは便器の下などのぞかぬものと考
えていて先ず失敗はないようですが。

芳野君。志ある所に道あります。この道の志は悪魔のもの
かも知れませんが、道高一尺魔高一丈、僕等は魔道に精進し
ましよう。ネクターは人の世の祕酒です。手の届く所にあ
りながら誰も気付かぬ青い鳥のように、誰にも手に入る筈で
あり乍ら味う人の少い、いやそれが酒であることすら知らぬ
人の多い酒なのです。（大便についての経験は今回は省略し
ます。）

右の一文が芳野君の参考となることを祈ります。もし前記
した僕の体験の更に詳細の点について説明を求められるので
あつたら、いくらでも詳しくお話し致します。

二十八年一月

芳野眉美君

沼 正三



私のこれから述べます自分の一風変つた心理が果して世の人の共感を呼ぶかどうか、それとも私の専売特許的な存在であるのかどうか、とにかく私は羞恥も見栄も外聞もななく捨てゝ素裸になつて書いてみたいと思います。

私は貴志川の清流の畔の農家に生を享けた本年二十八才の男子であります。先ず小学校時代の頃からの事を述べましょう。私の家庭は貧乏でしたが、性の事に就いては特に秘密主義をとつていましたので、私は十三、四の頃まで子供がどうしたら生れるのか知らず小学校で同級の早熟な子供から、そんな事に関して卑猥な言葉を話しかけられたり、便所の落書を見たりしても、何んとも合点がゆきませんでした。

まして自分の両親や謹厳な先生等までが、そんな行為をする等という事は想像する事さえ出来ませんでした。所がその私に異常な気持が芽生えたのは小学校六年生の頃でありました。兄が借りて来た名前は忘れましたが、何んとかいう講談本をペラ／＼とめくつていた私は或る一つの挿絵にくつと吸いつけられるように見入つたのです。今でも覚えていますが確か井川洗崖氏描く所の絵で、鬚面の捕手が色の白いでつぷりと肥つた美男子の力士を後手に廻して縛つてゐるという構図でした。

「僕ね、こんな括られた絵を見たら、何んだか身体がムツ／＼と櫟つたいような気持になるの、何故だろう？」

まだ無邪気だつた私は傍に寝ころんでいる兄に何気なくそう尋ねてメエと目をむかれました。私の此の時の異常な心身の変化をきっかけに私は現在に至る迄、これから述べようと

する耽溺の世界へ踏み込んだと言えるのです。

然し私は幼少の頃から甚だ消極的で気が弱く非行動性の一口に言えば内気な性向でしたので、此の様な嗜好を持つていたとしても実際に表面には現れてきませんでした。

小学校の上級生の頃、夏になつて川へ先生と一緒に泳ぎに行くと、ろく／＼泳ぎもしないで禪一つになつた受持の先生の裸身ばかりを眺めていました。水泳が終つて水着を脱ぐ先生達の傍へ行つて騒ぎ廻つたり、又大人の身体を不思議がつたりしたのも懐しい思い出の一つです。

私はその頃から父の裸体に興味を感じ初めました。父は小肥りの農夫特有の節々の盛り上つた肉体を持つていました。私は瘦せぎすの母よりも父の裸体を風呂場の入口からちらりと見たりするのが好きでした。そして年頃となつた私は誰に教えられることもなく、又恐らく思春期の男性が誰でも経験するであろう Onanie を覚えました。しかしこれは私が普通の少年から青年への道を辿つたに過ぎないわけですが、只私の變つてゐるのは、此の時のイメージの世界が普通は異性のヌードとか、Coitus の場面とか、或は異性を虐待し又は虐められてゐる場面といった類であるのに、——勿論私にも異性のヌードやそれらの場面は幻想される事はされるのですが、それにも増して私を有頂点にさせるのは、矢張りでつぷり肥つた中年の同性又は異性のヌード、Coitus、虐待でした。

不思議に若い男、美男子、瘦せた男、そんな者には見向きもしませんでした。異性でも私は細い人は嫌であり、むしろ中年の病的にまでダブ／＼と肥つた女が好きで、町の中でも



そんなタイプの男女に出会った時には、私はその衣服の下に包み隠くされた肉体をヌードにして想像しました。雑誌や新聞にでつぷりと肥った立派な紳士の写真が載っていると直ぐその紳士の逞しい裸体を自分の頭の中で作り上げました。中でもその様な口髭でも生じた謹厳な紳士が健康帯か薬の宣伝で半裸体になつていたりした写真があれば、それを切り抜いて何回も何回も眺めて悦にいつていました。

そして私の頭の中には一般青年の抱く色情とは凡そ縁の遠い中年男の裸体が苦しみ悶えている図がいつも覆いかぶさってくるのです。でつぷりと肥つて美しい髭を生やした紳士が素裸にひんむかれて、後手に縛り上げられ、その豊かな臀部を鞭で叩かれてゐる姿なのです。

こういった時、私は実際に私の幻想を目撃する機会を得たのです。それは高等小学校を終えて中学校へ進学した夏の事です。高等小学校の同窓会が開かれました。学校生活から社会へ解放された同級生たちは、まだ十五六の少年のくせに酒を飲み煙草をふかして、ベロ／＼に酔つて招待した先生にからんでいました。特に悪戯小僧達は招待というのは名目で学校時代に叱られた先生に対して復讐を企図していたらしいのです。

勿論私はそんな事は夢にも知りませんでした。便所へ行つての帰りに会場からずつと離れた教室でガヤ／＼人の声があるのです。何んだらうと思つて入つてみますと、不良で知られている五六人の少年が招待した先生の一人を囲んで口々に罵つてゐるのです。その先生は中肉中背で髭が美しく揃つて

私の一番好きなタイプなのも皮肉でした。

事情を察して懸命に逃げようとする先生を悪童たちは手足にとりついて床の上に押えつけていました。中の一人は早くも先生のズボンのバンドをゆるめて脱がそうとしています。

「おい、手を貸せよ」

突然そう言われて私はフラ／＼とその悪童達の中へ入つてしまつたのです。そこで私は最早や逃れるすべもなく不良少年達に押えつけられ、受ける羞しめに顔色を変えて恨めしげに睨んでいる先生の顔を正視することが出来ませんでした。今迄可愛つて下さつた恩師に対する裏切り行為の激しい後悔と、今これから行われる事に対するぞく／＼とする期待の嬉しさとが入り混つた複雑な気持が私の胸の中を去来しました。

それから後、私の幻想は益々募り、人の来ない一室で夜半禪一つになつて一尺四方位の鏡を前に置き、用意してきた荒縄をぐる／＼と腹や太股へ巻きつけて転ると、その縄尻を持つて手を後に廻しました。鏡の中には一つの肉塊が縄にくびれて映つてゐるのです。首から下なので私の幻想は、この貧弱な少年の裸体の一部から、ふてぶてしい中年男の裸体に置き換えられ、片手を抜いて禪に手をかけると、この中年紳士に襲いかゝる悪漢の触手となるのです。

やがて忘我の境が過ぎると呆然と自分の浅間しい姿に言いようのない自責と嫌悪を感じ、これからは此の様な考えは捨て去らうと決心するのですか。妖しい悪魔の魅力に負けた私の自作自演のこの遊びはそれから長い間中止められませんでした。



でした。そして私の果てしない空想力は偉大な幻想王国を造り上げました。壁一杯のグラフ用紙にその王国の地図を描き山や川も記入して、私はその王国の王様になりました。空想は飽くまで自由でありあらゆる事が可能でした。この国ではエロ映画やエロ本は公然と奨励され刑罰には昔行われたような残酷な拷問や体刑が行われ、売春婦、女相撲、ストリップバー等は最も威張る事が出来ます。隣接した国を攻略して敵国の王様や女王、貴族、軍人、政治家、教育家を問わず片っ端から捕虜として拉致して捕虜の刺青をした上、一生全裸で重労働にこき使うのです。怠けた者は容赦なく鞭打ち、女は女王を初め総て強制的に弄り物や曝し物見世物にし、生きながら解剖したり、人肉を食用に供したりするという荒唐無稽なところ迄発展するのです。

中学校の上級になつてからは暇さえあれば古本漁りをして奇抜な本の蒐集につとめました。私が軍隊へ行つてゐる間にそれらのコレクションは全部散佚してしまつたのは実に残念でした。日本書紀の解説で雄略帝や武烈帝の虐政等も知つたし、幕末頃の恐ろしい拷問の場面等私の趣味を刺激するのに十分でした。小説等でそういった場面が出てきても、ほんの一部であつたり、多くはハッピー・エンドで直ぐ助けの手が現れる事は大きな不満でした。

次に裸体主義である私の悪く云えば露出症的な傾向を述べましょう。私はあの海水浴によく用いるサポーターを便々たる太鼓腹の下につけ丸々したお尻をむき出しにして部屋の中を闊歩している自分の未来の姿を一生懸命に作り上げてその



なつてゐるのです。

私はその頃自分のこの露出癖とマゾ的な欲望を満たす為の一つの行動として、度々医者、門を潜り、もつともらしい理由をつけて医師の目の前に自分の……診察して貰いました。然し医師は大概一瞬しただけであるのは大変物足りなく、遂には鍼灸師の家を訪れて

「恥しい話だが……どうも腰が痛くて」

と嘘八百を並べて「どれどれ」と近寄つてくると、必要以上衣服を脱ぎすて、全裸に近い姿で診察台の上で俯伏せになります。これには施術者も驚いたらしく、慌て、毛布をかきにきます。毛布なんかいらぬのにと思つても向うは商売だから仕方がないらしいのです。

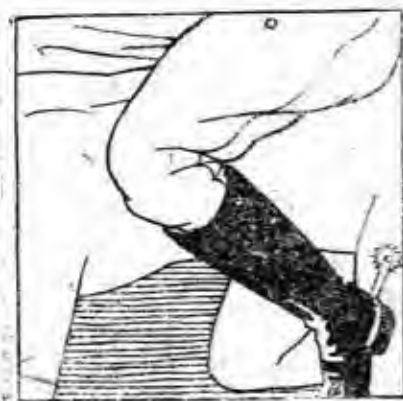
鍼はチク／＼位で大した事はなかつたけれど灸になると、私のマゾヒズムが十二分に満足させられる程熱く感じました。「アチチ」と枕へかじりつく時、私は苦痛を味う喜びで

空想を楽しみます。従つて私の最も尊敬するのは何んと云つても南方熊楠翁であります。氏の全裸で人と対面した世俗ばなれした奇人ぶりが私の憧憬おくあたわざるところと



一杯でした。そして幻想の世界——肥った紳士の悶えのたうつ姿——を臉に描きます。お灸は遠慮会釈なく次々と続けられる。私はうつとりとした境地に誘い込まれて、暫くは起き上れない位でした。

この様にして私は中学の二三年の頃からは小使いがあれば古本屋漁りと鍼灸師通いを日課にしていました。私は生来、映画が好きなので、映画の中に私の嗜好を求めましたが、これはせいぜいトリックに依る拷問や責めのほんの少しの場面が散見するだけで、私の期待にそうことが出来なかつたのも当然の成行きでした。この私の異常な欲求は世に言われる男色の一種なのでしようか、然し私は少年の頃はそんな事は全然知りませんし、女学生間にSがあるという事は聞いていましたが中学生の時に稚児さんという様な事は全然経験がありませんでした。たゞ中学三年の時、満員の映画館の中でこんな経験が一度ありました。それは丁度日曜日の立錐の余地もない位の詰め込み方だったので私はぎゅうぎゅう押されながら立つて見ていました。



乗馬服と長靴と鞭

森 本 愛 造

すると私の丁度前の背の低い青白い顔の少年が私に身体をびつたり寄りつけながら、変な仕草をしてくるのです。元より初めての経験でしたが、嫌な気持ではありませんでしたので、一つこんな男とゆつくり話しあつてみたら面白いのではないかという好奇心が私の心をそよのかしました。私は映画館を出ると、彼に近ずいて「話したい事があるからK駅で待つているよ」と耳打ちしました。恐らくその少年はびつくりしたのでしよう。キョトンとした顔付きで黙っているのを尻目に私はさつさとK駅迄来て待つていましたが、とうとう彼はやつてきませんでした。

若し私をもつと詳しく話かけて、彼と逢うことが出来たらそれから以後の私の人生に大きな変化があつたかも知れないと思うのです。

然し私の生来の消極的な性質が幸か不幸か私の性向にブレキとなつたのは事実です。まだ／＼書きたいことは沢山ありますが、別の機会に譲つて皆様の忌憚ない御批評を頂ければ幸いです。



私は最初の性的経験を先ずお話し致しましょう。

私は西洋風の家屋と西洋風の道徳と西洋風な慣習によつて
 成育させられました。之は只の偶然でありましようが、私の
 精神上、及び肉体上の傾向は既にこの為に一定の、日本に於
 ては珍らしい方向へとむけられてしまいました。環境はその
 作為を指定するというテエヌの学説はたしかに正しいので
 す。

十六才の時、私は何という事なしに乗馬に対する極度の慾
 望を感じました。尤も、私は六才の時から實際上、乗馬の経
 験があります。私は学友達と毎週のように東京郊外のA町に練
 習に参りました。考えて見るとこの事は、私の持つ加虐的な
 慾望に従つたのだと思えるのです。

私が十七才の秋でした。練習所に来てよく知っているMと
 いう二十四、五才の女性が私と最後まで残つて練習をつづけ
 て居ました。当時は戦争中で女の乗馬熱は低く、彼女以外に
 私には女性の馬術愛好者を知りませんでした。次第に夕闇が濃
 く、夜更けに寒い風が吹き始めました。私が帰ろうと思つて
 馬首を廻らして外へ出ようとする、彼女が遠くから「一寸お
 待ちなさいよ、私ももうあげるから」と叫ぶのです。私は何
 気なくそのまゝの所へ、彼女が一三〇種の障礙を飛ぶのを見
 ている。馬も疲れたのか、中々障礙に向おうとしな
 い。私が傍へ寄つて進めてあげようと思ひ、彼女の近く
 ままで、彼女が馬の横顔を見ながら「あんな鞭借してよ、
 さうなめてやがるから、いじめてやる」と云い乍ら、私の
 鞭を引つた。彼女が取り上げました。

何時もの彼女と余り違ふので、私はびつくりして彼女の方
 を只だ呆然と眺めて居りますと、今一つ一つは細い所迄は覺
 えて居ませんが、矢庭に、蹴る、打つ、罵るといつた仕込
 み方を始めました。それは恐らく私が未だ見た事のない程痛
 烈な懲らしめ方でした。馬の横腹からは血がにじむのがはつ
 きりと判り、尻の部分は何条もの条痕が浮きぼりのようには
 れ上りました。

その中、意を決したのか馬は障礙に向ひ、やつと飛び越え
 ました。その時私は始めて感じるある特殊な快感をかすかに
 意識したのです。私が帰ろうとしますと、彼女は「あゝつか
 れた、少し休まない」といつて木の根元にすわりました。こ
 の練習所のすぐつぎには林があり、そこには一丈近い秋草
 がしげつて居ます。彼女は立ち上つてしげみの方へどんどん
 と歩き始めました。

私は何の気なしについてゆきました。しげみの中へ足をふ
 み入れた途端、くるつと彼女は振りむきました。その紅潮
 した顔付は、私が初めて見る顔の様にさえ思われました。

暫らくじつと黙つて私の顔を見て居ましたが、いきなり私
 の臀部を、手にした鞭の柄で軽く叩き「あんな昂奮してるの
 ？」ときくのです。私がいぶかしげに「え？」といひますと
 「あたしは馬を虐めるの大好きなのよ、今の馬つたらしい気
 味だわ、けど先生に見付かるから、あれ以上は傷つけるわけに
 いかないし、ねえ、この鞭は自分の？」「ええ」「あんな鞭
 で打たれた事ある？」「いゝえ」「では少し打つたげるわ」
 私はびつくりして彼女の顔を見守りましたが、彼女の顔が



ら、すでに微笑はきえて、冷たく傲慢な命令的な態度に、私はかすかにうなずいてしまいました。もうそれから後は、はつきり覚えていない程狼狽したのですが、彼女が私のシャツをはき取り、私の首筋を押さえて「お坐り」といった事と、私がひざまずくと、乗馬ズボンを穿いた脚で私の顔を（太腿でしよう）しつかり押え、私の口を片手で押えつけて息苦しくなつた事、それから、私の鞭が私の背中を責め苛んだ事だけを覚えています。そうして、一打ち毎にかすかに力のはいる彼女の黒い踵の高い乗馬用の長靴と先刻、馬を責めた時に付いたと思われる血で赤くなつた、鋭い拍車のかすかに鳴る音とが私の想念のすべてでしたが、途中から、彼女は私の尻を思い切り強く打つて

「馬におなりよ」

と叫び、私をひっくり返して跨りました。併し私がうつぶせになつて居るので具合が悪いのか、その血で汚れた拍車で私の腹を蹴り上げて四つ這いにさせて、馬に対して責めたと同じ様に責めるのです。

その中、彼女の拍車が誤つてだろうと思います私の太股へ強く喰い込むと同時に私は××してしまいました。丁度彼女も………をすぎたのでしょうか。（但しこういう事は、今考えてみてそうだろうと思うのですが）ぐつたりとなつて、地上に横むけにどさりと横たわりました。

私は急に恐怖に襲われて、ぬぎすてられたシャツと帽子とを取るや否や無我夢中で馬に飛び乗り、厩舎へ戻りました。先生は

「一体何をぐずぐずしていたんだ、Mさんはどうした！」と怒鳴りましたが、私は何と返事をしたのか、とにかく乗馬服のまま走つてバスに飛び乗つたのでした。

N 駅につくとやつと冷静を取り戻しましたが、そうすると背中の鞭の痕へ汗がしみて痛さが耐えられず、殆んど唸る様にして家へ帰り「熱がある」といつて布団にもぐり込んでしまったのです。

乗馬鞭の痕は十日痛むといいますが、女の力だつた故か、翌日はもう余り痛みませんでした。脇腹と内股との拍車傷は一週間位痛みつづきました。

翌週練習に行つた時——その時は変な事に私は又彼女に責めて貰いたい気持が半分あつたのです——彼女の姿は見えませんでした。然しその次の週、彼女は何時もの様に明るい顔をして練習に來ました。帰り際、他の人々の居ない時に私の耳に囁きました。

「坊や、痛かつた？ 後悔してる？」

私は黙つて首を振りました。

「そう、じゃあ今度あたしの家へ遊びに來ない？ 面白いものがあるわ、ね、そうね、こんどの土曜日にね」

覚えて居ます。たしかそれは臨時試験の始まる前々日でした。すべて常に実力試験を主義として居た私はO 町にある彼女の家を訪ねました。広い洋間で、私は鞭打に関する写真等を見せて貰い、その挙句彼女の手で、今度は全裸にされて、「調教」を受けました。何故かその時も彼女は乗馬服に着換えて、私に彼女の長靴を穿くのを手伝わせ、鞭と、靴の踵に



よる加虐によつて私を責めさいなみ、意地悪にも、彼女の靴の踵に、私に無理に拍車を付けさせて苛めるのでした。

然し、今度は苦痛も少なく……、彼女の乗馬ズボンと長靴とに抱かれたまま、鞭による激励によつて××しました。この前の様に虚脱感はずびかず、その後も、彼女は色々な方法で再び快美的な境地に私を誘い込みました。

この二度に亘る奇妙な性的体験（彼女とCollesはしないのです）の故にか、私の性的感覚の中で、乗馬服と長靴と鞭とは必要なものと考えられるに至つたのです。

最早や夜も更けて参りましたので、私はこの手記を簡単に終局へ持つて参ります。

それ以後、彼女に二度会いました。然しそれから後、今日に至るまで、私は彼女に会つて居ません。彼女は引越したのです。それは一説に立川といい、一説に長野とも云いますが私は何にも知りません。



不思議な拷問

有馬 稻高

只今から五年前、二十三年の正月に馬術の先生に会つた時「Mさんはなくなつたそうだが、家も焼けてね。気の毒に」という言葉をききました。しかしその先生も今はすでに他界しました。

唯残つて居るのはそれが単にMさんによつて萌芽されたものにすぎないかも知れませんが——私のレチフの如き、長靴や乗馬服に対する性的愛好と、鞭打に対する快感感、マゾヒズム的な性慾と、右の如き前戯の方法に対する執着なのです。

Mさんの面影は早くも忘却の淵へ沈んでゆきましたが、之等の奇妙な愛好は私の性生活の基本です。しかし奇妙にも三年程前から私は女性に対するサディズムをも同様の方法により感じます。何れにせよ私は読者諸氏の中に右の如き（Mさん、或は私自身の何れでも）女性が居り、私に人生の中でのこの一つの奇妙な満足を与えてくれる事を望んでやみません

それは高等学校時代の事でした。終戦を契機として始めて高等学校も男女共学となり、私はH高等学校ときまりました。

た。始めの間はいままでの男だけの学校生活、或は女だけの生



告白の倒錯

活から、おいそれと新時代の傾向に移れず、腹でお互に友達になりたいと思つていても口には出せず、外に出してはたゞ「女なんて」「フン」と云つた様な態度を示していました。その様な雰囲気の中で、或時次の様な事件が起つたのです。

即ち女の生徒はいつも男の生徒の悪い所をさがし出しては先生につげ口をするので、私達も一つ女の生徒の悪い所を見つけて告げてやれ、と云うことになつたのです。(自分で云うのはおかしいのですが私は当時学校でも一、二番の秀才といわれて居り、大きな権力を有していました)

そして或日映画の帰り道でH高校の女生徒数人のグループが口紅を真赤につけ、盛り場を与太者の様なものと一緒に歩いているのを見つけたのでした。当時至極生真面目だつた私は結局それを学校当局へ吾げ口したわけですが(勿論面白半分です)その事がどうしてか、それらの女生徒に洩れてしまつたのです。彼女達は学校で私に会う度に、先生にきつく訓戒された事を根にもつてにらんでいました。しかしその時は、私はいつもの様に「フン」といつた気持で女という者の根深い恨みと復讐等、考えて見ませんでした。

ところが秋も深くなつた或土曜日の晩、八時頃、私の特に親しい友達の名前を云つて

「その人にたのまれたから、K神社の鳥居の所まで来てください」

という電話が女の声でかゝつて来ました。この様な事はさしてめずらしい事でもありませんでしたので私は気軽にすぐ行く由を返事して、早速指定されたところへ赴いたのです。

そして鳥居に近ずいた時です。いきなり後から、何か堅い物で頭をいやと云う程なぐられました。何が何だかさっぱりわからず、振り向こうとしたとたんその横頭に第一番目に勝る第二番目の打撃を受け、全身の血が一べんに逆流して燃え上るかと思う様な気持になり、ぼーとして来て何もわからない様になつてしまいました。

それからどのくらいたつたかわかりません。大変な寒さと割れる様な頭の痛さに意識をとりもどして「はっ」としました。身につけていた、下着類をとられて真ッぱだかにされた上、後手に腕をねじ上げられ細引様のもので柱に堅く縛りつけられてゐる自分に気がついたからです。

その時「明り」がぱつとついて薄暗かつた室が急に明るくなつたかと思うと、あの忘れていた事件を思い出させる件の数人の女生徒が毒々しい程の口紅をつけて笑いながら入つて来たのでした。あわてゝ声を出そうとしましたが声になりません。何と私の口の中には何か布片が押しこまれその上に更に他の布がまかれて堅く猿轡をかまされていたのです。と同時に何とも云い様のない、いやな匂いを咽喉の奥で感じました。(口に押し込まれていたものが、よごれたズロースであつた事は後で知りました)

私は、しやにむに起き上ろうとしたが却つて横にごろりと転がつてしまいました。彼女達は我が意を得たりとばかりに顔を見合せ、私の腰、大腿のあたりを指さして盛んに笑ひかけました。それにつられて我を忘れて私が「ちらつ」と、そこを見た時のおどろきを察して下さい。その時の気持は現在



でも忘れられません。いや一生忘れられないでしょう。

はだかにされた私は、白いズロースをはかされ両足首を縛った綱を股に通して、丁度正坐をしている恰好で、ズロースの上から大腿のつけ根にその綱をかけ、更に足首にまかして肉にくい入る程に縛りあげられていたのです。

やがて連続しておこる驚きの為に気も転倒している私に対して彼女達は口々に毒舌をふるって侮辱しました。その頃になつてようやく私も、こうなつた事情をのみこみ恥ずかしさに顔もあげられず、しかし「ちらつ、ちらつ」とまわりの状態をぬすみ見て、どうにかして逃げられないだろうかと思ひ始めました。

この入れられている室は物置の様なところで割合に広く二三の蜜柑箱がある他は何もなく私はその室の真中に立つている太い柱にがんじがらめに縛りつけられていたのでした。そして、その「いましめ」があまりにも嚴重で、動けばかえつて二の腕に綱がくい込むばかりで、夢にも逃れる事は出来ない事をも知らされました。

毒舌をあるだけ吐いてしまつた彼女達は、次に私の予期さえしなかつた事をしましたのです。即ち、まず彼女達のうち一人が用意していた写真用の電球と、いままでついていた物置の電球とをとりかえたので、そこは見違えるほどの明るさとなり、私の縛られて転がされた姿を、くつきりと画き出しました。そうしておいて、今一人の女生徒が、これもやはり用意していた写真機とフラッシュをとり出しました。

私は、とられまいと出来る限りの力をふりしぼつて首を振

り、体を動かしましたが、彼女はにや／＼笑つて近づいたと思うと、そこに落ちていた荒縄を拾い上げ、私の首を、息の根もとまるかと思われる程にしつかつりと柱に縛りつけ更にその先を、胸、或は腹にまわして、もうどんなに努力しても苦しみの為に、ほんの一センチも動く事が出来ない様にしてしまいました。もう、いくら顔を写真機からそむけようとしてもそむける事が出来ません。そのような私を、しばらくじつと見ていた彼女達はやがてお互に代り合つて、いろ／＼の方向から何枚となく縛られた私を写しとりました。

そして結局、彼女達はその写真機種として、私に、今後、彼女達の暴虐の奴隷となる事を、絶望感の下に承知させてしまつたのでした。私がうなずくと、私を柱からはずして、ころがし、順々に私の顔の上にまたがつて、「烙印」をつけてやると云い、後にねじ上げられている私の二の腕に齒型をつけるのでした。その時、何とも云えない快感が、腕の痛さを消すかのように、体中を駆けめぐりました。

私は生れつきのマゾヒストであつて、今迄外に現れなかつた素質がこの刺戟によつて、始めて形となつて現れたのかも知れません。いや、もうそんな事はどうでもよいのです。私はその時まで、その様な幸福感、いやそれ以上のものを感じた事はありませんでした。私はもうその時、彼女達にその場で噛み殺されても良い、とさえ感じた程でした。

五つの口紅のべつとりと付いた齒型が私の腕に、きれいに並ぶと、彼女達のうちの大将株が（他の女生徒達は彼女を「オトヨ」と呼んでいました）進み出て



告白の倒錯

「今日は小手調べよ」

と云うと、他の者に手伝わせて、正坐をしている型で縛られている私の下肢の縄をほどくと、はかされていたズロースをぬがし私を完全なはだかにすると、両足をのばして、足首を揃えて縛りなおし、更に「太もも」も合せて縛りあげ、私は辛虫の様にされてしまいました。

そうしておいて、彼女達は、入れ替り立ち替り、何の抵抗も出来ない私を、つねったり、なぐったり、あぐくの果ては革靴で蹴つたり、ふみにじつたりしました。

幸い私は、野球、水泳、等で常日頃体を鍛えていましたので、その位の事にはどうにか意識を持ち続け、こらえていました。なか／＼参らない私をみた彼女達は

「こいつば、なまやさしい事では、きかないよ」

と云うと、今度は柱に巻きついてた縄をとると、物置の梁に私の体を吊し上げました。勿論、彼女達の攻撃を最小限度にする為には、参った振りをし、意識をなくした振りをすればよいこと位わかっていました。しかし、その時の私は、そうされる事が非常に嬉しく、彼女達の手によつて、実際に意識のなくなるまで、弄ばれる事を熱望する心を、正常な側の私の心が押える事が出来なかつたのです。

吊り上げられると、急に胸にかけられた縄と、腹にかけられた縄が「きゅー」と肌にくい込み息の根もとまるかと思われました。「オトヨ」は、自分のスカートの上にしめていた細い婦人用の革バンドをはずすと、私の腹、腿、臀部を、あたりかまわず力一杯、しばき続けました。私はもう寒さどこ

ひではありません。額、頸、腋窩、至るところ汗で、ねちやねちやして来ました。彼女も汗を出し、はあ／＼云つて打ちすえていました。がさすがの私も、次第に息ぐるしく、血の逆流を感じる様になり、遂に「ウーム」と云つたきり、——私には、そう思えました——意識がなくなつてしまいました。

あたりのさわがしさに気がついてみると、後手に縛られていた手が今度は前に揃えて、丁度腹の上で縛られ、又足も足首を縛られているだけになっている私が、彼女達にとり囲まれているのを知りました。「オトヨ」は「今後は一切彼女達の命に服従し、彼女達の良き奴隷となり良き玩具となること」という様な事が書かれた紙に私の拇指で肉はんを押させ更に、今後彼女達の命令があつた日には、必ずこの物置に出むく様に書いてある紙にも同じように押させました。

そうしてから、彼女は始めて私の「縛め」といってくれ、「今日はこれで許してやるから帰れ」と云いました。彼女がこの様に自信を持っていたのは、私がマゾヒストの素質のあることを見抜いていた為かも知れません。

私は無表情をよそおい、非常に痛む節々を気にしながら、返された服を身につけると、そこを出ました。そして、彼女の家（私が拷問を受けた家）がK神社のすぐ側の、かなり広い家であることを知りました。

日は既に中天に昇つて、さん／＼と輝いていました。私は帰り道で、いま／＼の事を考えなおして、いろ／＼と煩悶しました。そして正常な血とアブノーマルな血とが斗争するの



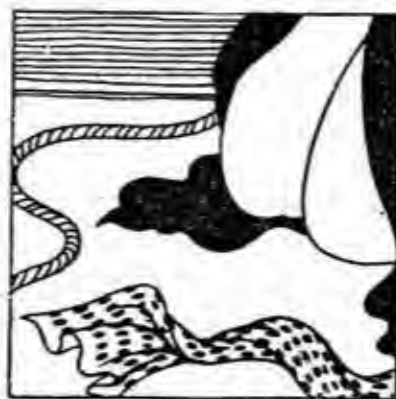
を、あり／＼と感じました。学問をすることによつて得た私のプライドが、私のアブノーマルな血を打消そう、打消そうとするのでした。しかし結局は、もう既に彼女達からの命令を待ちわびる私の血が、体からあふれるばかりに躍っている事実を打消すことは出来ませんでした。そして、その期待に

胸をふくらまし昨日一晩、無断で家をあけたことを、帰つて何と云いわけしようかと考えながら、家を急ぐのでした。その後、彼女達の呼び出しをうけて、私がどの様な拷問を受けたか、又現在では、どの様にしているか等は、又次の機会に述べさしていただく事にしたいと思います。

私の新婚生活

(前戯としての軽いサディズムス)

島村康雄



私がこれから綴ろうとしますことは、天野一郎氏の「サディズムの悲哀」(九月号)近東規矩也氏の「錯乱の倫理」(十二月号)のように理論整然たる事は書けません、私の拙い文が辿る回想と現在の生活状態を、読者の方々の御参考に供したいと思ひます。

私が貴誌に接する機会を得ましたのは、東京の浅草に数あるストリップ劇場に全盛を極めた責めを扱った時代劇、現代劇の演劇が次第に蔭を潜めた頃で、フランス座、ロック座、百万弗劇場と今日は自分に満足を与えてくれるものを上演してはいないかと儚ない希望を抱いて浅草へ訪れて見ましたが矢張り「残念乍ら」の言葉に尽きるのみでした。物足りない遺瀨ない、心を抱き乍ら歩く裡に国際劇場前の某書店では

からずも貴誌に触れ、私の両頬は頁を繰る裡に急に火照つて参り早速買求めましたのが、昭和二十七年九月号です。貴誌を愛読されている方々の何れもが貴誌を手にして初めて知る歓喜というのでしょうか。巷に溢れている風俗雑誌の空虚さに比較して真摯な編集内容に、私はこんな素晴らしい内容の本が発行されていることを其の時迄知らなかつたことをつく／＼残念に思ひました。

近東規矩也氏の「錯乱の倫理」は宛ら私の少年時代から、そして世慣れた言葉の思春期に歩んだ心の動きを表現して下さつたものとして、感銘深く読ませて戴きました。私の最も関心を寄せているのは、女体に対する責めで、

一、女が後手に縛られて暴漢に襲われかゝっている時(必



然それに抵抗する女体の動き)

一、女が後手に縛られて、悪者に何事かを白状せよと責められている時。

で後者の女体の縛られる形態が吊り上げられたり、十字架にかけられたり、石責め或は海老責めというものは私の興奮の度合から測ると稍下るのです。又前述の形態が時代的、所謂日本髪であるのを断然好み、又裸体であるより長襦袢が片肩にやゝかゝり、真白い雪を欺むく(各種小説によく出る言葉を借ります)乳房がのぞいている方を好みます。宛ら落花の舞というのでしょうか、二月号に寄せられた変の字問答第二話の肉体の門の問題の二シーンの中、私はボルネオ・マヤより、お町の場を絶対に支持する一人であります。

私が小学校を卒えた年、昭和十一年の暮、富士に現われた退屈男(勿論市川右太衛門の主演の映画)のラストに確か光川京子の扮する武家娘で、髪は水も滴たる高島田、衣裳は金らんどんすの可憐な娘が、荒縄で、後手に縛られ、志賀靖朗に物置小屋で襲われる十分間の場面にすっかり魅せられてしまったのが現在の心境を芽ぐくませたものとも云うのでしようか。それから暇を見ては近東氏が例に挙げた大都映画を専門に見ました。松山宗三郎、本郷秀雄、阿部九州男、杉山昌三九、ハヤブサヒデト、女性では三条輝子、東龍子、木下双葉、姓は思い出せませんが〇〇小夜子の活躍で、必ずといってよい程、挿入される責めの場面に当時の小遣を費していました。

最近の映画では、新東宝映画「大江戸異変」、沢村昌子は

後手に縛られて柱に縛りつけられたり、猿轡を噛まされたり或は襲われんとする所を逃れる様々の艶模様が堪能させられます。この時の沢村昌子の髪は結綿で、二十分の間に段々と乱れて行く髪が大変な魅力でした。沢村昌子がニューフェイスとしての初登場の映画であつただけに特に可憐な中に初々しい惨めさがありました。

私はこの様に女体の後手に縛られる姿に興味を覚えた十四五才の時から結婚に至る迄は夜、家人が寝静まつた頃、自分で筆をとつて面をかくては見ましたが才能がないのか全然ものになりませんでした。女体を縛ることにはのみ関心を吸引されている私は、貴誌で誰方か指摘された如く、サディズムの男は小心者であるとの言葉の様に、私も小心者の一人ではありますが、青年時代に入つて、生理的欲求が湧いて来ても、ネオンの巷に足を踏み入れることもなく、そうした夜は夜を徹して拙い画乍らも自分の想像する映画女優を対象として後手に縛られている様々な姿を画いて自ら慰めて居りました。そして一巻ものとして筋書を書いた事も幾度かありました。

二十六才迄遂に肉体的童貞(?)で過してしまいました。父のない私は、母や姉のすゝめで幼友達の現在の妻と結婚の話が擡頭しました。私は結婚の話がすゝむにつれて、現在の誰も知らない只一つの秘密の喜びが不可能になることに激しい未練を断ち切ることが出来ず、その結婚の話に解答を与えるのに躊躇いたしました。戦災に遭い、母は姉の経営する湘南地方の旅館に住み、只一人の私は隅田川から稍東に入つ



た現在の所に家を建て、小さな電気店を開いて居りましたので境遇と環境によつても早急に結婚を迫られたのも致し方ありませんでした。私は幼馴染の現在の妻に思い切つて、私のそうした性癖を打明けて納得してくれるかどうか確かめ様かと幾度思つたか知れませんが、美女緊縛に対する自分の精神状態を改める為のこれが只一つの機会ではないか、健全な心に戻ろうと悲痛な決心をして、その秘密を打明けずに結婚生活へと入つたのが二十六才の年の桜の花の咲く頃でした。

拙い乍らも思出多い数々の自作画を焼捨てたのは結婚の日の二日前でした。お定まりの蜜月旅行中は勿論、一月程は普通のありきたりな夫婦生活を続けましたが、最初の妻の生理日の数日が、私と妻の運命の夜となつてしまいました。

私は妻の盛装用の長襦袢姿を見ている中に、やつと忘れかけた女体の縛めに対して再び目覚めたのでした。が生理日の終る迄私は女体の縛めに対する数々の懐しい思出や想像に空しい又歓びの夜をすごしました。

その次の夜、私はバジャマを着ようとする妻に、長襦袢を着させて床に就いてから言いました。

「僕を今夜迄一人ぼつちにした罰だ、今夜は君をいじめるから其の積りで居給え」

「どうするんですか？」

妻は半信半疑の面持でしたが私はいきなり妻の両手を後手に捻り上げ、兵児帯で縛り上げました。妻は何ら抵抗もせず私のするまゝになりました。私はそうしておいてスタンドをつけました。妻は「あゝ」と短い声を洩らしました。私は

妻を抱いて起上らせて、兵児帯の端に紐をつけて棚の釣手に縛り妻を爪立ちさせて、胸をはだけ、二つの乳房を露わにしました。妻は「あゝあなた、なにをなさるんですか」と再び悲痛な声を上げました。

「うるさい、俺の云うことを聞くか、否か、厭だと云え、うんと痛い目に遭わせてやるぞ」

手拭を取り出し、御座なりの猿轡を嵌めました。がらりと変つた私の言葉に妻もいさゝか恐怖の念にかられたのか盛んに宙吊りになつた体を身悶えし始めました。長襦袢の胸ははだけ裾も乱れて、長年憧れた姿態を、今こゝに眼前に繰りひろげられた時の私の空前の歓喜を御想像下さい。結婚前に誓つた私の心境はこゝに於て一片の反古として儚く捨て去られてしまつたのです。

私はやがて長襦袢の前をすつかりはだけた新妻の緊縛された姿態に十分満足した後、棚の釣手から下して後手に縛り、猿轡をはめたまゝ床の中へ横たえました。兵児帯をといて改めて床に入つてから「ごめんね」と妻に呼びかけましたが妻は無言でいました。私は妻の無言でいる事が大きな反抗と察しました。或は明朝、起るかも知れない様々な不吉な事態を取りとめもなく考え続けました。実家へ帰えると言ううだろう。或は何と言つて私に抗議してくるだろうか。私は慚愧と悔恨が僅か数分前のあの大きな歓喜に身も心も躍動した後だけに、激流の様に心を沈痛なものにして行きました。取りとめのない考えに私も疲れ、妻に「おやすみ」と常の夜より一入優しく言葉をかけると妻は私の方を向いて「おやすみなさ



い」と普段の夜のように言うのでした。

その時の私の複雑な心理、妻は怒ってはいなかった。妻は怒りを隠して平静を装っているのだろうか、それとも妻は果して今夜の私の仕事を喜んでいいのか、私の心は交流のサインウェーブのようでした。

一夜は明けて朝餉の膳に向いますと、妻は相変らぬ新妻の優しい微笑を投げかけて平常のように私の給仕をしてくれ、「今日お店の仕入れにいったら忘れずに腕時計のバンドを買って来てね」

と微笑み乍ら云いました。私の忌恨の念は一べんに吹飛び私の胸は昨夜の喜びにも増して高鳴りました。五月の薫風にペダルを踏んで商用に出かけた私は世の中の幸福というものが自分にのみあるのではないかと思つた程でした。

結婚後丸五年を経過いたしました。経済的には世の慣いでのよい時期も悪い時期もありましたが、商売は大体平凡な順調線を辿つて居ります。今日迄私共夫婦は争いを致した事はありません。妻を初めて後手に縛つた夜から数えて五年、毎夜ずつと妻を後手に縛つては年月を過して参りました。

強姦ごっこ、或は私一人の創作によつて妻を腰元にしたり可憐な武家の娘や町家の娘に仕立て、柱に縛つたり、鴨居に吊つたりして、色々な理由で責めて楽しい夜をすごします。

最初に申上げた様に私は女体を余りむごい責め方をするより、女性としての羞恥の限界点の美しさに重きを置いておりますので、後手に縛つただけで妻の身体には傷を与えた事は

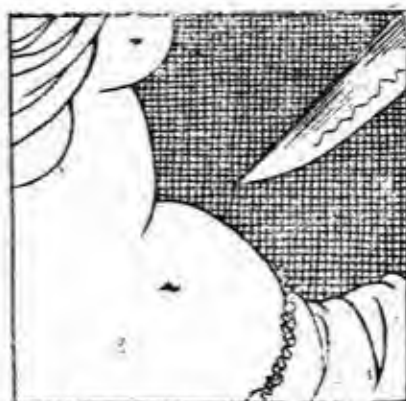
ありません。

妻は決して自分からこうしてくれとか あゝしてくれとか要求はいたしませんのでマゾであるかどうか、夫たる私にも未だに解りませんが、世の中の夫婦生活が、現在の私共の生活形態と思つているのかも知れません。が只一度「縛られると、身体が緊つて気持が快い」と云つた事がありました。私の悪癖が妻に移つた表われの言葉としてお聞き願つて戴きましよう。現在四つと二つの男児がおりますが親子四人共健全で医者叩いたことはなく、幸福な日々を送つて居ります。妻は子供を胎している時は決して風俗雑誌に眼を通しません。子供の胎教を考えているのでしようか、私も別段口に出して妻にそれを聞いたと云いませんが、よき妻であり、よい母にならんと心掛けて居るという事に敬意を表して居ります。その反面、夫たる私は、相変わらず、風俗雑誌を買求め、店を閉めた後は、我意を満足させる事ばかり考へて居ります。

創作や、体験談をゆつくりしたゝめたいと思つて居ります。が文を書くことの下手な私はお送り致してよろしいものか迷つて居ります。

◎羽村京子さん、原稿至急お送り下さるようお願いいたします。尚お送りしたいものがありますので局留置でも結構です。連絡先を御知らせ下さい。小坂多美枝さん予告下さいました続篇是非お送り願います。嶽収一氏へお手紙拝見しました。誌上では御返事出来かねますので連絡先を御指示下さい。御希望にそう事が出来ると思ひます。

(編集部)



開 花 の 契 機

信^{しの} 太^だ 蓉^{よう} 子^こ

私がこれから綴ります告白は女の身として余りにも恥しい赤裸々な事実でございますが、本当の事を申し上げますと、この文章を書いて居りますこと、いや若し雑誌に掲載されませんでも、編集部の方々の眼に触れるということだけでも、私の心の中がなんとなく楽しいのでございます。私は極めて内攻性の性質ですので決して友達にでも自分の事を話したこともございませし、奇譚クラブを愛読しておりますのも私一人の秘密なのでございます。

三月号の読者通信で京都の弓削友子さんが女性の読者の方々の事を申されておりましたが私が思いますのに案外多いのじやないでしょうか、私が自分の事から考えまして何も云わないで秘かに楽しんでいる女性の読者はきつと相当あるんだと思えますわ、でも此れから私の書きますこととお読みななつたら狂気の沙汰と思われるのじやないかしらと心配いたします。然し少くとも私自身にとつては、これは筆舌に尽し難い甘美な陶醉以外の何ものでもないのですが。

若い女の身空で恥も外聞もかぐり捨てゝまで敢て投稿いた

しましたのも、それによつて更に変つた強い刺激を受けるかも知れないという一つの漠然とした期待を抱いているからでございます。だから私は自分の告白が他の方々の参考になるだろうなんて大それた考えは少しも持つておりません。

私は現在東京の或る洋裁学校に通つてゐる今年で満二十一才になつた女性でございます。自惚れてゐるようで此んな事を書きますのは大変心苦しい次第ですが、私は自分の容貌や姿態が他人のお世辞を抜きにしても十人並以上であると思つております。身長は五尺三寸で十四貫の体重は一寸肥りすぎかなと自分でも思いますが、スタイルには一応自信があるのでございます。

私は自分のこの変つた性癖がどんな動機によつて私の心の中に芽生えたものやら、又それが全く先天的なものであつたのかどうか、自分ながらはつきりと判りません。しかし既に十二、三才の頃から自分の身体をしいたげること不思議な喜びを覚えていました。勿論しいたげるといつても、その頃



は子供でしたので、只尖った鉛筆の先で自分のふつくらした太股を痛くなるまで突いてみたり、爪を切る時殊更短かくつんだり、お裁縫の時、指先に糸をきつく巻いて針で刺したりした位のものでございました。

昭和二十五年の春、高校を卒業した私は間もなくN区にある某商社会社に勤務致しました。小さな会社ではありましたが経営状態は良好で給与も高校を出たばかりの娘にとつて勿体ない位でした。内気な私としては大会社で沢山の同僚と混つて仕事をしているより、こゝろいつた小じんまりとした会社の方が大変居心地よく、他の方々も親切にして下さいましたので毎日楽しく勤めて居りました。

その年の秋、私はその会社の社長の息子と知りあいました。彼はまだ大学に通つていましたが、気弱な私は晩秋の或る日曜日、彼とハイキングに行つての帰り、とうとう身体を許してしまいました。二度三度と逢つていゝうち、私は彼に自分の変つた性格をすべて打ち明けようと思いましたが、どうしてもそんな勇氣は起りませんでした。若しも彼に少しでもそんな方面に興味を持つていたら、私はもつと楽しくそして幸福になつていたかも知れません。

ところが昨年春、彼は卒業を眼の前にひかえて突然肺湿潤で倒れてしまいました。それは今に初まつた事ではなく相当以前から胸が悪かつたのだそうです。医師の診断の結果、相当長期間療養生活を続けなければならぬのでした。本当の事を云つて、私は彼に対してそれ程の愛情は感じていなかったのだと、その時になつて考えました。只熱心な彼の求

愛にはだされて、つい身をまかしてしまふ様な関係までになつてしまつたのです。

今病床に呻吟する彼を振りきつてしまふのは少くとも残酷に思われましたが、彼の身体の為にも今迄の二人の関係を精算した方がよいと決意して、私は表向きは家庭の事情ということにしてその会社を辞めました。その時両親から何んであんな良い会社を辞めたのかと、うるさく責められて困つてしまいました。家の者には彼との交際を秘密にしておきました。思えば私も軽薄な典型的アプレゲールの一人だつたのです。

でも、何とか尤もらしい理由を作り上げて私は暫く洋裁を勉強することになりました。そして暇のあるにまかせてマゾヒズムに関する書物を漁つていろ／＼の事柄が此の世の中にあることを初めて知りました。古今東西の惨虐な刑罰の方法等も随分研究致しました。

私は外出しますと、きまつて刃物店のウインドやデパートの刃物を売っている場所に佇む習慣を作りました。何んのためかと申しますと、ガラスのケースの中に入っているいろ／＼の形をした大小さまざまな刃物を眺めるのが一つの楽しみとなつたからです。

あのドキ／＼した出刃包丁をグサリと腹に突き立てられたらどんなに痛いだろう。そしてその痛さにも増してどんなに心地よいだろうと、その想像するだけで背筋がぞく／＼とする程嬉しくなつてしまふのです。

まだ方々で催される衛生展覧会や防犯展等には私一人では



気がひけますので、いゝ加減な口実を設けては友達を誘つて出かけました。そして内臓の彩色図を見ては、恰かも自分の内臓がそのように人前にさらけ出されたように錯覚し、帝王切開の画を見ては、思わず手に汗を握りました。でも警視庁で出品したという犯罪現場の写真は余り気持のよいものではありませんでした。若し私が惨酷な死体の現場を見せられたとしたら、きつとその余りのむごたらしさに失神してしまふかも知れません。

私は極端なマゾヒストであると同時に露出狂でもあるのです。(そのくせ非常な恥しがり屋なんですけど)私は服装には好んでタイトスカートやストラックスを選びます。その理由はびつたりとして腰の線が現れ、殊に下腹部の円みや膨らみが露骨になるからです。余りせり出ているのは形が悪くなりませんが、女のお腹つて豊かな脂肪でむっちり膨らみを持つていた方が男の人の情欲を誘うのじやないでしょうか、乗物の中で空いている時は別ですが、座る席がない場合、吊皮にぶら下つて前に腰かけている男の方の前に位置し、その方の視線が丁度私のお腹のあたりに注がれているとぞくぞくとする程気持がよくなるのです。また、わざと男の人の多い混んだ電車を選んで、彼等の手にした皮鞆に腹部を押しつけて淡いスリルを感じる私なのです。

夏ともなれば私はきまつて一人で海水浴場へ出かけます。露出狂である私にとつて夏の浜辺は中々楽しい遊び場所です。ここでは女性が白昼公然と半裸となつてその豊かな肢体を多くの男性達に誇示することが出来るのですもの。

二

最近自分でも驚く程、ふつくらと肉付きを増してきました。下半身をじつとみつめていきますと、何か思いきり傷めつけてやりたい衝動にかられるのです。この弾力のある柔かいお腹をよく切れる肉切包丁できり／＼と截ち割られたならば想像すると、思わず恐怖とも歓喜とも言えない一種不可思議な気持でうつとりしてしまふのです。

羽村さんの告日記にあるように紐で胴をきつく縛り下腹部をマリのように膨らませる方法は以前から行つておりましたが、自転車の空気入れを用いることは考えつきませんでした。一時は水をコップで何杯となく飲み干して妊娠した様に盛り上つた自分のお腹に激しい興奮を感じましたが、羽村さんも述べていらつしやる様に、その時は非常に楽しくても後が苦しくて何度も御不浄へ通わなければならぬので最近では減多に致しません。

時には全裸となつて草のベルトで自分の太股やお尻を笞打つた事もありますが、でも私はやつぱり腹部に強烈な刺戟を加えることに無上の喜びを味うのです。抵抗出来ないように手足を縛られて、うんと残酷な方法で私の身体を料理されるのが最も望ましいのでございますが、その様な遊びをするにしても、誰彼の差別なく気軽に頼めるといふ性質のものでなく、第一女の口からその様な恥かしい事を申し出るといふ事は到底出来ません。だから私は今のところ不本意ながら自虐の手段を選ばざるを得ないのです。

家人の寝静まつた深夜、私は自分の部屋でしば／＼切腹



「の真似事を致します。用いますものは切出して、切尖はすり減らして鈍角にし、刃はお台所の流しでつぶして切れないようにして柄ははずして、その部分に白布を巻きつけてあります。これは家人の眼を盗んで何日もかゝつて自分で作り上げた嗜虐遊戯にはなくてはならないお道具なのでございます。私は枕元の電気スタンドをそつと点じます。臍の前には三宝（この遊戯をする場合、前もつてこつそり持ち出しておくのです）が置かれてあります。私は両手で乳房を抱き、暫く目を閉じて居ります。心を落着かせて他の事は一切考えないで、自分が今実際に屠腹せねばならない破目にあるのだという事を無理にも思い込んでしまうのです。やがて徐ろに腰紐を解いて着物をすると脱ぎます。シュミーズを胸の下迄たくし上げ、少し間をおいてズロースをゆつくりと腿のあたりまでずり下げます。両掌でなめらかなお腹を撫で廻してから三宝の上の腹切刀を右手にしっかりと握りしめ、そして切尖をお臍の上にピッタリと当てがいます。ひんやりと冷たい切尖の素敵な感触、左手を添え、やゝ前屈みの姿勢で刀をゆるやかに突込みます。始めはチク／＼と痛みを感じますが、その中にお臍がジーンと痺れるような気持、スタンドの赤い豆電球がお餅のようなお腹をくまなく照しております。切尖に押されて私のお臍はその周りに皺が寄る程、きゆうと深く窪んでしまいます。白い肌と固い刃物の醸し出す得もいわれない柔軟と冷徹のコントラスト、真紅の血汐がこれに加われれば更に素晴らしいことでしょう。

それから私は切尖を外して左の下腹から右へ丁度腹部の最

も膨らんだ部分を真横に引き廻すのです。次には左脇腹から右へ、最後には鳩尾から真直ぐ下へ、左手でお腹の皮膚を上の方にずらしながら臍を通つて切尖を走らすのです。

三

然し女の腹切は余りに非現実的です。女のか弱い力で腹を切つて死ねないと思います。つい最近、某女工員が失恋の結果、自ら下腹部を切つて自殺を企図し、又他の若い女性も税金苦から切腹を選び、何れも死にきれなかつたという事が相次いで新聞に出ておりました。昔でも女性が割腹した例は殆んどなかつたといつてよいのではないのでしょうか。

長町女腹切という芝居がありますが、あれは事実あつたことなのでしようか、一説によれば武田勝頼の妻は織田徳川の連合軍に追撃された最後の武田一族が天目山にて滅亡した際彼女も又自ら腹部に短剣を突き刺し自害したということですが小説では誰でも知つてゐる八犬伝の中に伏姫が身の潔白を明かすために、身重の腹を見事に切り割いてみせる所がありますが、あれはあくまで架空のことなのです。

何にもせよ、腹を切るといふことは余程苦痛が激しいことでしょう。（それ故にこそ私の楽しみも多いのですが）それでは、前に書きました女工員ともう一人の女性とは何故苦痛の多い切腹など選んだのでしょうか。自殺するなら、少くとも切腹より苦痛の少ない手段がいくらもありそうなのに――。私のこの事に暫く深い興味をひかれたものです。

他動的に女性が腹部を切り裂かれることは時たま書物の中に現れます。暴君ネロや殺生関白などの悪業、或は安達ヶ原



一つ家の物語更には英京ロンドンに實際起つたジャック・ザ・リバーの話等、私はそれらを読み乍ら犠牲に供せられた女達の一人一人に自分の身を置きかえて想像し、どんなに胸をときめかしたことでしよう。でも女の腹を切り割いて料理してゆく状況を細かく描写してないのが歯がゆい程物足りないのです。

私はなんと変つた女なのでござりましょう。私の体内には何故、このように狂おしいばかりの血汐がうずいているのでござりましょう。冷静に自分を反省してみる時、私は実にイヤな気持ちに襲われるのです。このまゝでは自分は一生結婚することは出来ない。女としての幸福など擲かむことは出来ない。何んとかして此の性質だけは矯正しなければならぬと心に決めるのも束の間、磔柱に括りつけられ、両の乳房を長身の槍で抉られて苦悶する自分の姿を目の前にうかべると、妖しい恍惚境の中に浸りきつてしまうのをどうにも出来ないのです。

四

夜！それは私にとつて楽しい、そして苦しい幻想の世界なのです。眠りに就く前の自由奔放な空想のひとつ——。

冷酷無残な悪魔と一人の美しい女（勿論それは蓉子自身ですわ）との鬼ごっこ、彼女の衣服は次々と剥がされて、ブラジャーがちぎれ、パンティーズが引き破れる。全裸の女は遂に大きなまな板の上に仰向けに縛りつけられる。百鬼蠟燭に照らし出された女の裸身を喰い入るように見つめた悪魔の眼また板の脇に置かれた錆ついた肉切包丁へ悪魔の手が伸びる

（腹部を切り割かれる場合、鋭利な刃物より錆びついて切味のよくない刃物で無理にぎゅつと押しつけてしごく様にして料理される方が遙かに苦痛が激しく、それだけ快美の度合が強いと思われるんですもの）そして身の毛もよだつ美女の肉料理の幕はきつて落されるのです。

やがて、いろ／＼な空想を逞ましくした上蓉子の身体は鮮血に塗れてずた／＼に解剖され断末魔の苦悶にのたうち乍ら息をひきとつてゆくのです。

或る日、私は本屋の店頭で何気なく雑誌をひっくり返えし、いて、その中の一冊を手にとつて頁をべら／＼とめくつた途端、思わずはつとして一つの記事に吸いつけられてしまいました。狂い咲くカンナ／＼と拾い読みした後、胸をどき／＼させつゝ無我夢中でその雑誌を買いました。私は私の嗜好にびつたりしたこんな素晴らしい雑誌がこの世の中に存在していたのを初めて知つたのです。その雑誌を読んだ私が如何に狂気したかは、私以外の方には到底想像して頂けないと思います。

羽村さんの告白を何度も読み返えしては、その余りにも私と共通した点が多いのにびつくりし、やがて全身の血汐が燃えたぎり、妖しくふるえる胸を押えながら、しばしの間うつとりと夢見る気持ちでございました。女の身であるような大胆な体験記を発表された京子さんの勇氣と決断力に対して私は深い敬意を表すると共に尽きない感謝を捧げたいと思います（京子さん、貴女の告白記こそ、私の投稿を決意させ、私の前途に大きな生甲斐を与えて下さつた大きな原動力ですわ）



おんな
妓

の

かげ
影

泉 辰之助

「まあ、お久しぶり、どうなすつて？」

初夏の微風が酔心地の私の頬をなぶつていた。道の両側に桜と柳の植込まれた家並の中から艶めいた女の声が出た。

小岩附近と違つて急に淋しくなつて、駅の赤い灯がぼんやり目に入る小松川の通りから直ぐ右に曲つて半丁も行くとうやうや花街らしい賑わいを見せていた。

「うむ、兎に角二階へ上ろう」

女中のお八重さんの後をついて階段をとんとんと上つた私はチャブ台によりかゝつて冷たいビールを一息にぐつとあけた。

「時にあの妓はどうしたい？」

「お嫁に行つてしまつたわよ」

「え、僕に断らずにー」

「僕に断らずにはよかつたわ そんな薄情な妓よりもつと親切なのをお世話しましょうよ」

Reiko—

妾におまかせしてね」

「それよりお八重さんがうんと云つてくれ、ば、一番いゝんだが、駄目かね。こゝへ来た以上は君に万事よろしく頼むより外に方法はないだらうからね、余り若すぎず、おとなしいのが、いゝね」

私は空になつたコップをお八重さんにさす。この前の妓は四五回呼んだことがあつて年は三十位、大柄で小肥りの綺麗な肌をしてゐる上にすこぶる濃厚なサービスなので、居ないと聞くと何んだか惜しい様な氣してくる。

私はこの日、総武線の小岩で友人と飲み歩いて駅まで来たのが午後十一時頃で新宿迄の切符を買つて乗つたのはいゝが電車が平井駅に入つた途端、両国駅で脱線事故があつたとかで、とうとう馴染の料亭のある平井で沈没してしまふことになつたのである。

やがて階下の御帳場へ下りて行つたお八重

さんが上つてくるとニコニコとして言う。

「貴方、運がいゝわきつと御氣に入る様になりますよ、いゝ妓がいたわ」

そこへお女将さんも上つてきて話が急にはずんできた。コツプのやり取りをしている所へ、襖が静かに開いて「今晚は」というのも口の内、一人の妓が入つてきた。

どんな妓だろうと、半分は興味半分は不安で妓の顔の上のを期待していたが、まあまあという所、至つて平凡な、素人っぽい注文通りの、おとなしそうな女で、私の好みを知っている為めか、幾分肉付のいゝ締つた体付である。

「さあ、妾は下へ参りましょうか」

とお女将さんが立ち上つた。お八重さんに教えられたのか、妓も浴室へ入つた私の後から足袋だけぬいだ座敷着のまゝついて来て背中を流してくれた。

「おい、着物が濡れるだらうからいゝよ」

と云つたが

「でもいゝことよ」とまだ流していた。

この妓と不思議な因縁が結ばれようとは其の時、思つても見なかつた事である。それから妓は、私のぬぎ捨てた洋服類を一纏めにし、先に出て行つた。

二階に帰つて見ると、もう寢床も用意されていて、キチンとズボン迄も寝押しにしてくれている。私は湯上りの氣持いゝ体を、ゴロツと横にひっくり返つた、枕元のスタンドだけが柔かく光を投じている。妓は座敷着をぬいで、半ば向うむきになり乍ら、丁寧にたゞみ初めている。こう云つた情景がたまらなく私の目に映つて、抱き締めてやりたい衝動にかられたが

「お風邪を召しますよ」

と妓から振り返りざま声をかけられて「ウム、」と床の中にもぐつた。然しもぐり乍ら、じつと眺めていると、今度は帯までたゝんで部屋の隅の乱れ函に重ねて入れた。一寸目礼を残して妓は出ていつたが、多分手洗に行つたのであろう、帰つて来ても、初めての客の私に、遠慮してかモジ／＼している「いゝからお入り」

と云つたので、漸く「御免下さい」とも云わずにソロリと体を床へすべり込ませて来た。人によつては遊ぶ度毎に、相手を変えがる者もいるが、私はどうしても馴染まなくて、万事面白くない、先ず氣心が分らない、話の仕様もない、然し長襦袢でなくて、寝巻に着換えているだけに、幾分小符合で遊んで

いるといった感じが救われて、親近感が持てたのは何より助かつた。

フェミニストである私は、何かしら相手の美点を探し出して、其れに蕩酔してしまふタチである。真ん丸いふつくりした乳房をはだけた胸元に見ると色がとても白い、どんないゝ顔形をしているよりも女の肌の白いのは、男にとつて此れ程よい事はない。

「こゝへ来てどの位？」

「やつと一月かしら」

「今迄どうしていたの？」

お客なんて云うものが先ず発声第一に聞くきまり文句だが、この際仕方がない、我々ら甚だまずいと思う。芸名が「みすじ」本名が山田喜美子、年は二十七で一度結婚した事があつて子供も一人ある、結婚前までは相当の暮らしもしていたらしい。

「妾、その頃は今よりもつと色が白かつたのよ」

「今だつて中々白くて綺麗じゃないか」

といゝ乍らグット肌を脱がせてしまつた、妓もまんざら悪い氣持でもないのだらう、恥かしそうにはし乍らも別に抗らいもせず、私のなすまゝ自由にさせている。

妓の置家には同じ年頃の光奴というのが一

人いて、外に十八位の仕込中のがいるという。私はさつきからの酒やビールの酔が急に又出て来た。

「君の様な若い女とこうしてい乍ら酔つて了つて悪いなあ。矢張り、僕が今夜の様に酔つた失敗談を聞かせてやろうか。そうだ丁度この正月の事さ、〇、あの山手線の〇だよ、其処の山水楼で新年宴会があつて大いに飲んで もうベロ／＼になつてしまい、愈、散会となつてから、又引つばられて見番の裏の何と云つたかなあ待合へ行つたのさ、芸者も三人ついて来て、誰がどの妓と自然に組み合わせが出来てしまった。僕だけがもう飲みたくも食へたくもないので、二階に案内されて直ぐ横になりフーフー云つていた処へ春太郎という、小柄だから若く見えるがもう三十を少し出た、土地では相当の踊りの上手い妓がやつて来て、万世話をやいてくれたが、その春太郎も大分酔つていて、足元さえ危つかしいのさ。そして（貴方だれにも云わないと本当に約束してよ、いゝ事して上げるわ）と僕の顔をニツと見つめるのさ。中々真剣な顔付だから、どんな事されるのかと一寸は心配だつたが、（誰にも喋べりやしないよ）と返事してやると、その春太郎がさ妾を縛り上げ

て、そして貴方のバンドで遠慮なく打つて頂戴」と云うのさ（そしたら妾も嬉しいし貴君だつてキツトよ）僕は少し躊躇したけれど酔つていたので、じや一つやつてやろうかと、妓の両手を後に廻して、赤い細紐で縛つてやつた体がスラ／＼としていたので、踊りなんかには適當だが、縛り上げて見ると、痛々しそうな氣もしたから、初めは冗談半分に軽くうつてやると、妓は怒つて（本当に遠慮なんかしないで、お打ちなさいよ）と催促するのさ。そうなれば勝手にしろと、僕は妓の背中といわず尻といわず思い切り打つてやつたさ。打つ度に桃色の線が幾筋もハツキリとついて可愛想な氣にもなるけど（こゝは二階の奥で、下にはどんな事をして聞えないから、大丈夫よ）と云うので今度は仰向けにして、お乳の辺から腹、太股までグングン打ちまくつてやつたら、春太郎も流石にウンウン云い出して、……………」

曉方、遠くで初発の電車が通つて行く。外はまだ薄暗い。なんだが田舎へでも来ている見たいな錯覚をおぼえる。便所から帰つて又床の中にもぐり込むと、妓も目をさました。「昨夜のお話本当？」

「あゝ本当だとも」

「その妓の処へそれからお通いになつたでしよう」

「矢張り変つた刺戟が妙に忘れられないから續けて通つたよ」

「いやねえ」

といゝ乍ら却つて甘える様に体をすり付けて来た。ハムアと思ひ当つたので、矢庭に蒲団をバット引きはいで、うつ伏せにすると、今といったばかりの赤い細紐で妓の両手を後ろ手に縛つてしまった、

「妾まだ何んにも知らないのよ、段々に教えてね」

と心から嬉しそうに囁いて、身体をくねらせていた。

よし、この妓は物になると其の時知つたのであつた。

二

それから丁度半月日、又平井へ足を向けた入つて来たみすじを見るとオヤ人違いかと初め思つた程髪の色が玄人ぽくなつてゐる。

「本当に来て下すつたわね」とそばへ寄つて来てビールをとり上げた。妓はまだ馴染みも少し土地で約束通り来た私に対して、非常な

親しさを覚えたらしい、近頃三味線のお稽古を初めて肩がこつて仕方ないなどと近況を話し出した。ガヤ／＼と隣り座敷の客が帰つて行つたあとは、急にヒツソリとなつてしまつた。お八重さんが気をきかせて、一番奥の全然他とは離れた部屋をとつてくれた。

「喜美ちゃん」

「ハイ」

「そう此れから呼ぶよ」

「えい、わ、でもお部屋で二人切りの時だけよ」

「ね喜美ちゃん、君どんな本読んでいるの」

芸妓、殊に場末の芸妓なんでもものは大抵知れているが、小説新潮を毎月見ているという。丁度その頃の同誌には舟橋聖一の「情婦の手帳」というのが連載されていて、戦時中女主人公の葦子のいた女学校が自由主義の、名の下に閉鎖され、文化研究会の一員として彼女も下宿先から検挙されたのだつた、当時の特高の拷問は身の毛もよだつようなものであつて、彼女はまつ裸にされ、股をひろげた恰好で椅子に縛られたまゝ、卑猥な言葉を浴せられているうちにフーと気が遠くなつていつたり、日毎夜毎留置場から拷問室に引っぱり出されて刑事達に責め弄れてゆくストーリーである。



Reiko

刑事部屋で初めて素裸にされた事のないお乳を触られたり、人には云えないような事をさんさんされたり職権を笠にきた特高のデカの杉又が裸の葦子の腋の下へ首を入れていくらくすぐつたいと泣いて訴えても許してくれなかつたり、調べ室で気狂のようになつてのたち廻つたり調べ室で受けた羞恥は二度と葦子にとつてこの世にないものであつた。遂に葦子は杉又に処女をうば

われてしまふ。

「ね貴方、大勢の男達の前で素裸にされてジロジロ見られるなんて本当に死んでしまいたいでしょうね」

「まつたくだね 殊に若い女にとつてはね」
「妾せめて貴方と二人切りなら」と云つて急に妓は顔を真っ赤にした。

「喜美ちゃん、僕に君の生れたまゝの美しい姿を見せて呉れない」

ともう伊達巻もとつてしまつてゐる妓の寝巻に手をかけた、妓は恥らう様な様子をしていたが床からスルリと脱け出して、立ひざのまま寝巻を下にすべり落した。枕元のスタンドの灯がなめらかな肩をなゝめに照していた。

「さあ立つて」と私にうながされて、最初は向うむきに立つた。白いそして、たくましい背中と腰の辺りが何んともいえない曲線を見せて、股から足の先まで流れている。静かに顔を私の方へ向けると、

「もう、かんにんして」と急にそこへくずれ折れる様に、しやがみ込んでしまつた。

「人に云えない様な拷問つてどんな事するんでしよう、その葦子という人一体どんな事されたんかしら」

「まあ鉛筆かゴム消しか、ひどい時には太い竹の棒を使うと云うじやないか」妓は又真赤になつて尙も先を私に云わせようする。

「喜美ちゃん、そんなに聞きたければ、してやろうか」と笑い乍ら云うと、喜美子の方も首を合点くしてうなずいた。もう万事承知の上なら面白い、幸い今夜は他に客はいないし、もうお八重さんや婆やさんも寝付いた時分だから、少し位の物音は階下まで聞えもすまいという安心もある、一つの位喜美子がマゾヒストか試めす絶好のチャンスに恵まれたというものである。

先ず妓の細紐を幾本もつないだのを持つて後に廻り

「いゝかい覚悟は」と云いつゝ両腕をグツと後から縛り上げて乳房の方へ廻わし、強く締め上げて、又背中で縛り、どんなにあばれても、到底はどけない迄にした。

「サア立て」と囚人を扱う様に声は低いが強く命令した。

喜美子は「怖い」と云い乍らそれでも素直に立上つた。部屋の隅に置いてある二月堂の小机が目についたので、其れを真中に引出して来て、其の上につつ伏せに乘れとアゴで指図した。妓はヨロ／＼としたが私に縄尻を

とられた恰好で拷問台の処まで来たが、豊満な肉体をそのまま独りで二月堂の机に乗せる事は出来ない、私は半ば小突く様な風にして半ば手をかけてやり乍ら、兎に角妓の裸のままの無残な姿を台の上につつ伏せにしてしまつた。私は革のバンドをズボンからはずし、

一二度妓に聞かせる様に空を切り、そのビュ／＼という音をわざと妓の耳近くでさせた。妓は覚悟をきめているのか一言も洩らさないでじつとしてゐる。私は革鞭を先ず肉付のいい背中に打ち下ろした。一度二度三度、そして両肩に、然し階下が気になるので本当には鞭が振えず次第に尻の方へ打つて行くと、急に妓は「もつと／＼強く」とウメ／＼様に訴えた。よし階下に聞えても構うものかと更に力をこめて尻へ打ち下ろした。其の音の何んとも云えない響、左右に開かせた太腿へも用捨なく鞭を当てて行く。「起きろ」と云いさま妓の縛つたままの両手をグイと引いた。然し妓は独りでは起き上れそうもない、折角結つて来たばかりの髪を残忍にもつかんで置いて一方私の手を胸に廻わして引起した。

「喜美子、どうだつた」

妓はまだ黙つたまゝ息をハア／＼している「太ももを打たれる時一番感じが強くて私好

き！でも、もうかんにんして」

と甘えるように言つて目を閉じた。妓の両手はまだ縛り上げたままだし、乳房にも縄がくい入つてゐるまゝだ。私はどんな事があつても、この妓を手離したくないと其の時つく／＼思つた。

何時頃か、妓の足が私の足の上にドンと当つたので目がさめた。微笑んでゐる喜美子の顔が次第にハッキリと映つて来た。喜美子は「お仕置なさるんでしよう」と低い声で囁く様に云つたと思つと、私の返事も待たず「いやーん」と甘えた声を出した。

その「いやーん」という響は却つて私の心をかき立てて妓が又責められるのを催促してゐるという外はない、本当に嫌なら「イヤ」と短く云う事が分つて来た。私は今度は掛布団を除けて床の上に、喜美子を起すと「そのまゝ便所へ行くんだ、拷問の途中で小用でも催しては駄目だからな」と言いつつ残酷にも高手小手に縛り上げたまま引立てた。妓は一寸ためらつてゐたが、逃れようがないと観念したか、割に素直に襖の処迄歩いて行つた。然し襖を明けて「進め」という私の合図に、外の廊下には誰もいないとは分り乍ら、一瞬立ち止つてゐるので、ドンと私に突かれ

て、廊下の端にある便所まで糞尻をとられ乍らうなだれて曳れて行つた。然し便所の戸口まで着くと、もう一度私の方をじつと振り返つて「かんにんして」と訴えた。私は許す心など少しもない。「黙つて入るんだ」と、女便所の戸を開けた。妓はもう何うしようもないと覺るとそのまゝ、しおく／＼と中へ入つて行つた。

喜美子が菊五郎劇団を見度いと言つていた事を彼女と別れて帰る途中思い出したので、明治座の切符を速達便で送つた。

三

一週間もすると逢わずにはいられない衝動にかられて又出掛ける。喜美子の喜ぶ顔を見たり、たわいもない話をしたりし乍ら、一杯やるのが又とても楽しくて、明治座の切符が来た時は丁度夕食時分といつても、女達の屋御飯で、おかあさん(置屋の主婦)に迄「キツとあの方も行つていなさるだろう」なんぞとひやかされて、赤くなつてしまつたなど聞かされた。喜美子は全く芸は駄目の不見転芸妓には相違ないが、人のいい事無類で、芸者には珍らしいタイプである。隣の三味線を聞き乍ら私は杯をふくむ、傍で彼女が私のカバン

からサディステイックな記事のある雑誌や、写真や絵を出して夢中になつて見入る、時には急に気がついた様にお銚子をとつてお酌をしてくれる。私はもう小一時間もすると、この妓が誰にも見せられない無残な姿になるかと思うと、もう酒を飲み乍らも堪らない気持ちにかられて仕方がない。私は平井の駅を出る途端、どうぞ今晚も私達だけで外にお客のない様にと、祈らずにはいられない。

その日もそんな事を願つていたにも拘らずどの座敷もふさがつていて、お八重さんも一寸顔を出したきり、女たちのハシャいだ声が聞えて来るばかり、

「おい、あつちへお退けとするか」

と妓をうながした。

「今晚は駄目ね、妾お仕置助かつたわ」と言いつつ悪戯児らしくニツと笑つて見せたりした。「こいつが」と私も可愛くなつて、所きらず抓りまくつた。

が然し突然どうして楽しもうかと考えたが急にいつもの様に妓を素っ裸にして高手小手に縛り上げた。そして足首は、別々にかたく結えその細紐を両手を縛り上げた処へギューと引っぱり上げて、身体が反り返える様に強く締め上げて行つた。妓は足を伸ばそうと

すれば縛られたままの両手が引っぱられてどう仕様もない。他の部屋には鞭の音を聞かせる訳にゆかぬので、うつ伏せのまま、私の片手は、妓の足の裏をくすぐり初めた。妓はなんとか耐えようと身体を転々としていたが、もう堪らなくなつて来たのか、しのび声さえ洩らし初めて床の上をのたうち廻つた。

「ね貴君、妾とても鞭で打たれるより、くすぐられる方がもつと／＼苦しいわ」

喜美子は私に囁くのである。そして見て来た映画「奴隸の街」を寝物語に私に話してくれた。新宿の赤線区域から逃げ出した若い女が再び捕つて来て、大勢の男たちの前で見せしめの為め裸の背中を鞭打たれるシーンなど却つて喜美子自身が鞭打たれているように語るものであつた。

戦地での幾多の淫虐拷問話など二人で話した。日華事変突発の当時、通州で多くの日本の若い女たちが引捕えられ、云うに忍びない凌辱を受けた拳句、刑場に数珠つなぎになつて引出されて、なぶり殺しにあつた事など、もう誰もが知り尽しているのだけれど、彼女の口から今更に話されると不思議に生々しい事実が躍動して来るのだ。この喜美子という妓は本当にマゾヒストとして申分ない。

私は益々この妓に惚れ込んで行つた。今度帝劇で踊りの会があつて皆で見に行くのと云われ、ば、何日か帰りに銀座で飯でも一緒にしようとか、私の方から喜美子の歡心を買う様になつた。それだからこそ段々逢う度にコンパクト一つにしても立派なものになり、座敷着にしても先ずチャンとした芸妓らしい姿になつて来ると、私は却つて外見だけでも變つて行くのが嬉しいやら悲しいやら、複雑な心境にならざるを得ないのである。然し私と喜美子との間にはたつた二人切りになつた時だけ少しも變らない二人だけが味い楽しむ遊戯が続けられて行つた。

その中彼女は中々流行妓になつたので「お約束」でもして置かないと逢えなくなつて来た。九時といつてあつたから、少し廻つた頃いつもの料亭の玄關を入つて行くと、大抵は女中のお八重さんより早く顔を見せる喜美子が出て来ない。其んな事は別に気にする程でもない、二階座敷に通、もう酒の方がいゝ季節なので、早速チビリ／＼独



REIKO

りで飲んでゐる中には来るだろうと始めたがすぐ十時になり、十一時になり、お八重さんも「本当にしようのない妓だこと」と私に済まなそうに云つてくれた。

「お前さんどうしたのよ」と妓が入つて来るなり、お八重さんはニラミつけた。「済みません」「お約束忘れたんではないでしょうね」「ええ」と喜美子もうなだれている。私の方へも急には近ずいて来ない。

「どうしたんだい。まあ此方へお出でよ」と私が却つて取りなしてやる始末であつた。お八重さんが下へ行けと目顔で知らせると妓もバツが悪るそうにお帳場へ下りて行つ

た。やがて戻つて来た妓は半分ペソをかいでいる「お女将さんにうんと叱られちやつて、妾が悪い事は悪いんです、光奴さんと一寸話はずんでしまつてこんな時間とは思わなかつたんですもの」と独り言の様に弁解している。

「今日はどうんとお仕置だな」とからかう様に云うと喜美子も「ええ」とかすかにうなずいた。

漸くいつもの部屋で二人切りになつた。

「おい本当にどうしたんだ」とビシヤツと妓のはゝを平手で打つてやつた。

「嘘なんか云わないことよ」

「彼氏とでもいゝ事して居たんだらう」と此れも芝居の文句と同じ意味に私は使つたのだ。そうして段々責め場の空氣が濃厚になつて行くのを楽しんだ。

「おい、起きろ、そこへ座れ、お前は兎に角罪を犯したのだから白状するまで拷問にかけろぞ」と私はおどす様に申渡した。「賄物をぬいで神妙に手を後に廻すのだ」

妓は幾分顔を赤らめ乍らシオ／＼と長襦袢をぬぎ捨てると、もう下には何もつけていない。私は、後に廻わした両手をグツとねじ上げると、いつもよりきつく縛り上げた。拷問

台を指差し乍ら、ドンと小突くと、妓は悪びれずに台の上に身をうつ伏せにした。私は階下への響を気にしながらも思いきり強く背中を革鞭でブンなぐつた。ビクツと体を震わし乍ら続いて二回三回と鞭のふり下ろされるのに耐えていたが、徐々に尻から両股の方へ打つて行くと、少しでも逃れようと左右に体をくねらせ初めた。然し此所までは既に今迄にも幾度も経験した事である。何か変つた事はないかと、フト鴨居を見上げると、夏の名残の蚊帳のつりて掛けが残っていた。ヨシとうなずいた私は妓を引起すと、そのままずる／＼と引ずる様にして壁ぎわに連れて行つた。そして妓の足首を別々にかたく縛つてしまふと、蚊帳のつり手に紐をかけグイ／＼引張つた。

四

春から新緑へと又季節が巡つて来た。喜美子と逢い始めて一年になる。そして五月雨の頃となつた。



夜更けてから突然その行きつけの料亭へ出掛けたので、喜美子は他の座敷へ出てしまつた後である。お八重さんが心配して「貰い」をかけて呉れるのだが、中々先方に通じないと見えて、独酌のわびしさが身にしみて来るやつとの事で妓が来たが、何んだか平素よりボツと顔が赤らんで見える。

「大分飲んで来たな」というと、「そんな事ないわ、妾、風邪引いちやつて」と手を顔に当てゝいる。「早く寝よう」と妓をうながした然し妓が体がカツ／＼とほてつていて、余程苦しいらしい。「無理しないで帰つたらどうだい、花代は付けとくから」と、云つてや

つても帰ろうとしない。却つて、いつもの様に「いやあん」とスネる様な、甘える様な態度をして来る。「今夜はもういゝんだよ、静かに休もうじやないか」と私の方から断つてやつた。

妓は熱が高くなつて、私がわざ／＼手拭を時々洗面所迄しほり替えに幾度も立つて行く始末であつた。

「僕は一足先きに帰るけど、ゆつくり寝ておいで、お八重さんにはよく云つて置いて上げるから」

「お送りしないで済みません」と情のこもつた目元をうるませている、此がこの妓との別れになろうとは思つても見なかつた。

丁度仕事も多忙だつたので一ト月あまりこの方面へも御無沙汰したので、久し振りに妓の元氣になつたであらう顔を見ようと思つて出掛けた。

「みずじさんやめたのよ」「え」と云つたきり私も返事が出なかつた。お八重さんの話では、あれから一週間ぐらいブラ／＼していた様子だが、ハカ／＼しくないので大森の方の親戚へ行つていたが其の後はどうしたか、然し芸妓の籍は抜けたと云う。

「そりや嫌なお客だつて有りますわ、けれど

一々嫌だつて帰つて来てはお出先（料亭）さんからはきらわれて呼んで呉れなくなつてしまふし、芸妓つて厭ね」と云つた喜美子の言葉を思い出した。

「こんな社会から足を洗つてうまく暮して行けると本当にいゝんですけれど、みずじさんつて、芸妓にはまつたく珍しい大人しい人でしたわね」とお八重さんもシミジミ云う

た、うき川竹の流れの身、私は喜美子がどこかで幸福に毎日を過していて欲しいと念じずにはいられなかつた。
(終)

夢見たべうゆ

――破つた日記帳より――

川端多奈子

八月三十一日（日）晴

窓から首すじへ斜めにさし込んでくる朝日はじつとりと肌に汗を誘い込んでいきます。バスに揺られて三十分ばかり、山と竹藪の間の小道を辿ると、一軒の百姓家ともつかない家の前に出ました。

合図のように、鐵だらけのおばあさんが顔を出して無言のまゝで私達を内へ案内するのです。地下室へ通ずるその階段は水に濡れて、まるで苔でも生えたようにぬる／＼しています。それが暑さにほてつた素足にはべた／＼快いのですが、足先に力を入れて滑りを止めようとしても両手が後手にきつちりと縛り上げられたまゝ

ぐい／＼と押されるので、まるで宙に浮いたような恰好で私は水浸しになつた叩きの上に蛙でも潰すように投げ出されてしまいました。宙に浮いた時、下腹のあたりにきくりと強い衝撃を受けたようでその時の驚きが、あまりにも激しかった為か右肩から右腰へかけて当然起つてくる筈の痛みが少しも感じないので、私は横になつてま

ゝドロ／＼の床の上を弾みで滑つてどすんと壁に突き当りました。胸から二の腕へかけてぐる／＼と巻きつけられた縄が水を吸つて肌にじわ／＼喰い込んで来ます。次第に闇に馴れた眼には、こゝが穴倉のような物置であることを知らされました。

「さあ、今日はずん／＼と苛めてやろうじやないか、こうなれば袋のねずみだからな」

さつき私を階段から突き落した男の声です。私は縛られる事は承知しましたが、こんなひどい事をするのを承知したわけではありません。「誰かきて！」大声を出そうとしましたが声が出ません。その筈です。いつの間にか猿ぐつわが頬に喰い込むばかり固くはめら

れているのです。せめて自由な両足だけでもバタ／＼させて、あの男達を近づけないようにしなければと思いましたが、既に地下室へ下りてきていた男の重い体重が身動き出来ないばかりに私の全身にかゝっているのです。

地べたから慕い寄ってくる冷たさ、あゝ私は素裸のまゝ縛られているのです。後手を下げようとすれば首に廻った縄が咽喉を締めつけます。口へ詰め込まれて唾液でべた／＼になつた布片で舌を動かす事さえ出来ません。

「隣の拷問部屋へ連れて行つて、ゆつくり料理をしよう」

又別の男の声がしました。――

「いや、いや、いや！」
私は声にならない声を出してもがきました。隣にはどんな恐ろしい仕掛があるのでしよう。私の身体は一寸刻み五分試しにされるのかも知れませんが。そんな事をされたら、きつと私は氣狂いのように泣き喚くことでしょう。二人の逞

ましい男達の手によつて私は軽々と担ぎ上げられました。意識があり乍らどうすることも出来ないのです。私は此の男達の甘言を信じて、こんな野中の一軒家へ連れ込まれたのを後悔しました。然しこんな男を信用したのは軽率な私にも一端の罪はあります。

担ぎ込まれた隣の部屋には淡い裸電球がぼんやりとついていて六帖ばかりの広さです。電灯がついていながら私にはどんな部屋なのかさっぱり見えないのです。或は私の知らぬ間に目かくしされたのかも知れませんが。肌に感ずる触覚と聴覚以外は、私はすっかり外界から閉ざされ、私の知らない間にすっかり恐ろしい陥の中に陥つてしまつていたのです。

私は仰向けに木の台の上に寝かされました。縛られた両の腕が背中の真下になつて私の胸は嫌でもそりかえらないわけにはゆきません。この男達は一体どのような事をしようというのでしょうか、と、

突然右足の太股で焼けつく様な激痛が頭の芯までズキンとききました。

「あゝムツ……」

私は思わず大きな声を出してしまいました。冷汗が胸から脇腹へかけてびつしよりと出ています。

「多奈子さん、どうしたの？」

お友達が私の顔をのぞき込んでいます。私は自分の夢をのぞき見られたように赤くなりながら「胸の上に手をのせていたので、それで呻されたのだわ」

と答えながら、それでも何んと生々しい夢だつたらうかと、あの夢の続きを見たいような氣持で一杯でした。

私は男の人二人に挟まれてバスに揺られながら、うゆべ転寝して見た夢を今更のように思い出していました。この人達はあんな事をする筈ないわ、そう心の中で打ち消しつつも、あの夢に余りにも似かよつた今日のコースではありまゆんか、やはりあの百姓家のように

な一軒家の前に出たのです。只違ふのは老婆のかわりに出てきたのは三十前後のハンサムな青年でした。そして美しい女の方ですね、と私の顔を眺めるのでした。

三人の男の人達がぼ／＼と小さな声で何か相談し合つていました。私は一寸離れてさりげない風で道端に茂つた草に蟻が群つてゐるのを眺めていましたが、心の中では昨日のあの夢の続きを追つていました。あんなひどい仕打ちをされながらなんというやるせないそして痺れるような甘美な思いなのでしようか。

「ちよつと、多奈子さん！」

その時私は幻想から現実へ呼び返えされました。無言で顧つた私の眼の中へぎら／＼と脂ぎつた青年の真剣な顔付きが飛込んできました。

「今日はいつもと変つた縛り方をしたいと思いますがいいですか」
私は何んにも言わず只じつと相手を見つめていました。(未完)

春^{しゅん} 婦^ぶ 哀^{あい} 歡^{かん}

飛^な 田^か の 娼^{おん} 婦^な た ち

花 村 鶴 二

第 一 話

七彩のネオンは夜霧に濡れて、飛田の娼婦たちを、聖女と浮きたゞせる。

「ね、あんた眼鏡さん！」

とに角、男の特長をとらえて、即興的な呼名をつくる。

のれんを出た私の血管に、安酒のアルコールが、脈々と本能の浮気の虫をかき立てる。

夜毎、日毎の嫖客が踏む階段を、ひょうろうと踏む。部屋のまん中に灯つた親子電球、この部屋にいる娼婦の生態のすべてを、知りつくして煌めいている。

「今夜はまだ処女かい」

「モチよ、あんたが初めてのお客」

愛嬌を見せた前歯に冠した金冠が塗つた口紅に映える。この女は電髪をかけず香酒を匂わす和髪が似合っている。

出がらしの、味も香もないただ澁んだまずい茶に、唇をしめすと

「君は蝶々夫人のようだね」

と喋らせる。

「誰れもがそんな事いつていたわよ」

「すぐと、うぬぼれね」

「あら、この人憎まれ口、いやわよ」

テクニカルに私の二の腕を、きゅつとつねる。

「でも私淡谷のり子に似ていない？。そう信じているんだけど……」

独りに喋る。

「休みましょう」

帯を重たく解きはじめる。

「着物を脱ぐのは、君の勝手だが私は寝ないんだよ」

「あら！どうして？」

「愛情がなくて、肉体があるなんて私はけだものに陥ちたくないんだ」

「何とか謂っているわ」

女は肩から着物を下らすと、挑発的な真赤な長襦袢一枚になる。

「ね、早くしないと時間がくるわ」

私は壁に貼られた、幾枚かの映画人の雑誌の切抜きを見ている。

「あんた目的があつたから、登壇^{のぼ}たんでしょ？」

「うん！」

生返事をして、そつと女の顔をかゝえる。

「接吻を許してくれる？」

気の弱いことを、さらけ出す。

「泊りの客じゃないと、そう易々サービスし

ないのよ」

「勝手にしろ」

「あんた怒つたの」

額を稍上向きにして、受動的なポーズをとる。

「次の機会まで おあずけだ」

「バカにしているわ」

「私は君の青春の頁を盗みにきたのだ」

「この人変っているわ」

女は私の膝に、重たい体重を托しにくるのである。

第二話

「あんたゆうべから一度もわたしを楽しませてくれなかつたじゃない？」

大酔を発して、只眠るだけに階段を踏んで泥の如く熟睡した朝である。

「こんな商売をして、二年余りにもなるが、お客を振つたことはあるが、男から振られたことは、あんたが初めてよ」

私のあたまではまだ鉛の鈍重で、身体にまだ酔が残っている。おつくうで返事もしない。後悔の仏頂面であつたかも知れない。

「あんた商売なんだね」

女の声は不機嫌である。

「盲啞学校の先生さ」

「だったら助平じやはないの」

「僕の如き例外もあるさ」

「云つていらア」

女は不逞に腹匍つたまゝ、もみ潰しの煙草に火をつける。

「ほんとうに私の身体に用事はないの？」

「そうらしい」

「頼りない男ね」

「時にらく花もよいじやないか」

「何とか云つていらア」

この女の言葉の癖らしい。

「八後半が出勤時間だから、それまで帰らしてくれよ」

「帰さないよ、一どしつかり抱いてくれなくちや」

「無届欠勤すると、クビになるんだよ」

「クビが恐いの、あほらしい。短い人生じやないの、もつと心臓を強く持つてよ。あんた男じやないの」

「よい心臓だね」

私は意識的に度胸とは云わない。

「勿論強心臓じやなくて、こんな客商売が出るかつてさ」

「もつと優しく女らしくなるんだね」

「あんた泥足を洗わしてくれる甲斐性がある
甲斐性もないくせに……」

激しい怒りを思わせる唖阿をきる、この女の表情が、無智のあばずれの仮面の下に美しくのぞかせる。

「君は土佐の生れだね」

「あんた占師もやるのね」

「よさこい節を知ってる？」

「知ってる」

「この次きたとき、君のノドを聴くかな」

「これつきり来ない癖に、旨くいっていらア」

「それでもあるまい」

「精々バカにしなかつたらよいわ」

大柄な骨太の骨体の女であるだけに、この女から魅力は感じられなかつた。

「今晚きてくれるわね」

送り出してきて、キュッ！と手を握つた力が、私には暴力のように想えてならなかつた

第三話

小柄で縁なしの眼鏡をかけているので、場違いの感じがする。寝台に腰を落すと、不潔な音を残して接吻を済ます。

眼鏡に瞳をかくしているので、唇をぼつめ

て次の男の慾情をそゝる。

「いくつだい？」

「三十三、無愛想だと思わない？」

「思つたつてどうにもならないよ」

「ずい分薄情ね」

「月給が安い罪だよ」

女の指が私の肩あたりに、ウインクを繰り返す。

「君たちの給料は？」

「前にいた処は十日払、こゝの棲は翌日払いよ」

「じや流転の前科があるんだね」

「前科なんて穢れた言葉を、使わないでよ」

「嫖客という奴は、勝手なわがまゝの熱を、吐くものさ」

「そうね」

女は商売意識をとりもどしたかのように、第二の接吻を求めてくる。

「君からはインテリの匂いがするね」

「あんたからも、同じ匂いがするわ。わたし看護婦の国家試験をとつてるんですもの」

「こゝは病院じゃなかったね」

「あら！いやだ。生きるためにね……」

「妙に間違つた生き方——」私は口まででた言葉をぐつと嚙みくだした。



「床につきましよう」

女は真紅のセーターを脱ぎかける。

「休むのかい」

女は遲疑なく、バンドを外す。

「けだものにするんだね」

「だって、人間つてみなそうなんでしょう」

男という言葉をかくして、人間だという。

「春婦哀歡かな」

「うまいこと謂うわね、でも春婦なんて呼ぶのはきらい。遊女といつて欲しいわ」

「遊女か……」

私は反芻した。一と頃の私は娼婦のことを邪淫地獄の女獄卒なんて、さげすんでいた童貞の日が、僥ばれてくる。

「いつまでつゞけるんだい。こんな仕事を」商売とはいわない。

「そうね、良い方が見つかるまで」

女も客とは云わない。それでいていまの生活、客観的にチラと内省している、真剣な表情である。

「一寸は見当があるのかい？」

「手紙くれているのが二人程あるわ、でもねこゝに来る男は、口で立派なことを喋つていても、結局は肉体が目的だから」

「愛情はそれから生れるんじゃないか」

「こんな生活に陥ちていて、結婚の相手を探しているなんて、わたしも少しはどうかしっているわね」

女の笑いの中に、ニヒリズムの昁りが、一瞬過ぎて行くのを、私は見逃さなかった。

第四話

「あの人とわたし結婚したいわ」

私は新語を発見した様に、女の顔を見た。黒眼の勝ったつぶらな瞳である。

飛田の女といえはすべてが「あんた！ちよつと——」と変りばえのない一律の、生活の声だのに……。

「いくらで遊ばせるんだい」

「三枚あればよいわ」

「それで一時間かい？」

「まアね、ゆつくりして置くわ」

「忙しいかい？」

「まあぼちぼち……」

「ビールでも飲むかな！」

「まア素的……一現のお客としてはあんたは変つてゐるのね」

女は少し酔つてくると饒舌になる。

「終戦を大陸の邯鄲で知つたわ。これでも元は軍属だつたのよ」

彼女たちの身の上話には、何か誇張があるようだが……。邯鄲の土地をずばりと話す、この女に興味を持てた。

「それで……」

私は更に女にコップをふくませます。

「トラックで逃げたわ。前日まで偉そうな肩章をつけたカベタンが、自分の生命の保全にやつきになり、停車を命ぜられて君たちが求められたら、素直にみんな脱いで、盲従せよつて……ね。」

それ以上私はきゝなくなつた。耳の汚れと、酔つたビールの味がますますなる。言葉の腰を折るように

「慰安婦の軍属と違うだろうね」

「慰安婦じゃないわ、酒保にいたのよ」

女は酒保という言葉を一オクターブ上げて叫ぶような調い方をする。

「お互に戦争犠牲者か」

私の言葉をそれ以上に聞こうともせず、

「休みましょう」と眉をあげる。

「悲しき習性だね」

「だつて……」

女は羞かんだように、しゅんしゅんにする

「こゝへきて……？」

「一ヶ月」

「その以前は？」

「九州にいたわ」

「流れてきたのだね」

「えゝ」

女は素直に頷く。

「それでも生きているということは、嬉しいものね。あゝみんな夢の様な気がするわ。これからも夢より儚い人生なのか知ら」

「まあ元氣を出すんだね」

「そうね」

私は女の表情を改めて眺めた。美しく粧つてゐるものゝ、美しい派手な着物の下の、肉体——その血管にどんな、運命の呪わしい血が流れているのか……。

「僕は終戦を九十九里浜あたりで迎えた。あの頃の僕は……暗い話はやめようね」

私はつるされた古簾の隙から、今夜の星屑に眼を流すのである。

第五話

「最近までみなみの一流キャバレーにいたんですわ」

そのキャバレーを私は知っていた。それだけに、その以前の職業に触れなかつた。体臭のように媚態を発散させる女である。

「どうしてこゝまで流れてきたんだい」

「いろいろ事情があつてね……」

女はこれだけ云うと固く口を噤む。

「キャバレーのけんらんと、たゞれた人肉の市の感想は？」

「どこも同じだわ」

諦めきつた口調の中から「男つて酔うと、みな同じだわ」とも云う。

「キャバレーでヤマが這入ると、待ち構えたように、男たちはホテルへ連れこむのよ」

「ドラクだね」

「私たちだつて、それじゃなくちや生活が出来ないもの」

割り切つたことを、あけすけに云う。

「二つの生活から得た結論は？」

私は興味の眼に女の肢体を舐めてゆく……

「最後のものを物質で、あつさり解決するんだから気が楽だわ。抵抗も逃亡もしなくてすむから……それに……」

悲しき女体の生理を、秘々もらす。

「淫じゆうだね君は？」

「だつてみなが、そうなんでしょうと思ひますわ」

「僕には解らない」

「でもね」女はたゞみかけてくる。

「夢と希望があるから実はね、わたし以前から心の恋人があるの」

私は舌に苦い煙草を吹かす。

「世帯をした経験があるのかい」

「ないわ！」

「心の恋人とは映画人だね」

モウパッサンの小説で読んだ、薄倖な女のこと、私は想いを馳せていた。

「ずばりよ」

この時の女の頬は林檎のように真赤な血の色がさしてくる。

「こゝの近くよ、でも電話もかけられず、御手紙も出せないの」

「相手は君の気持を知らんのだろう？」

「勿論郁子独りで思っているんだもの」

とんだところで名前を明かす。

「わたしより二つ若いのよ」

「映画雑誌からの智識だね」

女はそれきり黙つて終う。それから少し間を置いて、京都にいた時の話を語り出す。

「よいどれ天使のあの人がきたの」

「それで……？」

「抽籤したわ」

「全く君たちの社会はわからない。まさか君が金的を射とめたんじゃないだろうね」

「え、そのときがっかりしたわ」

「お気の毒だつたね。まア真実と嘘の中間の小説みたいなものだね」

女は私の言葉の意味がとれない様に、一応とぼけた表情で

「ね、しつかり抱いてくれない。あんたが過去を話させるから、メランコリアになつてきたわ、青春の血をかき立て、ほしいわね。よいでしよう……」

第六話

「隣りにいた奴が、毒を呷つたのよ」

「救かるのかい！」

「え、大丈夫だと思ふわ」

「何で死ぬ気になつたんだい」

「お客に捨てられたらしいの」

「そんな純情なもの、こゝにはいるのかい。」

「わたしだつて信ずる男のためなら、死ぬる自信があるわ」

「そんな女が恐いんだよ」

「でも、よいじゃないの……」

「休まない？」

どこでも同じ一つ言葉がこゝでも繰り返される。

「君と話していることで十分なんだよ」

「すみませんね、実は今日からメンスなのよ」

「それでも……」

「え、濃い塩水をぐつと飲んで、薄い綿糸



で……………、あらバカな話を、一現のお客さんにしたりして、御めんなさいね」
 「男は気ずかぬかい？」
 「誰も気ずかないわ、妙な錯覚にとらわれて穢しがるわ。汚いはなしね」

「いろいろのこともあるんだね」

「ええ、どうせ泥水だから…」

女はこゝで押入れから「御誂」の包みを持ち出し

「今日届けられた着物よ見て下さる？」

女の新しく作られた着物への、よろこびが私を馴染のような心易さにしている。

「少し地味かな」

「こと更地味な柄を選んだのよ、いつまでもこゝの世界にいるわけじやなし、やがてはゴールインするんでしょう」

「心がけがよいんだね」

「だつて…でもね早くこゝから足を洗いたいわ、みんなが上つて独りで客を呼んでいるときなど、ほんとうになさけなくなるわ、どんな男でもよい。最高のサービスをしてあげようと思うわ」

「生活の苦労だね」

「ずい分あるのよ」

「借金があるのかい？」

「病氣をしたから、少しばかりあるの」

「どうする事も、出来ぬくせに生活感情にまで…ごめんなさいね」

「女つてね、男の親切に甘えてみたいようなそれでいて、男と云うもの、すべてに、反抗

してやりたい、複雑な心理があるわ」

「それを女というんだよ」

「はつきり言うのね」

女はあつさり妥協した口吻になる。

「あんたお仕事なにしていなさるの」

「さア何していなさるんだらう？」

私は他人ごとの様にとぼける。

「当てゝ見ましようか」

「当てゝ見給え！」

「さア、何をなさつている人か知ら？」

「俺は巷のモク拾いさ」

「まア旨く冗談を云うわね」

「ほんとうだぜ」

「嘘ばかり…」

私が巷に出て人生の美と醜の、かけらの屑を拾い歩くこと―悲しい宿命とあきらめて…

今日の女にも、それをもらさない。

街に出た私の瞳に、夜霧に濡れたネオンが、甘く…やがてきびしく迫ってくるのだ。

(おわり)

x

x

x



或る家庭教師の告白

角 田 平 八

そう云えば、何か土曜日になると、いつもと変った処のあるのに思い当つたのです。

「姉さんの部屋へ遊びに行つて来ます」

と云う時の彼の言葉つきが、どことなくおかしくしており、逃げる様に出て行くその態度に疑問を感じたのです。私にはむらくと好奇心が湧いて来しました。私はそうつと部屋を出、彼女の部屋——こゝ岩田ビルの三階、私達の部屋の、廊下一つ隔て、西北に有ります——の扉に近付き耳を立てましたが、何の音も聞えません。カギ孔から覗いて見ましたが電燈がついている事が分るだけでした。と、私の頭に何時か読んだ外国の探偵小説の

ある部分が浮びました。私は直ぐ彼女の部屋の隣の応接室——私達の部屋の真北にあり社長室の西隣りにも当る訳です——の扉を開けたのです。案の定です。応接室と彼女の部屋を仕切っている壁に暖炉が掘つてあつたのです。私はその暖炉へもぐり込みました。彼女の部屋の暖炉と応接室のそれとは同じ煙突へ抜けているのです。私はスリルに身を震わせ乍ら手足や顔がスミのため黒くなるのも忘れて煉瓦の低い壁を越えて彼女の部屋の暖炉の中へすべり込みました。その時分は既に初夏の暑い位の頃で使用してない暖炉には厚い布のカートンが掛けてありました。私はふるえる手で

僅かにカーテンの合わせ目を開きました。

そこに展開されて行つた淫乱の活劇、私は……いかに学問にのみ情熱を打ち込んでいる学生の分際とは云え、二十一才の五体健全な一個の男性なのです。そして、現実の女の味こそ知りませんでした。私の空想力は、今まで、私の逞しい衝動の赴く儘、色々のみだらな場面を展開させていきましたが、この光景は私の限界を知らない空想力すら一度も及ばなかつた所のものでした……化石した様になつて、眼の前に、コーコーたる螢光燈の下に演ぜられて行く世にもすぎまじい有様に生つばを飲み続けました。私の好奇の眼に先ず入つたのは、私の隠れている暖炉の真正面に当る所にある、なまめかしい色の絹の夜具ののせられてあるベッドに、裾の長い、胸の部分は思い切り開け放ち、僅かに乳房の先だけが隠れる様なドレス——私は衣服のことは好く知らないのです、この衣を、こう呼ぶのが正しいかどうかは知りません——を着て、大きな目の唇に青白い螢光をつや／＼と反射させて、その眼を細め乍ら坐っている彼女でした。その彼女の足許に二人の少年がひざまずき、螢光燈の下でもそれが小麦色であることの判る彼女の健康にプチ／＼した足先を捧げ持つて、

拇指をなめているのです。一人の少年は言わずと知れた博君——私は彼のこの家庭に於ける家庭教師なのです——でした。もう一人の少年は……よく見るとそれは少年ではなく、この会社——岩田ビルの一、二階は岩田産業株式会社の事務所です——に勤めている、チビちゃんという愛称のある十七、八才の可愛い、唄の上手な女給仕でした。二人の服装は、どちらも上体にはシャツを着ていましたが、私の方へ向いているお尻はむき出しでした。博君はパンツを太ももの所まで下けているのでした。少女の方は木綿の靴下を穿いていて、足の付け根の処に白いゴムバンドで止めていました。この三人の姿は、露骨ではないのに、そのくせ実にエロチックな刺激を私に与えました。私は、うずく様な胸の高鳴りを感じながら、じつと見とれていました。心持よさそうに暫く足先を二人に預けていた彼女は、やがてそのガウンの裾を大胆にまくり上げました。白いものがちらり、としました。彼女の右手が白い玉を

「ほら！」

と云う掛声と共に、広い、ジュータンを敷きつめた部屋の真中にころがしたのです。それは卵でした。二人は彼女の足先を離れ必死

になつて、その卵に這い寄ります。二人は暫く争つていましたが、ちびちゃん、その卵を口にふくみ再び彼女の足許に這い戻りました。私の期待におののく眼の前で、彼女は「さあ、博、お尻をお出し！」

と命じると、左手に持った鞭で博君の尻をピシリと打据えました。博君は観念した様に頭を抱え込んで、差し出された白い肉付きの好い尻に赤い筋が二つ、三つと印せられるのを、じつと耐えていました。ドレスの中から出て来た少女と博君は再び彼女の足許にひざまずき、今度は彼女の足の裏を舐め始めました。彼女は

「う……く……く……う……う……」

と博君の尻に例の鞭を一つ当て、耐えられぬように体をくねらせていました。

と、今度は、彼女は二つの卵を取り出し、さつと転がしました。二人は直ぐに卵に這い寄りました。一つは私の目の先まで転つて来ました。少女は私の前の卵を口に入れました。私は、しばらくカーテンの蔭に顔を隠していましたが、のぞくと、二人は夫々卵をふくんだ儘、争つています。くんず、ほぐれつのも争いです。博君が少女を押えつけて、キスの様な恰好をしました。私は何事が起つたかと

思いましたが、相手の卵を奪い合っているのでした。澄子さん——これが博君の姉、岩田産業の辣腕の女、専務の名です——は相争う二人の側へ近寄り、手にした鞭を振り始めました。彼女の顔は惨忍な喜びに酔った様な表情でした。二人は彼女の、きびしい鞭を、尻に背に股に腕に——鞭は顔だけは避けていました——受け乍ら、死に物狂いです。博君が遂に少女の首に手をかけて締めつけました。そして今や少女の口から卵を取り出そうとした刹那、澄子さんの足が何の容赦も無く彼の尻を蹴り上げたのです。彼は

「う……つ……」

と、うめいて卵を口から落しました。素早く二つの卵を辛うじて口に入れた少女は彼女の足許に、主人に、やれつく、小犬の様に慕い寄りました。彼女は半分、気を失いかけている博君のシャツを着けている背を狂気の如く鞭打ち続けるのでした。そして

「博！ お前は今度の先生が来てから、私と遊ぶのが嫌になつた様ね。今に見ておいて、あの聖人面した男も私の前にひざまずかせてやるから！」

私は全身の血の気が凍るのを覚え、がたがたと身震いしました。やつとの思いで自分の

部屋に逃げ帰った私は、私の部屋と社長室との間にある洗面所でスミを洗い落とし、ベットに入りました。しかし、慌てゝいた私は、洗面所の白いタイルの容器に黒いスミの跡を残して来たことに気が付きませんでした。翌朝彼女はそれを見つけ、私が熨斗に忍び込んでいたのを知った様でした。

私はその夜、家庭教師を辞して、この家庭から出ることも考えたのですが、住食つきで、五千円の給料を貰える、この絶好のアルバイトの口を見捨てることは、私自身に取つても惜しかつたし、私に、この家庭教師の口を世話して呉れ、その上、私の卒業後の就職のことも保証して呉れている先輩のことを思うと、私には決心が付きませんでした。そしてそのまゝ、ずるゝと夏休みを迎えたのでした。私は博君を何とかして、あの恐ろしい姉の手から救おうとも思いましたが、私の消極的で利己的な性格は、君子危ふきに近寄らず、の態度以上に出ることを拒みました。亦自分は博君の英語、数学等の教師として給料は貰っているが、性教育は頼まれていないと自己弁護をし、博君が私に秘密にして、姉とのことを何も言わないのを幸いに、私も毎土曜日の狂態については何も触れませんでした。

【読者通信】

(投稿歓迎)

○ 三月号のク我が軍隊時代の懐古〆思いがけないよい読物でした。特に男性の責めマード写真を挿入された事は秀逸でした。他の五葉の載らないのは残念です。是非次号にでも発表してほしいものです。瘦せ細つた陰惨な囚人等のは大嫌ですが、若くて健康で潑刺とした男を虐待するのは、そこにロマンチックな美しさがあると思います。今後もういつた記事をどしどし載せてほしいと思います。(大木実男)

○ 三月号の吾妻新氏の(サディズムの精髄)なる一文はまことに立派な論文であり明解にして堂々たる主張で、巻頭を飾るにふさわしいものであつたと思います。特に近代のサディズムの本質は女性を肉体的に苦めるよりも、より多く精神的な苦痛を与えることなりという点は全然同感です。強制でなく同意によるサディズム的行為は反社会的に非らずというのは私の主張でもあります。現代人は余りにも社会的に不自由です。然し性生活に関しては合意の上である限り如何なる幸福の追求も許さるべきでありましよう。現代人に残されている此の僅かな自由をも罪惡視することは私は真向

から反対したいです。(神戸 S・H生)

○ 一月号の黒井珍平氏の記事が思わぬことに大変な問題になつてしまいました。我々が驚き且つ私の一寸申し上げた読者通信が物の見事に型なしに打ちのめされてしまいました。全く恐縮の至りです。徳山浅香生氏、長崎YM生氏及び大分高森氏と、この所全く四面楚歌の感です。それで敢えて私は反駁は致しません。潔く白旗を掲げます。然し私は確かに髪ボウボウのグロな感じのものを云つてゐるではありません。日本髪に長襦袢は陳腐だと云われましたが矢張りこれも好きずきですね、パーマネントにシニミイズだつて私はいけないとは思いません。実に美しい情緒のあるものですが、けれども一方に片寄らず、美は主観的であり、客観的であらねばなりません。唯日本人としてたまには美しく結い上げられた日本髪にも淡いなつかしさと憧れを感じないでしうか、演劇に映画に又花街の巷の人の日本髪は誰人と云えども美しい存在と認めざるを得ないだらうと思います。然し私は自分の意見は通そうとは思いません。唯こんな人間もいるということを御記憶下さい。(京都 T生)

縛られた女の寫眞集

大好評！全部未発表の素晴らしい特寫成る

只今分譲中の第七篇（六十一集—七十集）は多数読者の要望を取り入れて特別に会員分譲用として最近撮映したもので、すべて未発表の粒よりの逸品揃いでありますから、どうぞ御安心の上御申込下さい。第八篇（七十一集—七十五集）は目下撮映中です。海老責、柱しほり、猿ぐつわ、ローソク、高手小手、ストッキング、長襦袢、十字竿、棒責め、拷問台、ハシゴ、吊り上げ、逆高、アグラ、芋虫、ムシロ、折檻、腰巻、逆立、荒縄等、豊富な裸女の肌に固く喰い込んだ縄の緊迫感はずっと皆様のお気にいる事と存じます。多少に拘らずお申込みをお待ちします。

第五篇、第六篇も併せて分譲中で
す。一集分五枚一組200円（送共）
大阪府堺局区内
曙書房代理部
振替大阪第34956番

た。しかし、博君の学校の成績の方は、一学期の通知簿を見ると中位になっていました。彼は、二年生で——年令から言うとは三年生の筈なのですが、その年の春、三年生になり得なかつたのです——姉の澄子さんに似た、面長の眼の切れの長い美少年でした。

彼は以前から私に、夏休みには是非、共に彼の生れ故郷——こゝでは彼の母が独りで、岩田産業の可成り大きい織物工場の切りもりをしていました——に来ることを奨めていました。博君の学期末の考査も終つて、愈々明日から学生にとって最大の喜びである夏休みという日の夜、彼の父、岩田産業の社長から呼ばれて、私は社長室——こゝで彼の父は——

週間の半分は寝泊りし、無類の放蕩者である彼は、その度に女を連れ込んでいました。しかも、その女の顔は決して一つではありませんでした。博君は、それらの女の顔を見る度に故郷の母が可哀想だと云つていました——に行つたのでした。室内へ入ると社長は赤い顔をして、ソファにもたれ夕刊を読んでいた。部屋は大して広くはありませんでしたが、華美を極めていました。奥には一つの扉があり、寝室につながっている様でした。社長はウイスキーをすゝめ、博の強い要望から出来れば、共に夏休みを彼の故郷で過して呉れる様に頼むのでした。別段これと云つた予定のなかつた私は心よく引受けました。

社長は機嫌よく

「君はよく勉強するね、感心なものだ。私なんぞ、学生時代は遊ぶことしか考えなかつたものだ。でも、彼女の一人位はあるのだから？」

と云つて笑いました。そして博君のことも話題に出ましたが、例の土曜日のことは言ひそびれてしまいました。その内

「どうだ、今迄色々博のことでお世話になつたお礼に、私の古だが背広を一着贈呈しようかな。君なら私の服で合うだろう。生地は上等だよ」

と、社長はにや／＼しながら言つたのです。社長は起つて私を寝室へ誘い大きな洋服ダンスの前に導きました。寝室には甘い香水の匂いが一面にたゞよつていました。ベッドがそのダンスの両側に一つずつ置いてありました。

社長は、さつとそのダンスの扉を左右に開きました。

「あッ」

私は思わず自分でも驚く位の大きな声を発しました。

（未完）

A

奇譚クラブ八月号に、二俣志津子さん、十月号に深瀬かず子さんの女性側より見た裸体狂崇に就いての論説のようなものが載っていました、私も男体と女体の裸体讃美について、思つたまゝの事を書いてみましょう

新裸体狂崇論

但し、これは総合的論説ではなく、あくまで私の主観に立脚したものですから、我流の、倒錯的斜視的、ピント外れの独りよがりになるかも知れませんが、その点最初にお断りしておきます。

近時裸体を主題

としたものが、絵画、彫塑、工芸、光画等の各面に亘つて、盛んに見かけられるようになったのは、裸体そのものに対する理解が、一般化されて来たことを立証するもので、慶ばしい事であり、新原始還元近代思潮に伴う傾向として、当然の結果かも知れません。既に諸芸術の傾向は、客観を棄て、主観に、主観を通じて実用化



七條美樹子

に進展しつつあります。

かゝる渦中にあつて、モード研究の参考文献などは、あまりクラシク、自然客観風なものが多く、モードフォトにしても、その姿態に、斬新なセンスと、覇気を缺いているように思えてなりません、その点、本誌が取上げている責めなどは、一つの進化と言えましょう。

ともかく、難しい芸術論は、私には分りませんしそれぞれ専門の方に委せるとして、私はさつくばらんに、私流の筆を取つてみます。

・先ず男性のモードですが、外人と日本人は、先天的にその形態を異にしていますので、全て日本人を対象にして申し上げます。

総体的に見て、日本人の男性裸像は、実物はあまり貧弱すぎやしないでしょうか。彫刻なら、その制作者の理想がそこに加味されるでしょうから、いかにも男性的に作られますし、芸術として価値あるしめる為には、忠実な真実描写は、許されない場合も多いでしょう。

う。だから、展覧会場などに出現されるものは、外人風な感覚や、あまりに完成されすぎた裸体という、架空的な印象を受ける場面が多いように思います。

それなら、もつと卑近な裸体は、というと、ヌード写真なんです、男性一人の全裸像というものは、残念ながら、私はまだ見た事がないんです。大ていはボルノグラフィ的なものでおまけに、殆どが女性に重点を置き、男の方はアクセサリに過ぎない場面が多いようです。だから、光画上の男性ヌードを觀賞する機会は、あまりありません。女性は（私だけかも知れませんが）、男性裸体写真を渴望しますのよ。どうして作らないのかしら、需要者は相当多いでしょうから、今後はどんどん製作してほしいと思います。アラアラ脱線。

だから、私達が現実的な男性裸像を求めようとすれば、いきおい生々しい実物を、直視しなければなりません。それも又機会が非常に少く、やつぱり銭湯の娘さんを攻略して裏の小窓からでも窺視するか、勇敢に番台に坐るのが、一番いいでしょうね。

そこで今度は各論という訳ですが、やはり体格は均整的。背は高からず低からず、瘦せて肋骨の読める人や、贅肉で太り過ぎてる人もダメ。容貌はやはり良い人の方がいいですわ。女性ヌード程容色を注文しませんが、やはり醜怪なのや、滑稽なのは、觀賞的には落第です。年齢は十五才から三十五才位まで。子供なんかつまらないし、おっさんお爺ちゃんも、私には興味ないわ。寧ろ嫌悪の情を感じる時すらあるくらい。

やつと過渡期に入つた、柔軟な感じもいゝし、背ばかり高くなつた、未完成な少年の裸像なんか、うつとり見惚れる事さえあるわ。ちよつとその身体に触れてみたいような激しい衝動さえ覚えます。成熟した青年には、みずみずしい魅力と逞しい美とに満ちています。感激と昂奮が、美しいシンフォニーとなつて流れます。かのオリンピアの森に立ちならぶ、男神群像の壮観には、何か威圧される、一つの美の極致のようなものさえ感じます。

次に毛髪ですが、丸坊主はやつぱり嫌ですね。整髪直後の清々しさもいゝけど、その次の日くらいのは、やゝ乱れた毛髪にも、私は何とも言えない魅力を感じます。眉毛は、女性的な繊細なのや、薄いのは嫌い、太い逞ましさに、顔の輪廓と構成を引立てる、男らしい良さを見出しますね。胸毛の熊のように濃いのを、好む人もあるでしょうけど、私はなぜか汚らしくて、あまりに野性的すぎて、まだそこから、美も魅力も感じる事が出来ないんです。男性の腋毛は、魅力の構成上、同性のもの程重要さを認めません。露悪的に誇示されない限り、多くても少くても構わないと思つています。

それから次に男性のヌード觀賞について一番興味を集中される個所についてですが、男性には、その他の部分では、こゝ程強烈に、興味を集める観点が無いからかも知れません。

二俣さんが指摘された、銭湯で、男達が前を隠して歩くのは、実にふさわしくないという点は、大いに同感だと思ひました。何だかいやらしくて、不自然で、男らしくない不様に見え、そこから美や芸術の微臭も、好感の毫末も感じません。裸体の時の男の人は、下

手な羞恥や遠慮から、折角の男性美の設計を歪めないで、堂々と見せて下さい。そこに男性の男性らしい、姿態の妙味というものが、美しく生きるものですから。

これらを要するに、それらがどんなポーズであつても、その裸体男像が、強い嫌悪羞恥の情を抱かしめるものでなかつたら、それは既に芸術の域のものであり、その中から少しでも美を観取出来、ほのかな憧憬を与えられたら、それで私達の目的を、立派に満足させてくれるものと言う事が出来ましよう。

男性裸像の最後に、責めについて、ちよつと書いてみます。奇譚クラブの挿絵や写真は、全て女性であり、極端な描写や撮影は許されないで、無理を感じる事が屢々あります。もつとも、巧みにこの禁忌圏外のポーズを取っているものは、仲々立派で、新しい感覚に生きています。

そこで、男性の責めなんです、これは、強烈なグロに流れ易い缺点があるんですが、逆にそれだけ、効果も多いでしょう。女性は男性の責め場に、大きな期待と関心を、秘かに抱いています。女は男より、内面的には、惨虐性の強い事さえあります。しかし、実行決断力が乏しいから、せめて絵画や写真でも、そのサジズム的傾



向を満たしたく、秘かに望んでるんです。グロばかりでなく、そこに美があり、律動があり、更に性的衝撃があれば、どんなにか素晴らしい事でしょう。

ギリシャの名塑、「ラオコーン」の像を御覧なさい。ルネッサンスの名画、「聖セバスチアンの殉教」を御覧なさい。そこに、美と昂奮と偉大な責めへの熱狂があります。願わくばラオコーンの老人が、ナルチサツスのような美青年なら、聖セバスチアンが思い切

つて腰布を取り、その全裸で縛られ、矢で射られていたら、私は疚くような興奮に痺れて、きつときつと独身の哀歎に、やるせなく悶えた事でしょう。でも数あるキリスト磔刑図ビエタに、少しの責めの良さをも感じないのは、そこに性的な詩というものが無いからです。

夢、詩、凛然たる恐怖の惨虐絵であればある程、その深奥から滲み出て来る、責めの良さというものが、なくてはならない筈です。

男性には男性独特の、責めの良さがあると思います。

B

次に私達日本女性のヌードですが、殆ど共通的な缺点として、脚

が短く、従つて不恰好だという事です。私は男に負けない程長身で均整の無さまさはない積りですが、胴が太くお尻が大きく、ちんちくりんで、アヒルの化物みたいな人が、よくありますが、あんな人を見ると、自分まで情なくなる程、幻滅を感じる事があります。

男は筋肉美、女は肉体と流線の美こそ生命です。

福々しく肥えているのも、程度の問題ですし、蠕蠕みたいに瘦せ細つたのに至つては、全然魅力のミの字もありません。適度という事は、男性のもの以上に要求されるのではないのでしょうか。非常に長身な人は、つまり腰から下が長いわけで、日本人の体軀的缺点を補い、却つてモードとしての均衡を、得られる場合さえありますが背の低い人は、裸体になると、一層仕末の悪い事になります。

容貌も、体格によつて、適不適もありますが、肉付のいゝ人には丸ポチャが可愛いでしょうし、伸び伸びした肉体には、面長な、理智的容貌が似合う場合が多いようです。しかし、モードの場合、智に勝ちすぎた冷嘲な顔とか、ケンのある馬面などは、性感を台無しにします。如何に芸術的モードであろうが、性感を缺除した女性美なんて落第です、そんなに美人でなくても、温い性感興を放射する女体なら、それだけで、立派に及第しているのです。

優しい美貌で均整美に輝き、温い曲線美を持つていて、しかもイッとの強い、魅力の結晶のような女体、それこそ理想のモードでしょうが、男性より女性の方が、理想に近い人は多いようです。女性の殆どは裸体芸術の対象になりますが、男性の殆どは、裸体芸術の対象になりません。

ところが、ある年齢を越えると、今度は女性の方が凋落が急激でやゝ老境の男性裸身は、まだ見る気もしますが、おばさん級お婆さん級の裸身では、頼まれても見たくないような、醜悪な場合さえあります。

ある男性で、非常に異性の腋毛に興味を持ち、狂的にさえ思えるような人なんですが、娘さんのものは、ゾクゾクする程嬉しくなるが、中年以上の人のものは、ゾツとするような悪感がある、と言うのを聞いた事があります。その気持は、ある程度私にも分るような気がします。

豊かな乳房の丘の麓から、悪戯小僧のようにちよつと覗いている腋毛には、とても愛嬌があります。私はその多少にも拘らず、そこに豊かな空想の明泉を認め、汚ならしさを感じません、寧ろ無毛、わざと剃つたものに、物足りない落胆と不自然ささえ覚えますわ。眉毛でも、可愛い顔の若い女学生が、毛虫みたいに濃い、生地のままの眉毛を持つている方が微笑ましく感じられますし、剃り落して、冷徹か、上弦の二日月みたいな偽眉毛を、人工的に揮毫してる方が、嫌な感じがします。更に生地そのものが薄く、顔の産毛なども寡少で、テカテカしたような感じの人には、すっかり興味を失つてしまいます。

乳房は、ツーンと突上げたように硬く膨隆した処女のシンボルのようなものこそ第一で、ピラミッド型の貧弱なものや、板みたいに隆起のないもの、だぶだぶした感じの豊満さ、或は懸垂したものなど、全く感心しません、他の所は大した事なくても、乳房さえ魅

力に輝いていたら、それだけで充分観賞の威力を具備しています。更に曲線とか肉感とか表情とか、そしてそれらを自然的に発揮するポーズとかが、裸体観賞には非常に重要なのですが、あくまで香りを失わない為には、やはりそこに、詩と夢とがなくてはなりません。

女性に女性の肉体を、男性の方が想像してられる以上に、こつそりとや精細微密に観察しているものなのです。その批判眼も決して割引などせず、無理にでも缺点を見付けたがる時すらあります。そして又、醜が非常に醜に見え、美は大変美に見えるものなのです。それは、自分というものを常に標準にしているのですが、美に対する羨望は尊敬に通じ観賞の愉しさを満喫します。

男性の裸体に対しては、素直な観賞よりも好奇とか、本能的意欲の満足とかいうものが多分に含まれてるかも知れませんが……。



個々の構成美に対する、微細に就いて話せば、キリのない事です。ので、駈足でこれくらいにしておき、総合的に裸体観賞の場合を、二三私見させて頂きます。



先ず男性裸体は相撲かレスリング拳闘などですが、巨満な力士の体格には、私は何か畸形的なものを感じ、モードを観賞する対象としては好みません、女には血を見て恐れぬ惨忍な潜在意識が、何処かに働くというだけでなく、筋肉美が躍動し、激突する、レスリングや拳闘に、一つの美しさを感じます。それは責められる美しさに、何か一脈通じるものがある筈です、願わくば、安易に女性にも見られる、全裸の男性の興業なんてものが何か始まらないものでしょうか。

女性なら先ずストリッップでしょうが、曲線の良さはあつても、乳房の崩れたストリッップや、脚の太短かい踊り子など、寧ろ美を壊す場合が多いのじやないでしょうか。裸体芸術論を振り廻してみても、やはり興行であつてみれば、芸術美を完成させるより先に媚を売らねばならないですから止むを得ない

いので事しよう

それよりも、音楽と律動から美を産み出そうとする、バレエ舞踏の方が動的芸術美学としては、最高のものでしょう、往年来米国の大紐育を圧した、世界のストリッッパー、ジブシーローズリーの様な女性が、若し日本に現れたら、裸体観賞に、一つの新しい角度を示唆してくれるでしょう。

男の人なら、遊廓で買った娼妓を、オールヌードにして、どのようにも觀賞出来るでしようし、奥さんから閨房美学の奥義を研究し、リーベさんを温泉マークにでも連れ込んで自由自在に裸体觀賞も可能でしょうが、可哀そうなのは女で、生々しい美の研究の實踐をする機会なんて、滅多にありません、じやア僕が觀賞させてやろうなどと、出現して来られたら、私、困つちまうけれど……。

せいぜい海水浴場や混浴温泉などで、そつと見せてもらうくらいが関の山。だから、ヌード写真にしても、性教育映画にしても、絵画彫刻の類にしても、女ばかりに重点を置かないで、もつと異性の方の祕密をも、どんどん開放して下さい、人類は男女は同数なんですからね……。祕密写真は、男の人だけの玩具じやございませんのよ。ふ……。

何やら取りとめのない事ばかり申しましたが、美術研究と裸体觀賞とは、同じヌードを取扱つても違います。美術研究は朝の表玄関で、裸体觀賞は夜の寝室です、前者は、あくまで芸術という隠れ簾の中で、綜合美学を集成し、意志と觀念を何かの形で、体系づけねばなりません、清潔な美を忘れてはなりません。

しかし後者は、美の満足と共に性的意義の満足も必要なのです、だから、多少構成が不自然でも、理念に倒錯的なものがあつても、不快で醜惡でなければ結構です。

前者には、客観に於ける、複数の満足というものも必要でしようが、後者には、勿論多人数の満足に越した事はありませんが、自分だけ楽しかつても、充分意義はあります。

また、前者は公開的ですが、後者は個人的、祕密的な場合が多いようです、そして、各人の主観が中心になります。他人は他人で勝手に好き嫌いをやればいい、んです。

私は裸体から目を外けません。裸体觀賞は大好きです。だから私は、他人の觀賞のためなら、必要以上に裸体を拒否したり、隠蔽したりしません。寧ろ露出症的な衝動にさえ駆られる事があります最近、裸と太陽という米国の文化映画がありましたは何という羨ましい天国でしょう。

裸体を理解し合い裸体を礼讃し合つて、男も女もその自然の中に美を助長し合う事が出来たら、まだ多年の情性の中に潜んでいる卑俗で汚い好奇心心理を駆逐し、本当は明るい裸体というものが、夢と詩のハーモニイの中で、私達の生活に融和してくれる事でしょう。それこそ私の理想の花園なんです。

その時こそ、みんなて手を取り合つて、そのユートピアへ行きますよう。

予 告

玲子女史の画室訪問

読者諸士の強い要望に従つて、今回喜多玲子さんのお許しを得てカメラとペンによる画室訪問を致すことになりました。最近号の口絵写真として誌上を飾る予定でありますので御期待下さいませ。



交

こう

感

かん

藤 安 節 子

私は子供の頃より、禽獣が好きであつた。

小鳥、犬、猫、鶏、兎の類はもとより、ひとの嫌う毛虫を飼つたこともあるし、粘膜の感触を思わせるくちなわ、なめくじ等も愛した。私が禽獣を愛するきつかけとなつたものは生物学者で動物好きの父の影響でもあるが、私自身生れつき人嫌いな性質が単に動物ばかりでなく、路傍の雑草や一輪の花にも心をめさせるようになったのであつた。

しかし、それよりも私は先天的ローア者でものごころついた頃より、ぼうぼうたる壁の孤独の身であつた。私はローア学校へ入るまで、言葉というものをてんで知らず、家においてもそうであつたが、いつも仲間はずれにさ

れていた。

ことに外に出ると、大勢子供たちが集つて耳がきこえず、ものが云えない私をいじめとおし苦しめるのだつた。

私がへと／＼になつて逃げ廻るのを、どこまでも追つかけてきて、はては食べ物を奪つたり、汚い息を吐きかけたり、最後には唾まで吐いて、どうにも我慢のならぬ悪戯をするのだつた。

そのような彼らの所行は、私の孤独をいつそう強め、私は成長すればするほど、周囲の大人からも遠去かり、私をして人間生活から永久に引き離していった。私は人間を愛するよりも、これらの禽獣により深い愛をそそいだのだつた。

小鳥は父も好きで、たくさんの鳥籠の中に

は、コマドリ、セキセイ、インコ等、色とりどりの美しい小鳥が飼われていた。

少女期の私は、ようやく膨らみはじめた乳房の胸に、そつと小鳥を暖めてやるのがたのしみになつていった。私の胸は純白で二つの盛り上つた膨みをもつ乳首は、ちやうど小鳥の嘴の明るいろであつた。

私はまた、日がないちに、小鳥を観察することに於いて、小鳥たちの微妙な性生活にも触れた。私がコマドリのあれをはじめ見たのは、たしか七つのときである。私がローア学校へ入学した年だつた。私の執拗な質疑に、極く抽象的ではあるが、母が手話で性教育をほどこしてくれた事を覚えている。

私は鶏が卵を温めるのを観察して、私自身の腹で卵を温めたことがある。私は腹巻きの

なかへ、有精卵を入れて、大切に温めたが、三週間すぎても孵化しなかつたので、更に股の間へ入れて大切に温めた。ズロースだけでは、卵をこわす恐れがあるので、私はバンドを使用して卵を固定させ、まるで金の玉でも抱いているようなぐあいだつた。

すると、どうでしょう。腹よりも股間のほうが、はるかに卵を温めるに適しているのだらうか、二十一日目に卵殻は破れ、雛がかえつたのである。私の家には、鶏も十数羽飼われているが、そのなかには、私が自分の股間で孵化したもの、つまり私が生んだ白色レグホンや、名古屋コーチンもまじっている。

私が毛虫を飼うのは、私のもつて生れたあわれみ深い性質によるものであつたとともにこれは私のアブノーマルな趣味でもあつた。

私の静脈の見えた蒼白い腕や乳房、汚れを知らぬ清浄な肌に、この毛むくじやらの虫けらを飼わせて眺めることに、私は残酷なよろこびを味うのだつた。私がいつも鏡の前で見惚れる私自身の肉体の美しさ、色が白くて、処女の形と膨らみをもつたこの豊満な肉体に、一匹の毛虫を飼わせるといふことは、何という美しさだつたらう。

私がくちなやなめくじをいじめるのが好

きなのも、まったく私のこの異常な性情に依るもので、私はそのなよ／＼とした柔軟性を愛した。それはちやうど、粘膜や粘液の感触であり、私はその官能的な感触が好きだつた。生きている蛇はさすがに知らないが、私の家は庭がひろいので、蛇の死骸がときどき出てくる事があつた。

ローア者の私は、子供の頃より一人の友だちも持たず、誰とも話さず、その孤独のさびしさを、小鳥や犬や猫の家畜から、くちなやなめくじに到るまで、魚や虫や貝や植物も含めて、人間への愛をすべてこれらの生物にそそいだのである。これは生物学者である私の父の影響でもあるが、私の生の対象は生物に限られ、言葉をもたぬ彼らこそ、私の友であつた。

二

私の家には、犬と猫が飼われていた。

猫は雑種ではあるが、ベルシャ系統の血をひく美しい毛並で、眼はオパールであつた。この真黒い猫は西洋の貴婦人のような高貴さがあり、私はこの猫を「伯爵夫人」と名づけていた。彼女はもう娘ではなかつたから。

この猫を膝の上に置くときの感触は、ほん

とうに華奢という感じで、妖精のような魅力と秘密と、豊かに奥深いものをひそめているところ、さながら魅惑的な女性のようなものである。それはほんとうに愛する美しい女性を抱くようであつた。ポオドレエルがその詩集「悪の華」に於いて。

来れ、わが美わしの猫よ……

と、女性を象徴した多くの詩を、私はこの「伯爵夫人」から見出すのだつた。私は彼女の黒く、且つ金色にして褐色の毛並に頼ずりし、或る夜なぞは、閨房に於ける恋人同志のように、たわむれた。

私の手は彼女の腰の、絹のような手触りの曲線を撫で、彼女の柔いお尻から脚へさがつてゆくとき、彼女のオパールの瞳が私をじつと見据えながら、青白い炎となつて燃えるのを見たのである。

私の眼も、愛する猫へと吸いつき人間同志ことに男女も、またかくのごとく愛するものであるかと考えたのだつた。私は立流な両親をもちながら、生れながらの啞娘であるがためにうとんぜられ、母の愛さえ知らないのだつた。社交家で、美しく音楽好きな母は、啞娘の私と手話で語ることを好まず、世間態を恥じて、私を人前に出さなかつた。

私は子供の頃から、自分の部屋でひとりで食事をする習慣であり、私といつも一緒に食事をするのは、猫の「伯爵夫人」と、犬の「ネロ」であつた。たとえ耳がきこえたとしても人間同志と差しむかいで食事をするよりも、犬や猫が相手のほうが、どんなにか気安いか知れやしない。私は父と母との、お互いに言葉で傷つけあうさびしい食卓を知っているのだ。

私がつとも愛したものはネロであつた。父の門下生で、犬好きで有名な広瀬教授からもらったもので、可愛い小犬の頃から育てた。純粹のテリアの雄であつた。

猫でも小鳥でも、私は可愛いがるので、誰よりもなついているのだが、ものが云えぬ私の手話はさすがにききわけてくれないのだつた。私の手話を上手にききわけてくれるのはこのかしこい犬だけであつた。

「いけません」「さあ、おあがり」「ちんちん」をはじめ、ネロはあらゆる手話に通じ、私のこころの憂愁や、デリケートな感情まで知ってくれるのだつた。母に何も訴えられぬ私は、自分のこころの悲しみや欲び、日常生活の些細なことをすべてを、ネロに話すのだつた、ネロの声、ネロの感触、ネロの気持まで

黒髪論争に寄す

私は奇巧の愛読者であり、同時に拙い文章で寄稿家の末席を汚している浮家鷹三です。私は実の処、晴雨氏をよく存じており一時は晴雨会員にもなつた程ですが、私は二月号の晴雨氏の文章を読んで翁ともあるう人が今更若い人相手に目に角を立てなくともと苦笑した一人でした。取り分け私の嬉しかつた事は和泉としお氏が同じ鳥の画壇の人であるその事なのです。と云つて私は晴雨翁を目の仇にしなければならぬ如くなる理由も持ち合していません。否むしろ或る意味では晴雨翁でなくて叶わぬものゝある事さえ疾くより承知の上なのです。

私が私にはつきりとわかるのだつた。ネロは私の唯一の友であつた。私は「仔鹿物語」のように、「女狐」のようにネロを熱愛した。食事と一緒に寝るのも一緒である。

私がネロを熱愛する度がすぎると云つて、母が顔をしかめ、

「節子、ネロと一緒に寝るのはおやめ」

と、何度注意を受けたかしのれないのである。

実際、誰の眼にも気味が悪かつたにちがひ

然し読者として私たちの集いはそんな微々たる事柄に何時までも両者の反論を聞くのが本心ではありません。宜しく愚生の一文を最後に貴重な誌面を他の眼新しい読物で埋められんことを、

(病床にて、浮家鷹三)

右の件に関して、全国各地から多数の皆さまから賛否両論の通信を頂きました。今迄掲載しました分はあく迄読者の方々の御意見でありまして編集部の見解ではございませんので誤解なきよう願います。編集部としては今後共出来るだけ公平に広範に亘つて皆様の御意見を発表したいと思ひます。但し此の件については一応打ち切りたいと考えます。

(編集部)

ない。私がネロと頬ずりするのはいとしてネロの赤い長い舌とも、しばしば接吻を交すのだつた。ネロはもはや畜生ではなく、私にとつてかけがえのない恋人であつた。

三

こゝで私の家庭について、少し語らねばならない。

私の父は生物学者で、京都の大学の教授で

ある。父祖の財産を受継いで、学者としては物質的に恵まれ上層中産階級に属している。母は名門の出で、学習院出身の才媛であつた大学教授である父は、もとより赤門出の秀才である。

このように両親とも優秀で、血統正しく、その品行に於いても何ら批難するところがなく、その上、上層中産階級に属しながら何故私のような啞娘が生れたかといえ、それはメンデルの遺伝法則によるものでも何でもなく、私の両親がイトコ同志であつたからである。父と母は、周囲の反対をおしきつて熱烈な恋愛結婚をしたのである。

生物学者である父は、近親結婚の弊害はもとより考慮したにちがいないが、若気のあやまちというか、遂に母を諦めることが出来なかつたようである。父は双方の血統が優秀である場合、近親結婚の弊害はほとんど認められないと外国の引例までひき出して、とうとう母と結婚したのだつた。

しかし、生れて来た私は啞娘であつた。たぐいなき母の美貌を受け継いで生れたが、私がローア者であることを知つたときの両親の驚きと絶望、その頃から父と母とのあいだには、ようやく性格的に越えがたい溝が出来て

いたのである。

私の呪われた出生によつて、家庭はいつそう暗いものとなり、睫がジーンと凍るような今日のひややかな家庭が出来たのである。その上、いけないことには、私の二年後に生れた弟は夭死したが、この弟も先天的ローア者がある上に、白痴であつた。学令期に達しても大小便が垂れ流しであつた。

父母の落胆はいうまでもないことだが、あたし達の愛欲の罪の落し子達は、と母は自嘲した。

このとき学者である父は、近親結婚の弊害を最少限度に喰いとめるため、みずから男としての誇を捨てて、断種したのである。しかし、その結果と、たゆることなき研究への過労から、父は性的に母を満足させることが出来なかつたようである。私の知るかぎり、母はヒステリックでローア者の私に、しばしば手荒な折檻を加えてあつた。ことに、きょうだいがなく、友だちがなく、そのさびしさを動物にまぎらわしている私を畜生呼ばわりにした。

私はローア学校へ行くようになってから、私と同じような不幸な人々に接し、共に学んだが。私はやつぱり孤独であつた。私と彼ら

とのあいだには階級的ないちじるしい差があり、幼いときから家庭教師がつけられ、二科の須田画伯のもとで絵を習い、両親にうんとぜられながらも、きびしい礼儀作法と、人間としての教養を授けられている私にとつて、このローア者の世界は、まったくお化けの世界であつた。

これらの気の毒な人々の大部分は、悪疾と遺伝と近親結婚による結果だつたが全部といつていいぐらい、下層階級者によつて占められているのだつた。日雇人夫と、工場労働者に限られ、中産階級出身者は一人もなかつたのである。まして私のような上層階級、それも大学教授というインテリ階級から、ローア者が生れるという事実が、すでに異例とされていた。不具者というものは、社会の下層から生れるものであつて、社会の上層から生れるということは類例のないことである。

母の美貌を受け継いで生れた私は、子供の頃から、端正な顔だちであつたが、年ごろになると、私は自分の美貌を十二分に意識した私は滅多に外出しないけれど、たまに外出すると、乗り物のなかや、舗道を歩いている男たちが、いつせいにふりかえつたり、じつと私を見据えるのだつた。

色が白くて、大きく潤んだ眼は瞳を長くのばし、高い鼻と花びらのような唇は、母譲りのものであるが、油絵の習得から得た色彩感覚と、多少の教養が、私をスマートな女にしていたのである。もつとも私の肢体も均勢がよくとれていたけれど、地質は極く良いウーステットで型は極く単純な黒のスーツ。ベージュ色の靴下に包まれた脚の線でも、トンボ玉の首飾りを短かく巻いた首でも、いやにすつきりした啞娘のくせに、美貌である私はひどくおしやれだった。この私が、啞娘であるということを知ったなら誰しもギョツとするこただろう。

これまで私は無関心で、決して私を人前に出さなかつた父が、私が適令期に入ると、しきりに人前に出ることをすすめるようになったのは、啞娘でも美貌であれば家の中へかくしておくのも勿体ないのか、ようやく老年に入つた父は私に適当な養子をとらせる意志であつた。それにはやはり私を人前に出さねばならない。

大学教授である父の許には、学生や大学院の助手たちが、始終やつてくるのであつた。父は無暴にも、自分の門下生の中から、私を結婚させようとしたのであつた。娘はローア

者であるが、気立がよく非常な美貌である。その上、この家には充分研究出来るだけの財産があつて、まして先生の令嬢と結婚するということとは、大学院の連中にとつては、大学教授としての将来を決定的にするものであつた。

四

私は父の許に若い学生がやつてくると、入念におしやれをして、茶菓を出すのが役目であつた。

応接室や書齋で対談中のところへ、扉をひらいて茶菓を持っていくと、父は話を止め、おもむろに慈愛のこもつた微笑をしてふりかえり、私を件の青年に紹介するのであつた。そして私にも、普通の人間に対するように、青年を紹介するのだつた。私はさも恥しうに黙つたまま丁寧に会釈して出ていくのが常である。

アプレ学生とちがつた、戦前の学生は、内気で、純真であつた。なかには純粋なテリヤのような青年、ネロのような青年もいた。先生を前にして、娘の私に話しかけたりする学生は一人もいなかった。そればかりか、若い娘の前に出ると、どの青年も顔を真赤にして

おどおどと伏目勝ちになるのが常である。私の家は屋敷町で、隣近所の交際がなく、私は家の奥深くに閉じこめられて来た関係上この家にローア者の娘があるということを知るひとは少いのであつた。私の家に小鳥や犬や猫がたくさん飼われているのを見て、大抵の訪問客は子供のない家庭のように見てとるのだつた。

父の許に出入りする青年も、私がローア者であることを知る者は少く、どの学生も、手のとどかないあこがれと讚美をもつて、私を視つめるのであつた。私はこれらの俊秀な学生と、見合いをしたこともあるが、遂に結婚にまでいかなかったのは、純真で、小心よくよくたる野心家の学生も、相手の私が啞娘では、さすがに二の足を踏むのだつた。

私がネロを愛するほど、私を愛してくれる男はこの世にいなかった。またローア者の私がそれを求めることも間違つていた。会話のないところに、決して人間生活はあり得ないのだから。

私が以前にもまして、ネロをはじめ、すべての生物を溺愛したことは云うまでもない。人間から拒絶された私は、禽獣にすべての愛をそそいだのである。一日中、研究室に閉じ

次

号

(五月号)

豫

告

女上位の特集号

風流責百態	少年及び女性の切腹	捕縄雑考	続・硝子便所	女王様ごっこ	淫火 (第五回)	らぶ・すれいぶ (第5回)	雌・獣の手記	続・僕の記録	實験室にて	偽られる殉教者
吾妻新	中康弘	嶽収一	芳野眉美	飛田良二	松井籟子	鬼山絢策	近見啓	黒井珍平	角田平八	成瀬亮

足舐め小説 (奇書紹介)

マゾヒストの會

(挿絵十葉入り)

ソフィア伯爵夫人著
沼正三訳

こもる父も、おそらくそうであつたろうが、父のそれは学問としての生物、標本化された生物であり、私は生物の生命を愛したのである。

冬が過ぎ、春が過ぎると、小犬であつたネロもすっかり成長して、もう立派な一人前の

雄犬になつていた、私がちんちんをさせると両方の後肢を揃えて私の前にかしこまつた。子供の頃も、父と一緒に入浴なぞしたことがなく、まだ男の肉体というものをぜんぜん見たことがない私は、ふと想像をたくましくするのだつた。

緑側に前肢をかけてちんちんをしているネロを見ると、私は頭がクラクラとした。私自身、すでに充分に成熟して、眠られぬ苦しい夜を持つていたのである。ネロと一緒にいると、私は、どうかすると、へんな気持が起るのであつた。

読みごたえのある主な読物

- 罪の椅子 (悪魔の手記) 飛田良二
- 地獄絵 (5) 行田和子
- ボクの責め方 (2) 宝塚二三夫
- 赤い部屋 (3) 山城一男
- 続・錯乱の倫理 (一) 近東規矩也

(本誌十二月号にサディストの懺悔よりと脇見出しで掲載した錯乱の倫理の続篇です)

三月号補遺抄、編集部便り、作家便り、代理部案内、読者通信、特別会員募集規定並に申込カード、読者論壇、短信往来、其の他写真、挿絵等本誌掲載洩れの分を収容

◎定価一部 二十円 ◎半年分 百円
旧号は第四号以前は全部品切です。

★大躍進のKK通信★

第七号愈々発送開始!



◎アブニストの記◎

らぶ・すれいぶ

(四)

鬼山 絢 策

私は春美を得て、私の理想に描いた「新婚生活」を味わうことが出来ました。

新婚生活……

それは総てが甘い味に包まれたお菓子を喰べるようなものとすれば、私の前の妻のあさ子との新婚時代は「らくがん」と言う麦粉でこしらえた打ちものの和菓子がありますが、恰度あれを喰べてるような感じ……

春美の場合は「エクレール」と言うシュークリームにチョコレートをかけた洋菓子を喰べてる感じ……と形容したらよいでしょうか。

「らくがん」のあの甘い中にもなにか満ち足りぬ苦さと、砂



を噛むような味気なさにひきかえ、「エクレール」はチョコレートの強烈な甘味と、快い昂奮と苦味、そして、唇の外に迄溢れるトロリとした甘美なクリームの味！

「らくがん」は安くて地味で堅実なお菓子でしたが「エクレール」は派手で高価なお菓子でした。

しかし私はいくら高価でも構わない、この甘美なケーキを購えるうちは、この味の中に浸って居ようと思いました。

私が春美を脳裡に描く時は、いつもベツトルームの中の姿でした。其処から一步外へ出た姿の春美に対しての生活対象は深く考えて居ませんでした。

ところがこれは又私の想つて居たより以上に理想的な好ましい立振舞でした。

私の理想は



「風は貞淑で忠実な、妻らしき妻として外部と交際し、又私に對しても、そうであつて欲しい。」

「夜は嬌慢で残忍で淫蕩な女王となつて、私に君臨する。」

と言うのでしたが、春美の風は、私が想像して居た以上に貞節で、淑やかで、私に對して深い愛情を示し、家の中もキッチンと主婦らしく取り締つて、思つたよりまめまめしく立働くのでした。只總べてがせい沢で、華美で、喰べ物にしても、着る物にしても、高価なものを買つて来たり、ねだつたりしましたが、私は出来るだけ彼女の望みを叶えてやりました。

ところが夜の部は、私の想像して居たよりマイナスでした。彼女は益々妖艶な美しさに輝き、コケティッシュで淫蕩でしたが、肝心の私の想像して居た性格とは一寸かけ離れて居ました。

私は閨房では彼女を美の女王と崇めました。女王にまつり上げられた彼女は恐縮そのもののような羞恥を見せました。私のへり下つた態度に、労わりのようなゼスチュアを見せましたが、間もなく、私の氣持を察してか、暴慢な女王になつてくれました。

然しその態度が、真底からのものでなく、如何にもうわべだけのもので、半分ふざけてやつてるとしか思えない所に、私の不満がありました。

然かも私の心をヒヤリとさせた事は、新婚生活三日目に彼女が極めて当然な夫婦としての要求を私に求めたことでした。これは妻から求むべきものでなく、

新婚初夜に夫から要求すべき事柄なのですが、私が全然それを欲しないものですから、堪えかねて、春美の方から口に出して来たのです。

私は春美の性格を、結婚前の二度にわたるあの行為に依つて、私の理想型の性格と過信して居たのでした。

それだけに、この要求は思いがけないものであり、私の心を暗くさせました。

やつぱりこの女も平凡な女性でしかなかったのか……私は落胆し、そして激しい羞恥を感じました。

私はベツトルームでは春美と對等の位置にあるべき男でない事を説明し、その夜をピンチから脱しましたが、四日目も五日目も執拗に求めてくるので、私は恥を忍んで、失敗を覚悟で、彼女と對等の位置に、いや彼女よりも上の位置に就きました。

結果は私の予期した通りでした。私はその時アブノーマルな慾念を去つて、神聖な夫としての義務を果そうと、懸命に努力したのでしたが……。

然しこの險しい土手を上ることは、足がかりさえ容易に与えず、一歩足をかけてはズル／＼と下り、時には二歩 三歩と彼女の好意と善導に依つて、途中迄上りかけても、そこで立往生し、やがては氣力を失つて、元の位置へ下り落ちてしまふのでした。

「どうしてなんでしょう」

春美は明らかに焦つて居ます。まだ私の性格を真から信じてくれないのです。



私は只春美に対して申し訳なく、羞かしく、早く彼女が諦めてくれよと希うのでした。

そうした後の彼女は然し私を充分満足させてくれました。

結局いつものポジションに還った時、彼女は怒った女王の如く、狂暴に、残忍に、思いきり私を蹂躪してくれました。

私は私本来の姿に立戻つて氣力を取戻し、始めて歡喜に浸るのでした。

すると私のその姿を認めた春美は又女らしさをだして来ました。

彼女は私の完全な姿にまだ未練を持つて居たのでした。

然しこれはまあ、何とたとえたら皆さんにお分りになつて頂けるでしょうか。

恰度本番から自分の最も嫌悪する前戯に逆戻りした時の感じ……とでも言ひましょうか。

「あなたは私の性格をまだほんとうに理解してくれてない。……そう私を責めないでくれよ。このことは前以つてあなたが了解してくれてるとばかり思つて居たのですよ」

「分つたわ……。」

春美は私の瞳の奥迄覗きこむよ



うにジツとみつめ

「これからはあんたの望み通りの女になつてあげるわ。」

二

私達夫婦は毎日毎夜、常の人とは違つた新婚生活に耽り楽しみました。

私は生れて初めて受けた官能の陶醉とショックに、うつゝを抜かして、編集の仕事などはてんでなげやりになつてしましました。

会社を休んで屋は春美と二人で映画を観たり、ストリップを覗いたり、競馬や競輪へ出かけたたりして、夜はアブの世界の妖しい魅力に耽溺しました。

「私はほんとうに幸せだ。あなたが私の理想の性格の女性になつてくれた事が、どれだけ私は嬉しかったか知れないよ。」

「フン……フ、。」

「あのあなたと二度目に会つた時ね、あなたはいきなり私を足で蹴つてくれた。あの時位嬉しかった事はな



いよ。然もあの時一時間位私を愛してくれたね。よくやつてくれたね。」

「ハ、ハ、実を言えば妾あの時、あなたがほんとに憎くてあゝしたのよ。終戦後初めてホールで会った時、あなたの眼を見て何だか妾結婚するのはあなたをおいて他にないと直感的に思つたのよ。それだのにあの晩あなたの態度が煮えきらなかつたでしよ。そして調べて見たらあなたが嘘吐いてるんですもの。妾ほんとに怒つたわあの時。妾をからかつてるんだとばかり思つてたわ。だからウンと磨めてやりましようと思つて、あの時はどうせあれつきりであなたと別れてしまふつもりで、思ひきつた事をやつてやれつて言う氣になつたのよ。それが途中であなたがあまり真剣なものだから、からかい半分でないつて事が分つたのよ。」

「私が五年も前からあなたの事を想ひ続けて居たつて事少しは察して居てくれた?。」

「そりやウス／＼氣がついて居たわ。」

「あの頃は私よりも大槻君の方が好きだつたんじやない?。」

「フ、そんな事どうだつていゝじやないの。今はこうしてあんたと結婚してるんだから。」

「大槻君と関係はあつた?。」

「そんな事聞くんじやないの、バカね。誰があんな女たらしなんかに身を委せるもんですか。」

「そんなにあの男凄いの。」

「えゝ関係した女が何人あつたか分らないわ。」

「あなたもそのうちのひとり?。」

「バカ、又言う!喋べれないようにしてやるわ。」

春美はいきなり私をベッドの上に押倒し、

「サアこれなら喋れないでしょう、喋つてごらんさい。」

彼女は勝誇つたように上から私を見下して笑いました。

私は舌を彼女の唇にはさまれて、声をあげることにすら出来ません。

私が昔抱いて居た理想は、私の崇拜する女性に絶対神聖無垢な処女でなければならなかつたのでした。それが現在では春美に、曾つては他の男の「愛の訪問」があつたとしても、仕方がないと、考えるようになって居ました。

あゝこの甘美な味!

鼻腔から脳髓迄つき刺すような強烈な愛の香り!

やわらかく、重たく、息苦しい重圧感!

この現実の耽美な味覚と嗅覚と触覚は、私の空想して居たよりも遙かに濃厚で刺激的でした。

春美は疲れてくると身体を横たえました。そしてそのまゝの姿勢でスヤ／＼と寝息を立てゝ眠つてしまふのでした。

三

そのうち私は漸くこの単純な遊戲に飽きて来ました。

私にとつてはそれは、「前戯」でなく「コイツス」なのです。世のノーマルな夫婦は、ノーマルなコイツスに飽きた時

「前戯」を始めます。私達夫婦も「前戯」として、いろ／＼

な方法をやりました。それが純然たる「マゾ」の世界に入つて行つたのでした。



先ず最初に楽しんだのは緊縛の遊戯でした。

布製の帯紐や、細引きなどで春美に縛つて貰い、後手に縛られた時、仰向けにされると、床の上では非常な痛みでした。床には絨氈を敷いてありましたが、それでも痺れと痛みは時間を経つと共に倍加して来ました。

でも私達の場合は「前戯」なので、そう長い時間はかゝつて居ませんから、私が苦痛に堪えられなくなる前に、春美の方で止めてしまうのでした。

藁の縄も使いましたが、一番痛いのは棕櫚縄です。これは細かい棘のような繊維がチク／＼と皮膚を刺して、あれの太い奴で縛られた時は涙が出ました。

棕櫚縄で縛られると翌日迄痛みが持越し、次の日に藁の縄で縛られても、縛られた瞬間から痛みを感じます。

鎖もやつて見ましたが、犬を繋ぐ細い平べつたい鎖だったので棕櫚縄よりは痛くありませんでした。

棕櫚縄で縛られて、床の上に仰向けに転がり、腹や胸を、春美が足でもつてグイ／＼と力を入れて、踏みつけたり、ドツカリ胸の上に跨がつて、お尻をブリ／＼と揺られた時が一番痛みがひどく、縄を解いた後もヒリ／＼して真赤に炎症を起し、血は出ませんでした。布が一寸触つても痛いので、メンタムをベタ／＼に塗り、昼間は細帯をやわらかく巻いて居ましたが、流石に次の日には再びくり返す勇気が出ませんでした。

彼女が私を貫める時は、私の好みで緋色の褌子のからこを全裸の上にパラツと羽織つただけでした。

私は水晶の首飾りをつけた女性が好きでしたが、これは時にとても醜く見える事があるので、時には外して貰いました。その醜く見えるポーズと言うのは、春美が、グツと首を水平迄下げた時でした。そうすると首飾りがプラン／＼とブラ下つて、非常にだらしない恰好になるのです。

春美は私を縛る事には大変興味を持つたようで、喜んで縛つてくれましたが、私が、

「腹を踏んで下さい」

と言うと、悲しい表情をしました。足をあげて踏んではくれましたが、てんで腹の上に只のせて居るだけのような感じで、ちつとも手応え、イヤ足応えでしょうか、がありません。

「胸の上へ跨がつて下さい」と言う、

「痛いでしょう」と又ハチを寄せて、膝小僧で加減してソーツと跨がるのです。その生ぬるさに、私は棕櫚縄のチク／＼した棘の触感と胸の上に入れ替えて彼女の生ぬるさを、酷しいものに想像しました。

春美はまだほんとのサジストになつて居ないのです。

あゝ早く春美が冷酷無惨なサジストになつてくれたら、どんなに嬉しい事だろう、それでも彼女にはその素質はあるのだから、今に私の思う通りの女になつてくれるだろう、「春美さん、笑つてくれないか、そんなむずかしい顔しないで。」

私は苦痛を忍びつゝ自分から無理に笑つてそう言いました。春美は直ぐニッコリ笑いましたが、その笑顔は、私の満足する表情ではありませんでした。



四

私は春美の足で蹴つて貰う事も要求しました。

一番最初、私は床の上にキチンと坐つて、両手を膝の上において、

「僕の何処でもいいから蹴つて下さい」

と言うと、私の眼の前にガウンの前をひろげて立はだかつた彼女は、

「フ、何処を蹴つたらいいの」

「肩でも胸でも、頭でも額でも、顔でもいいです」

これも最初は極めてやさしく、笑いながら、私の肩へ足をあげて、ソツと押倒すような蹴り方をしました。

「もつと強く、そんないゝ加減なことではなく真剣にやつて下さい」

「フ、、じゃほんとに蹴とばしてあげるわ。痛くつたつて知らないわよ」

「大丈夫です」

何度か蹴つて居るうちに段々と力が入つて来て、ドスンと肩へ激しく当るようになりましたが、どうも強く蹴られると、膝へついて居た両手が本能的に後へ廻つてしまうので、後手に縛つて貰つて、蹴倒して貰いました。

これは効果的でした。蹴られた瞬間両腕がビクツと後へ動きますが、その時両腕を強く床へ打ちつけて、頭の先迄ジンと来る痛みは、漸く私を満足させました。

然し五六度も蹴ると彼女はくたびれて、今度は左脚をあげ

て蹴るのでした。

「くたびれちゃうね。もう止めましょう」

「じやもう一度だけ、今度は顔を思いきり強く蹴つて下さい」

「ようし、これでお終い。ちき生ッ」

私は思わず緊張して、彼女の足の上るのをみつめました。が又期外が外れてしまいました。

春美の白い足の裏がはつきり見える程悠りとあがつて、私の額から眼の上へあてがうと、そこで初めて、力を入れて蹴つたのでした。

「もつと強く蹴れないの。」

「あゝくたびれちゃつたのよ、面倒くさい、今度は此処で蹴つてやるわ」

身をよじつて半身を起した私の前へ春美は豊かな腰をぶつけて来ました。

私はこの物凄い体当りに又ひっくり返され、後は床の上で彼女の激しい圧迫を受けました。

このキツクブレーは蹴られる方の私よりも、蹴る方の春美の方が直ぐ疲れてしまうので、私は又次の遊びを、提案しました。

今迄の模様でお分りになつたように、春美は私をほんとうは痛い目にあわすのはあまり好まないようでした。

私は時にはナイフを出して「これで何処でもいいから少し切つてくれ」と言いましたが、この時も春美は「妾血を見るの嫌いよ」と応じませんでした。



その代り私を羞かしめたり、嘲弄したりするような事は、興味があるようでした。で私も勢いその方面の前戯をいろいろ考えるようになりました。

私が馬になつて部屋中彼女を乗せて這い廻つたり、犬になつて、細引きを首に巻きつけて首輪の代りにして、チン／＼やら「お預け」やらをやつたりしました。その頃私はほんものの犬の首輪を買つて来て私の首につける事に思い到りませんでしたので、只細引きを首に巻きつけただけで満足して居ました。その綱の端を春美に強く引張られると、首筋がキュツと締められて息が止まる思いがして、締殺されるような快感を感じました。

アンパンや饅頭を小さくちぎつて、犬に食べさせる様に、投げ与えて貰う事もありました。斯うした時の彼女は、頗る興味を持つて、私の方から色々注文をつけなくとも、彼女の方で私を満足さすような事を進んでやつてくれました。

例えば饅頭をくれる時でも、ちぎつた一切れを床へ投げてそれを春美は踵でグイと踏み潰して食べさせてくれました。

私は口を床へ持つて行つて、その饅頭を口で咬えるようにして食べました。彼女を見上げると、如何にも愉快そうに、例の私の大好きなスマイルが頬に浮んで居ました。

春美はベットへ腰掛けて、饅頭を踏み潰した足の踵を私の方へ突き出しました。見ると鉛こが少しついて居ました。

私はその可愛らしい丸い踵を丁寧は何度も／＼舐めて鉛こをなめとりました。

私は猫の真似もしました。猫の泣き声を真似て、彼女の足

許にじやれついたり、スベ／＼したふくら腓(はぎ)や、太腿へ、猫のするように頬をこすりつけました。

春美はズロースを出して来て裏表や前後をしらべた後、私の顔へ「カン袋」をかぶせるのだと言つてかぶせました。

ネルの匂いと彼女の体臭とがミックスされて、何とも言えぬ甘い香りが私の顔全体を包み、私は有頂天になる程昂奮しました。私は猫のやるように四つん這いになつて後退りをしました。

春美はアハ／＼笑いながら私の頭をズロースの上から蹴とばしました。そんな時の春美の蹴りようは、かなり力が入つて居て、私が横ざまに転がされる程強く蹴つてくるのでした。私は眼がまわり、耳が鳴つて暫らくは起上れない程の、その打撃に満足しました。

五

私が春美と結婚してから暫らくの間は、只もう夢中に春美とアブの世界に遊ぶことのみを堪能したため、編集の方もいゝ加減になり、来月号の企画や原稿依頼の方もおろそかになつてしまつて、池崎から度々注意を受けました。

「君は近頃どうかしてるね、今度の奥さん貰つてから、少しボケてるぞ。あんまり奥さんを可愛がるのも程々にしておけよ」

などと冷やかされました。私は会社をよく休みました。急ぎの仕事などは二人しか使つてない編集員と学生に電話で頼んで、春美と旅行したり競馬や映画などを観て歩いて暮しま



した。

或る日池崎は私の家へやつて来て、私は明日会社で会うからと言うのをズカズカと入つて来て、「君、会社の仕事の方をどうする考えなんだね」

あんまり私がズボラを続けたものですから、池崎はほんとうに怒つてしまつたのです。

私も返答に窮して、「身体の調子が悪いから暫らく休むよ」と言わざるを得なくなりました。私は編集と言う仕事は好きな方で、今迄も面白く仕事をして来ましたが、営業成績も悪くなつたのですから、半面では仕事を休みたくなし、続けて行かなくてはならないと思つて居ながら、社の机に坐ると、校正も割り附けも間違つてばかり居て、我ながらいらいらして来るばかりなのです。

で私の心の中では仕事を続けたい気持があり、又「休んではだめだぞ!」と戒める良心がありながら、私は責任上暫らく休職する羽目におちいつてしまつたのでした。

「じゃ誰か代りの人を入れなくちやならないが……」

これは春美の頼みを入れて、春美の親戚の霧塚徹と言う青年に私の位置をソツタリ与えて、代らせました。徹は職にあ



になつたのです。

三月も終りに近ずいて大分暖かくなつた頃でした。

近頃又流行し出して来た女剣戟を春美と二人で浅草に観に行きました。

私は若い頃は太の女剣戟ファンで、女剣戟の元祖とも言ふべき大正末期の梶原華蔵や、昭和初期に入つてから真の女剣戟として売出した不二洋子、先代大江美智子などには随分熱をあげて観に行つたものでした。

ぶれて困つて居た時なので非常に喜びました。後にこの悪党が、恩を仇で報いてくるとはその時夢にも思つて居ませんでした。

勿論会社の投資者の一人である私に、その投資の配当として、月々の利益の中から、今迄の月給を差引いたものは池崎が送る事を約しましたから、私としては全然無収入になつた訳ではありませんし、何しろ親から只貰つた遺産がまだ相当残つて居ましたから、暫らく遊んで居てやれと言う気



それから女剣戟全盛となり、伏見澄子や桜蘭子、松園桃子や巴玲子、映画から女剣戟に転向した帝キネの小川雪子、東亜キネマの原駒子、日活の酒井米子、果ては女歌舞伎の中村歌扇迄が弁天小僧や花井お梅などをやり出して、レヴェューを圧倒したものでしたが、戦争と共に束縛が厳しくなつて立消えとなつて居たのを、最近ストリップに飽きられた故か、又候はやり出して、不二洋子や二代目大江美智子などの古看板にまじつて、ストリップから転向した池みどりとか葛谷愛子などが、かなりキワドイ事をやつて居ると言うので、観に行く氣になつたのでした。

恰度浅香新八郎の女弟子の浅香光代が売出して居た時なので浅草の松竹演芸館の彼女の舞台を観る事にしました。

春美は女剣戟は初めて観るのだと言つて居ました。

「女の人あまり入つてないわね」

「いやそれでもないよ、随分ファンも居るんだよ」

「だつて大概年寄りが多いじゃないの」

この劇場の中では一寸眼立つニールツクの洋装と若く美しい春美の存在を、あたりの見物人から露骨な視線を浴せかけられて、春美は最初のうちは不愉快なようでしたが、浅香光代の濃艶で放胆な演技を見て居るうちに大分氣に入つたようでした。

「あのひと、少しサジズムの氣があるわね」

と私の耳許に囁きました。

「そうかも知れないね」

「ホラ、あの男の人を蹴る時だの斬る時だのに一寸そう言う

所が見えるじやないの」

浅香光代はエロチックな演技で売出したのですが、又半面にサジステイックな演技も人氣のある所以となつて居ました。

例えば、敵役の男と立廻りをする時、他の女剣戟では、その男を斬る時に、最後の見世場として、サツと一太刀、最も得意の型で斬つて見得をきるのが普通ですが、浅香光代のは一太刀、二太刀、時には三太刀も同じ相手を続けざまに斬るのでした。

又捕方に扮したり、ばくち打ちの子分になつたりする大勢の連中を足蹴にするのは誰でもやりますが、大概蹴る真似で足を宙にあげるだけです、浅香光代のは、時にはほんとに男の腰や肩を蹴ることがありました。

春美はそんな所を見て、そう感じたのでしよう、それからは大の浅香光代ファンになつて、演し物が変わる毎に、欠かさず二人で観に行きました。

三度目に行つた時でした。

その時の演し物は特にエロチックな芝居で、彼女が強姦される場面などは、裾をはだけて禪を出した男と、腰巻をしどけなく乱した浅香の裸の太股とが擦れ合つて、上になつたり下になつたりしての取組合をして観衆の息を飲ませました。が、終の立廻りとなつた時、一息ついた光代が舞台中央の御洗水の柄杓を取つて水を飲もうとした時、後から打つて掛つた捕方の男を、体をかわして四つん這いに這わせ、その首根つ子をサツと足を上げて踏まえしました。その時でした。



真白に白粉を塗った彼女の太腿のつけ根の内側が、四つん這いになった捕方の男の頬へピッタリとくっついたのです。そのままの姿勢で、彼女は柄杓の水を悠々と飲み乾しました。恰度男の首へ半分跨がつたような恰好でした。彼女が水を飲み乾す迄、捕方の男はおとなしく四つん這いになって、彼女の股の間に首を突込んで頬べたを内股へ押しつけて居ました。

春美が肘で私の脇腹を小突きました。私が振向くと、春美はつと立つて、サツサと出口の方へ歩き出しました。

私は臍におちないながらも仕方なく後に従いました。そのまま出るのかと思うと、出入口の横から二階へコッ／＼とハイヒールの音をさせて上つて行きました。

「どうしたの？」

【読者通信】

小生奇巧の愛読者であります。KK通信の増頁、陽の目を見ざる原稿の発表、又単行本の発行企画等大賛成であります。特にお願い致し度きは本誌三月号吾妻新氏の「サディズムの精髓」の中に見えましたキドロドシュトック「クリスチヌの受難」の配本であります。同氏の了解を得て貴組織の下に実現されましたら小生は勿論同好諸志に絶大なる感謝の裡に迎えられることと思えます。又KK通信第一号第二号に紹介されました「泣き叫ぶ青春」も貴重なコレクションの一と

して筐底に藏される事と思います。

(東京 YU生)

神戸の山田様、東京の本橋様志田様京都の楠様橋本様滋賀の井上様大阪の森田様中河様はじめ多数の皆様方からの御親切なお便りを廻送して頂きほんとうに嬉しく存じました。お勤めを持つておられますため直ぐお返事差し上げられないのが残念ですわ、だつて言いあわしたように皆の方がお逢いしましょうつてお便りばかりですもの、友子困つてしましましたわ、ロマンチックなお手紙下さる方

(弓削友子)

春美は答えずに黙つて二階の席に入ると、一番後の一番高い所に上つて行きました。

「どうしたのさ、こんな所へ来て」

「フ、あなたのために此処へ来てあげたのよ」

「僕のために？」

「大分昂奮つてるようじゃないの。だからさ……フ、」

今日は比較的入りが少なく、一番見難い二階席の一番高いこの席にはあたりに誰も見物は居ませんでした。

私はやつと彼女の意図を了解しました。

「人に見られやしない？」

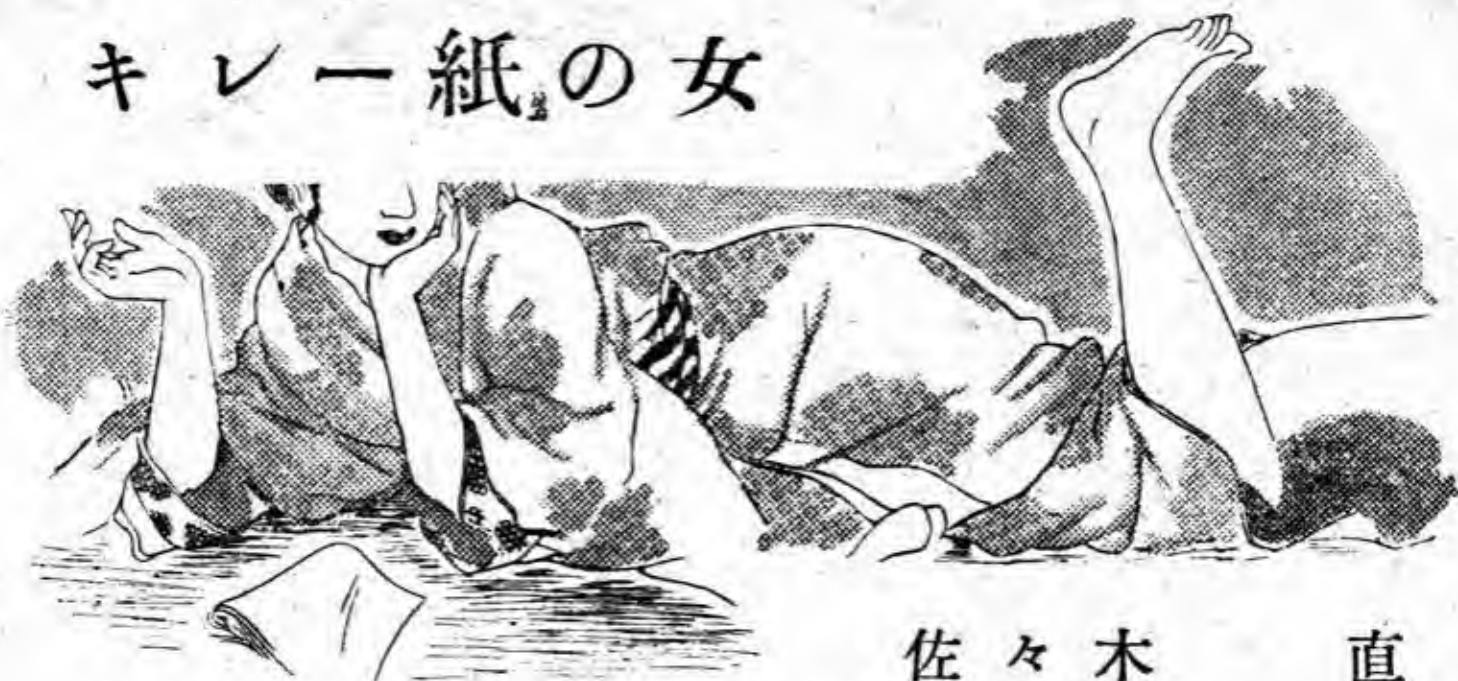
「大丈夫よ。此処なら見えないわ」

「でも……」

(次号へ続く)

小生は現在満二十二才三人兄弟の末っ子として生れ、長兄次兄は戦時中相前後してそれぞれ戦死、母も又疎開先にて病死致しましたが小生此の頃より亡き兄達に代るべき男性を慕う性格になつたものと思われます。後某薬品会社に勤務中、野性的男性美の同性を心中秘かに想う身となりましたが先方は正常なる性格にて小生の異常な思慕を打明け難く只通常の友として交際致して居りましたが、彼は家庭の事情にて退職し又小生も父一人子一人の境遇とて同会社の女事務員と二十才にて結婚致しました(大阪 M生)

キレー紙の女



佐々木 直

まことにおはすかしい話ですがね、と源吉老人は、年甲斐もなく羞みを唇に現した。

私はね、あるいは伝手があつて、新聞の立売をはじめることになつたのです。老人にはかつこうな仕事です。場所はK交差点としておきましよう、あまり明らさずに話すと、さしわりのひとでもできるでしょうし、若しこんなことが一般に知れ渡ると、あのひゝオヤジ、助平野郎と軽蔑された挙句の果、私の商売にも関係するようなことになる、それこそ大変ですから……

そこには共同便所があるのですよ、その便所が問題なんです、婦人便所にのぞき穴があるつてとんでもない、そんなものはありませんよ、よく調らべると、穴があるかも知れませんが、たとえ、それがあつたところである通りの激しい交差点、それに便所利用者の多い、衆人監視のなかで、女の便所をのぞくなんて、そんな度胸は私は持つていませんよ、私はこう見えても痴漢ではありません、れつきとした好々爺ですからね……

しかし、それは外観だけで、丸裸になれば、われ欲情す、ですから、あまり信用はできませんけれど……

その便所は通行人はもちろん利用しますが、その附近の人々の利用度が激しいです、またその附近が問題なのです。交差点からちよつと西寄りの南へ入る小路、そこは両側に小料理屋がぎつしりならんでいるのです。私はまだジャンジャン横町つてのを知りませんが、ちよつと、こんな町並ではないかと自分一人で想像しています。

こゝを、KY新地通と言っています、夕刊を売りきつてから、その横町へ入ると、とても賑やかでした。私のような血の枯れた人間でも、なんとなくボウツとして、ひとつはめをはずして見ようかつてな気持になりました。それはね着飾つた女が、裾に赤いものをちらつかせて、高い腰かけの上でジャンジャン三味線を弾いているのです。

ひろい世界に、ただひとり
なぜにあなたが、こう可愛い
君の寝顔に、頬あてゝ
女ごゝろの、忍び泣き

こんなわたしじゃ、なかつたに。

てな歌、まるで寝ている子を起すような偏情的なメロデー、たまつたものじゃありませんよ、

余談はさておき、こうした店の女や、マダ

ムがこの便所を利用するのですよ、それこそひつきりなしに、こゝへ駆けつけてくる。

こゝの共同便所は、通行人よりもこうした女たちのために設置してあるかのうちに……その女たちというのが……あなたもご存じのうちにタイハイ的な容姿で、私の目の前に現れてくる。なかには細紐一つのだらしないのがありますよ、いままで寝ていて痴戯のかぎりをつくしたような、疲れた面持で、手には、あれはなんとか言いましたなあ……あつ、そうそう、キレー紙というやつですよ。あの桃色をした。見ただけでも欲情を催すような、あいつをひらひらさせながら駆けてきます。便所の戸をあける時には、キレー紙を口でくわえたりなんかして……その女は、きつと唇で紙を始末するのでしょうか。あの時は片手しかあいていませんからね。

この辺から、私のわれ欲情す、の妄想が旺盛に働くのです。便所へ入って、用をすましたあと、あの紙でね、と思いかけると、私は体のなかをどくどくと熱い血が逆流するような、昂奮状態になり、完全に欲情のとりことなつてしまいます。

この共同便所へ、ろうたけた女盛りのベツピンがくるのです。さいしよの内はなんら関

心をいだいていなかったのですが、その女が用をたしての帰りぎわ、桃色新聞を買つてくれたのです。

「おじさん、よく売れる？」

なかなか可愛い、声でした。金鈴を振るような声、この口で、こんなわたしじやなかったに、などと歌つて鼻下長紳士を手玉にとつていたのでしよう。

「おかげさんで、ポツポツ」

「これから寒くなるので大変ね、体に気をつけなあかんわ」

「へえ、ありがとう」

「風邪をひかんように」

なんと親切？な女でしょう、私はおはずかしい話ですが、こんな美人？からやさしい言葉をかけてもらったのは始めてです。それこそほんとうにボウツとしてしまいました。その女は、三円の桃色新聞を二枚買つて、

「お釣はいらない」

と、十円札をおいて行きました。

その女は、左肩をぐつとあげて、それが癖なのか、それともそういう体なのか、いやに艶しさをふりまきながら、煙草屋の角をまがりました。私は、その女ぶりに見惚れて見送つたのです。

私は、ホツと吐息を洩らしながら新聞売台の上を見ますと、皺くちやになつた桃色の紙がおちているではありませんか。

「おや」

カツと頭へ血がのぼつてきました。私はひどくあわて、その紙をわしずかみにするなり、ジャンパーのポケットへねじこみました。大罪を犯したときのように、臆病そうにそつとあたりを見廻しました。こんな行為はひょオヤジ、助平野郎と面罵されても、一言半句の返答もできません。けれど、私は楽しかったです。夕刊を買う客がとぎれたとき、そつとポケットへ手を入れ、その紙をもてあそびました。やわらかな綿のような感触に、私の星は高鳴りました。たまらなくなつてポケットからとり出し、通行人に気づかれぬように掌のなかに丸めて、そつと鼻がしらへあてました。

この紙の特有の匂いなのだろうか、それとも脂粉にまみれている。あの女の体臭なのだろうか、えも言われぬ好もしい匂、私はとう然となつて桃源境に遊ぶような気持になりました。これが動機となつて、私はキレー紙の女に、好意と、ほのかな愛情をいだくようになりました。

店へ客がたてこむだらうの七時頃までに、女は三回ばかりこゝへ姿を見せます。その都度笑顔を見せてくれます。私は女が現れる度に年甲斐もなく、あられもない妄想をえがいて楽しむ男になりました。

たかゞ新聞売風情には、たゞ妄想だけで、それから飛躍なんてありません。全く甲斐性のないことです。

それからの女は毎日、桃色新聞を買ってきます。その都度、意識してそうするのかどうか、必らず桃色の紙をおとしていくのです。あの女、私に気があるのだらうと自惚れてもみたり、また一面、私のような人生落伍者の生顔を、嘲笑する悪趣味かなと、反省もしてみたり、このところ、私は混沌として女の真意がどこにあるか懷疑的になりました。

紙をおとしていくということ自体が、正に変態的ですね。その紙もときによつては、カチカチに固まっているのです。そんなのは皺ものばすことができず、まず無用の長物であるはずですが、私にとつては最も貴重なものでした。たしかに使用後の紙です。掌の上で眺めたり、鼻にあてゝ匂を嗅いだりしているともうじつとしていられぬ興奮を感じます。あの女も罪なやつです。老らくの欲情をかりた

【読者通信】

投稿歓迎

貴誌の中で最近特に反覆耽読した作品は六月号のバルカン・クリーグ、八月号の玲子女史の悦虐の記録、九月号の倒錯の告白中の羽村京子さんの狂い咲くカンナ、十一月号で岡田咲子さんの続変態艶書、本年新年号の第一回読者座談会に交悦に伴なう責めの衝動心理、二月号の辻村隆構成、塚本鉄三氏撮影の恋に狂つたワソカット、及び松井籟子女史作、喜多玲子女史絵の淫火等です。小生は二十才前後よりサド的傾向を持ち爾来三十才の現在迄その抑制にいさゝか困惑して居りましたが、貴誌発見以来一

縷の光明を闇夜に見出した様な気持で毎月楽しく拝見して居ります。

麻縄でその身の自由を奪われた悦虐の姿吊し上げられ、鞭の音に満足を見出す虐まれる表情バラバラと頁をめくる度に斯く迄私を忘我の境地に誘うあの文、あの姿もう少し私に財政的予猶あればと思わず洩らす溜息、松井さん岡田さん喜多さん川端さんを何度美望の気持で想起したことか。私も一度この様な女性に恵まれたならと慨嘆数刻、せめて我が思いを筆に托してと此の様に筆を執る事を決意させました。他の諸兄弟と同様に御指導を賜らんことをお願いします。

(淵瀬川藩夫)

てるなんて……

私は、夕刊売をしまつてから、あの女の住居を探しまわりました。狭いと思つていたのに入つてみるとKY新地も広くて、ちよつとやそつとでは、あの女のアドが知れません。けれど根気よく探しましたよ、というのは、私も男だ、一ぺんあの女を自分のものにしてみよう。そんな野望を抱いたのです。やたらに桃色の紙なんかを見せつけやがって、いま

に見ている、などゝ変に力んだのです。あの女を征服しなけりや男の估巻に関するなどゝ大袈裟に考えるようになったのです。

こうみえても、私は、女を買うくらい金はまだまだ持っていますよ、もとはレツキとした老舗の主でしたからね。と言つて女を囲うほどの余裕はありません。たかゞ新聞の立売ですから。

私は、女がKY新地の横通、葛の家にいる

ことをつきとめました。それが判明すると、矢も楯もたまらぬ思いになりました。老らくの欲情が、ぶつぶつと音をたてるように、体内をむずむずとはいまわります。今日、女が新聞を買いにくると、今夜、一ぱい飲みにくと、そつとほめかしておこうと待つていました。その日にかぎつて、いつまで待つても姿を見せません。けれど、たぎりたつた欲情をおさえる自制力を失つた私は日が暮れると同時に、まだ売残つてゐる新聞を畳んで店をしまつてしまいました。

風呂へ行つておめかしをして、一張羅の背広を着たのです。アバン型だが、布地はとつてもいいのです。私が全盛時代に金に糸目をつけずに仕立せさせたのですから……白いワイシャツに地味なネクタイ、鏡台にうつる私の姿は、寸分の隙もない英国型の紳士？どこから見たとて、共同便所わきで新聞の立売をしている。しわくちやじいには見えません。

私は颯爽とKY新地へのりこみました。眼ざす敵は萬の家のあの女、今夜は陥落させてやると、歩く靴音も勇ましく舗道を行きました。

むしろ若い女の肌が恋しくなりまし

た。われ欲情すの頂点へ達しているのでしょう。だが、これほど、意気込んで来たのに、萬の家にあの女がいないのです。

「これこれこうした女はどうしたのです」

腰かけ料理で一ぱいやりながら、大勢いる女を見まわしながら尋ねました。

「顔は美人だ。そうですね、眼はあんたに似ている顎はあんたとそっくり、口元は、ちようどあんたのようです」

モンタージュ写真でも写すような説明をしました。

「それやつたら、美枝ちゃんやわ……おじさん、美枝ちゃん知つてはるねん」

「知つてるとも、わしは恋人なんだ」

酒の酔に昂然として言いました。

「美枝ちゃん、どうしたのかしら」

「そうやわ、今晚の夜行で城崎へ行きはつたんや」

「そうですか、残念……」

私は意気が全く消沈しました。だがないものはしかたがありません。

「これをね、美枝ちゃんに渡しておいて下さい」

営々として蓄積したキレ紙の包みを女へ渡しました。

「あんまり浮気をする、いけないと言つておいて下さい」

私はそう言い残して萬の家を出ました。あれほど意気込んで乗込んだのに、私の得たものは、たゞ美枝という名前だけでした。けれど、これで、私の欲情が満足したわけではありません。若い女の肌の恋しくなつてゐる今夜、このまゝ濡れずに家へ帰る氣もしません。

私はK交又点へ来て、走つてくる高級車を呼びとめ、

「松島まで」

と、どつかと、こしかけました。

その後、その女に……へ……へ逢いましたよ、まあご想像におまかせしておきましょう。

「この間も女にせがまれて、とうとう思ひきつて、手術をしましたよ。お尋ねになるんか野暮ですよ、あれですよ、脳下垂体移植というやつをねハ……ハ」

源吉老人は、若いような声をことさら高く響かせて気持よげに笑つてから、
「とんだ、恥さらしの話でしたね」と、口をとじた。

地獄絵行脚

長岡変一郎

その頃——私は堪え切れぬ異常な慾求に日夜を悶々として送り迎えて居た。

——糊への執着。絞扼に依る自虐。フェティシズム等々。それ等の事は断続的——つまり一応或期間内に於ての体験を済ませば又暫くは懊悩から遠ざかる事も出来たが唯一つ「美女緊縛の姿態」に対する妖しい牽引力が私をして絵画とそして映画の内に求めさせ、それこそ文字通りの日夜を分たぬ連続的の無限地獄に私の身心を追いやるのだった。

その頃の映画は、勿論無声物の時代であつて、松竹。マキノ、帝キネ。日活。東亜等々各社競映の時代劇の内に、私の持つ異常性の渴望する、彼の「美女緊縛」のシーンが度々現われて来たものだつた。

当時の大衆文学として名声を博した燃ゆる

る渦巻。孔雀の光。落花の舞。砂絵呪縛等は何れも映画化されて、然かも各社競映であつた事実は、当時の映画界の記録が如実にそれらを物語つて呉れる。

さて私の嗜好癖は、それ等映画のスクリーンの上に、ホンの何分間、否何秒間しか現われ無い時もあるその僅かの裡に、美しい女優の紛する緊縛の姿態を求めて狂奔するのであつた。

日活映画の「燃ゆる渦巻」では、当時未だ女形を使用して居た頃で、烈女お綾の捕われの場面即ち「縛られた女」を、片岡松燕が演じて居た事を覚えてゐる。

又、同じく日活物「落花の舞」では、これは女優で当時名の売れた、酒井米子が芸者お絹に紛して、幕府目明しの家に監禁され、細引縄に縛られていた。

松竹「砂絵呪縛」に於ける、森静子紛する露路の緊縛ポーズ。——とまあその頃は、私としても未だ自分自身のそれが倒錯性慾だなんて事

の自覚出来る程度の性知識は無く、唯何となく仄かな快感憧憬を抱いて、ジーツと画面に見入る位の事だつたが、やがてそれが——私が性行為を——Onanieを覚えた頃からは、それからは何が何でも積極的に、絵画や映画の上に現われるそうしたものの、傑作を目前にしなければ、満足出来ないような結果を招来するに至つて了つた。

私は——映画館に入場すると必ず正面舞台の前下に、くつゝいていた楽士達の伴奏ボックスの「型の隅に行き、そこで立見をする事に極めていた。

そして其処なら如何程客が、入場者が立て混んで来ても、絶対に他人に気付かれる事無く、私は私のさゝやかな秘密の遊戲に耽溺する事が出来たのである。

私は前記の「型の隅」を、全で小学生

の児童達が、彼の修学旅行か何かの時に、集団で汽車や電車に乗込んだ折の、我れ勝ちに良い座席を取ろうとする時のその様、懸命になつて、それこそ人押しのけて、獲得しなければ成らない時がある。それは日曜。祭日。其他、映画館の大入満員を来した時に於て偶々起る現象なのであつた。

今やスクリーンに於ては、例の陶酔境のシーンが次第に近づき、あるとする。——そんな折、何かのハズミで私が右の「型隅」の場所から離れなければならない事が、偶発したとすれば、それこそ大変である。

私はそんな時、気狂いの様になる。何故？ つて、私は再び金と時間を費して、その映画を——緊縛場面を見直さなければならぬからだ。——

その頃の私には、金力も体に暇も無く公休日として僅かに、月一、二回しか自由にならぬ身であつた。

兎に角、私はそうした自己の持つ、倒錯性慾求に満足を与えんが為に、出ては映画を観賞（その特殊考察の上に於て）し、家の内に在りては絵画即ち、小説雑誌の口絵や挿画の裡から、美女緊縛の姿態を、そ

んなのに現われた性的魅力を追究し、スクラップする事に無上の快味を覚えて余念が無かつた。……

次に、それ等蒐集した、挿画絵画の傑作品と——そして映画の内の、そうした場面の現われたものに就て、記憶を辿つて（総て正確な資料は全部戦災にて焼失）述べて見よう。……

昭和×年。——当時の松竹キネマ作品。——「凡生奈落」——と題した映画には、ラストシーンに、森静子扮する娘型の井戸に吊れる場面あり。——猿轡を嵌せた娘を、悪党共が両腕を捻上げつつ庭に引出して来る。

滑車に依つて井戸に下つてゐるその釣瓶を外して、太い釣瓶縄でぐるぐると娘の体を縛り上げて了うと、他の一人がその縄の一端を引き、娘の五体は吊り上つて井戸の中へ。……

その瞬間。市川伝之助扮するところの「夜鳥仙太」が娘を救いに現われて、画面はここに大乱闘のシーンとなる。

猿轡と、そして太い荒縄に体中を、ぐるぐる巻き締められたその時の——森静子、紛するその魅力。——私は大阪新世界の日

本倶楽部で、その部分的なシーンを見る為に、三回の入場料を一週間の裡に三日間に分けて費消したものだつた。

アレ程氣に入つた場面は、爾来二十幾年の今日迄に、後にも先にもアレ一回だつたと、今もその思出が脳裡に浮ぶ。

美女が縛られ、吊り下げられるシーンの映画を、私の知れる丈此処に掲げてみると左の様になる。（年代略す）

当時の帝キネ映画に、細谷茂伝次原作。「獨體夢遊剣」あり、明石緑郎主演。平塚泰子の吊され。——其後新興キネマになつてからは彼の「銭形平次捕物帳」。嵐寛寿郎主演復讐鬼では淡路千夜子扮する「お静」が吊される。

ずつと後年、サウンドシステムにて、羅門光三郎主演「深夜の紅独楽」あり桜井京子扮する水芸娘。——父の仇を討たんと紅独楽にまつわる怪異。悪人輩の手に陥ちて井戸に吊される。——高桑義生原作。白帖秘門（東活映画）にも一場面あり。女優名忘却。以上右の裡、何と言つても「凡生奈落」に於ける森静子が一番傑作。是に勝るもの無し。

次は「責場」としての、緊縛を担当した

女優名と、その映画題名を挙げてみる。

日活映画「海棠やくざ」に、鈴木京子紛する「お糸」が納屋の中で、

同じく日活「旅姿上州訛」にて、桜井京子紛する百姓娘「お初」が土蔵の中。――

マキノ映画「浪人街第一話」モデル女優岡島艶子。大林梅子。同マキノ、「矢食」の松浦築枝。トッキーものマキノ「明烏夢泡雪」浦里に紛せる女優は同じく、松浦築枝。新興キネマ、「次郎吉流れ星」長瀬神一枚。細引繩に縛られたモデルは淡路千夜子。

先ずこの辺で中略させて貰つて……と。

唯、女優を裸体にして縛つた場面は、原作にはあつても、スクリーンにはさすがに現れなかつた。即ち「天狗の安」の如き、土蔵の二階で素つ裸にされた「お八重」が責められる場面は、ほんのチョツビリ陰絵になつて現われただけ。お八重に紛せる女優桜木梅子。――

半裸体になつて縛られ、背中を大映しにして責められた後、裏山の断崖に吊される場面のあつた挿画は、当時の極東キネマに於ける「怪人金仮面」この時の女優は小浜美代子であつた。

現在四十余才に或る私が、何とかしても一度見る事が出来ぬものかと、その時の昂奮を思い出して忘れられないのが、右の「怪人金仮面」と、先の「凡生奈落」の二篇の裡の美女緊縛の場面である。

次には挿画方面の蒐集品の傑作を、二三紹介した後、そうした物の蒐集癖倒錯性の副産物（どうも判然しない形容詞だが）とでも謂う可く、種々な変態性慾の世界に或時は耽溺し又或時は、正常な理性の上に立つてそれらの倒錯性に対する解明議論を吐く事の出来得るだけの、所以ミイラ取りがミイラにならずに終生を送れる様になつた（勘くとも私はそう思つて居る）その道程を記して行こうと思ふのである。

大正年間の小説雑誌の口絵や挿画には、岩田専太郎と、井川洗崖、両画伯が、時代物、現代物取混ぜての、従横無尽の活躍時代であつたと思う。

従つて私の求めるそんなのも、主としてこれ等両画伯の筆に成るものが多かつた。

大正某年発行の講談雑誌に小島政二郎作――「咽喉に十の字」――と題した連載小説中の一場面の挿画に、――線画の様な描



き方であつたと記憶して居るが、髪を丸髷に結つた人妻が、同じ様に五人程竝んで、何れも長襦袢一枚。古風な幅広扱帯を前で結んだ――つまり寝巻姿。と見られるポーズで、後手に縛られたその背部が真とに見えた絵が描かれていたそれを切取つて秘藏、非常に私の氣に入つて永く持つていた。画家は岩田専太郎。

大正十三年七月号講談倶楽部に筑波四郎作「実伝国定忠治」の連載小説挿画に、山王民五郎の女房お波が、玉村の京藏宅裏庭に於て、京藏の弟（サディズム性の男）主馬に腰巻一つの半裸体にされて縛られ、責め苛まれる場面のもの一枚。当時としても、裸体で縛られた場面の挿画は珍らしい方だ

つたので、是また珍重して秘蔵。同じく講談倶楽部所載で、岡本綺堂作、半七捕物帳「冬の金魚」の一場面の挿画に、マゾ性格を持つ女が、サド性の男に腰巻一つの裸体にされて縛られ、座敷の中に転がされて居るその画一枚切取り、スクラップする、何れも皆私の好む後手。高手小手の形容詞に当嵌るもの許り。以上の二作品は、共に井川洗崖画であつた。

他にも末だ数え切れぬ程の蒐集逸品があつたが、全部戦災に焼失したので今はない映画にしろ、挿画にしろ、以上のものだけでも、総て古い昔の記憶を辿つて記したもので従つて、この辺で中略させて貰つて話を次項に移行する事に仕度い。

× × ×

偕、私は先に述べた映画館での——スクリーンの上に現れる美女緊縛の姿態に限り無き性的魅力と昂奮を覚えて、××を行つたのであつたが、私はそうした異常な習癖を行いつつ、私以外の者にも同趣味否、同性癖の人の有無を知り度いと思つたが——率か不幸かそれは失望に終つた。つまり私と同じ様な習癖を行つてゐる人に、出会さ無かつた。が然しその代り（と言うのもお

可笑しいが）「オカマ」が私にくつついて来たりした。又、私の様なのは別の——若い女の背後から、所謂猥褻行為を行つてゐる変態男のある事を目撃したりもした。その点私のは、他人に迷惑を及ぼすので無く、まだしも良かったと思つて居る。彼の当時の新世界、大橋座や、世界座等には、よくオカマが出没したものだつた。「オカマ」遊んだ事があるか？——つてたつた一回だけ——いや、この事は又別の機会に話す事にして先を急ごう。

私は、私の倒錯性慾を通じて、次第に種々な専門的な医学書をも読破する機会に恵まれた。

クラフト・エビングスの著「変態性慾の研究」田中香涯著——「愛と残酷」沢田順次郎著「変態医学講話」ハヴエロツク・エリスの「性の心理」フロイドの「精神分析学」等々これらのものは、何れも例の「緊縛の女」に関する性的魅力を追究するの余り、遂には映画や大衆文学や、その挿画だけでは飽足らずにそうした専門的性心理学書を知らず／＼の裡に読破して了つたのであつた。

従つて又自ずと人間性心理の奇妙さを、

余す処なく知る事が出来て、お蔭で飛んでもない手柄（変態性兇悪犯人の逮捕）を立てた事もあつた。

先にも述べた如く、私がミイラ取りがミイラにならずに済んだというのも、一に前記の専門書を読破したその賜であつたと言ひ得るのである。

沢田順次郎博士の著に曰く「変態性慾の研究は非常に興味のある問題だが、同時に又非常に危険でもある。余程用心してかかるぬとミイラ取りがミイラになる虞れがある云々」と——

私がそのミイラにならなかつたとは、或は断言する資格に欠けているかも知れないが、然し勘くとも私は自己の有する倒錯性慾の為に、自己以外の他人に危害や迷惑を及ぼした覚えは無い。否それ処か多くの性倒錯者に、その性的煩悶の解決を与えてやつた事の方が多かつたと自負している次第である。

順次郎氏の著に、又曰く「変態を知らずして常態を知らず云々」と、まことに當を得た説だと私は首肯する。

犯罪捜査に當る警察官や、又小説家等は勘く共人間性心理の本能に就て、研究して

置く必要のある事は謂う迄も無い。勿論、常態も変態も……。

儲、余り豪相な事許り言つて居ると、腕者に嫌われるから、この辺で又私自身の持つ倒錯性に就ての告白に移ろう。

美女緊縛の姿態の上に現われる性的魅力の追究が、年を追つて益々激しくなつた私は、映画や文学や挿画や将又医学書等では満足せず愈々歌舞伎の上にも、そうしたものを求めて狂奔する様になつた。

尤も歌舞伎の見物中では、例の………を行ふ事は追に出来なかつたが、然しここでも又歌舞伎に就ての種々の知識を得る事が出来たのであつた。

即ち古今女の賣場のある芝居は何と何。そうした事を知る為に、自然演劇年代史や歌舞伎図録等の書物も読んだ。彼の本邦無二——否世界無二とも謂う可き賣の研究大家伊藤晴雨氏の事を知つたのも、この時代であつた。

私が、氏の事を知つたのは、大阪道頓堀の天牛本店で（昭和十年だつたと覚えてゐる）好色風俗誌講座と表文字のある洋綴本のその好色とあるのに、何かしら例のものが載つて無いか？との予感を抱いてパラバ

ラと頁を繰つてみた。と——

その時計らずも発見したのが、晴雨氏の女の緊縛写真であつた。

その賣へと謂う言葉もこの時知つたの写真を見付けた時の私の欣喜は、何に例え様もなく、なけなしの財布をはたいて狂気の如く、その本を購つて帰宅したものだつた。数日後になつてから、それはつまり当時の古本屋の店頭等にチラホラと端本になつて、姿を見せていた彼の文芸資料刊行会発行の——変態十二史の附録第三巻、変態蒐癖志に記載された賣の蒐集の一部である事を知つた。つまり好色風俗誌の第一巻より第三巻迄の中に変態十二史と附録志全部を纏めたもので、前者の十二史及附録志は和本であつたのを総括して洋本に改編したものがそれだと判つた。——但し私の購つた風俗誌は第三巻だけであり、又十二史の附録も右の第三巻を入手しただけで、他はさして私には用は無い様に思えて委しくは調べなかつたから、私の今言つた前者と後者との発行巻数に就ては些か間違ひがあるかも知れぬから其の点は悪しからず——

兎に角私はその好色風俗誌講座を入手して、そしてその時始めて賣という言葉の表

現が、女の緊縛美と関連ある事を知つた訳であり、更に和本綴の変態蒐癖志を入手して熟読するに及んで、益々伊藤晴雨氏の蒐集品や、その周囲の事情に就て、もつと知り度いものだと思つたが、如何せん昭和も既に十年のその頃には、殊に私の如き市井の一若輩に過ぎぬ者の、希望は到底達す可くもなかつた。

私は蒐癖志の中の「氏はその最愛にして従順なる夫人を材料に、賣の研究に没頭する。——例えば臨月の夫人を、寒中雪の降る庭の軒下に逆さに吊す（大正××年発行変態資料第一巻第四号口絵写真参照）云々のその第一巻第四号を求めて、大阪市内のあまねく古本屋（露店商人も含めて）を数年に亘つて根気よく漁り歩いたが、遂に希望は達せられず終いのまま日支事変から、彼の太平洋戦争——そして終戦を迎えた。がまア終戦後の事は後で話すとして、元の晴雨氏の事を始めて知つた時代に話を戻そう。

思い出すアノ頃の事。——私は歌舞伎に現われる女の縛られの場面を知り度いと希い、そうすると自然彼の播州皿屋敷のお菊や、切られお富等の歌舞伎版画も欲しくな

つて来た。

——だがその頃の私は、未だく何と言つても若僧で、矢張り変態なんて言葉を恥しがる位だったから、この版画の入手も中々容易では無かつた。

日本橋五丁目（大阪）にそうしたものを専門的に取扱つてゐる和本稀書珍本店が在つたが、それすら直接訪問をしきらずに、公衆電話で「お宅に播州皿屋敷のお菊の吊し責の絵や、何か他にもつとそうした場面の錦絵でもありませんか？」等と聞き合せたり又他の書店へ手紙を出してみたりもした。——そして皆断られた。

珍本店の店頭には、いつも変つた昔の版画等展示してあつたが、私の求める女の緊



縛場面の絵は、ついぞ見掛け無かつた。

とうとう仕舞いには我慢がし切れ無くなつて、この店に飛込み恥しいのを耐えて……「女の縛られた絵の沢山載つてゐる本か版画か何かありませんか？」と直接聞いてみた。——その結果として「変態……何……と云うのが、洋本にありましたか、何処かで見えた様な気がします。宅は和本ばかりしかありませんが——何処かその辺の本屋で訊ねて御覧なさい……」との店主の助言に勇気百倍（と云つても恥しくて耐ら無かつたのだが）いよいよ彼の日本橋筋電車通りの古本屋を虱潰しに「変態……何……とかいう女の縛られた絵ばかり載つてゐる本はありませんか？」——とばかり本探し行脚を始めた。

だが決つた様にどの店でも「さア——そんなもん有りませんア……」と答えて何かしら意味ありげに、ニヤリと笑つて私の顔を見る店員達であつた。

そこで私はもう口頭で訊ねる事は断念してそれから、何処かで何時かきつと探し出して見せよう意気に燃えて、古本店と云わず新本店と云わず片つ端からこの変態何々の表文字を手掛りに、或時等は五階百貨

店（古物市）迄も足を踏入れて行つて探しまくつたものだつたが、遂に先に述べた「好色風俗誌講座」を偶然発見し、緊縛の女つまり「責」に関する研究大家が伊藤晴雨という人である事を始めて知つた訳であつた。

話が少し後先した様だが私はこの晴雨氏否、蒐癖志の和本を手に入れてからは、是迄の様にそう恥しがらずに、堂々？の意見を述べ得る様になつて、それ迄に蒐集して持つて居た例の小説雑誌の挿画を更に自分の氣に入る様に——つまり縄の掛け方を補足して——それを特約の絵描きに頼んで極色彩に描き直して貰つたりした。——何度人も人を替えて——そしてどの画描きも、言い合した様に私の要求を満しては呉れなかつた。

或絵描き等は、散々勿体振つて長日月を待たせた挙句、全で私の注文にかけ離れた様なものを描いて寄こした為、大喧嘩をした事さえあつた。

私は又、猿轡を嵌めてない縛られた女の挿画に自筆でどれもこれも猿轡を嵌めて見たりもした。

印刷された猿轡を嵌めて無い画、アトに

から猿轡を加筆するという事は、結局その口や鼻の頭を塗り潰すより仕方が無かつた——でない、本当に口と鼻が隠れないと、実際に猿轡を嵌めた顔の魅力というものが出て来ないのであつた。

然しこの事は往々にして失敗もした。

折角美しく描けている画にアトから猿轡を嵌めた為に画が汚なくなつて了つて、又ぞろ新しく先の画を入手する為には、並大抵の苦勞では無かつた。

だが又不思議にもそれを探して巷を行脚するのが楽しくもあつた。

私は事縛られた女の画に関してなら特殊な第六感を働かす事が出来た。

それが何年も昔の雑誌に出ていたか小説の挿画であつても、根気よく巷の本屋を漁つて居る裡に、何時か必ず見付け出して見せる自信があつた。

だがそれは非常に時間の不経済を伴うので困りました。

即ち私はそんなのを探す時間には、同時に又新しい映画も観なければならぬからだつた。——故に当然無駄な時間は精々省き度かつたのもあつた。

新しい映画とは——勿論「美女緊縛のシ

ン」を観る事を前提としてである事は謂う迄も無い。

偕、歌舞伎では、彼の「播州皿屋敷」や「明島夢泡雪」又は「中将姫雪責め」祇園礼祭神仰記」等を観る事が出来た。

但し私の観劇した中将姫の責場は、姫が縛られないので失望した。

歌舞伎劇に現われる女の責場に自己の持つ倒錯性の満足を求めて更に——追究していくと、この頃の歌舞伎では殆んど上演を見ないもので、その昔は相当に有名であつたとの「恋闇月缺皿」や「吉様参由來音信」の事」等も知り、どうかして例え映画でもよいから劇中劇の形で一度これ等の劇を観度いものだと思願したが、遂に希いは容れられる機会が無かつた。

そう云えば又彼の播州皿屋敷のお菊の責場も、その昔の様な吊し責め場面を見せては呉れず唯簡単に折檻したのみで、程無く井戸に陥り込んで了つた。

尤もこの劇は、後に映画で「闇太郎懺悔」——と題した雪之丞変化の姉妹篇で劇中劇としてお菊の吊し責の場面を観る事が出来た——この時のお菊を演じたのが、即ち雪之丞でもある彼の阪東好太郎（現本間

謙太郎）であつたが、何故か私にはアノ表情は氣に入らなかつた。——がまあそんな事はどうこう言う権利は無い。

大太平洋戦争でアメリカB二九の空襲が私の為にはかけ替えの無い貴重な蒐集品の總てを一朝にして灰尽に帰せしめた。

終戦後——私は老母と共に現在の、北九州の炭坑に就職した。

そして坑夫の生活も次第に板につく様になつた頃、出版界も又次第に活況を呈して来た。

雑誌「妖奇」や「小説の華」等の口絵に伊藤晴雨の名を見出した時の私の欣びは何に例え様も無かつた。

だが、残念と言おうか今一步と言ふ処で翁の絵は私の要求を満たして呉れなかつた否、こう言ふとまた翁から「長岡変一郎氏に問う」等と返撃文を頂くかも知れない翁に対する私の認識は——つまり今ではもう翁の絵を、過去の如き倒錯性の対象として見る事の誤りを、充分とは言えないが或程度語る事が出来る様にもなつたし、又事実私自身が年令的にも昔の様な、自己の要求にのみ盲る事をしなくなつて居る。

翁の秘著「責の研究」藤沢衛彦氏との

共著に成る『日本刑罰風俗図史』等に依つて實に対する翁の研究意図が真意が実力が如何に社会に偉大なる貢献を為しつゝあるかを、如実に知る事が出来たと私は思っている。

もう可成り紙数も重るので、この辺で戦後に新作された映画の内で矢張り女の緊縛シーンの見られたものゝ二三を挙げて終末に近ずき度いと思う。

戦後の映画界は、当初チャンバラ物禁止で味気なく、後に再軍備可否論風潮に乗つて、又々チャンバラ時代劇の復活とはなつた。

然し総じて是ぞと見る魅力的な女の賣場の出る映画は無かつた様だ（無論緊縛を前提としての）

魅力はないが唯、女の縛られる場面でよい位の期待でなら、十指に余る位あつた様に思う——それも戦後の私は、もう余り以前の様に多く映画を観る事をしないから、或は見落して居るものがあつたかも知れぬが兎に角、私の観た丈のものを挙げてみる戦前の頃（日支事変以前）松竹映画のトキもので、高田浩吉主演次部吉格子があつたが彼の時のお仙の役を飯塚敏子が演じ

て自雷也床の仁吉に縛られ口に猿轡を嵌められるシーンがあつたが非常に魅力的だつたと思つて今も忘れない。

ところでその同じ題名の次郎吉格子を戦後同じく松竹映画で演つたのが読者も御存知であろう長谷川一夫。高峰三枝子のコンビであつた

この時の高峰の扮するお仙の縛られ場面は彼女の演技そのものが現代劇臭さから抜け切れない為が、或はその表情が時代向しない為か何れにせよ私の眼には「縛られた女」としての魅力は前者飯塚扮するお仙に劣つていると思つた。

戦前と戦後を比較しての同題名映画なら他にも未だある。

即ち東映の阪妻主演「天狗の安」あり戦前は新興キネマ時代に、同じ阪妻主演で上映された事は先に述べた通りであつた。

但し後者の天狗の安は筋書が原作者のそれと大分違つてゐる。

即ち原作ではお八重が土蔵の二階で素っ裸にされて縛り上げられ、責められるのだが、この場面は是又先に述べた様に、ホンの影絵程度で実際スクリーンの上には現われなかつた。

従つて原作では素っ裸で責める、この道にかけては垂涎に値する場面が見られなかつた訳であり、当然「桜木梅子」扮するお八重の縛られポーズは見たかつたが、見られなかつた事になる。

戦後の東映のそれはお八重がお静になつており、その代り土蔵に監禁され、柱に縛られ猿轡を嵌められた場面は何度もくり返し画面に現われる。

ところでこの「お静」に扮して居るのがこれが又魅力隆張りの「入江たか子」である。

往年のマキノ映画「浪人街第一話」をこれも東映で酔どれ八万騎と改題して上映している。

この映画でのラストシーン女賊お新の牛裂きの場面用意だけを宮城千賀子が演じたがこれは白衣の彼女の足を縛るところにはんのチョツピリ魅力を見せるだけ。——

新旧対照が面白いので一寸書いてみた。新旧対照の出来る映画なら是からもどしどし製作されるであらうと思う。（終）

x

x

x



美少年の死

岡 真史郎

新宿駅東口の構内売店をすぎ、狭い石段を登り、パチンコ屋や食堂や洋服店や靴屋や食品店の並ぶ坂道に出ると、その一廓にずらりと十数人の靴磨き屋が目白おしに並び、電燈をあかあかとつけていつせいに忙しく働いていた。夫々の磨台にはサラリーをもらいたてのサタデーイブをこれから楽しもうと、いう若い者達や、親から、もらつたばかりの千円札の何枚かを胸々おさめて、これから恋人とアベツクを楽しもうという学生やなんか、が思い思いの靴をびかびかみがかせていた。彼等の頭上には冬のさえた空にネオンの満盤飾がこぼれるように輝き、駅からはき出される夥しい群集は流れるように角筈の大通りの方へと武蔵野館界隈の盛り場へと動いてい

た。都会の夕方は目にしみるようなネオンの輝きと共に今や享楽のクライマックスに入る楽しさにわき立っていた。

生活の垢にまみれたような、お婆さんの汚くよごれた手に十円札二枚わたすと、キツドの黒手袋をはめ直して、立ち上つた島津紳一の背をぼんとたたいた者がある。K大学後期の生の渡辺敦夫だつた。彼は紳一より一年上で医学部に行つてゐる。帽子はかぶつていないが、ネーヴィーの外套にじみな縞物のマフラーをしてゐる間から、ちらと真白なカラーの学生服がみえる。

「やつぱり紳ちゃんじゃないか。おい変わらずゆうとしてゐるね」

「あッ、敦ちゃんか。驚かせるなよ。いつ

帰ってきたの」

「二日前、汽車は混んでいなかったけど、何しろ、シュヴェスタと一緒にんだから、世話がやけてね」

彼は妹と共にスキーに上越の方へ行つていたのだ。

「これからどうするの、映画かい」

と敦夫の方からきいた。

「いつだつて君は行動が神秘だからね、それになるで、良い入でも待つてゐたいな、おめかしじゃないか。誰かあててやろうか」

「ひやかしてはいけない」

と云つた紳一の腕をとつてとにかく大通りの方へ歩き始めた。宵のペーブメントをふむ紳一の靴がキュッキュツとさわやかにきしんだ。それにしても敦夫を驚かせた紳一の学生ばなれのした服装は紳一にしてみれば何もいままさら驚くことでもなく、親ゆずりの美貌と財産と鏝が身についているまでのことである。高い鼻と深い眼と、小さく結んだ唇は額の大きい細面の顔を上品にひきしめ、それに濃い眉毛と軽くウェーブした髪が飾つていた。強く突出した喉頸のアダムのはねは、ばんと張つた厚い胸と共にたくましい男性の表徴であつた。五尺五寸をこえる色白いこの美青年の

第一の特徴はオブシディアンのように黒くすんだ瞳が、うれいげにまたたいている、一種の悲し味をおびた深刻性と、にこりともしい口元の緊張であつた。敦夫に限らず男や女の多くが紳一に面と向つた時に感じるのは、このひきしまつた、リリシさである。それは血統の良いアラビヤ種の馬かスピッツのよう、に精悍伶俐な犬に対した時のような、すがすがしさであろうか。この美貌は紳一の母方の血筋によるものであり、彼の体格の良さと毛深さは父親ゆずりであつた。その上に彼の体は高校時代の水泳選手として鍛えられていた。その当時合宿の選手達の間で紳一のすばらしい美しさにうつつをぬかす者も少くなかつたのである。水泳は彼に美しくひきしまつた筋肉を与えた。肘と股と腰の強さは無類であつたから、彼を我が者にしようとして、つけねらつた硬派の上級生も彼の敏捷強力な力におそれなして近づくのであつた。

天性の美貌とすんなりした肢体は周囲の教育が与えてくれた身だしなみによつて、磨きをかけられていた。幸い牛込の大きな邸は戦災をまぬがれ彼の両親の健斗によつて生活が傾くことはなかつた。もともと戦前より、相当名の知れた貿易商だつたのである。ただ紳

一には男の兄弟がなく姉と妹の間にはさまつた一人息子で「お兄さま」「紳一さん」で通つてきたから、両親や姉妹達の愛情によつてこの上もなく保護はされていたが、青山にいる伯父が強力なスバルタ式の教育と英国式の鏝をやかましく云つて、紳一を柔弱なお坊ちやんにすることを極力ふせいだのである。

紳一は父が若い頃スコットランドで買つた褐色のホームスパンの外套に真白なベロトのマフラをし、渋いなす紺のリリアンのネクタイをしめていた。その齡の割には単調なあつさりした色調が、反つて、彼の美貌をひきたたせ、彼の精神性に調和しているのだつた。

茶房ブローニヤは新宿の喫茶横丁にあつたが、酒場をも兼ねていた。この店の経営者は永年銀座でバーをやつていたのだが、銀座色が漸次新宿に入るにつれ、従来よりも変つた凝りかたで店を開いたのだつた。北歐風のクラシックな二階建切妻で、白壁に黒い柱が目立つた。木板に店の名を刻んで吊してあり、夜はガス燈のような鉄格子の角燈に紫と白のネオンをとぼした。外からみると店は真暗のようであるが、厚い木の扉をおして入ると、中は割合と広く適當の暗さになつてゐる。つまり人の顔は判るが、みにくさが、影によつて見

えない、程度に暗いので人前で不必要に羞恥心の発達した人々にとつては、中で悠然と時間を空費するに適しているのである。部屋の壁は煉瓦ずみになつており、天井と共に太いオークの柱が頭張つていた。鉄製の燭台には、蠟燭がともし、所々にチツペンデル風の小じんまりとしたスタンドが置かれ、青い光を放っている。この店は名曲の店とガラス窓に書いてある如く、相当数のレコードを蒐めており、客の求めに応じて、どんな永い曲目でもかけてくれるためか、音楽を愛好する若者達が集つてくるのだつた。スタンドライトにてらされた壁には、マチスのデッサンとかルオーのピエロを描いた小品がかかつており、ベレーをかぶつた画家の一団が時々やつてきたりした。

こうした店なら、広い東京にあえて珍しくもないが、ブローニヤがその方面の名所であることは、店に女の子の給仕がいく、パリ式のギヤルソン、それも若く美しい青少年給仕のみを揃えていることでわかる。

煙草の煙と音楽と会話の雑音で、混とんとした穴倉のような室内に二人が入ると、早速マスターがやつてきて、
「いらつしやいませ」

と椅子をあけ場所を作つてくれた。ブローニヤに来る客は特殊の目的を持つた者と、常連と、ふりの客とあるから、そうした客種を一目でみわけ、それ／＼適當の場所へ案内するわけである。マスターは一寸粋なミリオンテックスの洋服を着こなした蝶ネクタイを結んだ四十年配の男だが、適當に気を配り、客の気分をこわさないよう心がけている。給仕の英ちやんという十八才位の少年が、盆におしぼりをいれた箱と冷水をみたしたコップをもつてきて、一寸軽く頭をさげテーブルに置くと、二人をさわやかにながめて注文をきく、

この種の店は一人客の場合それも、それと判る連中だと、早速美少年の給仕が傍へやつてきて、お伴を勤めるのだが、二人以上だとはつておくのが不文律のようでもある。

「だつて、そちらは出来ているんですもの……御馳走さま、……おごつてもらおうかしら」なぞと云っている。

紳一と敦夫は並んで、巾の広いソファアに腰かけ、コーヒを飲んでいると、敦夫の仲間の木内信也がやつてきて、敦夫の傍にわりこむと

「今晚は、……しばらく来なかつたじやないの。敦ちゃん。今年になつて始めてだね」

といいながら、二人に目くばせする。ダンディな背広姿で、色白の目の大きな青年だが一寸みると何となくずれた頰の影がやどつている。目の下に荒淫のくまが出来ているようだ。音楽は第三の男をギターでやつていた。

「信ちゃん、相変らず熱心だね」

「そうよ。この頃淋しくて、何だか餓えてるみたい。第一、紳ちやんが冷いもの。たまには僕にだつてお相手させてくれたつて良いのにね」

「浮気者。紳ちやんがそう簡単におちるもんか。第二、僕にだつてゆるさないんだから。紳ちやんは貴族だよ。あの子がついてるからね。實際嫉けらあね」

紳一はだまつて、ほほえみながら、ベルメをふかししいる。すらりとした手が美しい信也がまじまじと紳一の顔を正面から眺めながら

「紳ちやんの目をみると、胸が切なくなつてくる。キツスしたいな。アポロだ。やらなくとも良い。裸体がまたみたいな。鎌倉カーニバルの時は大分楽しませてもらったけど。あの子つて、良ちやんでしよう。この頃どう？」

ときく。紳一は

「大分良いんだって、一度見舞いに行つてやり度いと思つてるけど、反つて興奮すると良くないからね」

とぼそりと答える。

「興奮はこちらだおあいにく様紳ちゃんは冷血漢だよ。あんなに良ちゃんがあつあつなのに、一度もゆるさないんだって。うそじやない？そう？プラトニクが良いかなあ。僕なんかたよりないな。紳ちゃん、不感症かね。一度でふつちやうんだから。紳ちゃんと永続きしようと思えど結局プラの方が良いのかもしれないよ。ね、紳ちゃん」

「どうして君達はそうとつちかに決めたいの。親友で良いじゃないか、肉体にキツスしたいなら、もつと猛者が沢山いるでしょう」「有難うさんだ。ふられてるみたい。もうこんな話よそうよ……。敦ちゃん、踊ろう」

二人は立つて踊り始めた。オーカム・マイハートをやつてゐるのだ。びたりとだき合い目をつむり、腰を前後にふり、ゆるやかに動いている。

紳一はつと立つてバーのスタンドへ行くと洋酒の瓶がずらりと並んだ前で活発に、カクテルを作っているバーテンダーと向い合つて

腰かけ、マルチニーを作らせると、一人でグラスをかたむけるのだつた。彼はこうしてぼんやりと洋酒の様々の瓶を眺めながら飲むのが好きであつた。サタデーイーブは新宿が最も濃刺とする時である。客は続々とプロローグヤへも入つてきた。その多くが若い。或は談笑し、或は密語し、或は踊り、或は黙然と音楽をきき、或は飲んでいた。曲目はメルセデスシユモレのカルロス・カルデロになつた。甘い旋律が流れる。マルチニーの芳香とデイズエスチーフのオリーフの実際の触感を味いながら、彼は良ちゃんという若者から最近来たばかりの手紙の文句を思い出していた。

——紳一兄

こうしてじつと目をつむつて寝ていると、またしても、お兄様のことが思われてなりません。なつかしいお兄様。どうしてこんなに二人は別れ別れの生活をせねばならんのでしょう。この前お兄様が来て下さつてからもう二ヶ月たちます。あの時はたのしかったです。良輔、あの時のことと思うと涙が出て来ます。お兄様の美しい顔みているだけでも、僕の病氣は治るのにお兄様といつたら面白い話随分してくれましたものね看護婦が注意する位でした。あの時お兄様のお話にあつたヘレスポント海峡をへだてて愛し合つたリアンダーとヒーロの物語り。リアンダーが夜毎海を泳いでヒーロに会いに行く。そして一夜暴風雨のためリアンダーの屍体が漂着したのをみてヒー

ハナヲタカクスル

問 私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があるものでしょうか。

答 先ず特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙挿入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最返は材料がよくなり使用され出しました肉質法は少しづつ高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては如何なる方法も追従を許しません。従来の象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なる人も皆この方法で行うべき運命をもつてゐるのです。費用は一万二千円以上です。

大学市北区梅田新道

交叉点東一丁電車道

三山整形外科内

三山隆鼻法研究所長談

ローが絶望のあまり、身を投げて死んでしまふ良輔もまえにあの物語の絵をみました。あんな悲しさつてあるでしようか。お兄様は強くてリアンダーのように泳きもうまいんでしようけれど、天災のためリアンダーのように万一のことがあれば、良輔はいきていられない。お兄様と昔、鉛温泉まで行つた時のことおぼえていますか。あの時のお兄様のすばらしさ。この療養所と東京の間はヘレスポントの海よりも遠いけれども良輔は夢の中で毎日お兄様に会いに行きます。お兄様だつて来てくれるものね。でも、良輔はお兄様のためなら、命をなげ出してかまわない。病人がこんなことを云つて御免ね、お兄様をこんなに思っているのに、お兄様つたら、どうして、良輔に惜しみなくお兄様の体をくれないの。そりや今は病氣かもしれないけれど、こんな病氣もう治つたも同様、お医者様は大丈夫つて云つてますもの。実際お兄様と一緒にないのがくやしい。地獄におちたタンタラスが水を飲もうとすると、水が逃げてしまう。タンタラスは死にもの狂いで水を追いかける。お兄様は良輔が好きなくせにどうして、良輔をタンタラスみたいに、こいこがれさすの。是非もう一度来て下さい。良輔の血色も

大分良くなりました。良輔の裸をお兄様に擦擦してもらいたい。お兄様の力強い腕で良輔をしめてほしい。お兄様に命をかけてのペーゼをおくりします。お兄様はいつもこうして一緒にいるのに何が不足なのか、何が淋しいのかと腕を組みながら、云うけれど良輔一人でいると夜なんか本当に淋しくて泣けてくる。それは良輔まだ充分にお兄様をつかんでいないもの。良輔だつてもう大人ですよ。なつかしいお兄様早く来て下さいね。

お兄様の良輔より。

富山良輔は紳一の母方の従弟で彼より五ツ下の少年なのだが、故郷の家から出て来て、牛込の家に寄宿していた。良輔の家は長野県の豪家なのだが末子である彼は、行く末東京で生活するために、両親が妹にあたる紳一の母の家に寄宿させたのであつた。自然二人の若者は一緒に生活するようになった。紳一は良輔の純潔と無垢と朗かさとその豊かな頬の娘々したような美しさにいたくひきつけられた。良輔は上京して一年目漸く紳一との間が大胆な関係になろうとした時に呼吸氣病のため、郷里に近い療養所に行かねばならなかつたのである。良輔はいわばこのバーのスタンドに置かれた、早咲きのシクラメンの花の

ような温室育ちのひ弱い可憐な少年である。紳一が一寸強い語気で物を云うと良輔の目はみるみる悲しそうになり、涙ぐむので、紳一は反つてはつとするのである。彼は何とかして良輔をもつと丈夫な男らしい青年にしたいと思う。しよせん良輔もまたこのブローニヤに集つてくる紳士達のように男の姿をしたお姉嬢達になる運命の子なのだろうか。

紳一は思う。

俺と良輔は血族なのだが、二人が別れられない関係もあるのは良いとしても、何も良輔の童貞は奪うまでもない、あれは思つても嫌だ。良輔だつて俺だつてお互に体のすみまで知つているがそれが何だ、俺は良輔をあくまで純潔に留めておき度。けがれるのは思うだけでも嫌だやり度ければ敦夫だつて信也だつて悪くはないのだあんなに皆が騒ぐのだが俺は肉体におぼれ度くない。俺という人間は植物みたいに情ない。血が通つていないと奴等は云うだろう。しかし、あの肉の交りの後の味の悪さと来たら、どうだ。悲劇だ。俺にも今に結婚話があるだろう。青山のあの頑固な伯父が第一きかないだろう。お母さんはきつと、くどくだろう。良輔はどうするだろう。ええ、思うまい、俺はまだ若いんだ。

その時紳一の隣でさつきから、ジンをちびちびやつていた三十年配の男がマスターと話しているのが聞こえてきた。血色良く肥つてコールマン髭をたくわえ金縁眼鏡をかけ黒い外套に黒いマフラー。話す声に艶がある。

「それヤ私も結婚すれば家内がかわいゝけどね、何だかこの道だけは忘れられないものね。だからあまりひっこく好いたはれたのは閉口ですよ」

「そうですよ。でも何ですネ……あまり、おやりにならん方が良う御在んすよ。好きとなるともう理性も何もないですの。はたから見えておかしい位。あんなにまでしななければならぬんかしらと思う程熱中しちゃうんですの。……ええ。あなたのように御家庭をお持ちの方は、こんな色恋は、家庭が荒れますからね、御要心なさいよ」

「そうかしら。そうね。まあ肉体だけにしておきましょう……ふふ」

「誰か良い子、いませんかしら。両親の無い子で性質の良い子でしたら、私養子にしても良いんですの。しつかりしていればね。私も齢とつていつまでもこんなこと嫌ですからね」

「もう遊んで暮せる程もうけられたんでしょ

う」

「ご冗談を。でも、この頃疲れましてね、良い子にまかしたいんです。」

「ボーイさん達随分良い子がいるんじやない」

「ええ。でもね。それ、皆……。女か男か判らんような連中でしょう。せつかく世話してやつても、いつの間にか好きな相手こしらえて、逃げちゃうんですの、信用なん、出来ないますよ。」

「そう。？やつぱり男同志の間つて、緋香花火みたいにパチパチ云う間だけがあつて良いのね、女たいにべそべそしないかわりに永くなると、あきちまうんだね、同棲したつて子供が出来るわけじやなし……そのくせ子供は欲しいのにね。」

「全くね……うまうまいかないんですわね」

ダーミヤのシャンソンがうらがれた哀調でパリの恋のためいきをきかせている。

あの夜私は夢をみた

美しい夢……恋人を得た夢

一言も云わず、ふるえるように

優しく彼は私の手をとつた

ナンバーワンのジョニーがやつてきて紳士

の傍によりそうと彼にウィンクして

「なーさん……しばらく。何かおこつてよ……ベバーミントでも良いわ。」

「ああ良いとも。」

「メルシー。やつぱりなーさん気振りが良いわね。」

「ジョニーのネクタイが、なかなか良いじゃないの」

「いただきまあす。これ？」

と手で優美にネクタイをいじりながら

「銀座で買つてもらつたの。花菱のよ。私も一寸じみかもしれないけど……」

マスターがにこにこして

「ジョニーにも買つてやつて下さいた。お伴しますよ。」

「なにしろ、ジョニーは売れつ子だものね、今日一財産つくるでしょう。ネクタイなんか一体何本持つてるのさ」

「でもネクタイばかりじゃつまらない。ネクタイ売ろうかしら。良い外套ほしいな。マスター。ほらこの間のあの入ね三千円で私に売つて云うの。其れがギャバジンの良い品物なの。ただみたい。……買おうかしら」

なーさんと云う紳士はジョニーのネクタイを直してやり姉が妹に母親が子供に対するように、ジョニーの髪をわけてやつている。マ

スターは紳一の方をむいて、

「紳ちゃん、一人で何考えてらつしやるの、みんな紳ちゃんにあつあつなのね。あんたみたいに好き嫌いののはつきりしているのまた珍しいわね。」

「有難う。皆どうして僕みたいなものなのどこが良いのかな。シャルマンならいくらでもいるじゃないの」

「それはそうですけど。みんな紳ちゃんの、きりつとした男ぶりにほれちゃうんですよ」

なあさんは紳一の顔を羨望と讃歎のいりまじった顔付でじつとみている。紳一の行く所行く席必ず皆が彼を讃美し、彼の関心をひこうとする。或る紳士は彼にすばらしい外套と洋服を提供するからといった。或る紳士は彼に五万円のポケットマネーをやり、箱根ヘドライプに連れていってやると云った。でも紳一はなびかない。今ではブローニヤの物語りの一は紳一が金で解決出来ない人間だという事であり、ジョニーにとつては不可解な神秘的な男なのである。それだけジョニーは紳一が操を立てている良ちゃんという少年がねたましくなつてくる。ジョニーには良輔のような純真さがなく、人の愛情は金銭のバロメーターで測れると思つてゐる肉欲でしか友情を律し

ていない。紳一の神聖視する処は愛なのであり、それが精神が先で精神が合一すれば、肉体などはいともお易いのである。反対に肉体だけの切売にも近い性欲衝動的な交りをする事があつても心のうちで紳一は相手を軽蔑したくなるのだつた。そうした肉の演戯はしたがつて猛烈を極めたものであつた。紳一は良輔と夢の中でこうした、すさまじい行いをする事は珍しくない、しかし、現実には、彼が良輔を恋する程良輔を純にしておき度い、

そして彼と二人きりの魂の聖所に入り度いと思ふ程反対に紳一は信也のような男とただれるような一夜をすごすのである。紳一は良輔を絶対にブローニヤへはつれていかない。良輔は紳一のタブーなのである。

紳一は敦夫と信也達のいる一団へ行つた。今や絵画論と音楽論に青年達は熱中していた。アバンギャルドと現在音楽の比較なのであつた。

にこりともしない顔。熱中して目をきらきら



Ken

光らせている顔。煙草の煙ゆらめく蠟燭の焰の下で彼等は論じ疲れると、沈黙してお互にお互の珍しくもない顔を別の角度で見直し、「案外彼の顔も美しいや」等と思ふのである。映画俳優の下馬評は青年達に避けられぬものらしかった。誰其れが良いの悪いの好きの嫌いの、演技力がどうの、性格がどうの、鼻の恰好がどうの、目

の大きさがどうである。お互の品評をやつてゐるより、その方が当りさわりがない。芸術調よりも肉の香りが濃い。

「何故こうも人間という奴は恋愛にうつつをぬかさねばならんのか」

と一人が云うと

「人間以外の動物はね」

と敦夫が云い出した。

「何よ、敦ちゃん」

「つまり生物学的に云えばだよ、それ……交尾期というものがあつてあの時期にしか奴等は興奮しないんだ。生殖期と栄養期とがきれいに分れてゐるんだね。せつせとホルモンをたくわえてさ、生殖期になると徹夜で発散させちやんだ。ところが人間様だけはちがうんだ」

「なある程……一年中だあね」

「死ぬまでだよ。ホルモンが衰えれば補給するしさ。バスコントロールまでして、なお生殖せねばならんちうのはつまりなんさ。人間は生殖器官を芸術化し、恋愛という面倒臭いものを発達させたのね」

「つまり、そうすると子供を作るといふ作用から脱線する程芸術化するつてわけ？」

「そうなの、異性愛じやまだコントロールの

何のと非芸術的でしょう。だから同性愛なんて云うのは最も芸術的なものさ、生物学的に云つてね」

「肉体的連係が異性愛程深刻じやないから、何かして、深刻化しようとして、恋愛技巧が発達するのかしら？」

「どうりで皆さん、達者なわけだあね」

と誰かが云つたので皆にやりとした。

「生殖器が此の上もなく美しくみえるのは性慾のしからしむところというけど、この芸術化があるためもあるのさ」

「信ちゃんなんか自分で自分のものが、いいでしょう、自分で自分とはれるつてわけ」

「あら、失礼。私女よ」

「じや信子姉さん、どうなの？」

「私……あれは好物だし、気持は女なの。ね、わかつてるじやない、馬鹿、何よ、こんなこと云わせてさ」

「皆裸でここへ入つたらどうでしょう、品評会出来て良いねえ」

「いやだ。恥しい」

「だつて皆持つてるんだもの、恥しいなんてことないじやない。君よく銭湯へ行くね」

「お風呂は別だよ。そんな気持ないもの。で

もあれはすばらしいストリップだね、うつとりすることがある。」

「いやな奴」

「昔の徴兵検査官の係り、羨しいな。」

「私なら、うんとねんごろに検査してやる」

「たまらないわね、美男子の思う存分いじれてさ」

「これだけのグループで温泉へ行つて遊ばない。きつといけるよ。僕達だけなら恥しいことないじやない？」

「でも紳ちゃんがいると、恥かしくなる」

「急所さえさらけ出すの、つや消した。でも紳ちゃんが来たら、サービスするがなあ」

紳一はまた自分が話題になるのをみても帰ろうと思つた。彼の後から敦夫が出てきた。二人はそれから、千駄ヶ谷のある温泉ホテルへ行つたのである。土曜日の夜は何かこうしたことがないとおさまらないのだ。

桜の花も散る頃になつて良輔は上京してきた。彼はすっかり健康になつたというものの元々弱い体なのだから、紳一の母がひどく心配して、当分あたらず、さわらずのぶらぶらした生活をさせておいた。良輔は絵が好きでひまがあると、郊外へ出かけて、スケッチし

たり、美術館へ行つたりしていた、良輔にとつて、ギリシャの彫刻は美の啓示でさえあつた。彼は大きな画集を持つており、わけてもポリュクレイトスの彫像を好んだ、ナポリの国立美術館にある槍をかつぐ青年の裸像は、その均整のとれた黄金分割もさることながら上体の筋肉美、智的な容貌と手、すらりとした上肢、たくましい生殖器がこの上もなく美しかった。それは云いかえれば紳一自身のものに他ならなかつた。

或夜等は紳一の手がねているうちに一人で良輔の胸の上に乗つかることがあつた。良輔は其がたまらなくうれいのだつた。彼は紳一の顔にそつと接吻した。何という美しい耳だろう、やがて紳一はそのたくましい手を良輔の胸の上におき、ねむりながら、かすかに「良輔」と云つた。彼は良輔を夢の中にまで、思つてゐるのだ。朝のほのぼのした曙光が寢室を明るくしかける頃、良輔は何者かにおびやかされて叫声をあげた。悪夢だつた。紳一はねむりからさめると、いとしき者を両腕にひしとだいて、頬と頬とをつけて愛撫した。

紳一は大学へ行き良輔は散歩に行く。或日良輔は紳一の部屋の机の抽出しに、紳一のノ

ートを見出した。それに良輔自身のことか書いてあつた。

二月〇日

昨夜も敦夫のたつての懇話で肉体を宥した。彼は俺に傾倒しているが、俺の魂はうつろだつた。もうあんなことは、よそう。良輔のことを思う程、反つてめぢやにあんな関係を結ぶんだが、俺は良輔を汚したくない。俺の肉体はけがれているんだ。良輔の純潔に値しないのだ。童貞の貴さ、

三月〇日

みんなが俺を不感症だとか女に対して観念的だとか云う、そうかもしれない。もうじき良輔が帰つてくると、また一緒に生活が始まる、俺は良輔を愛する。良輔は近來めつきり大人になつてきた。

四月〇日

良輔からの便り。めんめんとして俺に対するラブレター。あれの頭の中は俺で一杯なのだ。うつかり出来ない。あれを墮落させられない。もう故郷の家に帰つたんだから、今までのように一日中お兄様お兄様でもくらせまい。淑子の奴、「この頃お兄様変ね、良い人出来たんでしよう」なんてカマかけてくる。しかし俺が良ちゃん出来ているなんて、ま

さか、いくら何でも気がつくまい、反つて淑子の奴、良輔に気があるんじゃないかな。

五月〇日

良輔が帰つてきた。すつかり大人になつてしまつた。背ものびた。色は前より白くなつたようだ。相変わらず優しく純だ。

良輔は「僕の童貞はとうにお兄様にさし上げてあります」と紙に書いてはさんでおいた。紳一が学校から帰り、翌日になつても別に変つたことはなかつた。今や青葉の空気はすがすがしかつた。小鳥が邸の庭で盛んに鳴き木蓮やライラックが良い香りを放つていた。

「良ちゃん、土曜の晩、泊りがけで何処かへ行こうか」

と或日、紳一の方から、さそつて来た。

「ええ、何処へでも、お兄様さえ良ければ」

「良ちゃん、すつかり大人になつたね……判つてるの」

「……………」

良輔はつづらな目をまたたいて、いたづらつ子のように笑つてゐる。

例の千駄ヶ谷のホテルだつた。岩風呂なんかで宣伝しているのだが、離れの浴室つきの洋間に二人きりになつてしまうと、二人とも

妙にだまりこくなつてしまつた。トランプ等
しているうちに夜がふけて行つた。

「良ちゃん一風呂あびよう一緒に入ろうよ」

「ええ」

紳一の裸体の見事な美しさ。今や二人とも
お互にかくす必要はなかつた。お互にお互の
裸身を心ゆくまで眺め合つた。紳一の品の良
い唇は良輔の小さな唇をふさいだ。二人の若
者はびつたりと抱き合つた。湯の流れる音が
心地良かつた。

「ベッドへ行こうよ……今晚は、良ちゃんの
成年式なんだ。」

「お兄様、こわいみたい。僕何だか海賊か何
かに殺されるみたいな気がする」

「二人の結婚式なんだ。良ちゃんの血をすす
るから」

「僕もお兄様の血がのみたい」

紳一はつと走つて洋服のポケットからナイ
フをだしてくると、良輔の上腕の真白な肌
にぶすりとつきつけ、たらたらとほとばしり出
た鮮烈な赤い液体の上にがばりと唇をおしつ
けた。紳一はやがて自分の腕にも、いさぎよ
く小刀をたてた。良輔は真赤な血のしたたる
ダビデの巨身にいだかれて、ベッドにかつぎ
こまれた。純白のシーツの上ところがされた

良輔の全裸を眺めている紳一の裸像を赤いシ
ヤンデリヤが照し、すかしてみると、肌の縁
はほんのりと赤い。

この弱い少年は怪鳥のような叫び声とも、
うなりともつかぬ声を発すると、七転八倒の
苦しみをし出した。紳一の驚きは云うまでも
ない、彼はおろおろとして盛んに良輔の咽喉
につまつたものを出そうとするのだが、はや
窒息した良輔の顔はチアノーゼをしてきてい
る。この場合宿の者をたたき起し医者と呼ぶ
のが常識ある者の急務であつた。しかし紳一
の神経はひつくりかえり、彼の意識は常態で
なかつた。彼等は素裸である。それは良いと
して医者は何と説明するのか。紳一の脳裏を
ちらりとかすめたのは、彼の両親姉妹達や青
山の伯父等の良識ある顔であつた。良識!!
それが何だろう。所詮紳一は永く生きたとて
この良識の社会に容れられない身だ。申しひ
らきなんて馬鹿らしい。

「そうだ。良ちゃんと一緒に心中しよう。」

彼の血走つた目は部屋中をみわたした。
部屋の隅に古風なガスのバーナーがあつて
、コーヒを沸かすようになっていた。紳一
の手はバーナーをひねつた。彼は良輔の冷た
くなつた体をだきその顔に接吻した。涙が良

輔の頭にしたりおちた、遠くで省線の一
番電車のひびきがしていた。

ホテルが翌朝どんな大騒ぎになつたか云う

までもない、同性心中、ガス自殺、病身の従
弟に同情して、と新聞は書くだろう。プロ
ニヤの連中がびつくり仰天し、その噂は、有
ること無いことを放送するだろう。ただ解剖
した警察医にも肺に落ちぬ点が多少あつた。
二人とも素裸でナイフがあり、血がしたたつ
ている、何のために腕をお互に傷つけている
のか、しかも一方は中毒死でなく窒息死なの
だ。首をしめた跡もない。しかしこうした事
も青山の伯父や紳一の父親達の如才ない立ま
はりによつて新聞紙に出ることはなかつた。

千駄ヶ谷心中事件のうわさもおさまつた。

敦夫は相変わらず、プロニヤへ行つていた。
誰もあれ程ちやほやした神秘的な美青年紳一の
ことをもう忘れていたのか、話そうともしな
かつた。敦夫の心には一つの孔が出来たのだ
つた。紳一。それは敦夫にとつても忘れ得な
い人ではないのか。彼がどうして死ぬ気にな
つたのか、あの肉体の交りを軽んじた紳一な
ればこそ、プラトニックな心中なんてしたの
だろう。か。「そう云えば、あいつは新入生の
時から妙に淋しそうな奴だつた。」と敦夫は
一人物思いにふけるのだつた。鉢植のカンパ
ネーラの花が音もなく散つた。

(終)

恍惚境と法悦境

高 取 辰 治

性的感情と宗教的情緒とは、その根本に於いて異つてゐるのに拘らず、その性質及び形式上に於て多くの共通性を持つてゐる。即ち性的感情も宗教的情緒も共に愛の対象を有しこれに一身を捧げて熱烈の愛情を表することとは兩者共に同一である。

歐洲に於て男女両性間に於ける愛情をば地上の愛 *Irdische Liebe* と云い、神に対する愛を天上の愛 *Himmeliche Liebe* と称してゐるが、此のように二種の愛には共通性があるから、一方の愛が他方の愛を誘起し、或はこれに變形することのあるのも決して偶然でない。

元來世人は宗教を以て現世を超越した純形而上的のものゝように思惟し、また宗教家自

身も斯く信じてゐるが、然し私共の見る所を以てすれば、宗教信仰の根底には彼等宗教家の蔑視する性的情緒が存在し、しかもこれが基調となつて宗教信仰の動機となり、或はその信仰の度を強めることが案外に多いものである。

有名なる医學者にして且つ人生界の事情を精知せるテオドル・ビルロートは、全然純粹にして肉慾から離れた宗教的感情の存在することを否定して次のように云つてゐる。

「私自身の感ずる処に依れば、特殊の宗教的感覚があると云うが如き説は全く無意味である。世人の稱して特殊の宗教的感覚と云う処のものは、畢竟想像的妄想的の気分の外ならない。それは宗教の惑溺者に於て色情の興奮を來すことや、彼の回々教徒に於ける祈禱運動や、被鞭鞭宗徒に於ける飛びまわり等の如

きものを見ても判る。寺院が尼僧に対して花聲、僧侶に対して花嫁と称せられてゐるのもまた前記の事實を示証するものである……人間は自身の真像に摸してその神を作り、これに祈り、これを讚美する。しかし、所謂神なるものはたゞ人間の有する性質の抽象化されたもの、或は擬人化されたものであるから、人間も、神も、世界も、宗教もまた異つた処はない。蓋し人間は超自然的に何者をも考へること能わず、また何等非自然的のものを為すことも出来ない。何となれば人間はたゞ人間的の性質のみを以て考へ、且つ行動するを得るに過ぎないからである。

實に此の言の通りで、超世間的なる神も、その實は人間がその形体性質を尺度とし標準として、想像的に作つた擬人的所産物であるから、これを自己の愛の対象として、實際の

人間に対するように熱烈の愛を傾倒するのは、恰も現実の地上に生存する男女両性が、相互に愛慕して一身を犠牲に供するのと、その性質に於て根本的に異つた処は無い。されば宗教的及び性的情緒が相互に移行転化し、或は連想的に相結合して、容易にその一方を代償することの出来るのも、思えば異とするに足らない。

性的本能の慾望が他の方面の事項目的に振り向けられて、それに新しい興味を有するようになった無意識的の転向変形をば、フロイドは「昇華」と称したが、宗教の信仰にもまた性慾の昇華と認むべきものが少くないのである。これを古今東西の事実に徴するも、青春の身にして塵世を見限り、身を寺院に投じて僧となり尼となる者や、或は此のような世捨人にならずとも、破境の嘆の悲しさに、若しくは愛人の無情に失望するの余り、世を厭離して肉から靈に入るような者も世上その例に乏しくないが、併し彼等は果して徹底的に性慾から解脱した純潔の僧尼、或は教徒と看做すことが出来るであろうか。否、私共の見る処では、彼等は地上の愛を失つた代りに、天上の愛を欣求しているのである。生来の性的本能を宗教信仰の方面に転向せしめて、間

接にその本能を満足せしめているのである。現実には於ける愛人を失つた代償として、擬人的なるゴット、キリスト、仏陀等に愛着し、燃ゆるような情熱をこれに捧呈しているのである。熱烈な僧尼の神、仏陀等に対する態度と、恋に燃える俗人の情人に対する態度との相類似することは、實際上争われない事実である。

二

宗教的感情の強くして性慾の微弱なものは、その本能を全く宗教信仰の方面に転化昇華せしめることは決して困難でなく、その性感は天上の愛によつて補償せられ、敬虔の生活を送ることが出来るが、これに反して性慾の強く若しくは宗教的感情の發育弱きものは、その性慾を昇華することは甚だ不完全であり、或は不可能であつて、肉慾感と宗教感とは相互に移行し、とても純潔敬虔なる宗教的生活に到達し得られない。

フリードリッヒはこの様な実例を多く挙げたが、その中には次のような尼僧があつた。それはケヌアの聖カタリナという尼僧で、その宗教心は旺盛であり、その身持ちも嚴肅であるに拘わらず、胸裡には絶えず情火の燃

えていたがため、彼女は之を冷却せんとして故意に地上に横たわり、「愛して！ 愛して！」と叫んだ。そしてその際には教父に特別の愛着を感じるのが常であつた。或る日、彼女は自身の手紙を鼻に触れた処が、身に染み渡る許りの一種の匂いを感じた。彼女はそれを「天国の匂い」だと唱えて、之を吸うと死ぬような心地がすると云つた。

聖者に関する伝説に徴するに、その中には宗教的感情と肉慾的感情の結合したものが稀でない。殊に全く地上の愛を見棄てた尼僧に於ては、その愛人としてキリストに熱烈の愛情を抱き、しかも、その由を公言して憚らぬ者さえある。コーセイギルテンは聖ニアグネスに関する伝説の中に次のような説話を記述した。

彼女は美少年ルチウス・チーツスなる者に恋せられて、その胸の思いを打明かされた時、直ちにこれを拒絶して、美少年から送つた贈物の上に、天国にある愛人キリストの壮美を詠じた詩を書して送り返した。しかも、その詩に肉慾感を基調とした情熱に漲つたものであつた。

禁慾生活をなせる聖者善智識に於ても、その抑圧せる性慾は時として何等かの形の下に表現することがある。その実例として先ず第一に挙ぐべきものは、播磨書写山の性空上人は嘗て生身の普賢菩薩の姿を拝せんと欲し、七日間祈願をこめたが、満願の曉に至つて、その夢に「室の遊女の長者を拝め。これぞ実の普賢菩薩なるぞ」との天啓を得、直ちに室の遊廓に至つて「端嚴柔和の生身の普賢、白象に乗れる」遊女の長者に接し、随喜の涙を流さんばかりに喜んだと云う説話が「撰集抄」に記されてある。

また親鸞上人が肉食妻帯をなす前に當つて「吾れ玉女の身となりて犯されん」との仏告を得たと云うことは「御伝抄」に記する處で即ち六角堂の救世菩薩が、顔容端嚴なる聖僧の形を示し、広大なる白蓮華の上に端坐し、親鸞に生命して宜く

「行者宿報説ニ女犯、我成ニ玉女身ニ被レ犯、一生之間能レ莊嚴、臨終引導生ニ極樂ニ」

とあつて、観音菩薩が玉女となり、上人に犯されんとの夢の御告げであつた。此の伝説を以て果して一の事實であるとせば、上人の抑圧した或は潜在した性慾の宗教的表現と認むべきものである。

歐洲に於いてもこの実例が少く無い。過去世紀間に尼院に流行した「ヒステリー」に於いて、性的幻覺が主要なる關係を有したことは明白な事實であつた。尼僧の抑圧した性慾は、「淫魔」Incubusの幻覺を惹起し、悪魔が男性の形となつて現われ、自己を冒瀆することを幻感した。

ヒンクレルは或る尼が淫魔に苦しめられ、遂に牧師の助けによつてその危害を免れたという一例を記述したことがある。また女性の形態となつて現われる淫魔Incubusも、同じく聖者に幻覺されたことがある。聖ベネジクトはその誘惑に打克たんがために、裸体のまゝ薔薇園の荆棘中に身を投じた。

十七世紀時代の聖ニアンデスもまた性的幻覺に悩んだ一人である。彼女は勉めてその性的本能の衝動を抑圧して純潔なる生活を続けたが、併し夜間に至れば幻視幻聴を來し、誰か一人の男の忍び来るのを見たり、或は床の傍にその息を聞き、その声を聞いたたりした。時にはその幻に見える男が彼女の被つた床の蒲団を引きめくるところを感じた。彼女は終夜それに抵抗し、時には恐怖のあまり床から飛び出すことさえあつた。一夜その男は彼女の傍に來つて、自分の意に従わねばお前は世界

で最も不幸な女になるぞと云つて彼女を挑んだ。しかし、彼女は自分の身体は神に捧げてあるといつて、極力それに抵抗したこともあつた。また、或夜などは一種の恐怖に打たれて、終夜戸外の雪の上に立つて一夜を明かすようなこともあつた。しかし彼女は遂にキリストとの情交を想像することによつて、始めてその汚れた思想から免れ、純潔なる生活を維持することが出来たという。

聖ニテレーゼもまた屢々性交を象徴した不思議の幻覺を持つていた。彼女は一日容色端麗なる天使が黄金作りの長鎗を携え、これを以て彼女の胸を突き刺したり引き抜いたりして、苦痛と共に最上の快樂を与えることを感じた。

聖フランチカもまた天使と肉的に交ることを幻覺した。

僧尼が三昧即ち恍惚状態(エクスターゼ)に陥る場合に屢々性的感情が起り、その極度に於て神或はキリストとの情交を幻覺することは實際上掩うべからざる處で、宗教的「エクスターゼ」と性的「エクスターゼ」とはその間に密接な關係がある。所謂「法悦」なるものが如何にその感覺に於て性的快樂のそれに類同するかは、嘗て沼波瓊音氏が「俳味」

誌上に掲載された「法悦」の記事に徴しても明かである。その一節に

「マックス・ノルダウは三昧に入れる者は性交の際に起ると同じ快味をおぼえ、また肉体に同じ現象を起す由を記せり。(中略)余の知る僧某、語つて曰く、我は法悦を経験せり。肉悦も経験せり。我は法悦を肉悦より前に経験せり。さて後に始めて肉悦を経験するに及び、その感、その現象(体に起る)の全く法悦に同じきに驚き、慄然たりき。たゞその差とも云うべきは、法悦の方、肉悦の方より

りも時間遙かに長きことなり、法悦は誠は大悦喜なり。大歡喜なり、而してその心持は正しく愛なり」とある。

思うに禁慾生活をなせる僧尼の中には、所謂法悦に入つて肉慾の代償を得ている者も多かるう。性的感情と宗教的情熱とが、情の最も発動興奮し易き経路に於て、共通性を持つてゐることは既に前述した通りで、一方の情の燃える時には、また一方に於ても炎々として燃え上る。

熱烈に敬虔に神に奉仕している時、遺精す

る僧侶のあることや、礼拝中情熱に苦しむ婦人のあることはエリスの挙げた処である。

されば宗教心は必ずしも性的本能を制克するものに非ずして、却つてこれを昂めるような機会が多い。キリストに対する愛が恰も異性間に於ける愛の如きものであることは、これを聖者の自伝等に徴しても明かであり、また彼の殉教者が惨酷なる迫害に堪え忍び得られるのも、その根底に於て性的快樂の伴うに因ることの多いのは、私共の推測するに難からぬ処である。

【読者通信】

羽村京子さんへ

川端多奈子より

三月号の誌上でお呼びかけを頂きまして本当に嬉しく思いました是非お住所お知らせ下さいませ、

わたくしも京子お姉さまでしたらすぐお所お知らせいたしますわ、そしてきつとお伺いさせていたゞきます。わたくし内気で人に逢うのはの好かないんですけど、お姉さ

までしたら本当に親しみが持てゝどんな遠いところへでも飛んで参りますわ、わたくしへのお便り、直ぐ転送して頂くよう編集部へお願いしてありますの、多奈子、楽しみにしてお逢い出来る日をお待ちしております。

森山美歌様

貴女の書かれたロマンチックなサディズムと悩ましのサディズムを読んで私は思わず文中の三吉になつたような気持です。私は痴人

の愛の譲治の様に美しい女の人に責め虐められたいマゾヒストなので。美しい女の人達の嘲笑を聞いただけでも精神的にも肉体的にも妖しい心のとぎめきを感じるのです。どうか貴女の未発表の分もこれからどしどし発表して下さい。お待ちします。(五三九生)

松井鏡子さま

「淫火」はなんと素晴らしい小説でしょう。私は今までこんな心をゆ

すぶる迫力のある小説を読んだことがございません。小百合夫人が新世界へ行つたときは二回ともどうなることかとハラ／＼させられました。私は小百合夫人の様に美しくはありませんけれど、自分が夫人になつたつもりで空想しております。どうか夫人の筆みをかなくてやつて下さい。でも余りひどい責め方では恐いと思います。お手やわらかにお願いしますわ。

(赤城とめ)

キヤメラ愛好會

大東新聞の婦人記者、古川弘美が編集長に呼ばれて、なんだろうと思ひながら騒々しい編集部の机と机の間を通つて、編集長室のドアをノックした。

「はい」

何時もの元氣な荒つぽい編集長の声が聞えたので弘美はドアを開けた。

「まあ腰かけ給え。どうしたの此頃は嫌に暑いね。恋人でも出来たかな？」

「そんなにお上手おつしやつても月給日前だから駄目、なんにも出やしませんわよ」

弘美はきれいな白い歯を見せて微笑する。

「実はね、君にたのみたい仕事があるんだよやつて呉れる？特に女性でないとやりにくい仕事なんだ」

1

弘美は分りましたと言う表情でうなずいた。編集長は、ピースに火をつけて一寸真面目な顔になつて、

「君、女性カメラ愛好会つて言うの知つてるか？」

「いいえ、知りませんわ。でも近頃はキヤメラ熱が盛んですから、そんな会も方々に出来てるんじゃないですか？」

「うん、そうなんだ。僕も聞いた時はそうだと思つたんだ。けど話を聞いて居ると少々変な所があるのさ。その会の会則になつてゐるのが、その会員になれる女性は必ず未亡人に限るんだそうだ。ねえ一寸怪しいだろ？」

弘美はいたずらっぽく笑つて片目をつぶつて

岡田咲子

「まあ、そんな話だからお聞きになったの？未亡人の会なんかに興味を持つ編集長こそ怪しいぞー」

「なにを言うか。冗談言うなよ。だけど、未亡人だけに限られたキヤメラ愛好会なんてのは、どうも特種くさいにおいだと思うんだ。そう思わない？」

「そうね。いささか有りそうね」

「そうだろ。この話はその会にやとわれて行つたモデルから聞いたんだ」

「まあ、モデルを使つてゐるの？」

「そうなんだ。それも裸体専門のモデル組合には加入していないモデルを使うらしいんだ。そのモデルに聞いてもその後を聞き出してやろうと思うんだけれど要領を得ないんだ。だいぶつかませられてるんだよきつとー」

「でも私なんかノコノコ出かけて行つても上手くかぎ出せるか知ら？」

「そこなんだ。そのモデルが、素人のモデルを探して居ることをベロツとしやべつてしまつたのさ」

「その素人モデルに、この私になつて行く段取りになるつて訳ね。」

「嫌になつちまうなア」

「だけど当れば賞与倍額うたがいなしさ。それに相手は君たちと同じ女ばかりだ。どつちにころんだつてたいしたことは無いと思うんだだけだな」

と言つて弘美を見る。

弘美は腕を組んで考え込んでしまつた。

2

次の日の午後。弘美は見るからに貧相な洋装で、編集長に教えられたモデルの住んで居ると言う下町のうすきたない露路の中にある駄菓子屋の二階で、春子と言うそのモデルに会つて居た。

春子は弘美の姿を穴のあく程に、じろじろ見つめながら

「でもそんな良いスタイルして居るのに、どうしてモデルやめちやつたの？」

弘美はうなだれたまま

「病気の妹を養えるだけ、お金いただけないもんですから——」

春子はニヤリとして安心したと言う顔で

「そんなんだつたら大丈夫よ。私がたのんで上げるからウンともらつて上げてよ。だけど一寸辛いことがあつても、がまんするのよ。それからそこへ働らきに行つてると言うこと、ぜつたいに誰にも言つてはいけないわよ。いい？」

弘美は言われて内心おいでなすつたと思つたが、いじらしくなずいた。

しばらくして、春子は電話をかけて来ると言つて出て行つた。

やつと一人になれた弘美は、大きな息をして部屋の周囲を見廻した。ガランとした部屋の隅に置いて有る机の上のスクラップブックを見た弘美は、何故かそれを見ずにはいられないような氣持になつた。新聞記者の感がピンと第六感に働きかけたと言うのだろう。弘美は机の近くへ静かに、にじりよると人の足音に聞き耳をたてながら、それをめくつて見た。

とたんに、弘美はアツと声を上げかけたほどそのスクラップブック

クに、はつて有る写真は異様だった。
全裸体の女が椅子にグルグル縛りつけられている。口には猿ぐつ
わをはめられて――。

そしてその女は両足を片方ずつ椅子の足へ別々に縛られ、キヤメ
ラの正面へまともにむき出して居るのだ。

弘美は体から一度に血がなくなつてしまつた様に真青になつて、
スクラップをふせたのと

「見たわね」

と言う春子の声が聞えたのが同時だった。弘美はハツとして振
向いて、そこに立つて笑いながら自分を見上している春子の顔を見
てもしばらく返事も出来なかつた。

弘美は今さらながら後悔せずにはいられなかつた。編集長がうら
めしかつた。でも来てしまつた今、そして春子に

「私だつて始めは嫌だったわ。でもこんな位のことしなければ、良
いお金もらえやしないんだもの。パンパンするよりずっと良いわそ
うでしょ？」

と言われてしまうと今さら新聞記者だと名乗る訳にも行かず、逃
げだす訳にも行かなかつた。ただ成行きにまかすより外に術がなく
なつてしまつた弘美であつた。

「もう一寸待つてよ。今、自動車が迎えに来るから――」

言われてもうなずくより外に仕方がなかつた。ただ対手が同性ば
かりで有るというただけがたつた一ツの助けであると思ひながら
ほんやり靴下をはいて仕度する春子の姿を、弘美は見えて居た。

3

迎えに来た自動車は、新型の自家用車だった。冬の日の暗くなつ
た街を軽いエンジンの音をたてながら走る、弘美と春子をのせた自
動車は国道へ出た。

それまで春子は一言も口をきかなかつたが、弘美が国道へ出たこ
とを知つて、不安そうに春子の顔を見ると、春子は笑いながら、

「もうすぐよ」

言つて、ハンドバックから大きな男子用のハンカチーフを取出す
と、それを細長く折りたたみながら、

「始めての者は目かくしすることになつてゐるの。嫌だらうけれど
もしあとで、こんなこと位でお金をねぎられたりしても馬鹿々々し
いからしておくわよ」

有無を言わず弘美の目をそのハンカチーフでふたすると後ろで
固く結えつけてしまふと両手で弘美の体を抱くようにおさえて、

「心配しなくても良いわ。もうすぐよ」

と弘美の耳もとでささやいた。

弘美はもうとつとくに観念のはぞを決めてはいたが、先刻のスクラ
ップブックの写真の女の白い開らかれた内股が目かくしの下で閉じ
てゐる弘美の顔から何時まで消えなかつた。

自動車が停つたのはそれから三十分もたつた時だった。もちろん
弘美にはあの国道から後は全く何処を通り何処へ来たのか判らな
かつた。

春子に両手を持たれ、めくらのように歩いて、扉の開く音がして
靴が脱され、つめたい板の間の感じを足の裏に知ると、次はフワリ

としたじゆうたんをふんだことを気づいた時

「座つて——」

春子が後ろで言いながら、目かくしをほどこいて呉れた。弘美は椅子に腰かけてやつとなれた目であたりを見廻した。

そこは立派な洋風の応接間であつた。弘美はこの応接間から考えて相当の邸であると思つた。壁にかゝつた古風な時計がセコンドを刻んでいる音以外、人声もなにも聞えて来なかつた。

春子は、

「一寸待つてゐるのよ。すぐ来るからさわいだり大声を出したりしないでよ」

言つて出て行つたままだつた。

「一体、何処だろう。そして何が始まるんだろう？」

おちついて来ると、また弘美の胸に不安がモヤモヤと起つて来た。だがまた別に、

「きつとびつくりするような特種が待ちかまえて居るにちがいないな、こんなことでおどろくものか」

と言う氣持とがぐるぐる弘美の全身を駆けめぐつた。

4

しばらくして春子が、一人の女と一緒に入つて来た。その女は春子が弘美を紹介するの聞きながら頭を上げる弘美を見守つていたが、静かにソファに座ると、無表情のまま春子に

「では拝見しましょう」

春子はうなずいて弘美に

「貴女の体をごらんになりたいのだそうよ。さあ脱いで——」

命令するように言われても弘美には即座に、はい、とは言えなかつた。春子はモジモジして居る様子を見ると、立つて来て弘美を引張つて立上ると、後ろへ廻りブラウスのホックを嫌言わさずにはずし始めた。弘美は全身を固くして身をよじりながら、

「でも、此所で！」

春子は当然だと言つた顔で、

「そうよ。ここで脱ぐのよ。」

「でも……」

「でもつて？ 嫌？」

「でも……」

身を固くして居る弘美を見て居ると急に、その婦人が声を立てて笑いだした。そして、

「ふるえてるわね。傑作じゃあないの。皆さん今夜のモデルには大喜びよきつと——。春子さんには出来すぎたひろいものだわ。」

と言つて大笑いすると、

「ねえ春子さん、早くしてよ。皆さん用意して待つておいでになるんだから——。嫌がつても、もう駄目駄目。おとなしく脱いだ方が得よ痛い目しない間に——」

「ほら、お叱りうけない間に脱ぐのよ」

尙も脱がそうとする春子の手を払いよけながら、弘美は、

「嫌、変なことしないで下さい。なんと言ふ人たちの。余りじゃあないの」

弘美は遂に大声を出してしまつた。それは弘美自身で自分の化けの皮をはいたも同然だつたが、今の弘美にはそれを考えるよゆうをなくしていたし、考えられないのも当然のことだつた。

半分脱がされたブラウスの下から見える下着をかくすようにして机を楯に身構える弘美を見て女は、また大声で笑うと、

「ますます傑作だね」

笑いながらベルをおす。おしながら――

「今に判るわ。早く脱いでおけば良かったなアと思うことが」

急にドアが開いて、女中らしい女が二人入つて来た。女は二人に、弘美を指して、

「この人を早く用意させて――」

女中は無言でうなずくと、弘美の両方から近ずいて来る。弘美は大声で、

「なにをするの。私をどうしようと言うの」

さけんでもがいて逃げようとする弘美を、抱きかかえおさえつけると、じゆうたんのうへへお向けしておし倒し、一人の女中は弘美の両手を頭の上でおさえつけ、もう一人の女中は弘美の両足をおさえ、弘美が全く動けない様にしてしまうと、春子の手が弘美の体から一枚一枚脱がし始めた。

弘美は悲鳴を上げ、腰をくねらせ、首を振り額に汗をにじませてその暴力から逃がれようとした。でも全てが無駄だった。

大きく上下する豊満で引きしまった弘美の乳房。左右によじるあぶら切った腰、太腿。

弘美の全ての部分が明るい電灯の下にさらけ出されると、それまでだまつて見下していた婦人は女中と春子に、

「さあ、早く縛っておしまい」

と言つて麻縄をほうり出して、さつき弘美がして居た目かくしのハンカチーフを春子にながて、

「これで口も縛るんだよ」

全裸体にされ、両手両足を麻縄で固く縛られ、口へハンカチーフを、かけられた弘美は、もう寸分も、もがけも出来ぬ姿で抱き上げられると、再び椅子に座らされた。女はぐつたりとした弘美の姿に満足した様子で春子に、

「私、スタジオの用意をして来ますからね。その間に貴女からこの人に会のことをくわしく説明して上げると良いわ」

と言つて意味ありげな微笑を、弘美になげかけると女中たちを従えて部屋を出て行つた。応接間はまた元の静かさを取戻した。

全裸体で縛られたまま、椅子に座られ声も出せずにうなだれて居る弘美の、なやましい姿にうつとりと見とれていた春子が、自分の椅子を引よせながら弘美のそばへ近ずいて、静かにうなだれた顔を上向かせて、

「可愛想だけどがまんするのよ。どうせ朝になれば会も終るし、帰らせても呉れるんだから、嫌なこと言われても、がまんして言うなりになつておく方が利口よ。この会の会員はお金持ちの未亡人たちが道楽の末に考え出したものなのよ。最初は普通のモード写真を男の真似して撮っていたんですつて――。所がその中に会員でサジストの女がモデルを縛つて撮影したつて訳よ。それが次第に面白くなつてモデルを縛つて写すのは二の次になり、モデルを色々な形に縛ることの方が皆の目的になつてしまつたのよ。だから貴女のような素人のような人を引張つて来ては楽しんで居る変つた会なの。その代り、普通のモデルなんかでは想像も出来ない謝礼金を呉れるんだし、せいぜいこつちも気分を出して縛られてやれば良いのよ。痛くなくても痛そうな顔で、さも苦しげなポーズをしていれば相手は満



足するんだから考えれば割に良い商売よ。でも言うポーズを素直にしてやらないと、本気になつて責めたり苦しめたりするから、そこを上手くおやりなさい。まあ嫌な人！ ふるえてるの？。大丈夫よ貴女ほど美しい体してれば、体を見るだけでシャツターを切つてしまうわ」

【春子はそう言つて笑う。

弘美は、固くはめられた猿ぐつわで息も苦しく、体を一寸うごかしても肌にくい込む縄の痛さに顔をしかめた。

5

しばらくして以前の女が入つて来て、

「さあ用意は出来たし、春子さん、足だけほどもいてそのままスタジオの方へ連れて来てよ」

春子は言われた通り弘美の両足の縄をほどくと、

「さあ、立つて」

両手を後手に縛られ猿ぐつわのまま弘美を椅子から立上らせると甘美の縄尻りを持つて軽く背中をおして歩かせる。

縛られしびれていた両足に力が入らず、弘美はフラフラと倒れそ

うになり、その度に後手に縛られた縄を引張られながら、弘美は応接間を連れ出された。

廊下を通り、階段を降り一目で地下室だと分るコンクリートの石段を素足のまま、降ろされた弘美は、その突き当りのドアを開き、その中

へ一足ふみ入れた瞬間、

「ア！」

とその場へ棒立ちになつてしまつた。

そこは地下室とは思えない程立派な部屋であつた。

いや部屋ではない、完全なスタジオなのだ。天井にはスポットライトがずらりと列んで居る。

部屋の隅は、劇場の舞台裏の様だ。机、椅子、ベッド、ソファ、目でそれと判る十字架や、木馬や、色々の型に組合された柵の様なもの、雑然と置かれ、細い鎖、太い鎖、太い麻のロープや細い荷作り用の細引き、などがずらりとならべられて居る。

中央は低い舞台の様に円型に一段高くなり、その周囲を、この会の会員なのであろうか、二十名ばかりの洋装、和服、とり交ぜた婦人連中が、首から色とりどりのキヤメラを下げて座つて居る。

扉の開く音にその目が一斉に弘美の方を注視した。

弘美を連れて来た女は会の司会者でも有るらしく、その円型の舞台の上にのぼると周囲から盛んな拍手がおこる。女は微笑して、「どうも皆さま、お待ち遠うさまでした。唯今から始めることに致しましょう。今夜は、お陰さまで今までに参りましたどのモデルよりも美しい肉体の持主が来て呉れましたので、必ず皆さまに御満足願えると信じて居ります。ではモデルを皆さまに御紹介しましょう。」

と言つて春子に合図する。春子は謙がる弘美を引ずるように舞台へおし上げる。

弘美は恥かしくその場に立つて居られない気持だつた。むせかえ

るような香水のにおいと煙草の煙りに、弘美は意識さえぼやけて来る様で、何も考えられず、唯だ恥かしさだけが先に立ち、腰をかため太腿も固く閉じ頭を下げたまま、やつと春子が持つ縄尻につり下つた様な姿で立つて居た。

その場の光景は、映画や絵画で良く見るエジプトかアラビヤの物語によく出て来る奴隷市場の雰囲気と思わせる情景であつた。

女は固くなりふるえている弘美の体を静かに一回転させながら「如何がですか？この豊かに盛上つた乳房。このつやつやとしたなめらかな肌。このあららの乗切つた腿。すんなりとした足。皆様、お気に召しましたでしょうか？では今夜は特別番組として、その右端の方から順番にお好きなポーズをお報せ下さい。出来るだけ今までになかつた奇ばつたポーズをお考えになりました方には、撮影終了後、朝までこのモデルの体を提供致したいと思います。では皆さま、ごゆつくりお楽しみ下さい」

拍手が地下室にひびきわたる。

両側から乳房と腰だけを布でまとつた女が二人出て来て、春子と交代して弘美の縄尻を持つて立つ。

天井のスポットライトが何台も弘美の体を照射する。ライトに照らされた弘美の姿はおうばかりの無惨ななまめかしさを発散させている。司会者の女は右端の女に、

「NO1のポーズは？」

と問いかける。問われたローライフレックスを胸に下げた中年の洋装の女は、

「柱に立つたまま、縛りつけられたポーズが良いわ。その立派な乳房に、くい込む縄のみりよくは、また格別だと思ふわ」

「かしこまりました。では用意——」

司会者の女が合図すると円い太い柱の様なものが舞台の上にすえられる。

弘美の体から今までの縄がほどかれると、助手の女二人は弘美をその柱の前に立たせて嫌がる弘美の両腕を柱の後ろへまわすと、細いロープで弘美の両手首を固くいましめると、別のロープを取って弘美の乳房の上へかけると、乳房がくい込み、ひょうたんのようにくびれるまで強く二重三重に縄をかけてぐつと柱に縛りつける。

その痛さに弘美は猿ぐつわの下に呻き声を上げた。

パチリ、パチリ、もがく弘美の裸体に一斉にシャッターが切られる。

「如何です？ さぞ傑作が写せたことでしょう。ではNO2の方は？」

言われたライカを下げて眼鏡をかけた女はややこうふんした調子で、

「そうね。でも私はもう少し苦しんだポーズをつけてほしいわ。どう？両手を縛って天井から吊り下げちゃあ——」

天井に滑車の音がして太いロープが一本たれ下つて来た。

弘美の両腕はそれで上へ吊り上げられると、徐々に弘美の体は上へ吊り上げられ、辛うじてつまさきが床にとどいて居るまでにされると弘美は、腕の痛みに悲鳴を上げ、腰をよじりつまさきに全身の力を集めて、その痛さに堪えようと努力した。

「こんな馬鹿なことが、こんな馬鹿々々しい狂人の様な会があつてたまるものか。あゝ痛い。腕が胴からぬけてしまいそうだ。あゝ。私はこんなこと出しているとこの連中に責め殺されてしまう。あゝ

苦しい。だれか助けて！ だれか助けて！

弘美は苦しげに体をくねらせながら心の中で、猿ぐつわで声にならないと知りながらさけびつづけた。

その撮影が終つて、弘美の体はどさりと台の上に降ろされると、体はじーんとしびれてそのまま動けなくなつてしまった。両側の助手の女が近よつて来て左右から弘美の腕を持つて無理に舞台へ立上らせ、前へたれ下つた頭をつかんで上向かせて、ことさら全部に苦しげに息づく弘美の体を見せながら次のポーズを持つて居る。

「だいぶ弱つた様ね。一寸水をあびせてやつては如何？ このきれいな裸体がビツシヨリぬれている所は素晴らしいわよ。私はそのぬれたまま十字架にかけられたポーズをお願いしてよ。」

そうNO3の女が言うのと、十字架、それも大の字になるように作られたものを立てると、助手は弘美を、そこへ引づつて行き、まず両手を大の字に開けて鎖で縛り上げる。

弘美も次の瞬間には自分がどんな姿にされるか良く判つてゐる。もう恥も外分もなかつた。両手首は鎖で縛られてしまつたけれど、両方の足はまだ自由なのだ。弘美は全身を両足に集めて、片方の鎖を持つて弘美の股を大きく開ろげようとして近ずいた女を力一杯けりつけた。

不意に、けられた女は二三回ころがつて舞台の下へドスンとおちた。もう一方の女も、あわてて弘美の足をおさえようとする所を、弘美の美しい白い足の裏が女の鼻柱を強くけりつけた。

女は低くさけんで鼻をおさえたまま、その場へうずくまつてしまふ、鼻をおさえた両掌の指の間から鼻血が吹き出して流れおちた。司会者の女が逆上した様に台上へかけ上つて来る。

周囲からキヤメラを持った洋装和服とりどりの女たちが、ワイワイ言いながら走り上つて来ると、あばれる弘美の腰に太腿に足首にそれがまた特別の余興でもあるかの様に、しがみつくと、もがく弘美の両股を無理矢理に大きく開ろげて縛りつけようとする。

何時かあばれる弘美の口から猿ぐつわがずりおちて、弘美は目を血走しらせ顔を引きつらせ、

「嫌、嫌よ。放してー お放しつたら！ あ！ 嫌！ 助けて！ だれか来て！ だれか来てエ！」

懸命にさけびつづけたが、次第に弘美の、美しい肥つたつやつやと輝くような太腿は左右に大きく開ろげられ遂に、力もつきはてた両足首を左右別々に鎖でガンジガラメに固く縛り上げられてしまつた。

自由をうばわれた弘美の額からはボタリボタリ玉のような汗が、せわしく上下する乳房の上におちて流れた。

一瞬周囲の人々はおたずをのんで、弘美の桃色に上気した肌。むせるような体臭に酔つてしまつた如く、ぼんやりと十字架にかけられた弘美を見上げて居た。女たちの中の一人が不意に感にたえないと言つた声で、

「まつたく素適。今までにこんな見事な肉体とポーズを見たことがない」

その声に夢からさめてやつと我に返つた如く口々に賞讃の声を、弘美の体にあびせかけた。

皆がそろそろ台を降りると、司会者の女はまず、ずり下つた弘美の口の猿ぐつわをほどくと再び固く猿ぐつわをかけなおすと、皆の方を向いて、

「皆さま如何がですか。特別番組が入りまして皆さまぞ御満足であつたことと思います。ここで一ツ司会者として提案がございますが、今夜は一ツ特別番組の続きとして、このはりつけになつて居ります者をあばれ、さわいだ科で皆さまの一人一人のお好みに応じた罰を加えてやつたら如何がかと存する次第で御座います。例えば――」

と言いながら女は弘美のそばへ近ずくとその太腿を手でさすりながら、

「このにくい様な太腿をこのようにグツとつねり上げたり――」

弘美は、その痛さに猿ぐつわの下で悲鳴を上げ不自由な腰をくねらせる。女はニヤリと笑いながら、

「または、このやわらかな足の裏を、こうくすぐつてやつたり――」弘美は縛られた足の指を、ちじめたりそらしたりしてがまんしようとする。

女は自分のして居ることに酔つたような上わづつた声で、

「または、ここを、こうやつて引張つたり、いじりまわしたり、ほれほれこのように――」

弘美はなにを、どのようなことをされているのか両股の間の痛みでよく判つた。遂に最後の責めの手がやつて来たのだ。

弘美は呻きもがき悲鳴を上げながら次第に意識を失い始めて居た司会者の声が次第に遠くなつて行く。

たくさんの方たちの笑聲が大きくなりまた遠く消えて行く。

そして編集長の顔が、春子の顔が、司会者の女の顔がぐるぐるまわり始める。

鼻血をおさえた女の顔が、春子の家のスクラップブックの椅子に

縛りつけられた女になり、その女が最後には弘美の顔になったかと思ふと、そのまま、弘美は深い深い穴の中へ急速におちて行くように意識を失つてしまった。

6

自動車はまだ暗い夜明けの国道を走っている、車の中には、目かくしをされ猿ぐつわを固くはめられ、その上両腕まで後ろへ廻して縛られている弘美が来た時と同様、春子につきそわれて乗つて居る春子はグツタリして居る弘美の体をびつたり抱き寄せて、耳もとへ口を当てて、

「如何？まだ苦しい？。でも札金も入ったんだし、二度と貴女さえ行こうと思わなければあの人たちと永久に会わずに済むんだし、まあ良いとしなけりやあ——。貴女が責められながら、うわごとに編集長つて名をよびつづけた時には一寸おどろいたわ。一人で探訪に来た勇氣には、皆んなますます、みりよくを感じたらしいのよ。お陰で私もあの人たちも引越ししなければならなくなつちまつたのよだからもう再び貴女にもお会い出来ないわ。でも最後の忠告に言うけれど、あの人たちはあの人たちだけで、静かに秘かに遊ばせておきなさいね」

自動車が停る。

「着いたわ。さあ苦しかったでしょ。でも猿ぐつわと両手両足はすぐほどく訳には行かないの。ここ貴女の新聞社の前よ。もうすぐ夜が明けるから、だれにでも助けてもらえるわ。私が降ろして石段へ座らせておいて上げるから、しばらくそのままじつとがまんしてよ」

春子は弘美を抱き上げると、自動車を降りて石段に腰かけさせ、「さよなら」

と言ひ残して車に乗る。

自動車は軽いエンジンの音をひびかせて朝もやの町を走り去つて行つた。

弘美は猿ぐつわに後手の姿のまま、ぼんやり車の去つて行つた朝もやの彼方をぼんやりとながめて居た。

7

その朝、夜警の者に弘美は助けられた。

その日の午後に警察は、下町の駄菓子屋の二階へ手入れをしたがもう春子は帰つて来なかつたし、机の上に、忘れられたように置いて有るスクラップブックだけが、唯一の手がかりとなつたけれど、なんの役にも立たないものであることは弘美自身には良く分つて居た。

数日後の夕刊には、弘美の探訪記事が、三段ぬきで「謎のキヤメラ愛好会」と大きな見出しで出たことはもちろん有るし、そしてまた弘美が特別賞与をもらつたことも、探訪の謝礼金として、あのモデルの春子が渡して呉れた封筒の中に、新品の素晴らしい洋服が四五着出来るだけのお金が入つて居たのも事実だし、弘美が再度探訪記者を志願しなくなつたことも本当であつた。

(おわり)

支配者と被支配者 波多野 新

苦痛を快樂として感受するという人間心理の注目すべき能力が、社会生活の形成に非常に重大な役目を演じているということは疑いもない事實である。この事實はこれ迄も注意

出来ない。もしそうなれば何故圧迫されているものが全部、一人の人間のように立つて反抗しないか？

されないうちでは無いが、幾分誤まつた解釈を下されていたのである。一つの社会的階級をその精神的隷屬の境遇から引き離そうと努力する指揮者達は常に所謂君主性的性質を持つた人々である。彼等にとつては指揮されるよりは指揮した方が氣持がよい。今迄の權力者を押し倒した者がこんどはあべこべに僭位者となつて前よりも一層堪え難い圧制を行つたという事實は歴史の中に屢々繰返されている。「自由」への指導者もある瞬間に達すれば必ず暴君の臭いを発揮する。

即ち経済的契機に或る心理的契機が附け加えられなければならない。それには生れつきの或る特別な素質がなければならぬ。或る者には権力感情が快感を与え、或る者には苦痛と服従が快樂を与える。

さうで誤まつた解釈が起つて来る。彼等は自分達にとつて、空虚な胃が食物充満の觀念に依つて刺激されるから、他人もまたそうであらうと推察する。また一方では自分達が、誰にも押さえられない、勇ましい、冒險的な支配慾に依つて刺激されるから、他人もまたそうだらうと思う。

私は人間社会に於ける永遠の支配者と被支配者の階級別が單にこの心理的契機だけから説明され尽すとは考えない。私はたゞこの見方が常に無視され過ぎてしていると主張するのである。

さて、何がこういう指揮者を生み出すのであらう。経済的關係の強制が生み出すことは

私が次に示そうとする事は、政治的マゾヒズム（もしこういう造語が許されるならば）がその現われる形に於いて性慾的マゾヒズムと殆んど全く同じだということである。

酋長とか国王とかいうものは必ず彼等と同程度のものに依つて倒される。即ち、心理的に彼等に匹敵するものに依つて滅される。近代のキリスト教国の君主は好んで「神の恩恵によつて」と称する。そして反対者はそのために非常に都合の悪い位置に置かれる。この言葉は純粹に僧侶的の謙讓の言葉であつて、四三一年にエフエズスの宗教會議に於て発見され、それ以後あらゆる僧侶の手紙のおしまいに書かれるようになった。昔の法王達

はもう一つのマゾヒスティックな言葉をそれに付け加えていた。即ち *Servus Servorum* (下僕のうち最も卑しきもの。)

君主はその人民のマゾヒズムが望む所に従つてその態度を決する。シュルツ氏はその歴史に関する著書の中で次のように云つてゐる。「君主がその権力を増大せしめる方法は勿論千差万別である。最も好んで用いられる方法は惨酷な暴政である。各瞬間毎に死を以つて脅かし、かくて人民の心を常に恐怖で一杯にし、最後には狂的な暴政に迄堪えさせる。こういう方法をとつて代表的なものはフイジイの二人の酋長である。一人の酋長は人民の身体から肉を一片切り取つた。もう一人の酋長は自分の妻に薪を集め籠を築かせた上、人民達を火の中へ投げ込んで焚殺した。二人共、自分の名が有名になり、人々から恐れられるようにするためにこんなことをしたのである。アフリカの酋長達もたとえこれ程惨酷でなくとも随分近い所まで来ることが多い。そしてこういう標柱の思い出の方が、善い君主の思い出よりも遙かに深く後に残るといふことは人類にとつて誠に悲しむべき徴候である。善良さを弱さと、惨酷さとを取り違えるといふことは人間の古来の弱点である。」

未開人の人類学的研究に於いて我々は被支配者のマゾヒズムの最も粗野な形を発見するその前に出ては最も惨酷な拷問室もまるで子供の遊戯に過ぎない。

スベケの報導している所に依ればウガンダの王ムテザは勝手に自分の後宮の女達の胸中に槍を突き通しては楽しんだという。或るアフリカの酋長は好きな時に自分の家来達を呼び集め、自分は鎌の形をした刀を手にして彼等の中に躍り込み、手当り次第に首を刎ねて楽しんだ。そのために彼の名声は愈々あがつたという。

マゾヒズムは性慾の他の根本的要素と同じく「一般的」であり、「人間的」である。

ロシアの或る一年志願兵が書いたものに依ると、彼の連隊の新兵達は自分達を各瞬間毎にこつびどく張り倒す士官達だけを、「敏腕だ」と歎称するそうである。

ダイクトル・ヘーンはその日記帳の中に書いてゐる。

「我々はロシアで何を発見するか？ 一つの民族……その中では打撃、虐待、鞭打、頸や顔の真中への拳骨の一般的習慣が何世紀以來も育てられた民族、反抗なしの屈従をアジア的な勇気を以つて断行する民族、命令と服従の

中にいることを自分達の生れつきの要素の中にいるのだと感じている民族、強制と鞭でもつてあらゆることをさせることの出来る民族支配者とドイツ式の教練係りの軍曹のために出来ている驚くべき無性格的な群衆。」

ロシアは文明に遅れているというのか？

予備士官であり、幾分スケプチックなドイツの或る出版屋が話したことがあつた。

「全く、こいつだけはどうすることも出来ません。司令官閣下が戦線巡視のために静々と馬をうたせて来ると一種の戦慄がゾーツと私達を襲うんです」

全体この畏敬の念の現われに心理的にどんな區別があるというのか？ たゞ文明が進むにつれてそれに対する感受性が高まるというだけのことではないか。アフリカ人では首をちよん切らなければならぬのがロシア人では横面を張れば済む。そしてドイツ人はたゞ通るのを見るだけで充分なのである。

嘗てハイネはその「ルツカの町」の中で云つた。

「イタリア人は、他の或るヨーロッパ人でもそうであるが、命令するときはドイツ語を使う。我々ドイツ人が何かそれに責任を持つてゐるのであるか？ 命令の言葉がドイツ語

になる程我々ドイツ人は命令する国民なのであるうか？ それともあんまり命令されるので、被支配者は一般に一番ドイツ語を理解するようになつたのであるうか？」

或る支配者の行為を判断する際にはそれが被支配者の政治的マゾヒズムから起つてゐるのではないかと問うて見なければならぬ。

たとえその家族が三百二十五の城と二万人の使用人を持つてゐるロシアの皇帝が、一人の新兵がモスコウの観兵式のとくに行列を離れて皇帝の前に膝まずいて何か請願したゝめにシベリヤでの終身懲役を宣告してもそれはロシアの服従的な国民性にはよく適している。



第一図

号を絶えず口の中で呟き続ける。ヒンドウは右手を胸に置き、次に地面に触れ、最後に額に持つて行く。そしてその間中自分のことを「卑しい奴隷」と呼ぶ。ロシア人は主人の膝を抱いて接吻する。ポーランド人は地面に身を投げる。ボヘミア人は主人の着物の裾に接吻する。チベット人は膝まずいて舌を突き出す。オースタリイ人は「Servus! (奴隷)」と云いドイツ人は「The Diener! (あなたの下僕)」という。

膝をちよつとかぐめるのは膝まずくの略したものであり、お辞儀をするのは身を投げるのを現わしている。帽子を取ることは同時に赤裸々な服従のしるしである。軍隊の拳手の礼はその帽子を取るのがもう一段略されたものである。

挨拶をするということは非常に神聖なことに見做されているので、しまいには相手を見ることがすら失礼になる。それでケーブ

コロニーでネグロが白人に挨拶する時には顔を何かで覆うか、地面に向けるか、後向になるかする。

その境遇の關係上非常にデモクテイツクであるエスキモー人も或る挨拶の儀式を持つてゐる。そしてその挨拶の結果どつちが目上かがきまるのである。ボアの記す所に依れば、「よその人が村にやつて来ると盛大な歡迎のお祭りが行われる。村の住人達は一列に並び一人の男がその列の前に控えている。よそから来た人は腕を組み、首を右に傾けて静々と近づく。すると列の前で待ち受けていた男が力限りそのよその人の右の頬をひつばたく。そして今度は自分がひつばたかれるために首を右にまげる。その間他の住人たちは踊を踊り、歌をうたい初める。二人はどつちか片方が氣絶する迄代りばんこになぐり続ける。この挨拶は勝つた方が相手を殺す権利を得ることになるので時として危険であるが大概の場合には平和に終る」

プロシヤの宗教裁判所の裁判官が或る僧侶の犯罪の取調べのため種々な身分の証人を召喚した。その召喚の文句の階段はまことに模範的で驚嘆に値するものであつた。

下役人Xに。

アビシニヤ人は膝まずいて地面に接吻する。日本人は草履を脱いで右手を左の袖に入れ、胸を静かに下にすべらし、恭々しい足取で進み寄つて云う。「御免下さいまし」セイロン島では地面の上に倒れてその長上の名前と称

私はあなたを証人に指命する。X日X時にこれ／＼の所に出頭しなさい。缺席すれば三十マルクの罰金に処する。

会計係Yに。

私はあなたを証人に指命しなければならぬ。どうかX日X時に私の事務所に出頭して頂きたい。あなたは自分の陳述を文章に書いて持つて来てもよろしい。

郡長フォン・Aに。

私はあなたを証人に指命することを委任されました。あなたに御都合のよい時間をきめては頂けますまいか。私としてはX時間に私の事務所においてを願ったのが一番好都合です。あなたの時間をあまり長く取らせないためにあなたの陳述を文書にしてお持ち下さつても結構です。

総理大臣フォン・Sに。

私は閣下を証人として指命することを委任致されました。あなたをポツダムのお住居にお訪ねしてもよい時間をおきめ頂くわけには参りますまいか。
アッサシン。

我々は今や、臣下の政治的マゾヒズムを確かなものにするために支配者が利用する権力獲得手段の歴史的な例をあげる段取りとなつ

た。もちろんこういう例は非常に数多い。しかし単なる経済的の圧迫や肉体的の強制はこれの際加えてはならない。それは心理的な手段でなければならぬ。私はこゝに東洋の歴史から一つの例を引こう。これは暗示や催眠術が係わつていないから一層よく当て嵌まる。その仲間のものは自らをファイダーウィと呼ぶ。ファイダーウィとは「犠牲的なものたち」という意味である。その頭領はシャイヒ・ウル・ヂバルと呼ばれる。「山の老人」の意である。アッサシン達は殆んど二百年もの間恐るべき生命知らずな戦いを続け、向う見ずな争いをして来たので、フランス人たちは危険な殺人者を *assassins* と呼んでいる。

アッサシンは一人一人が主人の手の中の「意志のない奴隷」の典型である。彼等は主人が意欲せる所のことを信じられない程の異常なエネルギーを以つて意欲するのである。そしてこのエネルギーたるや眼前自分の生命を墮とさなければならぬ時でも決して萎縮しないのである。こういう心理的狀態は一体どこから来たのであろうか？

「ハキムの回想録」という歴史的小説の中でハムメルはシリアのアッサシンの根拠地であるマツシヤトの庭に就いての次のような記述

を発見した。

「我々の物語は今やイスマイル人の君主イスマイルとその人民等をよろこばすために集まつていた。彼等は彼に美しい衣物を捧げ、マツシヤトの城をあらゆる華麗なもので飾りたてた。イスマイルは以前にもまた以後にもマツシヤトの城で行われたことのないような盛んな有様でその家来を引きつれて城に乗り込んだ。彼は腹心の家来を探し出すために暫くそこにとどまつた。その目的のために彼は大きな庭を作らせ、水を引かせた。その庭の真中に彼は四階建の涼亭を建て、その四面には金銀の星をちりばめた立派な窓を一つずつ開けた。

この涼亭の中には薔薇や陶器やガラスや金銀の盃や置き、ナイルの地方からつれて来たやつと大人になりかゝりの男奴隷十人、女奴隷十人を入れた。彼は彼等を最も華麗な絹でよそおわせ、金銀の腕輪を嵌めさせた。柱には麝香や琥珀が嵌めこんであつた。そして四つの窓の穹窿に四つの小箱を置き、その中には最も純粋な麝香が入れてあつた。柱は磨き立てられてあつた。そしてこゝに前述の奴隷達が住んでいた。

庭は四つの部分に分かれていた。第一の区

域には梨の樹や林檎の樹や葡萄の樹や桜の樹や桑の樹や梅の樹などが植えつけてあつた。第二の区域にはオレンジ、レモン、オリーブ、ざくろなど、第三の区域には胡瓜、メロン、その他の野菜類、第四の区域には薔薇、ジャスミン、水仙、菫、百合、アネモネなどの草花があつた。庭は水の流れてしきられ、涼亭は池で囲まれていた。

この島には小さな森があり、その中には羚羊、駝鳥、猿、牛などがさまよつていた。池の外には鴨、鶯鳥、犬、鶏、兎、狐などがいた。涼亭を囲んで高い並樹を植え、そこに上と下と二つの部屋のある大きな家を建てた。この家から秘密の道が庭の外へ通じていた。庭全体は高い壁で囲まれていて外からは見えないようになつていた。更にこの家と涼亭をつなぐ廊下があつた。この大きな家は男達の集会所であつた。

イスマイルは戸に向いあつたソファの上に坐り、男共を床に坐らせて一日中飲んだり食べたりさせた。夜になると彼は男共の中からしつかりしたのを一人選び出して「おい、こゝへ来て坐れ！」と云つて自分のソファの上に坐らせて酒をすゝめた。酒の中に入れて置いた麻醉薬が効果を現わす迄十五分程の間、

イマム・アリの量も質も並び優れた財産や、彼の勇氣や高潔な心やに就いて話してきかせた。やがてその男が眠りに陥つて死んだやうになつて倒れるとイスマイルは彼をかついでその部屋を出て廊下を通つて涼亭に運び込んで奴隷達の手に引き渡した。彼が正気に帰ると若者達や少女達は彼に云つた。

「私達はあなたが死ぬのを今か今かと待つて居るのです。何故と云えばこゝはあなたの来る所ときまつていたからです。こゝの極楽の中の涼亭で私達は天使です。あなたは死にさえすれば永久にこゝに私達と一緒にいられます。今はあなたはただ眠つて居るだけでじきに眼がさめまします。」

見廻すと何とも云えない程美しい少年少女が自分の前に居る。空気は麝香のにおいで一杯だし、外を見れば川が流れ獸が遊び鳥が飛んでいる。こうして二時間程というものの夢現のうちに過して行くとひよつこり彼の前にイスマイルが出てくる。「おゝイスマイル様。私は夢を見ているので



第二回

ございましょうか？それとも醒めて居るのでございましょうか？」

とその男が云うとイスマイルは答える。

「この場所のことを決して他人にしやべつてはならぬ。これはアリがお前の死後來るべき極楽の場所をお前にちよつと

見せて下さつたのだ。されば以後決してイマムに仕えることを怠つてはならぬぞ。お前にはこういう褒美が定めてあるのだ！」

そこでイスマイルは晩餐の用意をしろと命じる。あらゆる珍味佳肴が金銀の器に盛つて運ばれて来る。やがて再び麻醉薬のはいつた酒を飲ませて元の道を運んで来て眼の醒めるのを待つ。正気に帰るとその男は

「神のはかに神はない。そし

てマホメットは神の予言者だ！」

と叫んでイスマイルに近寄つて有頂天になつて居る。するとイスマイルは云う。

「お前の見たことは夢ではなくて、イマム・アリの奇蹟である。もしお前がこの奇蹟の秘

密を守ればお前は見た通りの幸福を得られるだ。がもし人にしやべつたらお前はイマムの腹を招く。お前は今やイマムの手足となつたイマムのために死ねばお前は殉教者になれるのだ。」こうしてイスマイルは忠実無比な臣下をたくわえ、遂に並ぶものなき強大な君主となつたのである。

以上の物語は十三世紀の後半に二十四年間ヴェネディヒを去つて東洋に旅していたマルコポーロに依つて確証された。彼はムラヒツドという一つの民族とその酋長「山の老人」に就いて次のように語っている。

「高い二つの山の間の美しい谷に彼は一つの美しい庭を作つた。その庭は貴い果樹や香のいゝ灌木で満たされていた。庭のあちこちに金具や絵や絹帳の家具で飾られた大きさも形も種々の宮殿が建つていた。これらの建物に囲まれて小さな流れがあり、酒や乳や蜜や清い水などが種々の方向に流れていた。この宮殿には美しい少女達が住んでいた彼女等はあらゆる種類の音楽や踊に通じ、その上ある種の恋の誘惑のすべに長じていた。何故酋長がこんなに魔法のような極楽を作つたかという

とそれには次のようなわけがある。

は美しいニムフ達の群れ遊んでいる感覚的な極楽を約束した。そこで酋長は自分の家来に自分もまたその寵人のために極楽の快楽を具えてやる事が出来、従つてモハメットと同じように予言者であると信じさせようとしたのである。彼の許しなしには誰もこの華麗な谷へ踏み込むことが出来ないように、彼は大きな堅固な城をその入口に立て、その内を秘密にした。彼は附近の山に住んでいる十二才乃至二十才の若者の中から特に好戦的性質と勇氣を持つてゐる者を沢山に選び出して自分の宮廷に留めて置いた。そして毎日彼等と予言者モハメットの極楽や自分自身の極楽のことを話し合い、或る時間になるとその若者のうち十人乃至十二人に催眠剤を飲ませ、彼等が半ば死んだようになると例の庭の宮殿の別々の部屋につれて行く。眼が醒めると彼等の感覚は筆紙に尽し難い程微妙な対象を感じる。愛らしい少女に取巻かれてその歌を聞き踊るを見、嬌態に誘惑され、珍奇な食物や撰りに撰つた酒をすゝめられたりするうちに、あまりの快楽に酔いしれ、本当の乳や酒の川を見てゐるうちに、実際に極楽に居るものと思ひ込んでしまふ。こうして四五日たつと彼等はまた催眠剤を飲まされて運び出される。そ

こで皆の前で、何処に今迄いたかときかれると彼等は答える。陛下のお情けによつて極楽におりました。そして彼等は美望の念に満ち充ちて聞耳をたてゝいる皆の前でその極楽の有様を物語る。そこで酋長は皆に向つて云う「我々は今や、主君を守るものは極楽を得べし」という予言者の言葉の確証を得た。もしお前達が私の命令に服従すれば、お前達もまたこの幸運が与えられるであらう。」この言葉で熱情をおおられて彼等はみな主君の命令を守つて生命をも平気で投げ出すことを最大の幸福と思うようになるのである。」

神聖なエクスタクシ

紙面の都合でこれ以上アツサシンのマゾヒズムの制度に就て述べる事が出来ないのは非常に残念である。

私はここにそれに似て一層性慾的色彩に富んだ例を掲げよう。尤も関係者はそこには何等「神聖ならざる」考えなどまじつていないと主張しているがそれは言葉の遊戲に過ぎない。女を崇拜する男、にとつてはその「女王人」はローマの布教者にとつてその天の女王がそうであつたと同じく、「神聖」である。左に目撃者Rバルデイの記述を掲げよう。

「信仰普及の目的で作られたフィデ布教所は

カトリックの電話網の殆んどすべての電線の中心である。その最大のプラン、最大の手段が何であるかは私は知らない。或いはそれについては私が知っている以上他の人々の方が知っている。しかしそれが如何にその英雄達を訓練するかということは私はこの眼で見たし、その宗教的陸軍大学の仕事も充分に観察したからそれに就いて物語ろうと思う。

大きな暗黄色の建物がローマのピアツツァ・デイ・スバグナにある。向いの小さな建物もそれに属していてその中には印刷所と本屋がしつらえてある。前者は約三百種の国語や方言に翻訳された問答示教書やその他の伝導用書類を印刷する所であり、後者はその販売所である。例の大きな方の建物は或る一定の日だけはあることを許されるのであるが、そこで或る日、非キリスト教的なそして未開の地で用いられている言葉のうちどれか一つとその他カトリック教の布教のために必要なすべての知識とを習得した生徒達の試験が行われた。この試験は平凡な学生生活の最高点であるが、それには教会社会の最も高貴な人々が常に立ちあうことになっていた。そして今でもそうであるかどうか知らないがその時は彼等の力を既に持つているこういう人々の前

だけで浪費するのは惜しいというので、僧職でない一般の人々をも招待した。その頃は故レドチョウスキー伯爵がこの布教所の長であった。そのレドチョウスキーは濃紅の立派な僧正の服をつけ、金の鎖のついた十字架を頸にかけ、白髪に紫色の頭巾を頂き、帽子を頸に垂らして、高僧達を左右に半円形に控えて壇の真中に腰掛けていた。この劇を一層効果的にするために壇の上にはあらゆる芸術品が飾つてあつた。そしてその前にいるこれ等の人々はさながら色彩豊かな画像が壁から抜け出したかと思われるようであつた。その壇に向い合つて次の部屋に通じる扉があつて受験する生徒が一人づつ出て来る。最初の生徒が部屋に入つて来た時、そこに集まつた人達はみな古ローマの元老達が坐つてアレナに駆け込んでくる斗牛を見ている所という感じを受けた。第一の生徒は背の高い瘦せた年程も成熟していない若者であつた。一眼見ると肺病だという感じがした。運動はギクシャクとしてしかもオズオズ、眼は大きくて黒くて熱っぽくて、うれしそうに上を見たとすると心配そうに下を見る。深く身を屈めながら彼は高貴な人達のいる壇の近くへ進んだ。そして非常に珍らしいイデオムで祈禱をとえ終る

とこゝに彼の試験が初まるのである。それはイタリー語での説教であつた。ソプラノとまだ熟さないバスとの間に揺れながら初めは小さい声で、がすぐに大きな声でしゃべり出した。私は神聖な戦に於ける武装せざる神の戦士である。私は或る輝かしい土地の見知らぬ浜辺に上陸した。私の舟が着いた所には人影が一つも見えなかつた。まるで無人島に漂流したような感じであつた。私を乗せて来た舟は去つてしまつてその帆は水平線の彼方にくれてしまつた。私は十字架を胸に押し当て、島の中へと進んで行つた。すると忽ち叢を押しわけて野蠻な皮膚の黒い土人共が現われて来た。そして突きとばしたり打つたりしながら私を酋長の天幕へ引き立て、行つた。酋長はその土語で私に怒鳴りつけた。しかし私はその土語を習い覚えていたので自分が神と聖い処女の下僕として未開の民を改宗させるために来たのだと答えた。が酋長はそれに耳をかそうとしないで私を殺せと命令した。——話している若い男の顔には狂気に近い大きな熱情の火が輝き初めた。その骨張つた鼻の孔は拡がり、薄い唇には泡が現われ、頬には消耗熱性の焰が燃え初めた。——そして彼等は私を木に縛りつけて鞭打つた。やれからま

た私のいましめをほどこいて今度は板の上に寝かせ、手斧や短刀を持つて私に襲いかゝった。——黒い着物を着た彼の身体を戦慄が走った。——彼等は生きながら私の皮を剥いだ、胸から膝まで一気に！血が飛び散り、暖く私の身体の上を流れた。その間も彼等は私を鞭打った。私は意識を失つて呻き出した。しかし最も聖き処女マリアはこれを見て私の苦痛に同情して泣き給うた。その熱い涙は私の上にふりそそぎ、遂にはその腕の中に私を引き上げ給うた。その絹の白い衣は私の血のために紅に染つてしまつた……こう彼は疲れ切つて殆んど呻くように云い終つた。燃える眼はさながらマリアをそこに見るように天井を見つめその指は彼女の聖い腕を撫で廻しているかのように動いた。レドチョウスキーは深い賛成の色を顔に現わしてその隣りの僧侶に身をかがめた。そしてその繊細な手入れの行きとどいた手は拍手のために膝から挙げられた。他の人達も一せいに拍手した。感動的な一人の

第三 図



男の如きは熱心に「ブラヴオー」と呟いた。
マリアを俗世界に引き降ろして墮落させたのは中世の恋愛詩人の仕業だとはよく主張されることである。またたとえマリア崇拜がガリシア、フエニキア、バビロニア等の宗教から直接に影響されなかつたとしても総体キリスト教というものが自身が決して純粹にオリヂナルなものではないではないか。

ビザンチニズム。

今日のインタンブール、当時のビザンツの宮廷はギリシャ帝国やローマ帝国のように一つの世界帝国を作り、それは一二〇三年に大統領エンリコ、ダンドロが退位するまで続いた。スラブ人はコンスタンチノールを今日でもツァリグラッド（皇帝の町）と呼んでいる。この帝国の長い伝統を縁どつてマゾヒスティックな儀式は極めて苦痛なものである。しかしビザンツだけがきわ立つて他の宮廷よりもその傾向が甚しかつたのではなく、

たゞビザンツがその大き過ぎる名声のために皆自分の所へしよいこんでしまつたものらしい。今日と雖もたとえビザンツ程ではなくとも殆んどそれに近い有様ではないか。

一八一一年三月二十日の早朝、チュイレリ一の庭に夥しい群集が熱を病んだような緊張をもつて、大砲が数多くの射撃に依つて皇后が皇子かまたは皇女かをその夫に贈つたことを告げ知らず瞬間を待つていた。

最初の大砲の音が轟いたのが九時半であつた。人々は愈々強くなりまさる緊張をもつて数を数え初めた。もし王女がチュイレリで世界の光を見たのであるなら二十一発でやむ筈であつた。二十一発、そして一秒間、すると呼吸のつまるような静けさが引き裂くような歓呼に変つた。この上もう数える必要はない。第二十二発目の発射はナポレオンがローマ皇帝である一人の息子の父になつたことを告げ知らせたのである。あらゆる種類の帽子が空中に投げ上げられた。「ウラー」という叫声が附近の街々を無数のエコーと共に走つた。民衆はうれしさのあまり気でも狂つたかと思われる程であつた。

皇后の部屋の一つの窓のカーテンの陰に立つてこの盛んな光景を親しく見ていたナポレ

オンはその胸の中に深い興奮を覚えずにはいられなかった。彼のまわりの人々は初めてナポレオンの頬に大きな涙が流れ下るのを見た。一時間程後にマダム・ブランシヤルドはマルスフェルドの軽気球に乗つて空中から紙を振りまいた。それに依つてよろこばしい報告が天と地の住人に行き渡らせられたのである。それはよく晴れた春の日であつた。それでこのしらせは驚くべき速かさを持つて地方に拡まつた。既に午後二時にはリヨン、ブリュッセル、アントワープ、ブレスト及びその他の地方都市から祝辞が来た。ナポレオンの近衛の士官、侍従、飛脚等はあらゆる方面に派遣された。

デモクラティックなニュー・ヨークもまた御多分に洩れない。

「全アメリカは若いアスターの御誕生を非常によろこんでいる。一週間も前から無数の人々がアヴェニュー・××五番地の窓の前で待つていた。至る処に若い母の肖像が、最近このさうに訪問さるべきアスター夫人」というキヤラクテリスティックなみだし附きで飾り立てゝあつた。」

高貴なる、最も高貴なる、最も高貴なうちで最も高貴なる衣服の持つフェティシステイ

ツクな魅力もまた同様に激烈なものである。こゝにその一例をあげよう。

ブリント・アルブレヒト街の工芸博物館の前に今日多勢の人間が集まつて大變な騒ぎになつた。それは王女ヴィクトリヤ・ルイゼの嫁入仕度が一般に陳列公開されるのでそれを見ようと押しかけて来た群集だつた。

博物館は十時にならなければ開かないのに氣早な連中は朝も五時頃からやつて来て入口の前の階段に頭張つていた。朝からお屋にかけてその群集は（殆んどすべて女であつた）恐ろしい勢で増加するので、押し合ひ突き合ひする女達を整理するために巡查三十人と騎馬巡查六人と憲兵が二人出張してきた、傍観者は首を振りながらこのあらゆる階級の女達が生命的に狭い階段を押してゆくのを見ていた。もみ合ひは益々激しくなり、帽子も夜裳も髪も滅茶苦茶になつた。忍耐強い部長コルドンは部下を五人づつに分けて、自分の場所を得る



第四図

ために真赤な引き歪んだ顔をして荒れ廻つてゐる女達を一行に並べようとしたが駄目だつた。氣絶するものが出来て医者と病人車が呼ばれた。工芸博物館と人類博物館との間の丁度影が切れて太陽の光に照りつける所にいた女が五人墜撃を起して倒れた。彼女等は居あわせた医者に依つて一と

先ず衆議院の中で手当されたのちそれぞれ馬車で送り歸されたその内に熱さはますます烈しくなり、氣絶するものはますます多くなつた。女達はこうしていつたらどうなるかということ自分の目でちゃんと見ていながらそして憲兵や番人が羊のような忍耐を以つてもう少し正氣に返るようと云い聞かせても誰一人耳をかす者もなかつた。新しい群集がやつて来るや否や前にも増した騒ぎが繰り返された。

博物館の出口まで目的の嫁入仕度を見るためにつゝがなく争ひ続ける「幸福」を持つた人達はケーニヒグレーツア街に向いた出口へ出てくる。疲れ切つてぼろ／＼の着物と帽子を着て彼女等は心地よい我家への歸りを急ぐ

のであつた。

地球は権力を持つものゝために与えられて
いる。一九一〇年の十一月にシユワーペンの
三十ヶ所の地にカイゼルが演習を観るために
立つた記念だと云うわけで石碑が立てられた
こんなことは古往のベルシヤにすらなかつた
ことだ。

一方近代の新聞記者程ベコ／＼人の尻尾に
ぶらさがる犬のような奴はない。彼はあらゆる
出来事に首をつゝ込み、それに感情のソー
スで味をつけて民衆に供する。そしてその際
権力者の前に精神的淫をやる。

「トウルン王女とタタシス王女の金色の薄物
が夢のように大広間を横切つた。」

とか、

「ゲルハルト・ハウプトマンは疣を取り去つ
て、目下繻帯をしている。」

とか云つた調子である。

ハンス・バルトという男はベルリナー・タ
ーケブラット紙にエックス・サンタンのアブ
ドウル・ハミッドのものとの邸を訪れた記を載
せた。彼はその家を「神聖なる住居と」呼ん
でいる。そして、

「床に皇帝が半分程吸いさゝれた煙草が落ち
ていた。私はそれを拾い上げて絶好の紀念品

とした。」

嘗て或るドイツの出版屋が何と云つたか？
「一種の戦慄がゾーツと私達を襲うんです」
さあ、誰がマゾヒズムを一種の精神病だと
云うのだ？

もしそうなら全ドイツを、否、全世界を氣
狂病院へ拘禁しなければならぬではないか
？

我々の諷刺絵雑誌は政治的マゾヒズムの表
現で満ち充ちている。もしもそれらの絵から
政治的なワニスを抜き取るならば、人は非常
に屢々その下に性慾的マゾヒズムの純粋な表
現を見出すであらう。

第一図は一七八四年のイギリスの政治的カ
リカチアで、総理大臣フオックスがその保護
者デボスシヤイヤー公夫人のスカートの下へ
逃げこんだことを表わしている。

第二図はフランス革命時代の銅版画で、「王
政と教会が共和政治の命令で出発する図」で
ある。二人の女が支配権を振っている。

第三図は同じくフランス革命時代の作者不
明の諷刺画で、大臣リノーがジャコビン党の
委任を充分遂行しなかつたために、外国から
帰ってくるや否や新聞紙からひどく攻撃され
たことを諷したものである。鞭を持つている

女はマダム・ローランらしい。

第四図は一八一六年の英国のカリカチュア
で、英国の人民が重税のために苦しんでいる
のをカロリン皇女に乘られて苦しんでいるよ
うにして諷したものである、人民は

「おゝ私の背中！もうこれではたまらない！
これで私はもうおしまいだ。」

と叫んでいる。ジョージ五世がうしろから

松葉杖にすがりながら、

「進め！経済を説け！そしてお金を握つたら
俺の例にならえ！」

と怒鳴っている。

◎御知らせ◎

昨年九月予約限定版にて刊行しました玲子
画帖第一集の御注文御照会を未だに頂いてお
りますが右は既に一部も在庫致しておりませ
んし又再版も致しません故、今後御送金下さ
らないように願います。尙玲子画帖第二集は
予約に依らない限定版として完成次第本誌上
並にKK通信上に詳細発表致します故、品切
にならない中に御申込下さるようお願い致し
ます

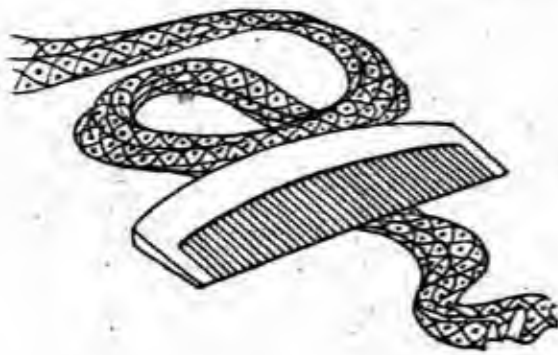
御申込順に限定番号を捺印致します。

代理部

責めの美的表現

＝映画・演劇・小説

に現れた責め＝



小お此この木き閨けい一いち

二月号で雲井氏が述べられたことは、オール同感で、「吾党の士あり」と、嬉しくなりました。

私も大抵の洋画を見ていますが、一体に西洋では、両手を高く上で縛つてその上、鞭鞭を加える型が圧倒的に多く、後手縛りは「荒野の」(伊)「海の征服者」(米)「ジャマイカ・イン」(英)位ですね。「海の」で後手に縛られた上に、寝転され、胸はふくれ上り顔をのけぞらせる所が、テクニカラーだけに生々しく、白黒写真からは、想像出来ぬ位、スバラシイもので、ヴァージニア・メイヨなど、いつも彼女の胸線美は、色つきでは何倍も美しく感じます。

洋画に比べると、邦画に於いては、やはりぐつと色気があり、西洋の女が縛られては男に噛みつきそうな見暮と対照的に、自由を奪われ男のまゝにさせている風情が、遙かに女性らしく、美しいものです。

「次郎吉格子」だつて、折角、美女高峰さんを縛つたのですから、彼女の胸のふくらみをもつとく描写すれば良かったのに、唯もう無茶苦茶に縄をまくんですから助かりませんスクリーンでは、乳房の上ギリ／＼の処まで

なら露出可能ですから、もう少し、肩を出したら良かったでしょうし、お三枝さんが嫌がるなら、せめて、もう少し着物をくずして、裾の乱れだけでも見せて欲しかったものです。

KK通信第四号論壇で「宝塚の猿飛佐助で新珠美千代が、縛られて踊る所を、週朝でホメられたんで、観た人は、どなたか、書いて下さい」と頼んだのに、どなたも、まだ書いてくれませんね。

歌舞伎も「浦里」「欠血」を近頃は、演らないのでしょうか。地方では、女歌舞伎で、「佐倉宗五郎」の吊し責めをやつてゐる所もあるようですが、此れも、御存知の方は、書いて頂きたい。

さて、男——と云つても、むしろ男姿で女の演技を——(殊に縛られた時)——する長谷川一夫の責められ場を話しましょうか。「蛇姫様」では、原作中の、素晴らしい責め場はなかつたけれど、敵に捕えられて、危うく殺られる場面、縄すじでしたがり／＼後手に縛られ、大きく息ずき乍ら周囲の男たちを眺める目付と、唇の動きは、まさに女のそれでした。敵のボスがそ／＼と傍へ立つ。カメラは、彼の後からグルリと横面へ流し、あと

けない表情で長サンが見上げる。そして「斬られるナ」という恐怖の表情に変わり、激しくなる息使いは、愚生をして三回も続けて見させました。

ついでに原作の方を話しましょうか。千太郎（長さん）が、関所越えを失敗して縛られ引立てられてゆく所を、彼に惚れてた奥女中が行列のカゴから見付け、使をやつて、繩をとき宿屋へつれてこさせる。そこで、酒の酌をさせるのですが、彼の命を救つてやつた代りに、男の貞操を差し出せ、と云うのです。それまでに何回もこの女に恩になつていてので、どうしても今日も逃げるわけに行かぬ、千太郎は、

「貴女のお気持は、よく分つています。でも私には、想っている人があり、その為、今迄童貞を守ってきました。でも、命を助けて頂いた今日、又貴女から逃げ出すわけに参りません。自由を奪われて、童貞を失うのは仕方ありますまい。いつそ私を縛つて下さい。さ早く縛つて、でないと私は逃げたくなりません。」

と、すりよります。女はキラリと目を光らせると腰ひもを解き、キリ／＼と縛り上げ、うつとりと、男に見入ります。

「私、もつと酔いたいわ、あなたも酔つて。ネ、いゝでしよう」彼女は、子供におつゆを飲ませる如く、男に酒をのませます。段々すりよつてきて、縛られた男を抱きよせ、唇をふれ合い、やがてそのまゝ、グイと男を押し倒すのです。

この結末は、意外なことになるのですが、強チンの一場は、この辺で幕としましょう。次いで「阿波の踊子」で、長さんの絶品の責められ場となります。高手小手に縛られて牢番からトンとツキ出され、ヨロ／＼とよろめきつゝベタリと崩れるように坐ります。例によつて女性の演技。

他の男優は、いくら縛られてもこのマネは

出来ません。長二郎は林長二郎門下で、長丸と云つてた頃から女役ばかり。十数年の女形生活は、どうしてもチョク／＼と、女らしい演技を見せ責められる場では、ゼツタイ「縛られた女」の表現をします。

彼のソバへ立つた敵役は、ビシヤリと頬を打ち、ついで蹴転がします。（余談ですが、昔はバン／＼を「蹴ころ」と云つてました。してみると、サド性のお客も多かつたのでしよう。今のバン／＼は、縛られて転がされるようなことは封建的男性横暴の悪習だと、一リクツこね、一向に女らしく思えません）この転がされて、肉体が綱目の下でうごめく所は、絶品で、こういう所を本モノの女優



がしたらどんなにスバラシからうと思つています。

その縄目をグイとねじ上げ、しめ上げて、敵役が頬よせて（と云つても愛のコトバは吐きませんぜ）くるのですが、長さんは、半眼閉じ、無抵抗に顔をのけぞらす所は、エキスタシイの女のそれです。

さて、戦後「大江戸の鬼」では、恋人の親の罪をかぶつて、捕えられ、牢へ恋人が会いにくるのですが、縛られたまゝ、女が近よつてきた焦せりを、指をひろげたり、握つたり又その指が、スチールや、プロマイドで、承知の通り、女に見まわがしき白魚の指で、又うまい具合に、右腕の縄の喰い込む所は、着物を破いてあるのでブリ／＼した軟くて弾力のある肉体が、のぞいて見えます。

「続修羅城秘聞」

これは、週朝でQ氏が珍しい愛慾シーンと云つてましたが、長さんは高手小手に縛られ、藪がすりよつて抱きつきかけるだけ。いつそこういう絶妙なシチュエーションは、藪さんさえ昨今の類勢（失礼）挽回のため、縛られるのOKしたら左の如くいゝ責め愛慾シーンになります。Q氏がホメたのはモツペラ藪さんが、白い肩とかすかに乳房の一部をチラリ

と見せ乍ら、もがいたり、のけぞつたりする所だつたのでしようが。さて、私がカントクならの一席。

長さんが投げ込まれる。次で内通した藪が胸もあらわに（美女と盗賊の京マチ程度に）後手に縛られた儘、彼のソバへ投げ出される。二人共縄目を逃れようと身をもむ。

カメラは身をもむ度にチラリと胸乳がふくれ上り、裾の乱れから、内股を、瞬間見せる二人共ぐつたりとなり、藪が「あたし、どうして、あなたを救けてみせるわ。私自身どうなつても」と述べる。「こうなるのも運命だ。二人共死のう」と男。女はにじりよる。

（この映画では、ずつと藪が男を追つていた）蛇のようにウネリながら、男の顔へ頬よせ、男の胸へ顔を伏せて泣く。後手の女の指が、あせつて、うごめく。次いで猛烈な接吻。女は身をよじり、顔のアップとなる。カメラ、ペンして、そばのローソクを写す。男、にじりよつて女の手の縛しめを、噛み切ろうとするが、肉に喰い込んだ縄は、歯がたゝない。君の縄は、太い荒縄で女の歯も立たぬ堅さ。女はふとローソクを見て、這いより、両手首を焰にかざす。顔のアップ、汗がにじみ出、胸をのけぞらしてこらえる。男、女をツキと

ばす。男の縄は堅いが、女程肉へ喰いこんでいない。ローソクの火は少し宛、縄を焼く。必死にこらえる男の顔、両手首をねじる。ハシリと縄が落ちる。縄がとけては、迷カントク、もう切り上げるべきだ。後は、縄目のまゝこの女を抱いて、連れ出すだけ。

小説の責め場も数多いが、描写に、品のある舟橋聖一の「田之助紅」は、殆ど責め場で満ちている。女形の田之助が欠皿になつて舞合で責められ、女弟子、巽は、待合の一室で役人に責められ、勿論舞合でも責められる。

愚生がカントクなら、責め場を主にして演出する好適の脚本になる。例のハワード・ヒューズの「ならずもの」も、日本公開では大カットだつたがT・ラッセルが犯される場面の他に、チャンと、責め場も入っている。問題は如何にゲイジユツ的に、表現するかと云うことだが、逆コース時代の今日、一寸やそつとの工夫では実現難しかろうと存ずる。

最後に愚生の脚本で、

「白子屋お熊」

お熊は、街のヨタモン氏にサラワレ、縛られたまゝ、イタされてから、この味が大好きになり、今も一室で例のアベツシュ君との色模様。舞合はお定りの四畳半、隅に行燈。お

熊は、裾から赤い色をこぼして、男の腕に抱かれていた。

「お熊、そんなに、おめえ、オレが好きか」

「アイ。」

男はじつと見つめているが、グイと、女を転がし、

「よし、そんなら、こうしてやるんだ」

と、お熊の腰ひもを外す。グイとキモノを

肩からずらし腰まき一つにする。女は目を閉

じ抵抗しない。手をねじ上げ、キリ／＼と縛

り上げ、転がして飲みかけの盃をチビリ／＼

やりながら眺めている。

「どうだい。痛いかな」

「え。でも、体がキツチリしまつて、いゝ気持。早く抱いて。」と、にじる寄る。

男は抱きかゝえ、唇を合す。女の手指は妖

しく、動く。

「こんな目にあつて、おめえオレが憎いだろ

ろ」

「いゝえおまえ、私しや、嬉しいのさ。好きなお前のすることなら、どうされたつて本望だよ。」

このまゝでは芝居にならない。お定まりの邪魔が入るんだが、余りお長くなると、お目ざわり、何れ稿を改めて、今日はサワリだけということに。

【読者通信】 投稿歓迎

私は二十六才の独身青年ですが

女性には興味なく男性的な同性に愛情を感じます。過去私が熱愛した二三の男性はそういった傾向のない人達でしたので所謂片思いとして苦惱した経験もあります。東京では男色者の集まる場所があり私も上京の都度逢つて歓を交える事もあります。余り上京の機会もありませんので月一度か二度位です。

又この小都市ではそういった人々もありませんので悲観して居りま

すが、貴誌を読んで大いに慰められて居ります。(神奈川 I 生)

x

小生の希望を述べます。小型誌になつてから淋しく思う事は巻頭の色刷頁がなくなつた事です。成程現在の様にアート紙を使つた写真も結構ですが二月号の様に着衣のまゝ縛られた姿など色付であれば肌の白さと着衣の華やかさとの織りなす美が十分に出来た事だろうと思ひます。縛られた女の場合は必ずヌード、着衣の場合は天然色写真、出来なければ色付絵に願ひたい。此の為に誌価の高くつく事

は大多数の読者にとつて異議ないと愚考します。誌中「淫火」は小生の最も期待するものゝ一つ、喜多画伯の挿絵と相俟つてこよなき読物です。貴誌の中、小生の一番嫌なものは男色を取扱つたものです。一部の人間から反論があると思ひますが寒気します。どうか今後共貴誌の主流はあくまで男性のサディズム、女性のマゾヒズムの線に沿つてゆかれます。尙今後は発売日の予定は厳守してほしいとらされる読者の身にもなつて頂きたい。(和歌山 S・D)

x

写真集早速お送り下され有難うございました。余りの構成の素晴らしさに目をみはりました。肌に喰い込む縄目の痛さに呻ぐ苦痛の表情、猿轡など我々の生活をこの上なくエンジョイし希望をもたらししてくれます。貴誌の真面目で誠実な編集ぶりには全く敬服致します。若し貴誌がなければ私を初め多くの愛読者がどんなにか失望落胆することでしょう。どうか更に発展を祈ります。

(多蔵敏夫)

衣 囚 続

古川 裕子



「大体これでいいでしょう。まだすこし時間があるから、そのまま待っていて下さい。あゝそうだ。これをかけておきましょう。あなたがお好きでしたね」

全身がすっかり写る大鏡の前で、さき程から全裸の私に、麻縄のかけかたを苦心していたS氏は、満足したように私を後手に縛りあげてしまうと、私のトランクから、桃色のゴム引レインコートをひきずり出し、縛られた私の身体に素膚の上からバサリとかけ、フールドをかぶせた。

冷たいぬめぬめとしたゴムの感触がヒヤリと身に沁みる。ううつと思わず呻くと口の中につめられたタオルが咽頭をすつかりふさぎそうになる。あわててもがいてやつとわずかに舌をうごかして、タオルを歯の方に押しやつて呼吸すると、うす目をひらいて鏡を見た。あゝ、これが私の姿？ 猿轡とフードとで顔は殆どわからない。

何かゴム布に包まれた一個の荷物のように。自分ながらあの世からでも来た不吉な悪魔のような姿。でもこれは自ら求めた姿ではないか。S氏は今朝とはうって変った丁寧な口調もうすきみ悪い。

大広間の方では、しきりに人が集るけはいがしている。秘密クラブのショウ。そして今日の鑑賞の対象は、誰でもない。この私なのだ。

「さあ、そろそろですよ。うまくやつて下さいね。いえ、もつとも今日のは、お芝居でも何でもないのですからね。地でやつて戴けばそれでいいのだからお互いに楽でさね。さ、脱ぎましょ。そしてその可愛いあんにこれを嵌めましょね」

四十がらみの、目のつりあがつた、色白の、どこか狐を思わせる待合のおかみは、私の身体から無雑作にゴム引レインコートを剥ぎとると畳の上



にバサリと放り出した。そして鉄の足枷を足首にはめると、両足間の鎖の長さをやつと歩ける程度に加減した。

「用意が出来ましたか。あつちの方もいいようですから、始めましょう。あなたは、ただされるまゝになつていただいいのです。たゞなるべく呻いて下さい。もつともいやでも呻かせますけどね。写真のお約束はなかつたけど、それだけ猿ぐつわで顔がかくれてれば、かまわんでしよう。一時間ばかりです。客は三十人位。そのうち十人位は御婦人ですよ。おつと、そのバンティイは？……。いやそのままそのまま。最初から何もかもでは却つてつまらん。皆様の前で、ゆつくり御披露することにしませう。さあ、歩いて！」

いつのまにか入つて来たS氏は、こう云つて私の縄じりをとると邪慳に私をたたせた。と同時に後手にしぼられた手首の重つている背のあたりに、ビシリと最初の竹ムチが鳴つた。

雨戸がすつかり締つてゐる暗い廊下をまがつて、むつと暖い人いさねのような濃んだ空気を全身の皮膚に感ずると、閉じた眼の中にさえ明るく光がさしこんで来た。「歩け！」第二のムチが肩から背にかけて焼けつくようになる。ドンと背中中に突かれて、私は広間の中に、突き倒されるように転げこんだ。足枷の鎖が、ガチャガチャ

と鳴り足がもつれて、何の支えもなし得べくもない私の身体は、明るい明るい電燈の下に無惨にも腹這にころがされたのだ。ざわざわとした人声が、息をのむようにビタツと静まると、重苦しい空気が部屋中を支配した。百の眼が、百の視線が私の全裸の身を凝視している。眼を開ける勇氣もない私にも、まざまざと皮膚に視線が突き刺つてくるのが痛いようにわかる。

「裏切り者の女をとらえて参りました」Sの声。

「罪状証拠は明白でございますが、この女を一応おとりしらべ下さい」

うす目をあけてうかがうと、一段高くなつた場所に、中世紀の宗教裁判の時の僧侶のような服装をした男が三人。まともに私を見おろしている。

「座れ」Sは私を荒々しくひきおこすと足枷のはまつた膝を折らせて正座させ、二又になつた棒で私の首すじをおさえ、裁判官の前にひきすえた。

「うむ。住所東京都北多摩郡O町 古川裕子。三十歳」

本名を呼ばれて私は思わずもがいた。猿ぐつわの下で声をあげて反抗しようと思ふもんだ。約束がちがう！。「動くな」今度は革ムチがしたたか尻にあたると、二又の棒は、私の首を床に、びつしりと押しつけてしまった。後手の手首が高く背に躍り、お尻は、まとも客にむいてゐる。

「人別間違ひなし。もはや取調の要もあるまい。直ちに刑を執行しよう。刑はお集りの方々におまかせする。何なりと申し出られたらいい」

「そのバンティイを剥げ！」いまままで沈黙して片図をのんでいたらし

い客席から始めてこの時声がかかった。

「宜しい、パンティを……。これはお集りの御婦人に執行をお願いしよう」

首を床におさえつけられた私は、下半身をもんで抵抗した。

「さあ、この鉄で」一人の婦人が鉄をうけとつたらしい。股のゴム紐がパチンと切られ、卵のかわをむくように私の尻が露出する。

「その尻を打たせろ！」再び声がかかる。

「宜しい。だが少しおまちなさい。首枷をはめましょう」

私の首はギロチンの首穴のような固定した首枷にはさまれ、犬のように這わせられ、そろえた膝に縄をかけて首枷台にむすび、足をのぼすことが出来なくされた。私の身体は両膝と首とで体重を支えているわけだ。

「さて、どうぞ」

何人で叩いたのだろうか。全身熱湯を浴びるような痛さ！時々女の声もまじつて、ムチが鳴る。

身をよじる。呼吸が苦しい。手首から肩腕にかけて痛さだ。ムチが鳴る。ムチが鳴る。

火花の散るような痛さの中で、私は思わず叫ぶ。「貴方はなぜ死んだの！」この声が奇妙な呻き声にしかない。身を悶える。焼けつくような尻の痛さ。身体の不ふし、首の痛さ、全身から力がスーッと抜けて私は首枷に首をはさまれたまま、犬のように横倒しになる。意識がぼんやりしてくる「貴方はなぜ死んだの！」私は薄明の中で呻く。

「次には殿方たちに刑を執行して戴きましよう。女を柱に括れ、正面をむけてはりつけよ」

私は足をひろげて衆人の環視の中にそうされる。

「殿方よ。どこにでも」

写真器の閃光電球の光が閉じた瞼の裏まで遠慮なくとびこんでくる。殆ど絶え間のないシャッターの音！

いろいろな……が、私の全身に……の一点に集中してくる。

「足を吊りあげよ」私の足は次第に上に吊りあげられる

「乳房に枷を！」御婦人方、女の乳房をお責め下さい」

乳房に厚いゴム製の腕のような器具がはめられ次第にしまつてゆく。嘔き気をもよほし冷汗がながれる不快感。やたらにわめきたくなる。乳枷を遠慮なく締めつけられる。猿ぐつわもちぎれよと呻く。シャッターの音、シャッターの音。

「洗礼台に、殿方、聖なる場所以外、どこへたりと洗礼を」

私は台の上に後手のまゝ仰向けに縛りつけられる。

「またれよ。女は見なければならぬ」

伴創膏が両眼の瞼にはりつけられて、私は眼をみひらいたまゝ、またたきも出来ない。

次々とか……！次！次！

私の意識は又もやもうろろとなる、シャッターの音。

「貴方、この私はなかに、娼婦よ、娼婦よ」

私は目を見ひらいたまゝ、夫のおもかげに叫ぶ。

「さて女を吊せ」

私の腕に茶色な液体が注射されると、現実と夢とが混合して、何か樂園にのぼる感覚。

「死刑執行並びに裏切り者の野ざらし刑！」

首に更に縄がかつた、全身べとべとの私の身体が宙に吊るしあげられるけはい、こりつと肩の関節がなると同時に、人の呻き。私は失神した。

それから三日目の朝、どしや降りの雨の中を私は待合を出た。ポケットには三万円の札束がある。レインコートをきて、大きなガゼのマスクをした顔を、一層フードでつつむようにして、朝の街に出た。

北国の十一月中旬は、もう色濃く冬の足音がきこえている。雨の中にみぞれがまじる。

身体の不ふしがまだ痛い。それよりも、もつと私の心が痛んだ。思えば五日前の朝、小雨のふる中を、私は今と同じ姿で札幌駅をおりた。目印は私の大きなマスクと革の華奢なカバン。Sの目印は。何気ない右手のハンカチ。何かに憑かれたように、私はこゝに來たのだ。

突然の自動車事故は、私から最愛の夫を一瞬にして奪つてしまつた。身よりのない私は夫の事業をその友人にまかせて、一株主として、東北の小都会に役人をして夫の兄をたよつてゆくより仕方がなかつた。子供のない義兄夫婦は、ひっそりと東北の田舎で暮らしていた。あによめも大人しい優しい人で、殆ど初対面に等しい私を大切にしてくれた。そして静かな半年がすぎた。一年がたつていつた。私の義兄の家の離れに一人寝て、夫とのかつての、しびれるような私たちだけの歡樂の夜々を思い出しては、身もだえた。私も専門学校までいった女で、人生の関心も、このような性の想いだけとは、自分自身どうしても思いたくはなかつた。私にはもつと高貴な

想いがある！

しかし、私の中には、もう一人の全然別の人間がいた。思いきり虐められた歡喜の声をあげる女が。真や善や美を真面目に考え。人生を有意義に、しかもつましく清く生きてゆきたいと願ひ又努力をする自分に対して、この女は理屈も何もないに性につながる被虐の妄想をかかえこんではなさい。一人の自分が想像もつかない破廉恥な行為を、この肉体の中の女は、いや応なしに実行させてしまふ。狂いまわるような情熱のさめたあとの、あの索莫たる想いを誰が知つてくれるだろう。

神に見はなされた悪魔の女！ 自分は自分をつくづくそう思う。そして自らの生命が断てたらとさえ思う。しかし、夜がくると、私は寢床の上で悶える。もう一人の女が、かつと目を開き私を眠らしめない。夫が生きていた時は、夫との被虐加虐の調和の上に夫の愛があつた、しかも夢さめて、屋間の私たちにさえ真面目に世の中のために、人のために働こうという夫との間の共通の意志があつた。それが夫に死なれた今、真面目な聖なる自己は余りに弱く、肉体の女は余りに強い！ 縄の味、ムチの味、足枷手枷猿ぐつわ、そして私の囚衣であるゴム引レインコートの感触が、私を握えてしまふ。私のこれらへの妄想に、私の下半身は、いや応なしに強く強く反応してしまふ。夜毎私は自分に猿ぐつわをはめ。足枷首枷をつけて自らムチ打つ。夫との遊戯がまざまざと思ひ出される。あゝ誰か、私を目茶目茶に虐めかけてくれる人はいないか！それが夫への不貞であつてもかまわない。あゝものたりない！ あゝものたりない！ 私の中の被虐の女がこう叫びつゞける。一度あの歡樂の美酒を味つたものがどうして忘れられるものか！と。



丁度その時であつた。義兄の小箱の中にあつた「奇譚クラブ」を見つけたのは。私はこれをむさぼり読んだ。今まで誰にも話すべきでないこと、私だけの悩みと考えていたものもろのことが、こゝに同じように人々がいる！。

私はその夜決心して、義兄にひそかに自分の悩みを訴えた。おとなしい義兄はだまつて聴いていた。もう四十歳を越える彼は、人生のいろいろな面を知りつくしていたのかも知れなかつたし、又、多少とも私や彼の弟(私の夫)と同傾向をもつていたとも思える。私にしても、夫の兄という肉体的な親近感が、あえてこの告白をさせたのだつた。

「それは余り健康な心理ではないが、しかし私は弟の性癖を知っている。小さい時から仲よく一緒に育つたのだからね」
こゝで彼は、ちよつと笑つた。

「まあ何とか考えてみよう。人間は道德や理窟だけでも、ゆくまいから。でもそれとは別に、あなたの本当に真面目な面は、そのために卑下したりしないで大事に持つていた方がいい」

義兄は、こう云つた。そして、まもなく「奇譚クラブ」の読者通信欄に彼の名で私のことを発表してくれた。応答はすぐにあつた。第一に札幌のS氏とそうしてすこし遅れて大阪のH氏と。ともに私

の夫と同じ血をもつ人のようであつた。その手紙には脈々と両氏の特種な情熱が溢れていた。私は最初にS氏からの手紙を義兄から、わたされたとき、深い後悔におそわれた。あゝ何という、はしたないこと！ 何という女！ 自分をもみくちやにしまいたいだつた。しかし私の中のもう一人の女は、手紙をうけとつただけで胸をとどろかして歡喜している。早くあけてみる、お前が長い間望んでいたことが今こゝにある。そゝれみる全身がわきかえるようにわなないてゐるじやあないか！

義兄は、私にこう云つた。「その人に会うのもいいが、良い人なら結婚したらどうかね。もつとも仲々すぐに良い人というわけにもゆくまいが、あなたの話では、とても正常の人では何ともなるまい一番いゝのは、文通だけで我慢出来ないかね。それがもつとも不難なのだ。直接会うのは危険だな。実は私も調子にのつて少し深入りをしたと後悔しているのだが。文通だけで満足してくれるなら私も安心していられる」終りの方はつぶやくようだつた。

義兄の言葉はもつともだと思ふ。私は承知した。しかし夜に寢床の中で読むS氏の手紙に私の中の女は声をあげて呻き出した。何故行かないの！ 恐いの？、結婚なんかはしてくれやしないけど、行つたらいいじやないの？ 世間の眼や、自分の道德なんてなあに？ いくらいいばつたつて、あなたの中には私がいるのよ。「高貴」な精神なんて云わないで頂戴。もつともつと、骨を噛むように、底の底まで楽しみなさい。あゝ私に満足させて！ あの歡喜！ あの満足！ それをこの私に味わさないつもり？。私の中の女は、身をもたえ地団太を踏んでこう叫ぶ！「三十にもなつてなあに、この豊満な乳房、真白なもも、可哀そうだと思わないの！」

私はそつと手紙を見る。恐いものをのぞくようだ。

「私はあなたに私のよごれた靴下と襪とで猿ぐつわを嵌めますよ。私がどんなに巧妙に責めるか、どうか一度会つて下さい。細の味もムチの味もそれから……。あなたの大切なものには私の指一本ふれず、責めるのです。貴方は私のドレイ。哀れなドレイがどんな仕置をうけるか、早く連絡して下さい……」

そして一週間目の朝、私はフラフラと仙台駅から北海道へ旅立つた。

「本当にゆくのか。あとはあなた自身の責任だよ」

義兄は心の底から困惑した顔でこう云つた。

「私にも覚えがある。仕様がないだろう」

十一月中旬の津軽海峡は波立つていた。私は顔半分もかくれてしまふような大きなマスクをはめて護送される囚人のようにうなだれていた。

何度このまゝ海へ飛びこんでしまおうと思つたか知れない。私のそばの革の小さなカバンには、夫との遊戯につかつた各種の責道具がいてあつた。これを私は、あの見知らぬSという人に使わせるのか。そのためにもつて来たのか。性の満足のためには、私はこんなことをする。お前は娼婦だ！と私の心は何度もわめきつづけた。そのたびに一方では、私の中の女が歓喜の表情で、「もうすぐ、もうすぐ」と齒をむき出してわらつていた。そして私は無事に函館の街を見た。私の心は次第に落ちついていった。

北海道の景色は内地とはまるでちがつている。札幌までの長い汽車の窓から見る原野は、何か哀切なノスタルジアを感じさす。

白樺の林、牧草畑、もはや雪をいただいた遠い山々。それは私の



心に粗野な原始の心情とも云うべきものを与えた。「あゝ私はとうとうこんなところまで来てしまった」その想いは私に何か絶望的な勇気を与えた。

札幌駅を降りたときにはそれでも流石に曇々とどろ

いた。手がワナワナとふるえた。

そしてやつとの思いで切符を渡すと、私はこわごわ「右手のハンケチ」をさがした。と後から肩を叩かれた。

「古川さんですね」

紺のダブルの背広に上等な外套をまとった体格の良い、しかし柔和な顔つきの三十がらみの紳士が立っていた。この方がS氏？。私はただ「はい」とうなずいた。

「案外お若いのでびっくりしましたよ。まだお嬢さんのようだ。私Sです。このたびは御縁があつて、こうしてお会い出来たことを嬉しく思います。さあ荷物をおもちしましょう。あゝ雨がふつていますよ。小降りだけど」

私は、私の荷物の中からゴム引のレインコートを出し、すつぽりフードをかぶった。

「そうそう、レインコートがお好きだったのですね。そうやってマスクにレインコートを着ていらつしやる姿がお手紙からの、あなたのイメージでしたよ」とS氏は笑った。

札幌の朝の雨は仲々やまなかつた。S氏は駅近くの旅館に私を案内して、

「ゆつくり夕方までお寝みなさい。今晚からは私のドレイですよ」

S氏の目はこの時始めてキラリと光った。

「まだマスクをしていらつしやるのですね。今、私にそのマスクをとらせて下さい、これが私の最初の命令ですよ。お約束したように私はあなたのものだけは責任をもつて指一本ふれませんよ」

彼の指が私の柔い頬にさわつた。そしてマスクの紐に指がかよつて取り去られた。

「ほう」驚嘆したように云つてS氏は「では今晚はこゝで」と紙片を示して立去りかけた。

「お休みなさい。夕方にお迎えにあがります」

この時再び彼の目がキラリと光った。私は小娘のように頭をさげた。

その夜と次の夜はS氏に示された待合ですごした。

最初の晩は、S氏は完全に「夫」になつてくれた。一挙一動、私のイメージにある夫との遊戯そのまゝを行つた。私はS氏の胸にかじりついた。夫が生きているようだった。

次の晩は、S氏のイメージに従つた。私は完全に彼のドレイになりうせた。あらゆる凌辱も、あらゆる苦痛も夢のようであつた。後悔などはなかつた。私の中の女は狂喜していた。後手に縛られ麻縄を首にかけてひきしぼられる。足首も括つて背中て手首と殆ど一緒に括られる。口には猿轡。夜明けの最終の私の姿がこれだった。

「さあ一休みしよう」

猿轡がとられた。唾液を十二分に吸つた口中のタオルがそこに吐き出された。私はぐつたりとしていた。

「結婚して！」

私の最初の一言はこれだった。

「何？」

一瞬S氏は耳を疑つたらしい。

「結婚して！ 貴方の妻にして。毎夜私たちは、こうして楽しみましょう」

私は早口にこれだけ云つた。S氏はあきれはてたような苦笑をう

かべた。そうして急に妙に惨忍な顔になると、

「冗談云つてはいけない。貴女は私のドレイですよ。ドレイを妻に出来ますか。貴女は私に踏みこまれてはいけません。優しくしてあげればつけ上つて何を云う。二度とそんな音を吐けないように折檻をしてやろう。今まで遠慮していたが決心した。貴女は、そのまゝで、もう少し居るのですよ。今日、こゝで秘密クラブの会合がある。予定を変更して今日の主役は貴女だ。あのショウに出演するようにになれば、貴女もプロさ。何に。いやだつて。いやでも何でもその手足は御自分の自由には、なりませんよ。貴女は私のドレイ。今こそ思いしつたでしょう。さあさあ泣かないで、女の泣き声も悪くはないが、今はちよつと具合が悪い。さあさあ貴女の好きな猿ぐつわをもう一辺嵌めていらつしやい」

S氏は自分の襟を私の口の中にねじこんで、絹のしごきで私の口鼻をおさえてしまった。

それから五時間、私は私の身体を衆人の環視の中にもち出され、さんさんにもてあそばされるまで、その姿でころがつていたのだ。

そして今、無理矢理にポケットに札束をつめこまれ、どしやぶりの雨の中につき出されるように放り出された。

「あなたのショウの時の写真は送つてあげるよ、充分それを見て楽しみなさい。又来たくなるようにね。でも結婚はごめんだぜ」

S氏は最後にこう云つた。

私は悄然とこの街を去つて東北の義兄のもとに帰つた。

「どうだ、こりごりしたのじやないのかね」

義兄がぼつりと云つた。私は黙つてうなずいた。

「世の中はそう云うものさ。こゝにもう一通来ている。もう、これ

かは捨てよう」と、義兄はそれを封のまゝまるめて紙屑籠に放りこんだ。私は黙つて見ていた。

その夜、私の手はガサゴソと紙屑籠をさぐつていた。

見ろ、又機会がある。私の女は叫んだ。大阪のHとそれには署名がしてあつた。文面は殆どSのそれと同じであつた。

「私は貴女を虐めたい。貴女は私にドレイの奉仕を要求する」と私は、この手紙に対して何か書かなければならなかつた。

「私と結婚して……」こう書いたらこの人もおこるだろう。おこらせてアィソずかせればいい。

一方の私が云つた。何の返事があるか。もうコリゴリした筈じゃないか。又も肉体を人にさらして金を得ようと云うのか。お前は娼婦！と。でも私の手はワナワナとふるえながら、むごたらしいしかし甘美な凌辱の幻想と期待とをH氏に書いておくつた。そしてその最後に「結婚」の件をはめかして。これが正常の私の哀れなレジスタンスだつたのだ。

数日して二通の封書が私に届いた。一通は見るも無惨なショウの写真。もう一通は予想通り憤激にもえるH氏の手紙だつた。それは「貴女は私のドレイ。娼婦に等しい貴女の根性を私の折檻によつて叩き直してやる。あらゆる。あらゆる凌辱を加えられる覚悟があるなら自分のところへこい。汽車賃位は出してやる」と私はその二つの書簡を寝床の上に抱きながら、私は娼婦になつたという嘆きと、札幌へそして大阪へ何故ゆかない。夜毎これからお前の苦悩はつゞく。歡樂の酒は何故のみほさぬ。行つてみる。そこには又新しい刺戟がある。と云う二つの声が耳もとにガンガンひびくのを身悶えしながら聴いていた。

奇譚クラブ最近号 主要目次

- 八月号 責めと男色特大号○
 ○九月号 特集 錯倒の告白○
 ○十月号 特集切支丹迫害史○
 口絵 責め場面挿絵集 喜多玲子・構成
 切支丹迫害史画集 五井野弘・画
 縛られた女写真集 辻村隆・構成
 切支丹迫害史 漆島 迫平
 氷責めの断罪 赤城 芳年
 遊女花菱の受難 花山 剣作
 江戸の刺青模様 潮 マリ
 マリヤ・マグダレナ 桂 牧次郎
 性慾の昇華 赤坂 剛
 或る医師の告白 亀岡 恭二
 大衆文学に現れた「女の責め場」 高月 大三
 愛と苦痛の交錯 島上 源一
 恋の烙印 松井 籟子
 あらたま村の奥にて 二俣志津子
 アブニストの記 へばきうり 鬼山 絢策
 夫婦愛と緊縛の考察 辻村 隆
 サーニン 戸森 暁
 宿命に哭く 浅田 正人
 悪女 岡田 咲子
 江戸時代の墮胎医 福森 耕司
 縛られた妻 早川新二郎
 遺書 小峰登美子

十一月号 ○宗教刑罰戦慄画譜

- 口絵 宗教刑罰戦慄画集
 風俗便所考 淫書開好記
 緊縛の受難（縛られた女の写真）
 悲恋の答刑 松井 籟子
 局部装飾としての文身 高野 雅和
 続・へばきうり 鬼山 絢策
 羞恥と潮紅 波多野 新
 ストリップ変態記 朝見 速夫
 現代陰間茶屋談義 染田 玄
 好き者放談 鷺見 東一
 続・恋態艶書 岡田 咲子
 誌上雑感 小田 利美
 少年矯正院体験記 嶽 収一
 桃色の地獄 藤安 節子
 反戦論者の弁 三富 浩生
 夢性の美少年 三村 幾夫
 墮胎と出産風俗 阿久津 猛
 珍版・南国随筆 井村 幸男
 羞恥心の発達 赤坂 剛
 都会の異態交響楽 中河津規男
 江戸奇習 縁切寺 畑村 連治
 想魔と口紅 桂 牧次郎
 癡狂文学者の研究 杉山 清詩
 ジャンベルネル夫人の狂楽 シヤルロット
 男色魔の虜 井口 正憲
 性愛描写の文学 紀市 郁栄
 切支丹迫害史 漆島 迫平

○十二月号 惑溺の愉悅特集号○

- 口絵 フランス貴婦人の変態性生活
 尻、甘き歡樂の後
 耽美派小説名場面集（潤一郎の巻）
 折込口絵写真 縛った女を写す 辻村 隆
 濁れる愛執 松井 籟子
 初夜 笹田 豊
 奴隷妻 片矢 薫
 指の秘密 武山 武彦
 男装麗姫伝 亀岡絃七郎
 孤独なファンタジー 芳野 眉美
 モンテカルロの佯僕男 モリス・ブルウジェ
 中国艶話 毛のない女の物語 赤塚与志夫
 女性器崇拜 雨森 順一
 糊と泥と砂 長岡変一郎
 4Sクラブ探訪記 二俣志津子
 非公開放映 世界の閨房 藤安 節子
 囚衣（或る人妻の生活記録） 古川 裕子
 陸に関する怪奇な報告 村田 生
 SODOMIEの珍裁判 鳴尾 善治
 ロマンチックなサディズム 森山 美歌
 香具師放談 浮家 鷹三
 女囚私刑体験記 小坂多美枝
 セックスの記憶 綾 久江
 錯乱の倫理 近東規矩也
 夕映え燕の教訓 丘 正雪
 狂い咲くカンナ其の後の告白 羽村 京子

○新年号 縛った女を描く○

口絵 吊り下げられる女 喜多 玲子

中世紀の宗教刑罰画集

鼻 愛の使徒 色刷口絵 椋鳥

口絵写真 縛った女を描く

アブニストの記・らぶ・すれいぶ 鬼山 絢策

脱落者 小森 原平

徳川閨門痴情録 的場 通

淫火(みだらび) 松井 籟子

戦争処女の手記 藤安 節子

長崎らしやめん考 花山 剣作

お国自慢・好色民謡選 七条美樹子

人妻告白記・妻の復讐 辻 佳月子

桃色のペールに包まれて 川端多奈子

読者座談会「交悦に伴う責めの衝動心理」

マゾヒストの果て 福田 英一

糊の執著 長岡交一郎

鼻腔礼讃 升岡 金吉

変の字問答 浮家 鷹三

告白記 僕の記録 黒井 珍平

女の責場を描く時の心境 伊藤 晴雨

少年の恋 守田 雄二

貞操帯奇譚 ジョルジュエフカルトル

あなたのムチの下に 角田 平八

赤につかれた男 上村秀久雄

男色の花道 堤 行房

風変わりな作戦 笹田 豊

○二月号 責めの小説特集号○

口絵 怪奇派小説名場面集(乱歩の巻)

口絵写真 恋に狂ったワン・カット

スペインの宗教裁判

妖 花(心の悪魔) 羽村 京子

夜開く孤島 岡 真史郎

淫 火(第二回) 松井 籟子

若衆散華(同性愛欲史譚) 戸崎 平馬

変の字問答(第二話) 浮家 鷹三

らぶ・すれいぶ(第二回) 鬼山 絢策

燐 光 久留木 栄

女嫌いの種々相 仁比山 等

アレキシナの日記 鳥上 源一

女囚獄中記 花井お梅さんげ譚 小町 右近

糞尿崇拜とトータル思想 三瀬 淑朗

処女崇拜と宗教売淫 島影 映

比丘尼開眼 久松 俊介

琉球の女産 木之下白蘭

悩ましのサディズム 森山 美歌

切支丹迫害史 漆島 迫平

死刑執行奇談 茂木 芳久

黒井珍平氏に答う 伊藤 晴雨

しいたげられるよろこび 林田 澄子

破った日記帳 川端多奈子

硝子便所 芳野 眉美

つわもの哀史 吉井 川洋

映画とサディズム 雲井 彰

○三月号 東西拷問くらべ○

口絵 柱に縛られた女 喜多 玲子

口絵写真 東西拷問くらべ

サディズムの精髓 吾妻 新

切腹史談 中康 弘道

同性的男性愛の謎 染田 玄

受難記(ある女の告白) 岡田 咲子

妖異聚楽第 戸崎 平馬

らぶ・すれいぶ(第三回) 鬼山 絢策

女囚私刑体験記(其ノ二) 小坂多美枝

黒井珍平さんへ 羽村 京子

艶書通信(喜多玲子さまへ) 高野すみ子

文学歴史に現われたるサディズム 仁比山 等

悲痛と快楽 波多野 新

第七天国の夢想 梅井 清

伊藤晴雨先生へ答えて 黒井 珍平

屍 臭 丹波 太郎

色情の価値 角田 平八

猿轡 雑考 千葉 三郎

白い便器の幻想 芳野 眉美

伊藤晴雨氏の解答を読んで 和泉としを

破った日記帳 川端多奈子

緊縛女優列伝・縛られた女優たち 升岡 金吉

アドニス灯 鷺巣 千芳

ジブシイの性的生活 有馬 正秋

淫 火(第三回) 松井 籟子



切腹史談 (2)

中 康 弘 道

3 整 齊 期

切腹が屢々行われている間に、まず刀の運び方が定まり、腹は一文字か十文字に切るべきものとされた。次いで割腹後自ら致命傷を加える代りに、介錯を受けるようになった。

式法の定まり始めた最も顕著な例は、豊臣秀次の最期に見られる。高野山に在った秀次の許へ、当日中に切腹の命がもたらされたのは文祿四年の夏であつた。まず湯殿で行水を使うと、秀次は小姓に命じ脇差を取出させ、切先三寸残して紙に包みその紙に使用する人々の名を書付けた。札の上に

腹切刀が六腰並んだのである。一同別盃を交しつゝ介錯人を定める。譲り合つて故参の篠部淡路が承る、

小姓の中でも美貌で寵愛深かつた不破万作が、庭先に設けられた白州へ駈け下り、「お看に」と双肌を脱ぐ秀次が介錯しようと下り立つた瞬間万作は腹十文字に切り腸を掴み出したので、秀次は二大刀で首を打落し死骸を摒除へ片付けた。こうして小姓三人を介錯した後、伽の僧隆西堂と秀次は床机に掛け、一度に声をかけて腹を一文字に切つた。

二の大刀を心もとに突立てた時、隆西堂は転び落ちて果てる。秀次は淡路の大刀を肩先に受け、「落付け」と言いつゝ臍の下まで切り下げ三大刀目に死んだ。次いで淡路も切腹した。こういう作法が

定まるのに拍車をかけたのは、殉死を目的とする切腹である。

合戦の場で主君に従つて奮戦敗後の末、主従共に深く切腹するのは必ずしも純粋な殉死とは言いがたいであろう。然し明德記に見える、細川頼之の病死に際し切腹した三島外記の如きは主君の死を悼む他に何の理由もない。是より始まつて、特に主君の優遇を受けていた者は主君の病死に当つて切腹するを当然とした。加藤清正の死に際しては、朝鮮から連れかえつた金という小姓まで切腹している。

是より先、秀吉は殉死により人材を失う事を嫌い、秀次の死後殉死者を差止めた程であつたが合戦の終息により漸く哲學的形態を見えた武士道を全うする為に、切腹の理由を殉死に求めたのは必然の趨勢であつ

たろう即ち戦場の昂揚状態に在つて、他人を殺傷するのに全力を竭し、一旦事敗れば刃を転じて我と我が腹を裂く事を以つて潔しとする思想がその決断性を内攻せしめたものと言ふべきであらう。「武士道とは死ぬことと見付けたり」という葉隠の精神は武士の果は切腹か浪人との諦念に安住の境を見出してゐた。従つて刑罰であつても、切腹には名譽保全の恩典を感じ、依然として自ら刃を加える思想を醸成したのである。前代に於ても仏前に於て切腹したり、まず仏名を唱えて後に切腹したりする事の多いのを見れば仏教的な輪廻転生思想が精神的に切腹の受入れを容易にしていたことは否めないが、此の頃より切腹の場を寺院に定める事も亦多くなつた。尤も、姫路城の腹切丸の如く、特定の切腹場所と城内に設ける事もあつた。

さて殉死の爲の切腹にも種々の様相があるが、病臥時に主君から賜つた一碗の粥に感じ殉死を決意したとか、お薬役が主君の病死と同時に道具を碎いて切腹したなどは最も純粹な、二君に仕えぬの思想を実行した例であらう。有馬忠頼の死後追腹を切つ

た堀江伊右衛門は極めて容貌が醜くかつた一日侍女が笑つたので「兒女に侮られては御奉公もなりかねる。切腹仕る」と座を立つた。忠頼が驚いて制止したので是が殉死の動機となつた。然し後には、老い先短い自分が殉死すれば自然子孫が厚遇されようとか、何某が殉死すれば当然自分もせねばならぬ、とか地位や主君の持遇の程度を計つて、切腹を願ひ出るような事も起つて来た。

中には、記録によれば慶安三年尾張候義直の病死に當つては五人の者が切腹しているが祿高、年令層からして適当な階級代表者を殉せしめた、としか見られない例もある。甚しきに至つては、殉死者の爲に用意した棺が一つ余つたので、係であつた者が自身切腹し、余つた棺を用立てたという事もある。こうなつては殉死の眞精神は何処へやらで腹を切りたくで切つたのではなく止むを得ず切つたという事になる。

慶安四年毛利秀就に殉じた梨羽頼母は若年で気怯れした様子であつた。すると頼母の臣山本某が「御免」と腹を一字に切り「左程痛うはござらぬ」と言いつゝ十文字

に切つた。頼母も是れに感じて漸く腹を切つた例もある。

即ちかくなつては、先述のサドとマゾの交錯的な自殺心理は、皆無に近い。是は刑罰の場合も同様で自責どころか反抗的な氣で切腹する者も少くない。その上に合戦時の昂揚的な状態は社会全般から失われてしまつてゐる。勢い最大の苦痛を最大の満足とする如き思想は薄れたのも、又この時代相であつた。前述の義直に殉じた一人、土屋某が存分に腹を切る迄介錯を持つように言い添えたのなどは、既に此の頃、腹を切りおえる迄に首を打つのが習慣だつたからであらう。逆に、重罪人に苦痛を永びかせる為、刃引きの刀で介錯させたり、仇討の意味で怨恨ある子弟に介錯を命じ、当然介錯人は、存分にお腹召されよ、と、切腹人の苦痛を見守つて快とする事もあつた。是れなどは切腹の自然発生的な精神に反する考え方と言わねばならない。

切腹の作法は種々の異説があるがその大概とまとめると次の如くである。

切腹人は当日、まず行水を使い髪を結う此の結び方も平常とは異なる。着衣は水色無

紋の肩衣である。場所は、寺院、又は預り人の邸内、庭上又は室内等。何れにしても作法は罪の軽重、身分の高下により小異がある。

白縁の疊二枚を白絹で巻いたのが切腹の場である。正副介錯人と正副検使が立会う切腹人が着座すると杯が出される。是れにも色々に故実がある。次いで白木の三方に載せた腹切刀が出る。刃を切腹人に向け、切先は右に向ける。切腹人は検使に一礼して右から肌を脱ぎ左を脱ぎ終えれば左手で刀を執り、右手を添えて押戴く切先を右へ向け直すと同時に右手に持替え、左手で三度腹を撫で下し、臍下一寸でもよい。深さは三乃至五分。深ければ刀が廻り兼



切腹の図

ね、又腸が流れて見苦しい。刀を右脇迄廻す時に首を打つ。此の場合、後に切腹より介錯が主となつてからは、刀を押戴く時、又は左の脇腹へ突立てる時の何れかに首を打つようになつた。そこで思うさま腹を切ろうと欲する者は、

合図ある迄介錯を待つよう依頼した。介錯は、腹を切つただけでは死に切れないから行われ始めたのであるが、後には武士の氣風が低下し、

苦痛に耐えがなくなつた反面、形式尊重の結果、見栄よく切腹を終らすためでもあつた。苦悶の為に姿勢が崩れては介錯し難いのである。

罪によつては扇子や木剣を真刀に替える事さえあつた。有名な赤穂四十七

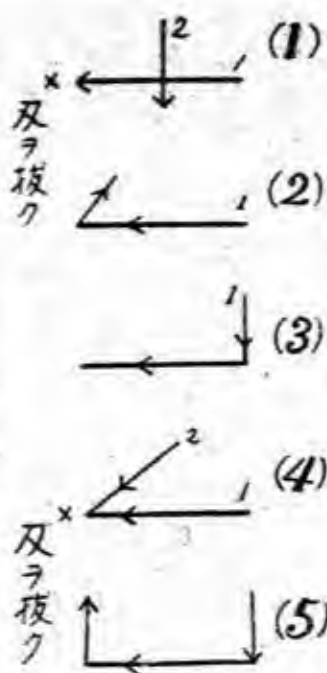
士でも、真実に腹を切つた者は少く、三、四名、それも介錯の時機を誤らしたため、着衣の上から突刺している。却つて郷里で自刃した萱野三平の方が見事な切腹を遂げたようである。

介錯無しに切腹する場合は、自ら咽喉を突貫くか、横に突貫いて前へ捻ねるかの二法を撰んだ。中には自ら髻を握つて頸を掻き落す者もあつた。

切腹の方法としては、度々述べた一文字腹十文字の他に、異形として二文字、三文字があり、又殉死に際し主君の紋所の形を切つた者もある。一文字も一法として腹を左から右へ大刀で横に突貫き刃を前へ押して腸を流出させた例が記録に残っている。十文字に至つては、佐藤忠信の例を(①)基本として、次の如き例がある。

まず左脇腹に突立てた刀を横に引廻し右脇で上へ撥ね上げるもの(②)左脇に刃を下向けに立て、少し切下げ、刃の向きを替えて右脇まで引廻すもの(③)左から右まで②同様引廻し、右脇で一旦引抜いた刀を右乳の上へ上げて、右脇へ斜めに切り下げて、前に刀を引抜いた所へ合せておくもの

④更に幕末以后に見える例として左脇に刃を下へ向けて突立て、やや切下げ、刃を転じて右へ引廻し、右脇で又刃を転じてやや切り上げるもの(⑤)がある。右腹を縦に切った後腹を一筋切るのもある。



こゝで切腹の語彙を一言しよう。

切腹には二ぬの解釈がある。(一)我と我が腹を刃物で断ち切り死ぬ。(二)武士に課せられる刑罰の一、短刀で腹を切り死に就くのであるが、実質上斬首に等しい場合が多い。

(一)と同様の法として、割腹、屠腹、自腹、腹切がある。所謂ハラキリを外人に対して使い使われる時は(二)を意味する場合も多いが更に単に日本人の自殺という位の意味でも使われる。戦時中のハラキリ機即ち特攻機を想起する迄もなく、先般の在伯邦人ハラキリ事件も週間読売7月20日号で

は真相は服毒による自殺だという。

立腹又は立切腹は立つたまま切腹する事従つて端座の場合區別して坐切腹ともいう。詰腹は刑罰でも無く又自分の意志でもなく他より強いられて切腹する事、私刑的な意味が濃い。無念腹も二義ある。(一)は無念さの余り切腹する事、憤りの余りの憤腹と似通う。(二)は戦国以前に多く行れた如く腹を深く広く切り内臓をくり出し、或いは摺み出して投げ付けるなど、怨念を残す意志の表示を伴う場合である。当時は勇武とされたが後世切腹の式法が整つてからは未練且つ見苦しいと忌まれた。

追腹又は後腹は、主君父兄朋友等の死(自然死自殺刑死等)に当つて後を追う為に切腹する事、先腹は対象人物の確定的な死に先立つ場合を云う。尙追腹は、切腹と限らず殉死の為の自刃総てを指すと思われる用法もある又商腹は子孫のお覚えを考慮して老臣が殉死する事、輪腹は殉死すべき人を詮議する場合を云う。

鎌腹は鎌で切腹する事農民に見られる。蔭腹は秘そかに掻切つた腹の疵口を布で巻いて、決死の行動をとる事。

義腹は義理に迫られて切腹する事。序でに自殺に類する名詞を調べると自死、自殺、自決は刃物によるとは限らず自ら死ぬ事、自刃は刃で腹の他、口、咽喉頸、心臓で胸手首等を突刺し又は切つて自ら死ぬ事、自裁、自切は概ね切腹を意味する。自害、自残は自決と自刃の何れにも用いる、生害は元は殺害の意味であつたが、後に自害と同種に用いられる。尙自頸、自刎は頸部に刃を加える事。自絞、自縊は首を絞める事である。

勳詞では腹切ルに始まり、掻切ル、掻破ル、掻裂ク、掻割ク、断チ切ル、刺シ切ル等。刀の扱い方により、一文字、真一文字、横一文字、二文字、三文字、十文字、左十文字、右十文字、縦横十文字等を、腹一文字二掻切ル、の如く組合せる。

切腹の意志を表示する場合は、切腹ス、腹切ル、腹ヲ切ル、腹ニスル、腹仕ル等。又、敬語として長上の切腹を云う場合は、オ腹召ス、オ腹遊バス、等を用いる。大日本史等漢文体では、屠、割、剖、断、割、潰、等を、屠レ腹の如くに用いる。

刀を腹に突刺す手勢を形容する副詞とし

ては、ガバ、ガバリ、グサ、グサ、グサリ、ズブ、ズブリ、フツ、フツツ、フツツリ、フツリ(フの代りにブ、又はブをも用いる)等を、グット突込ム、ブツリト突刺ス、等と用いる。

刀を横に引廻す手勢には、キリリ、キリキリ、グイ、グイグイ、グット、ブリリ、サラリ等を、キリリト引廻ス、サラリト掻切ル等の如く用いる。縦に切下げるには、クワツト、グット、スルリト等を、クワツト推下ス等と用いる。

切腹に用いる刃物は、太刀脇差鎧通し等の他、鎌、更に最近では、軍刀サーベル庖丁類剃刀類ナイフ等を用いられる。徳川時代の作法に従う時は、九寸五分を定法とし、切先五分程残し紙縫で二十八巻して止める蓋し血滑りを防ぎ腹膜を破らぬ程度突刺す為である。

戦国時代は脇差の柄口、又は刀身の中ほどを、切先三寸位残して布で巻いた。太刀軍刀等は刀身に布を握り添えて用いられた。切腹の後は前に倒れ伏すのを正しいとした。但し守矢頼真書留によれば、諏訪頼重は、脇差ヲ乞イ十文字ニ切ラセラレ、三刀

目ニ右ノ乳ノ本へ突立、テンモク程クリ下ラレ、サテ後へ御タオレ候とある。

刑罰としての切腹は、本人の屋敷、寺院預り人の屋敷、城内の腹切部屋等が用いられた。姫路城の腹切丸は今も残っている。

4 衰頹期

前述の如く、江戸時代に入つて元祿以後は切腹の真精神は言われていた。然し中には立派な例も少くはない。その一、二を挙げる。

増上寺の僧新田大光院は、寺内の確執が原因で、弟子や塔中の人を集め、此の体を見よと言ひさま、腹一文字に掻切り咽喉を断つて武士にも劣らぬ最期を遂げた。

近藤甚左内は、猿楽の舞の馬の口を取らされた事を恥じ且つ憤り、武士の真加に尽きたりと父に切腹を願ひ出、見事に切腹した。

嘉永年間、神奈川砲台に在つた松山藩士新海八良左工門は、同僚の悪戯で蒲団蒸しになった。苦しさに抜刀の禁を破つたが、乱心として隠便な結果を計らわれたにも拘らず、切腹を申立て、止まず、許されて腹

一文字に掻切つた。若侍多数連坐、切腹仰付かつたのを見れば、面当ての意味もあつたろう。

松山騒動で詰腹を切らされた山内与右衛門内は、切先五分残して白紙で巻いた刀を以て、腹一文字に掻切り、白紙の血に濡れたのを裂き取つて投げ棄て、次の刃で咽喉を絶つた。

時代の風潮が墮弱となつても、尙且つかゝる剛勇の士は單なるものである。然し一面に於て、現実の切腹が介錯偏重となり、凄惨な悲愴美を尊ばなくなつた反面、その擬態が歌舞伎に於て繁盛を極めた。此の二つの現象は競合的に切腹の精神を、現実面で



は衰頹せしめて行つたと言えよう。そして反面では人間内奥のサド、マゾの存在を立証している。

就中、仮名手本忠臣蔵は、判官切腹及び勘平腹切の場面で、美貌の名優が自刃の悲愁を予想させる事によつて、幕明きから人氣をさらつて行つた。それは絵画的な鮮烈さをさええ當時に於ても保つていたであらう顔世やお軽の悲嘆と愛慕が、切腹の悲痛さを一層効果づけた事は言うまでもない。それは文芸面にも利用され、此の時代の作品は殆ど切腹の情景無くしては成立しなかつた。

幕末に於て外国との交渉、側幕運動等戦乱的雰囲気は、切腹の精神を再度喚



南 柯 夢 挿 絵

起した、と言つてよからう。殊に外人を殺傷した罪により切腹した青年武士の最期は戦国時代に勝るとも劣らぬ凄壮さであつた兵庫事件の滝善三郎は、外人に切腹を認識せしめた第一人勸であつた。

当日、彼は悪びれる所もなく座に着き、挨拶の後、着衣を帯の下まで脱ぎ下げ、腰の辺り迄露出した。短刀を取上げ暫く思入あつて眺めたが、やがて最期と、左の腹深く刺し、静かに右に引廻し、やゝ切上げたこの間、顔の筋一つ動かさなかつたが、血が滲み出、刃を引抜いた時始めて苦痛の色を浮かべたという。

続いて起つた堺事件では、十一名の士卒が切腹した。

まず箕浦猪之吉は徐ろに衣を開き、逆手に握つた短刀を力一杯左脇に突立て、三寸切下げ、右へ引廻し又三寸切上げ脇を掴み出す所を介錯を受けたが、三大刀目に死んだ。

西村左平次は一文字に掻切つた刃が浅く感じたのか、再度突立て半ばに及んで介錯を受けた。

大石甚吉は、両手と腹を暫し撫擦り、短

刀を左脇に立て左手で柄を押して切下げ、右へ引廻し、又左手を添えて切上げるのに少しも滞らなかつた。

最も凄惨を極めた柳瀬常七は、一旦右へ一文字に引廻した刀を更に左へ押戻したので、血と臓腑が一時に噴き流れた。

此の例を殆ど最後として、明治六年切腹は死刑の内から除かれた。

然し自由意志による切腹は尙余喘を保ち神風連以後内外の戦争に発現された。それらの内で目覚ましい例を挙げよう。

近代の切腹で最も華々しかつたのは乃木將軍であらう。明治天皇に殉じて、大正元年九月一日、將軍は夫人と二人居間に入つた。

上着を脱ぎ下腹を露わした將軍は、軍刀に仕込んだ備前兼光を右手に取り、左手を添えて左の横腹に差込み、左から右へ八寸許り斜めに引廻し、次いで右から左へ、五寸、更に左から右へ二寸、三文字腹の典型であつた。割腹後、ズボンの釦迄懸け然る後咽喉を貫いて最期を遂げた。

大平洋戦争の従軍者の中では、長崎丸船長菅源三郎の白刃がある。長崎港外で触雷

沈没した責を負い、西洋剃刀で下腹を半月形に切り、然る後頸動脈を絶つた。

終戦直後、東京代々木原頭に集団割腹を遂げた大東塾生十四名の最期は、今尙吾人の記憶に新しいところである。十八才より六十才に至る塾生は、八月十六日自刃を決意、二十六日決行迄を準備に費し、当日は午時一時起床簡単な食事を終え、徒歩で十九平澤と呼ばれる現場に至り、ヒモロギを中央に丹座、午前三時、双肌を脱ぎ白布で巻いた短刀を以て、作法通りの割腹を遂げたものである。

5 切腹の意義

生きるに忍び難いとして死を選ぶ自殺は誰しも安易且つ苦痛の少ない方法を執るのが人情であろう。然るに切腹は、鋭利なる刃を身体中最も肥厚せる腹部に加え是れを切り裂く。而も即時致命的な損傷は与え得ない部位であるから、衝撃死を受けるのでなければ即死は望み難い。たゞ、失血に伴う意識の昏濁並びに絶大なる痛苦と戦つて更に致命傷を加えるか、或いは、漸次失血死に至るを待つ。武士道トハ死ヌコトト見付

ケタリ、という葉隠の一句は、肉体に加え得る限りの惨虐を尽さねばならぬ、武士のサド、マゾヒズムを象徴している。武士の修業の第一は戦闘で人を斬る事である。その決断と惨虐が、屈辱に耐え難い時、卒然として自己破壊のエネルギーに転化する。

それが最も苦痛多い自殺方法——切腹となつて表れたのである。衆人の面前で切腹が行われ、時として其の自己破壊が、内臓諸器官の揚挙に迄及んだのは、サディズムが急激に自己の肉体に向けられた結果、最大のマゾヒズムに転移したのであり、それは多分に露出的なヒロイズムを伴う事によつて、名譽の最小限の保持を意図されたのである。而も切腹を見聞する人々の内心にも同様のサド、マゾヒズムの要素が潜在するが故に、寧ろ悲惨な凄絶さを勇氣と讃えて語り伝えたのである。それは敗北その他の屈辱を償つて猶余り有る行為とされたのである。

然しその真精神、即ち自ら腹を断ち切つて絶大な痛苦の内に死んで行く勇猛心は、戦闘時に於ける昂奮状態に救われる所極めて大であつた。後世平穩の時機に切腹する

事は、極めて至難であつたに違いない最初には単に首を打つ為の介錯が、次第に故実作法の重要部分を為し、遂には腹に刃を加えない内に行われるに至つたのも、其の結果である。そして切腹の真髓は、そのサド、マゾヒスチックな性格を考慮に入れる時、殺伐な戦国時代を最高潮とし、後には僅かに其の余光を保つたにすぎない。従つて幕末に當つて、故実に従いつゝ尙、思うまゝに腹に刃を加えた例の多かつたのは決して偶然ではない。

切腹は自殺の手段である限り戦時中に於ける如く称揚されるべきではない。然し又愚劣な野蠻な行為として貶しめ輕んずべきでもない。それは日本人の歴史に残る事実として、我々が継承すべき文化遺産の中に蔵存する。その認識に立つ時、始めて我々は切腹の真義を理解出来よう。それは現実には既に過去の事実であり、又あらねばならないのである。

(附記) 本稿は山名正太郎先生並びに黒部量二氏の御厚意に負う所極めて大である少年婦女の切腹、文芸と切腹に就ては稿を改めて読者に供したい。
読者の疑問、及び筆者の誤謬を指摘して頂ければ幸甚である。

【読者通信】 投稿歓迎

新年号の川端多奈子様の告白、興味深く拝読しました。なんといつても貴誌のお写真は他誌の比べ物にならない程立派な「縛られた美」の表現だと思っています。私も男性のは論外として女の縛られた姿は女性の美をどんなにか助長し完成するものと思つて居ります。この点貴誌には更に「縛られた美女の觀念しきつた時の美しさ」を追求めて頂きたいと思ひます。誌上の誰かの御説の様に晴雨ばりや他誌のものでは同じ縛られた姿でも不自然さや恐怖や苦痛の醜い表情があつては折角の美が台なしです。同封致しました写真は私と私のお友達との合作のもので、技術の未熟と材料の関係で不鮮明で恥しいものですが、川端さんや其の他のモデルの方々によつて此の種の美の探求に成果を挙げて頂きたく参考迄にお送りいたします。写真の後ろに縛られて首の座に直つたのと、袴をつけた襟姿はお友達、白い囚衣をまとつたのが私です。私のは襟柱の前に引居えられた上、地上二尺程の高さに磔られて居ります。この際この姿のまゝ三時間も放つて置かれたので私

は身動きも出来ず全身が痺れて下された時は本当に処刑された様にくつたりとして居りました。もう一枚が処刑を終えて地上に横たえられた私の屍体です。

この外二人で火焙や絞首刑やらゆるお仕置の姿を色々な服装で写真をとりました。私の今迄の経験では盛装して襟柱に縛られてお仕置を待つ姿が一番美しかつたと思ひます。貴誌の手で昔のお姫様の姿のモデルで一連の磔刑や其の他のお仕置の美しい写真を完成して頂きたいと切望いたします。そしてそのお仕置の執行者も女の方と一緒に写したならば更に効果が多いと思ひます。

(滋賀県 大川由紀子)

× サディズムの女性へ

私は只今東京のM大に在学中の二十一才の青年です。幼年時代より縛られることに興味があり、小学校時代には悪童連に随分可愛がつて貰いました。現在では同性よりも異性にいじめられる事を無上の光榮と思うのですが、そんな相手もなく脾肉の嘆をかこつて居ります。せめて同好者の皆さまに仲

間入りをさせて頂いて慰めにしたいものです。同好の皆様及びサディズムの女性の皆様によろしく。

(Tokyo. T.T.)

× 二月号にのせていただいたわたしの拙いお便りに沢山の方々からいろんなお返事を貰いました。わたしどうしていゝかわかりません。書きかけたわたしの文章もとうとう途中までやめてしまいました。恥しくてどうしても書き終えることが出来ませんでした。やはりわたし、御本を讀ましていたゞくだけにはしますわ、そのうち気持が落ち着きましたら又何か書いてお送りさせていたゞきますからどうかお許し下さいませ。(時山加代子)

×

入れ違ひに三月号拝受、いつも乍ら他社に比較して貴社の誠実に感服して居ります。KK通信の倍増は実に嬉しく思いました。特に二月号補遺抄は有難く至り尽せりの編集振りには只々頭が下るばかりです。前回第一回の読者座談会には惜しくも選に洩れてしまいました。予告にありました第二回の座談会には是非出席させて

頂きたいと熱望致します。人夫々によつて経歴や傾向も異なることゝ思ひますが、小生のように老境という域に達し人生の酸いも甘いも噛み分けた人物も一人位は混つていてもいゝのではないかと考へます。年の功でそういつたコレクシヨンもいさゝか他に誇るべきものもあります。御繁栄を祈ります。

(柳川老生)

×

愛読者の皆様今日は、小生満十八才、童貞、神を信じ學術を尊び藝術を愛好し、トンコ節を嫌悪し不正を憎悪する品行方正の一青年ですが、人間性を尊重するが故に小生は自分が秘かに抱いてゐる

(女性を後手に縛つてみたい)という欲望を決して恥ずべきものと思つていません。サド的傾向というものは人間の(特に男性の)心のどこかに必ず存在するものと信じてゐるからです。小生貴誌故に一生品行方正を持続する自信が生まれました。貴誌を手にして余りの嬉しさに一筆したためました

(東京 伏住竜児)



縛られた女優たち (二)

升岡金吉

三月号に引続いて縛られた女優たちの列伝を思い出したまゝ書いてゆきますが、見落している部分が沢山あると思いますので識者の御教示を賜れば幸いです。

○久我美子

奴隷の街で田中春男の仮面の紳士に挑まれて帯で両手を縛られた身を黒髪纏んでぐいと仰向けにされる。その時の彼女の美しさはよかった。追いつめられた女の美が迫るものがあつた。

○岸恵子

鞍馬の火祭り」で五郎少年と共に新撰組

に捕われて本当に後手に縛られていた。吃七捕物帖」では悪人に捕われ、罪人の様に本縄で縛られ、金ゴロの為に後手のまゝ引立てられてゆくシーン、悲惨なる美しさ。

○星美千子

「ひよどり草紙」朝雲照代の恋仇に捕われ後手の猿ぐつわの身を足で押さえつけられ、柱につながれ、最後には刑場へ引立てられてゆく。太綱が喰い入った体を柱へつながれ目かくしをされて痛ましい娘姿を見せてくれた

○岸旗江

箱根風雲録」でいきなり猿ぐつわにむし

ろのグル／＼巻のまゝ捕えられて危い所を助かるシーンあり。

○若山セツ子

「袴だれ保輔」で小沢栄に捕われ、可憐な姿を後手に縛られた上、木の下へ猿ぐつわされてつながれた。痛々しく思えた。この中で一人の女は小松義男に挑まれ、半裸の上から荒縄でひし／＼と縛り上げられて情慾を迫られていた。

○藤間紫

「酔どれ八万騎」で宮城千賀子を助けに行つて反つて捕えられ、縛られて猿ぐつわ、殺人罪まで犯した為に捕手に完全なる後手姿になつて手首へヒシとからむ縄付の背からキヤメラはきれいに映し出していた。

○三浦光子

「恋文道中」カムバック第一作から好太郎に帯で後手に縛り上げられて木へつながれ悲鳴をあげるシーンを見せた。あばれのし、やはり好太郎の色魔奉行にかどわかされて縛られた身をかつき込まれた。

○高峯三枝子

「次郎吉格子」で悪侍進藤に引ずり上げられた二階で、捕縄で後手に縛りあげられ十手を縄に通してグイ／＼と締め上げられる責め

場をみせ、その上猿ぐつわを噛まされて足蹴にされて横倒しになる。仰向けになつて、もがいてゆるむや「次郎さん逃げて……」と悲しい叫び、悶える女の美しさをかなり長い間楽しませてくれた。

○轟 夕起子

「三万両五十三次」で女賊に扮して敵をあざむかん為に花嫁の身変りになつて後手に縛り上げられ猿ぐつわまでされた姿でもがいているシーンがあつたとか（これは見落してしまつた。）

○関 千恵子

悪人に味方して「青空浪人」で芝居する娘、今一人の娘と共に細引で後手に縛られた上、割竹で打たれて悲鳴をあげて苦叫する。縛られて転がされて、起上つた後手姿、トンチンカン三つの歌で太綱のグル／＼巻にされた姿、これからどうなるかと思つたら助けられてしまつた。

○御 園 裕 子

「水戸黄門伏魔殿の妖賊」で可憐な姿を後手に柱へ縛りつけられて斬られてぐつたり、只後へ手を廻してその上をグル／＼巻いたゞけだろうが、何という妖しい美しさをかもし出すことよ。

○宮城野由美子

家康を討たんとして捕われて「振袖狂女」で綱で後手に縛り上げられて宙吊りにされるまさかと思つたら本当に彼女だ。驚いた。手首にからむ綱、打たれて悶え、呻く姿、これ程の責場は近頃珍らしいと思つた。

○三 原 葉 子

「風雲七化峠」で第一回出演から悪人に捕われ、鼻口をかくす猿ぐつわ、綱で文字通りのグル／＼巻きにされる。柱へく／＼りつけられて足まで荷物のように十巻、二十巻、これでは少し美が消されてしまう。一寸鋭い眼がよかつた。

○西 条 鮎 子

「流賊黒馬隊」で悪代官に捕われて馬上へそして牢へ、拷問！最後は刑場へ本綱の後手姿、白装束は哀れにも美しい。十字架にかけられて槍に血を吸われん所を助けられる。少女にはちと強すぎるシゲキだ。

○木暮実千代

「情炎」で不敬罪として河原に引出されて本綱にかけられて後手に縛られた身を晒し着にされる。哀れな姿。寒夜尙縛られ続けていく。大女優故に何故か気の毒だ。スターもつらい事だろう。罪人になることは……

○山 口 淑 子

「戦国無頼」で山口淑子縛らる、国際女優縛らる！勝気の女賊、海賊船に捕われて頸をグイと仰向けられた美しさ、三国に捕われて黒紐で後手に縛られた姿、叫ぶ口に猿ぐつわ大きい腫が悶える。地上に転がされたまま、忘れられない姿である。

○美 空 ひ ば り

「角兵衛獅子」で可憐な小娘になつて親方に捕えられ細い荒縄で後手に縛り上げられ、後から見ると、本当に胸から三巻四巻、両手首にキリ／＼巻きついた縄でギツチリと縛られていたしその縄を割れた火鉢のへりへ後手の手首をこすり／＼して自由になつて天井から逃げ出す。何故かホツとした。「鞍馬の火祭」でも後手に、両手足を縛られて猿ぐつわまでされていた。「天狗廻状」で親方に掴まつて後手、今度は手首が縛つてなかつたが、水漕の中へ縛られたまゝ顔をつけられて「水責め」にされた。可愛想だつた。

洋 画 の 部

洋画でも女優の縛られるシーンは沢山あつたが、昔のものは余りはつきり浮んで来ないやはり人種の違いだろう。「狙われたお嬢さ

ん”で美人が両手足を縛られて猿ぐつわをさ
れてた。“旋風地獄谷”で手足を縛られた女
が線路上に寝かされたり“キングコング”で
娘が土人にさらわれて鉄鎖で台上へ縛られた
りした。(洋画フアンの人に聞いてみたいと
思う)

○モーリン・オサリヴァン

“ターザンの逆襲”で土人に捕われて木を
背に抱く様にして縛りつけられた。(アチラ
さんは手も長いから)縛られたまゝ舟もろ共
に水中へ落ちるともう縛めが解けてしまう。
こゝらがつまらない、もつとしつかり縛つと
けばいいに。

“新モンテクリスト”で名を忘れたがクリ
ストにピストルをつきつけられ両手を前に押
む様にして縛り、体中グリ／＼巻にされて更
に美唇へ布で猿ぐつわまでされて寝台の上へ
あちらはやはり女尊、静かにいたわる様にし
て演っている。

○ジーン・アーサー

“アリゾナ”でハリキリガールとして活躍
だが女だ。強盗にいきなりタオルの猿ぐつわ
を噛まされ両手は頭の上で両足も長々と寝台
上にギチ／＼と縛り上げられてしまった。

○ドロシー・ラムーア

“ジャングルの恋”で土人に後手に縛られ
た体を抱き上げられて半裸の美体を餌食
に！ガアーツと開く獸口！さすがに外国の賣
場、恐怖に悶える美しい苦悶の姿は忘れられ
ない。

○フランセス・ギフォード

“ターザンの凱歌”でドイツ兵に捕われる
と両手は後で縛られ、柱へ乳房の上からヒシ
／＼と縛りつけられて恐怖のものだった、ナ
チを出したらもつと責めればいいに、中々の
美人だった。

○ナンシー・ケリー

“ターザン砂漠へゆく”で手品の女として
無実の罪をきせられて、後手に縛られて大勢
の前へ引出されて絞首の刑にされんとして台
上へ悲しみの、ターザン現る、後手のまゝ馬
上へひらりと飛びうつる。

“乱闘術”で名を知らんが少年少女に悪い
女として首へ投縄、そして椅子へグル／＼巻
に縛りつけられて、クスグリ責、椅子へ縛る
のが洋画の責めらしい。“ジャングルジム”
でヴァージニア・グレイ、リタ・バロンが悪
人に両手足を縛された。アチラの女の縛られ
たのもいゝものである。

○イングリッド・バーグマン

“ジャンダーク”彼女は神技といわれるだ
けに素晴らしい、英軍に捕われ、鉄鎖で後手
に縛られて馬上に引かれて両手足に鎖をつけ
られて引出されて尋問の嵐、拷問の嵐(日本
ではやらない)そして牢獄では獄卒の慾情に
挑まれて悩まされる哀れさ、最後には囚衣の
身を馬で運ばれ、罪木へ鉄鎖で乳房の上から
×印に締められ、その鎖がすり落ちるのを自
ら直す清らかさ、“主”にキツスして刑卒の
命ずるまゝに後へ廻す両手も背へ縛りつけら
れて惨たる火刑のシーン、煙にむせ、焔に焼
かれて苦悶する姿の神々しいまでの美しさは
永久に忘れられぬサド的シーンの大絵巻だつ
た。

○ポーレット・ゴダード

“征服されざる人々”で殺人罪で奴隷とし
て買われ、云う事をきかぬと両手首を綱で縛
られて釣るし上げられて背中中の衣をはがれて
鞭で叩かれ、インデアンに捕われて大の字に
木へ縛りつけられて、女共に衣をズタ／＼に
されて火あぶりにされんとした。

○ヴァージニア・グレイ

“ジャングル・ジム”で、人に捕われ引立
てられて石の室へ入れられ後手に縛られ更に
投げ出した両足まで結えられて壁によりかゝ

つたポーズ一寸よろし。

○ジエーン・ラツセル

「腰抜け二挺拳銃」インデアンに捕われて後手に木を抱いて縛りつけられた姿は艶なるものあり。「ならず者」で革紐で両手を拡げて縛りつけられ、水にぬれて締まる縛めに苦悶するポーズ又艶。

○ヴァージニア・メイオー

「虹を握む男」の彼女の縛られてもがくシーンにはたしかによかったと僕も思います。

「姫君と海賊」「快傑ダルド」鎖をつけられたただけが悪くないポーズが一寸ありました

○フレンダ・ジョイスと四人の美少女

「ターザンと豹女」で邪教団に捕われ、彼女が綱の細いもので、ボーイも同じく、四人の美少女達は紐やら布やらで、皆な後手だが交叉したのも、だらりとしたのもで、だらしない。女性はやさしくあつかうのか。

○ジューン・デュブレ

「バグダットの盗賊」で悪人に捕われて金綱へ全身グル／＼巻に縛りつけられた珍らしい縛り方。そして細紐で後手に縛られて連れ去らんとする。×印に縛らないのがアテラの特徴。

○アリーン・ロバーツ

「武装市街」で人質としてさらわれて情婦に「やかましい」とタオルで猿ぐつわを噛まされんとして狂気のように泣き叫ぶ姿は見事、車上に両腕を前で縛られて猿ぐつわの姿は、かなりひどい見せ場だった。

○カルラ・デルボツジョ

「荒野の抱擁」でギヤングに捕えられて、叫ぶ口へ猿ぐつわ、寝かされて全身グル／＼巻に縛りつけられたり後手に目かくしのまゝ果もなく歩かされる。悲惨なる姿が美しかった、思い切った責めを見せてくれた。

「ファビオラ」でのキリスト信者の集団虐殺シーンは凄惨。十字架に、或は後手の男女の体をぶつ／＼け合い、火あぶりの刑あり、猛獣の前へ投げ出され、杭に縛り矢で射殺し縛られて煙に咽ぶ女、泣き叫ぶ女、何れも美しかった。「十字軍」の中の奴隷にされた女達が鎖でつながれたシーンも、外国ならではの見物だ。

○モーリン・オハラ

「バグダット」で縛られ「ノートルダムの侑僮男」では後手の身を裁判にかけられ、刑場に引かれての哀れな役、「巖窟の野獣」では第一回主演の少女が信じた人の余りの残酷に呆然とするのを美しい唇へ噛まされる白布

の猿ぐつわ、もがく両腕をぐいと背へねじ廻されて布紐で縛りあげられ、頭からスツポリと外套をかぶせられて顔だけが見え、頬を噛む猿ぐつわ、馬車から船へ外套の上から後手を掴まれて、逃れんとして後手のまゝ扉を開ける手の美しさ、可憐さ。

○ワンダ・ヘンド・リツクス

「追はぎ」危いこのワナの中へ恋人がくる知らせたいが後手の猿ぐつわの身をもがく、背を撃つのを知りながら後手の不自由と戦って指先を引金にかける。「ダーン」と一発、必死の姿は美しかった。

その他「絶海のターザン」「轟く天地」「凸凹ハレムの巻」「海の無法者」「地中海の虎」「砂漠の鷹」「女海賊アン」等々あり。昔の連続映画で、或は、「暴君ネロ」の残忍な場面は思い出しても浮かんで来ないが多くの女優達が縛られていたシーンが沢山あった。同好の志から映画の題名や、その場面を聞いてみたい。動く責め場の美しさを誰か十分に教えて下さる人はいないものか？

◎編集部宛へ御教示下さった方々へ厚く御礼申し上げます。次号に発表いたします。



風流猿轡

吾妻

新



前号「サディズムの精髓」で述べたようにサディズムの本意は単純な肉体的苦痛よりも精神的な凌辱感をあたえることにあるのですが、その場合に、緊縛と猿轡がもつとも重要となります。

縛ることは手足の自由を奪い、猿轡は声の自由を奪います。どちらも、それ自体が激しい苦痛を目的とはしないのです。それは、苦痛を与える前提として、まず相手の抵抗力をうばうことなのですが、ちょうど美食家が栄養をとるだけでは満足しないように、洗練されたサディストはこの準備行為を十分に楽しむことを知っています。なぜなら、サディズムのいちばん深い要素は肉体的苦痛でなくて心理的な汚辱にあるからです。

とくに猿轡は、手足を縛った上の仕上げであるばかりでなく、視覚、聴覚、嗅覚のすべてを満たすので、妙な表現ですが、きわめて高級なデリケートな操作です。支那料理でシユーマイを食べればその店の腕がわかると云いますが、私には猿轡のかけ方をみればその人間のサディズムの程度がわかります。つまり誰にでもできるが、その差はさまざまなのです。

たとえばヨーロッパやアメリカのサディズムを考えてごらん下さい。鞭打といえど血が流れて失神するほど打つ。残忍で野蠻で単純無味です。こういう粗野な感覚では、猿轡の技巧は発達しません。多くの史実、好色本を含めての小説、絵画、写真などをみても猿轡

の使用はむしろ例外になっています。また僅かな実例をみても、ただハンケチを円めて口につつこむとか、歯と歯の間を紐で縛るとか実用一点ばりです。どの感覚のよろこびを無視しています。稀に念の入ったものもありますが、私がこれから述べるようなのは不幸にして一例も知りません。

まず視覚の点から言うと、猿轡に使う布は手拭やタオルでは面白くないので、できるだけ汚れたものを用います。本誌の読者はその道の達人が多いとみえて、こうした心理効果をよく知っており、汚れたパンティやズロース、褌などを描写していますが、これは美しい口を汚辱する心理を裏付けにした視覚の快楽です。同じ理由でそれはなるべく巾をひろ

く、鼻まで包んでしまうことが必要です。鼻と口が掩われ、眼だけが物を言うときにその眼は最も魅力を発揮します。

次に聴覚ですが猿轡は物を言わせないためであるに拘らず、実際には声を立てることができるので、またそれであればこそ意味があります。言葉にならぬ言葉、うめき声などは邪魔どころか、なくてはならないのです。だから後に述べるように、わざとある程度の声を出せるように口の中に含ませる布を加減したり、それを中心としたいろいろの遊びを工夫したりすることもあります。

嗅覚はおそらく最高級の技巧で、これまで配慮すれば申し分ありません。それには口につめこんだ布の汚れた部分を引き出して上に折り曲げ、鼻のすぐ下にあてがうようにしてその上から掛ける布の最も汚れた位置を鼻にくるように縛るのです。ただ上の布だけではすぐ汚臭に馴れてしまいますが、鼻の下に厚い布の部分があると、上の布との間にかすかな隙間ができて、若干の空気の流通が行われるためかえつて臭気が刺激します。また汚臭は鼻の上からかけた布では大半がそこに逃げてしまいますが、それに包まれた鼻の真下にあるものは臭気がこもるのみでなく、発散す

るのは鼻翼の間を通つて行われるので、どうしても嗅がないわけにいかなくなるのです。妙な説明で興覚めの方もあると思いますからこの種の話はこの程度にしておきましょう。

先年、同好の士数人とZ談（低級平凡なY談と区別するため我々はこう呼んでいます）をした際、縛りと猿轡を中心として即席の川柳をつくつてみようということになり、その場で数十句できました。なにしろ即席であるし、主題が主題ですから、技巧に難のあるのはもちろん、一般人に意味の通じないものもあります。縛りの方はまたの機会として、猿轡のものだけ拾つてお目にかけましょう。いずれも同じ程度の人間がつくつたのでネタイは似たようなものですが、テクニクを分けてならべてみます。

鉄瓶がわいてそろそろ仕度をし

これは専門的部類にぞくします。鉄瓶の湯が沸騰したとき、布の汚れた部分を湯気にしばらく当てるのです。すると適当に湿り且つ暖まります。これですばやく縛ると、その臭気は百パーセントに感ぜられます。

じつとりと汚してはめる猿轡

いい匂い嗅がしてやるが前座なり
これも同異曲。

禪で眼千両を楽しんでいる

説明の必要がないと思います。絵画巧的情景です。

猿轡ちつとは声を立てさせる

上の布を弛めるのではなく、口の中の布を少くしてやります。

弛めてはいいい声を聞きまた縛り

解いてくれるのかと、ほつとして詫びたり泣いたりするのを楽しんでから、また縛つてしまふ。

あやませ声の途中で布を出す

これはまだ猿轡をかけていない状態。あやまつているのを耳にもかけず、ゆつくりと準備するのを見せつけるポーズ。

うつくしい眼が細くなる猿轡

他のある行為が伴つていることを暗示しています。猿轡だけで眼が細くなるのではない。歓喜か苦痛かは想像自由です。

叩いては眼であやまらず猿轡

それ以外に意志の示しようがありません。

キツスしてすぐまたはめる猿轡

自由を奪つておいてむりやりにキスすると空想されてもかまいませんが、これはやはり素直に愛情の表現と解釈したい。即ち、合意の上で洗練されたサディズムをたのしむ夫婦にみられる図です。

責め道具夫と妻のもので足り

夫の鞭、妻のズロースや靴下。

猿轡はずすは飯のときばかり

こんな長期刑もあるかもしれません。

猿轡かませ返事をせぬと打ち

口実はいくらでもある猿轡

いくども聞きとれないと責め立てる
免れぬ罰はかませて歌わせる

責める条件として完全に利用しています。

できないことを強いるのだから、どこまでも逃げる道がない。しかし心理的サディズムには常にこのような理由づけが必要となつていきます。だからこの場合には多少は声を出せる

ように縛ります。それでも発音は絶対に不明瞭なのだから、刑罰は確実に実行されます。必死になつてしやべろうとする相手の努力の無残に裏切られてゆくプロセスが興味をそそります。

ひと声が十分づつのおきてなり

これは、十分ごとに猿轡をはずして休ませてやり、また掛ける。時計を眺めて十分後を期待する気持と、ふたたび新たな凌辱を加えられる苦しみとを利用した、精練されたサディスティックな技巧の一例。

じぶんで縛る自由だけが与えられ

これは既に相手が完全に奴隷化してしまつた場合にのみありうることです。つまり、どんな命令にも反抗できなくなつており、反抗すればそれ以上のひどい折檻にあらうことがハッキリわかつている場合。「さあ、これでやるんだ」と汚れた布を出され、自分でそれを口に押しこみ、その上から猿轡をかけるのです。少しでも弛くしたり、汚れた部分をずらせたりしたら手酷く罰せられます。彼女はこうして自分の手で自分を凌辱した上、ユツクリと手足を縛られねばなりません。ふつうの

順序と逆なやりかたの可能なことにスリルがあります。

さて、このような例を見てもわかるように猿轡は単に言葉の自由を奪うだけでなく、あらゆる角度からさまざまに利用できるので、あたらしいサディズム（残忍で反社会的な犯罪の危険のあるものを古いサディズムとすれば）の最も興味ふかい分野にぞくします。そして私はいつも強調するのですが、これらはできるかぎり合意の上で行われる快楽でなければならぬのです。サディズムがそうした個人間の私事であり、しかも肉体的危険がないかぎり、公衆にも社会にも害を及ぼさず、むしろ人間の獣性を洗練された形で昇華することができます。

縛ることや鞭打についてもへたな川柳が集まつていますから、そのうちにお目にかけることにします。

次号は

吾妻新

「風流責百態」

人 獸 交 婚 談

異 婚 抄

山 崎 浩 平

(蛇)

今年が蛇(巳)の年だから、というわけではない。日本の文学史の上で、蛇は人獣交婚の第一頁に記されているのである。

崇神天皇の叔母に当るヤマトト姫とも云い、又、セヤタタ姫とも云う。夜な夜な訪れる夫は、夜闇に乗じて入り来たり、朝明けを待たずに帰るのが常であつた。姫は一度夫の姿を見たいと願つたところ、後朝に彼女の櫛笥の中に、下紐位の大きさの蛇になつて現れた。

「驚きなさんなよ」

と念を押されていながら、姫は思わず悲鳴を上げた。男は忽ち人間の姿に還つて飛び去つた。後悔先に立たず、姫は箸で陰を撞いて死んだという。

此の話は性心理の発生史学上から考察すれば面白い内容を持つていようである。蛇は言う迄も無く男根の象徴であり、女性の経血や処女膜出血が、蛇の咬傷であるとする解釈も、神話の分析に取り入れられている以上、其の線に沿つて説明すべきかも知れない。

然し、是れで一応此の話柄を紹介したに止めよう。

安珍清姫の説話で蛇は女性にも姿を現わす事になつた。雨月物語の真女兒は、女性の蛇として最も恐るべくも好色な一例であろう。

紀州三輪崎は今の新宮市に含まれる。此処に何時の頃か、大宅の竹助という漁師が住つていた。男子三人女子一人に恵まれ、裕福であつたが、三男の豊雄は賢くもあり風流心があつたので、父は彼を神宮の安部の弓麿に学問を習わせた。

九月も末の或る日、師の家から帰途俄か雨に降られた豊雄が、近所の漁師の家へ寄つた。漁師は恐縮したように云う。

「若旦那様、むさ苦しい所ですが」
豊雄は

「構わずに」

と言つてゐる所へ門口に影が射した。

二十になるやならずの美女が、十四ばかりの少女を伴れて雨宿りしている。豊雄は自分の持った傘を彼女に貸してやつた。女は、

「新宮のお社近くの県の真女兒とおたずね下さい、御親切を頂きます」

と艶やかに愛想笑いをして去つた。思わず心も空になつた豊雄の其の夜の夢に、彼女の家を訪ねて大層もてなされ、一間に入る所で

目覚めた。

翌朝起きるなり新宮を探し廻つた末、小女に出会つて、豊雄は妖夢の通りにもてなされた上、互に愛情迄交し合い、金銀で飾つた太刀を元の主人の持物と言つて、彼女から貰つたのである。

翌朝の事である。昨夜は何と言つても生れて初めての快楽に浸つて豊雄が、つい寝過ぎたのを起しに来た兄の太郎は枕許に輝く太刀を見とがめた。然し彼は、兄には勿論のこと父母にも真実を告げず、さる人より記念に、と答えたゞけである。嫂にだけ事実を語つた太郎は妻から聞いて不審を持つた。

国司の下役で県のなにがしという名にも心当りが無い上に、太刀が立派すぎるのだ。

兄は、よくその太刀を調べた。と、それは都の大臣から新宮への献上品で、盗まれて問題になつていた品だつた。

太郎は早速父と相談の上、役人に届出たので、豊雄は縄をかけられ、真女兒の家へ案内を命じられた。来てみると、不思議なことに真女兒の家は門の柱も朽ち腐れ、軒は傾き壁も落ち、人の住むべきものでは無かつた。役人が入つて見ると、奥深く一人の女が坐つてゐる。

「国司様のお召しだ、直ぐに参れ。」

と引立てようとする、不意に天地も砕ける物音と共に、女の姿はかき消すように消え数々の美麗な織物や楯劍の類など、何れも宝物の盗まれたものの許りが残つてゐた。

豊雄は長く牢に繋れたが、彼の罪と許りも言えないし、父や兄が役人に賄賂を贈つたので、許されて大和の姉の家に預けられた。

義兄夫婦の家へ、真女兒が訪ねて来た時は豊雄も恐れと驚きに逃げ隠れたが、女は、「あれも貴方をお慕いする一念で、急に家も破家に見せかけ、何かと謀で役人を脅かした迄の事、私は貴方に会いたさに神詣でに日を暮してゐました。貴方はそれに——」

と、泣くのである。まず義兄夫婦が同情し取なしたので、もともと豊雄も真女兒の容色には迷ひかけた程であるから、二人は婚礼の式を挙げる事になつた。

吉野への旅の計画を義兄が立てた時、真女兒は出沒つた。それも道理、名高い滝の辺りで、一人の翁に会つと、真女兒主従は忽ち滝に跳び入つた。驚く豊雄に、翁は、あの女は牛と交つては鱗を馬と構つては龍馬を産むという、極めて淫蕩な蛇の化身である、と教えた、恐れ戒めて豊雄は郷里へ逃げ帰つた。

間もなく芝の里の芝の庄司の女で、大宮の采女であつた富子と縁談が起つた。宮仕えしただけに富子はなかなかの美容である。彼も満足して妻とした。

二日目の夜、寝物語の最中、彼はふと変な事に気付いた。妻の声が真女兒に似てゐるのだ。よく見れば、艶やかに笑つた口もととは、正しく真女兒の癖である。

翌朝明けのなり道成寺の法海和尚を迎えて相談すると和尚は豊雄に袈裟を与えた。

彼は閨に入るなり袈裟で女子を押伏せた。和尚が念仏を称えろと、女の胸の上に、三尺程の白蛇が蹲つてゐる。それは和尚が鉢に入れて埋め、以後豊雄は無事に暮した。

畠の畔で仮寝する農婦の陰に、蛇が入り込んだ、というような話は単なる好色ではなく穴居を好む性質からであらう。

(狐)

月の美しい秋の夜である。豆畑の畔に小豆飯と油揚げを置いておけば、狐が其の人の家を訪れ、戸をほとほと叩いてけんけんとう鳴くという。その礼として、豆の収穫がよいという。現代でも筆者の地方に行われている習俗の一つである。狐が徘徊すれば、兎や野鼠

が近付かないから、豆がよく出来るのである。と、筆者は解釈している。次に物語るのも月明の夜ではあるが、平安朝の言い伝えである。

一人の若侍が、月の美しい都大路を歩いてきた。二条辺りで、ふと彼は言いようもない良い香りの漂うのに辺りを見廻した。

崩れかけた築地の蔭に、被衣姿の若い女性が立つていたのである。香りという姿といふ彼は魅せられたように築地を乗り超えて女に近付いた。女は手を取られて始めて気付いたように、逃げようとして抑えられた。

「何も申しません、唯一度、貴女のお情けを頂きたいものです」

男は女の手を握り締めて囁いた。冷たい手であった。女は、うろたえて、

「いゝえ、許されぬ身です、お見逃しを」と低声に言う。

皇居の近くで物盗り火放けの絶えぬ時世であつたから、何れ此の女も盗賊の思ひものか何かだろうと、男は気付いた。

「いや見逃すには貴女は余りにも美しすぎる。」

慾情に燃え立つた若侍の顔を、女はやゝ目尻の切れ上つた美しい瞳が見た。

「貴方様には一時のお戯れ、私には一生の終り、それでも貴方様はお許し下さらぬ。」

女も体が少しづつ震えていた。強ち恐怖許りでは無いと見えた。男は彼女を抱き寄せると、草を分けて破れ朽ちた古家の縁に上つて行つた。

その翌朝、草叢に一匹の狐が死んでいた。

顔の上には男が昨夜与えた扇子が拵けてあつた。一夜の情けに、女狐の命は絶え、萩の花がいつまでも微風にそよいでいたのである

(馬)

あすこの偉大なること、馬敬礼の如しと称する。馬でさえ頭を下げるほどだ、という意味である。馬に変じた夫を人間に戻す時、妻が神仏に、あそこだけは馬のまゝで、と願う笑話は、洋の東西を問わぬようである。

一方、筆者は嘗て馬が黒人に犯されて生んだという、顔は黒人で、胴四肢が馬という怪写真を「歴史写真」で見た記憶がある。

見世物に人が牝馬と交つて見せた記録も有るといふ。それ程馬は人間生活に縁が近いのである。

中国に伝る話を一つ述べる。

張という男が馬に乗つて旅をした。背に跨

つて行く程に、股に当る馬の背の感触が、揺れ具合と相俟つて、張は思いがけないことに悩みながら、又快く思いつく揺られて行つた此の心が馬にも通じたものか、帰宅して馬を繋ぎ、さて家に入ろうとすると、牝馬は彼の袖を咬えて引き止め、果ては腰を寄せて怪し気な姿態をさへ示すのである。

家人が驚いて張の袖を切り放すと、誤つて手綱迄切つて終つたので、馬は何処とも知れず走り去つた。春の夕暮であつた。

是れで済めば何でもないのだが、こゝに後日談がある。

張が此の日の淫心を思い出しては独り恥じている内に、月日が経つて秋になつた。

一日、家人が厩で騒いでいる。張が怪しんで見に行くと、美しい女が佇んでいた。

女はろくに口を利かないのに、張を見かけると、急に羞恥の色を浮かべ、首を垂れて上目使いに彼に何か訴える風情である。

張も其の姿に心を動かされ、妾の一人に迎えてしまつた。

二人の間は毎日楽しい口説が続いた。

すると或る事、何故か春の初めから女は物憂わしげであつたが、俄に故郷へ帰らせてくれ、と言ひ出した。然し張は深く女を愛して

いたので其の願いを許さなかつた。

女は暫らく身を震わせて泣いていたが、いきなり、

「とう／＼お別れの日となりました」

と言うなり、馬の姿になつて駈り去つた。

馬の背で慾情する話では、日本にもこんな話がある。

京から近江へ向う道で、馬背の揺れ心地に唆られた男が、とう／＼堪り兼ねて有名な近江燕を一本抜き、小刀で抉つて女陰を形どりやがて捨てゝ行つた。

するとその燕畑へ収穫に来た少女の一人が奇妙なもの、と言いながら其の燕のうろたひたのを掻いて食べた。

女は未通女のまゝ妊んだという。

(犬)

後家さんやお妾さんは犬を可愛がる。或は空圖を啣ち、或は旦那の足の遠のいた夜のつれずれに、抱き寝するのだ。是れはいみじくも馬琴先生が八犬伝で説いているところで、伏姫は道ならぬ快樂に耽つた余り、八房の死骸を枕に我と我が腹真一文字に掻切つて、膨張した腹の始末を付けねばならなくなるのだ

次に紹介するのも犬に絡まる昔話である。

或る男が北山を越えて遊びに出かけ、道に迷つて日が暮れた。彷徨数時、谷川の近くで小屋を見付け、助けを求めたところ、二十ぐらゐの女が出て来た。わけを話すと、氣の毒がつて泊めてくれる事になつたが、たゞ旅の人では主人が承知せぬ、私の兄になつて下さい、と女が言う。そこで其の手筈で主人の帰りを待つた。

女は問はず語りに身の上を話した。里に住んでいる内に、怪しいものに捕えられて此の山中に同棲しているというのだ。そこへ主人が帰つて来た。男は一目見て吃驚した。というのは、その主とは大きな白犬だつたのである。

女は夫に、兄がたま／＼山道に迷い、小屋を訪ねて来ました。是れが兄なのです。と男をその犬に紹介する。男も止むなく口を合せると、犬は怪しみもせず、臥転んだ。

女は食事の仕度が出来ると、夫と男に食わせ、やがて女と犬とは奥へ入つて同じ床に寝てしまつた。

翌朝別れ際に、女は男に固く口止めした。然し咽元すぐれば熱さを忘るゝが人間の常

である。男は京へ帰ると、会う人に此の話をした。面白がつた人々は弓矢や杖を持つて隊を組み、男を案内に立て、北山へ分け入つた。小川の辺りにやはり小舎が有つた。すると氣配を察した犬は、女を先に立て、跳ぶように逃げ去つた。

それから数日して、男は不快を訴える内に死んだという。

察するに女も久しぶりに見た人間の男故、肌身を任せたかも知れず、それだけのもてなしを受けながら裏切つた男だから、罰が当つて死ぬのも当然なのであつたらう。

(河 獺)

岡本綺堂先生の半七捕物帳に、河獺が向島で人の財布を奪い、重味で却つて紐に首を絞められて死ぬ話がある。老人を襲つて金を取つた河獺も傑作だが、是れは強姦した話である。

中国には便所がない。そこで彼女も家を出て、用足しの場所を探した。野原へ出た。

彼女というのは当時二十の美少女である。その留守の間に許婚の男が訪ねて来て、彼女を待つていた。すると、変な方角で女の悲鳴が聞える。驚いて探し廻ると、女は野原で

小穴へ足を突込んで救いを呼んでいた。

抱き起しても、彼女は口を開かない。それは泥を口に詰められていたのである。ところで穴の中には誰かが引張つてゐるかのようにな女の足は仲々抜けないのである。大勢聞き付けて集つた人々の力で、やつと救い出したが女は泣き叫んで「河瀬に肌を狙われた。もう駄目だ」と繰り返した。

翌晩も彼女は用を足しに出た。すると河瀬が拐つて行つた。

昨夜の事も有るので、人々は直ぐ追いかけたが、遂に見失つた。

翌朝、改めて探しに出た人々は、川べりの岩の上に、唇は吸い破られ、性器は掻き撈られた女が、死んでゐるのを見付けたゞけであつた。

(猿)

好色な老人を狒々爺と悪口する。猿の好色は岩見重太郎の武勇伝に名高いが、こゝにその原話を伝えよう。

昔、美作の国に、中さんという神があり、猿であつた。年毎の祭には娘で美容のものを

犠牲に奉る事になつてゐた。その年も選に當つた娘が親子の別れに泣き悲しんでゐるところへ、旅の者が獸を求めてやつて来た。

思うに皮を商いとしてゐるので、獲り歩いてゐる男であつたらしい。話を聞いて男は、「命を大切に思うから神も恐れ多いもの、私にその娘さんをお預けなさい。どうせ殺されようとする位なら、犠牲に出さず、私に預けなすつてもよろしかろう」

と熱心に言う。親も何れ殺される娘なら誰に預けても同じことと諦めて、やつてしまふ。さて男は其の娘を見に入ると、ふつくらと愛らしい、祭迄の命と知りながら手習をしてゐる憐れさ、而もその紙に時々涙が散る可憐さに、男は咄嗟に決心する。命に代えても此の娘を助けてやりたいと思ふのである。

祭の日迄の四日間、男は娘を愛撫する傍ら猿を殺す工夫に一心を凝らした。

やがて当日、貴女の命に代りますよ、と男が言へば、女はしみじみ泣くのであつた。

男は女の入るべき檻に入り、愛犬と刀を抱いて待つてゐる所へ、猿が何十匹と神殿に集つて来た。中にも真白な毛に蔽われ、顔と尻だけ真赤な大猿が、檻の蓋を取るや否や、犬は猿共に喰ひ付き、男は大猿を押伏せる。

思わぬ椿事に神主どもは騒ぎ罵る内、一人の神官に神が乗り憑いた。

「きよう限り犠牲は求めぬ。命を助けよ」

と言うのである。男は、今迄人の命を数多取りながら、と腹立つたが、止むなく許してやる。そして男は娘と夫婦になり、長く其の地に止つたという。

以上の他種々の説話乃至は実話もある。然し余り現代の事実を挙げるのは差し障りあるので簡単に述べよう。

女で犬を愛撫するのは先にも述べたが、単に犬に口淫を行わしむるのみでなく、交接して観覧する例が外国にはある。その種の女の中には、自然に人間よりも犬でなければ満足出来ないものもあつたという。

男では、山羊、羊、牛、犢、馬、驢馬、犬等と交接乃至鶏姦的行為を行う例が多い。

是等は観覧せしめる場合は何れも刑罰に処せられる。

(了)

◎終驗談、告白文は御遠慮なく御安心の上御送稿下さい。あらゆる秘密は厳重に守ります。



淫

みだらび

火

松井 籟子

画・長 玲子

(第四回)

一

玄関の土間に転がされたまゝ、小百合夫人は自分が二つの人間に分離されているような妙な気持とたたかっていた。一つはそうしてスリッパ一枚のみじめな恰好で、冷たいコンクリートのたたきに、病い犬のようにうずくまっていたという思いだった。もう一つは早く起き上つて、誰か見ているだろう此の醜態のしまつをつけないといけないという羞恥だった。しかし、その場の処置を急にどうなりようもなく、困る気持が一番多く、泣き

出したいような小百合夫人の体の上に、ふわつと何かかけられた。はつと思うと、次の瞬間に、そのかけられたものが何であるかという詮索より、煙草と髪油の匂いの入りまじった、いわゆる男くさい匂いが鼻をついた。そして、それが誰とも知らないが、男のスプリングコートであるのを知ると、男のたくましい手で助け起されたのと一緒にだつた。

「とに角、その恰好じやしようがない。こつちへ来なさい」

男は村山ではなかつた。

黒いワイシャツにエンジのネクタイをしめている。地廻りのあんちやんというよりは芸術家らしい。この辺にいらしたら下廻りの俳優か、街頭画家か、何にしても、労働者や普通のサラリーマンのたぐいではない。

しかし、とつさに小百合夫人がそんなことを考えたのではない。ただ、村山ではないと思つただけだ。そして、都会人らしい早い頭の廻り方で、特別に観察しなくても、漠然とその位の判断がつくといえまい。

「僕が洋服をとつて来てあげるから、まあ僕の部屋へ来て待つていなさい」

男は小百合夫人がずるずると引きずられて通つた廊下を、もう一度もと来た方へ戻ると、途中から二階へ導いた。二階にも小部屋が二つ三つあるらしかつた。

小百合夫人はだまつて男のあとに従つた。何にしても、スリッパ一枚では外へ出ることも出来ない。幸い女が投げ出してくれた風呂敷包みの中には、コートとハンドバッグが入つてゐる、ハンドバッグの中には、ドレスを買う位の金はある。しかし、スリッパの上に

コートを羽織つて外へ出るにしても、とにかく風呂敷包みをあけてコートをとり出して着るということが、玄関先の物見高い人の目の前で、どうしてゆうゆうと出来るだろう。

男が自分のコートを着せかけてくれた、突嗟の機転で、どうなることかと好奇の目を光らしていたその家の人達も、一応この場はその男にまかせておけばいゝと納得したように、しいて口を入れるものもなく落んだのだ。或いは中にはその男の親切を、村山の情婦の乱暴よりは危険に思つた者もないではないだろうが、男の顔がきいているのか、どうせはひらひらと沼に落ちた一枚の木の葉の様に濁つた水の中でその色の美しさを氣にとめてみてもせんないことなのかもしれない。

通された部屋は、下の部屋より少し上等なのか、ふしの多い床柱ながら一間の床の間もついている六畳程の部屋だつたが、しやれた電気スタンドとまではいかないのか、真中に下つてゐる電気の笠に風呂敷をかけて薄暗くしてあつた。雨戸もとざされて、人絹らしい布団が幾分なまめいて敷かれてある。見れば掛布団を衾まで深々とかけて、寝乱れた髪の水の顔がのぞいてゐた。

見てはいけないものを見てしまったように、小百合夫人は視線をそらして、部屋の入口に小さく座つた。

「あんた！」

女の罵声が寢床からとんだ。

「あんた！」と一声、かみつくように投げてはみたものの、女はあとにつゞく言葉が出ないのか、食い入るような瞳で男の顔を見ていたが、その声に似合わず起き上ろうともせず

「あんまりだわ」

と、男をとがめた。

「何があんまりだ。わけも知らずに又喧嘩を売る気か？」

男が言った。

「何さ、男のくせにまわしをとるの？ え？ いったいどこの部屋へつれこんでいたのよ、そのひと……」

女は言葉の激しさに似合わず、動こうとしない。

小百合夫人は自分を救ってくれた男の為に、どう弁解したらいいかと思いまごついていると、男はつかつかと寝ている女の上に、布団の上から馬のりになると、ビシヤツと女の頬をひっぱたたいた。

「痛い！」

と女は叫んだが、上から押さえられているので手も出せないのかただ首をわずかにそむけただけだった。

「まわしをとるとは何だ？ 気をつけて口をきけ！」

「そんなら何よ、あの女……。ちよいと、あんた！」

女は小百合夫人の方へ顔をねじむけると、

「一寸、その外套はね、私が作つてやつたコートなのよ。ぬぎなさいよ、あんたなんかに着せる為に苦労したんじゃないわよ、安つばく着ないでちょうだい！」

「バカ！」

男の手がもう一度女の頬にとんだ。

「さつきから言っているじゃないか。わけもきかずに変なやきもちやくな。この人は……」

男の説明を聞きもせず、女はみるみる涙を一杯に浮かべると

「ぬぎなさいよ、早くぬいでよ。私がなければなしのお金で、自分のものもつくらずにやつと作つてあげた外套……」

小百合夫人の方へ顔を向けて言うのだった。

それにしても、それだけ口で強く言うのなら、布団の上からまたがつている男を、下からはねかえす位出来そうなものなのに、依然として言葉だけで身動きもしない。そして、恨むように見はつた目に、泉が湧くように、涙がにじみ出しているのだ。

その涙にぬれた顔を見ると、小百合夫人は女同志として、その女の男に対する深い愛情の様なものに胸をつかれた。罵られたのかかわらず、何かしらん、女のやきもちに胸をつかれたのだ。いつの日、自分が夫に対して、こんな風なやきもちのやき方をしたことがあるだろう。罵りさわいでいる女と、それをまた思いやりもなくひっぱたいている男の情愛のあり方が、おかしいと思うよりふどうらやましかつた。けれど、そう思えばよいに、女が気にしている外套をそのまゝはおつているのはばかられた。

「すみません」

小百合夫人は小声でいうと、外套を肩からはずすより仕方がないスリッパ一枚の丸い肩があらわれた。

男はそれを見ると、馬のりになつていた体をなおして、小百合夫人に近よつた。

「いいから着ていなさい」

そう言つて、小百合夫人にその外套をかけ直した。

「こいつにはかまわなくていいんですよ。今、僕があんたの洋服をとつて来てあげますからね」

立ち上つて出て行こうとする男を

「あんた！」

もう一度女はよびとめた。

「あんまりだわ、あんまりだわ」

「そう言いながら、布団から転がり出て来た女の姿を見た時、小百合夫人は思わず、

「あつ！」

と言ったきり、息がとまるような気がした。女は一糸まとわぬ裸体だった。

その上に、後手に細引で縛られているのだ。乳の上下にまわされた縄は二つの腕をくぐらせてしつかり肉にくいこんでいた。蜂のように胴はくびれて、幾すじもの縄が荷物を縛るようにかかけられ腰のふくらみはその為によけいに大きく見えるようで、更に腿の所で再びギリギリと、足首まで棒のようにくくられていた。女が一寸も動かなかつたのはこのせいなのだ。

女はただ転るだけしか動けないらしい。それも布団から、畳の上へ転り出すことは出来たが、平な畳の上では転るだけのはずみをつけるのが困難なのか、荷物のように横たわって、声だけに一ぱいの恨みをふくめて

「この縄といて頂だい。厭よ、こんなに侮辱されて、この上縛られているのなんか厭よ。といて頂だい！」

そう男によびかけた。

男は小百合夫人の前に、急にあらわにしてしまった女の惨しい裸体を困ったような、はにかんだような妙にゆがめた顔のまゝ、急いで抱き上

げて、布団に戻そうとした。

「厭よ、厭よ」

女は自由のきかない体でもがいた。「強情っぱり。どうして俺のいうこと

「玲子」



を静かに聞こうとしないんだ。じゃ、そうしてろ！」

男は畳の上へもう一度女を放り出すと、

「俺はこの人の洋服をとつてくるからな。わけはこの人から聞いてくれ。何もお前がやきもちをやくようなことではないのだ」

そう言いおいて、出て行つてしまった。

小百合夫人は女に近付いて、その縄目をといてやろうと思つた。

どういうことで、そんなめにあわされているのかよくは解らなかつたが、理由は何にせよ女は男の愛人が情婦らしい、その女がといてくれと云つているのに、男はとかずに行つてしまった。自分がいいいかに悪いかわからない。しかし、素裸で縄目の恥に身もたえする女を前に、どうして自分が平気で座つていることが出来るだろう小百合夫人はおすおすと女ににじりよつて、その縄に手をかけようとする、

「何するのよ」

女はするどい声でとがめた。

「あんたにほどもうもらうなんて思つていないわ。私の事なんか放つておいてよ」

女は体を無理に動かそうとした。しかし、ぐるぐる巻きのその体はただ芋虫が蠕動するように動くか転るより他に動きようがない。大体女というものは同性の者に自分の裸体を見られるのを厭がるものだ。しかし縛られた女は小百合夫人の目から自分の身をかくす術がなかつた。ただ僅かに転るように彼女に背を向けた。後手に十文字に縄をかけて縛られている手首が痛々しく小百合夫人の目を射つた。丸い大きな白い尻に、みみずの這つた様な痕が幾すじもあつた女は自分で縄をゆるめようとするのか身もたえした。女が身もたえ

ると、その痕が生きた虫がくっついていっているように蠢いた。その虫をまるではいら落そうとするように女の尻が動く。動いても動いても赤いみみずのような虫は女の尻にとりついて、生血を吸っているようにはなれない。何でつけられた痕なのか、小百合夫人は身がしまるような気がした。

「あんたはこんな風にされたことない？」

後向きのまゝ女は小百合夫人に言つた。

「あんた、うぶらしいから、教えておいてあげるわ。あの人ね、女をこんな恰好にしなければ愛せない人なのよ。いずれあんたもこんなめにあうわ」

「違う人です。私、あの方には今はじめておめにかかつたばかりであなたが考えているような者ではないのです」

小百合夫人は必至に弁解しようとした。

「へん。うまく調子を合わせるわね。まあそういうことにしておこう。どうせあの人の魂膽は知れているのよ。あんたまで私をいじめる道具にしようとするんだらう。私を身動き出来なくしておいて、やきもちをやかせるつもりなんだらう。そうにきまつてるわ。でも私、あんたにあのひとをとられる位なら、いじめ殺される方がましだわ。あのひとは恐しい男よ。いじめて、いじめて、いじめぬかれても、女があきらめられないような妙なもの持つている……こんなめにあわされても、しやくだけど私はあいつが好きよ……」

言つている女の声がふるえてきた。女の裸身が粟粒立つてきたのだ。素裸でいられる程暑い季節ではない。同時にスリッパ一枚の小百合夫人もブルツと思わず身ぶるいした。

夫人は男の外套をそつと後から女にきせかけてやつた。そして、

自分は風呂敷包みをといて自分のコートをとり出して着た。女はそのまゝ静かにしのび泣いているらしかった。

小百合夫人は再び此の新世界で、見てはいけないうるものを見てしまったのだ。言いかえれば、見たくて見たくて仕方のないものを見たともいえる。しかし、それは見ていただけで満足出来るものではないのだ。見ているだけで満足出来るなら、まだしも毒は薄いのだ。

小百合夫人は自分をその女におきかえて、体の奥底でめらめらと燃え出した焰に血の色が変わるのだ。淫火というのだろうか。その淫火で焼き殺されてみたくなる。縛るだけではなしに、もつとむごい目にあわされたくなる。体中を這うようにめらめらと燃える焰を追つて、体の外からも火で追われてみたい。煙草の火でもいい、此処が彼処かと思つてしまいたい。右に身を悶えれば右から、左によければ左から、足のさきにつけられる火を、膝を立ててさけようとすれば、そのたてた脚のふくらはぎに……。そして「あつ！」と言つて足をのばせば今度はあしのうらに……。煙草の火だつたら消えてしまふだろうが。ローソクの焰のさきでもいい。体の外と体の内と、両方から燃える二つの焰が自分の身を焼き焦す。泣いて、呻いて、苦しんで、息が止まつたかと思ふような長い分秒を息をのんで熱さをこらえると、次にはく息は荒く大きくなる。その息が正常に復す間も与えられず、再び「ううつ！」と息をつめてこらえなければならぬ。息が苦しくなれば縛られている胸は大きく波打とうとし、縄はよけいに胸を締めるだろう。体中にじとつと油汗が浮いて、真冬でも裸体の身に寒さを思わないかもしれない。

けれど、それだけで満足出来るだろうか。責めて、さいなまれて燃えに燃えた体に最後のとどめをさすように××××××××××

息を引きとるような長い尾を引く呻き声をあげて、そして、天上から地の底へ落ちこんでしまふのではないだろうか。

小百合夫人の想念がそこまでいつた時、夫人の口から思わずやるせない吐息が洩れた。

しかしいつたいこれだけの想いを走らせるのにどの位の時間がかかれたのだろうか。長い時間だつたようににも思われるし、分秒の間だつたのかもしれない。

廊下に足音がして男が帰えつて来た。

今まで静かだつた縛られた女は、男が帰えつて来たと思うと、急に体中を緊張させ泣き声はたと止んだ。

「さあ、これを着て早く帰えりなさい。そこまで送つてあげよう。どうもあんたは此の辺の人ではないようだ」

男は言つた。

「といて頂だい！」

再び女は叫んだ。

「うるさいな。まだそんなことを言っているのか」

「私、あんたにどんなめにあわされても今まで我慢してきたわ。でも、私の目の前で何も他の女に親切にしてやらなくなつていいじゃないの。こんなことしてひどいと思わない？」

「お前はね、一たんこうと思うと、なかなかその考えのぬけない女なんだ。あとでゆつくり説明してやるよ。ヒステリーおこすな、みつともないじゃないか」

「へえ、あんたでもみつともないつてこと知つてゐるの。」

「いゝかげんにしろ」

男はたまりかねたように女を蹴つた。

「玲子」



小百合夫人はその間に手早く洋服を着た。そして考えていた。いつたいこの女は男にい

じめてもらいたい為に荒い口をきいているの

だろうか。おなかの中では何故男が小百合夫人を

その部屋へつれこんだか大方の見当はついているのだろう。見当がつかないまでも、小百合夫人と男の間に、何のとりたてて情事らしいものがないこと位察しているのだろう。それを承知でわざとやきもちをやいて男にくつてかかり、男の暴力を待っているのかも知れない。それとも女と男の情痴の世界が、だんだん爛熟してくると、普通の形では愛が語れず、肉体的に苛めたり、苛められたりして、愛の満足を得るようになり、それが精神の面に逆に波うちかえして精神的にも苛め合わなければならなくなってしまうのだろうか。本末が顛倒して、憎しみ合い、いがみ合つて、心にも体にも傷痕を残し、その上、離れられない情交をつづけているとしたら、随分やりきれないことだろう。

しかし酔つてはいけないと知つていても、酒好きのものが盃を下におくことが出来ないように、小百合夫人は今、目の前に注がれた毒酒が美酒のように心惹かれるのだ。酔うなら酔つてみたいと思う。人の情人を奪う気持はなかつたが、小百合夫人は男の瞳に妙に惹かれた。いや、瞳ではなく、男の体全体から匂い出す性液の匂いの様なものがあつたのかもしれない。送つてくれるという男に、これ以上迷惑をかけずにひとりで帰るべきだと思ふ気持とせめて停留所までも送られたい気持と交又した。

小百合夫人の仕度が出来のを待つて、「じゃあ」

と、男は女の縄目をとくでもなく、そのまま一緒に部屋を出ようとした。

再び女がわめき出したのは当然だった。

「うるさいな」

男はいうと、電気にかけて

あつた風呂敷をとつて、片手にそれをもち、片手でズボンのポケットからハンケチをとり出して持ちそえと、いきなり女の鼻をつまんだ。女はしばらくそのまゝこらえていたが、鼻をきゆうとつままれて、その手をふり払うことも出来ない縛られた身で、息をしようにと思えば口をあけるより他仕方がない。苦しうに口から息を吸うのと、男の丸めたハンケチが、女の口の中へ押しこまれるのと一緒だった。そうして、上から風呂敷で頬がゆがむ程に強く猿ぐつわをはめられてしまったのだつた。

「どうだ降参したろう」

男が言うのに、女はありつたけの力を体にこめて、部屋の入口へ転がつて来ようとする。

「技巧だ」

と、小百合夫人は思つた。女が意識してそう動いているかどうかはわからない。しかし無意識の技巧というものもあるのだ。男の感情をたかぶらせて、虐待しないではいられないようにしているのだ。案の定男はいきなり女を床柱の所まで引ずつていった。そして、何か縛るものがないかを見ていたが、縄はみんな女の体にまきつけてしまつたのか、適当なものもない。



男は掛布団をはがして敷布団からシーツをひっぱり出すと、ビリビリとさいいた。旅館のシーツなのだろうが、引き破つてもそのくらい金がかたがつくと思つてゐるのだろうか。幅太く三四本に引きさくと、それで裸身の女の体を床柱にしつかりとくくりつけてしまつた。すでに体中棒のように縄をかけられてい

る身を猿ぐつわをはめられ、さらに柱に縛られてしまつては、さすがの女も身動きも出来ないらしく苦しうに肩をあえがして、ただ燃えるような目でじつと男と小百合夫人を見つめるばかりだった。

男はそれでも裸身の寒さを思つたのか、まるで床柱と女をしんりの巻きでも巻くように薄い掛布団をぐるつと女の裸身にまいて、上から残りのシーツのきれはしで結んだ。

その間小百合夫人は部屋を出るにも出られず、よけいなおせつかいも出来ず、ただ茫然と、その光景を眺めているより仕方なかつた「とに角出ましよう」

男は小百合夫人を促した。

「でも……」

と、小百合夫人はさつきから相当長い時間を、縛られたまゝでいる女が、更にまだ、そうしてあと何分か何時間か、身動きも出来ずにいたら、どんなに苦しいだろうと氣になつた。

「大変な一幕を見せてしまいましたね、あんたとおあいこというには、僕の方が少し歩が悪いかな」

男は言葉つきをややあらためて、夫人に言う。

「まあ、こういう所には随分変つた出来事が多いんですよ。あいつ

はああしておいても大丈夫、もつとひどいことをしてやることだつてあるんです。さあ、行きましよう。僕はあんたをそこまで送つて又ここへ帰えつて来てほめてやりましよう、それまでお仕置しとくわけ……ハハ、ハハ、」

男はむしろ明るく笑つて、廊下へ出た。

小百合夫人は男の言つた「もつとひどいこと」とはどんなことなのだろうかと思つたがそれまでは聞けなかつた。

階下の帳場で男は直に帰えるから、二階はそのままにしておくようにと念を押して、用があればよぶだろうから、そつとしておけと命じた。帳場の者がそれに卑猥な冗談で応じていた。

一一

外へ出ると夜霧が立ちこめていた。

男は急に言葉少なになつて、黙々と小百合夫人に肩を並べて歩いて行つた。

小百合夫人は今夜の宿のことを考えていた。外へ泊ることわつてある家へ、夜更けて帰つて行くのも変だと思つた。

直に地下鉄の駅は見えて来たが、地下鉄へ乗るつもりもなく、小百合夫人の足は重かつた。

「どちらへ帰られるんですか？」

男の物言いが丁寧になつたのを、小百合夫人は不思議に思えなかつた。そうして肩を並べて夜の街を歩いてみると、今さつき、あの安宿で女を縛りつけて来た男とは別人の様に、静かに澄んだ教養が感じられた。夜の戸外の空氣の所為なのか、夜というものが、人を幾通りにも変化させる魔力を持つてゐるのか、小百合夫人は男に言

つた。

「あたくし、どこか宿をとりたいのです。御存知ないでしょうか？」

女から職業的に誘つてゐるようにとられるといけなと思つて、小百合夫人はわざと慫慂に言つた。

「お宅へは帰えられないのですか？」

「帰えりたくありませんの、今夜は……静かに眠りたいんです。」

男はしばらくだまつていた。何を問ひ、何を聞き出したらいいのかわからない風だつたが、

「みなみへ出ましよう」

と、タクシーをよびとめた。

高島屋の見えるあたり、御堂筋の一角でタクシーをおりると、男は静かな喫茶店へ小百合夫人をともなつた。タンゴのジェラシーがまるで交響樂のように強く、低く部屋の空氣をゆすつてゐる中で向かい合ふと、男は言つた。

「僕にはあなたという人がどうしてもわからない。どうしてもそのコートと風呂敷に包んで、あんな家で、村山なんかと遊んでいたのか……」

「御存知ですの、村山さん？」

小百合夫人は言葉をはさんだ。

「探訪記者かとも考えられるが、そうではないでしよう？」

「ええ」

小百合夫人は微笑みながら否定した。

「しかし、ひとのことを聞くには僕の方をさきに言うべきでしようこれを言つてゐると、とても長くなるのですが、あなたはどう思ひ

ます？」

「芸術家……」

小百合夫人があてつっぽうに断定すると、

「フフ、芸術家……そうですね、たしかに……」

と、ふくみ笑いで言つたが、自嘲しているような笑いだつた。

「近いうちにもう一度会つてくれませんか？ 今日御存知のよう

に、そういつまでもあいつを放つておくわけにもいきません……」

そう言いかける男の言葉に、瞬間、小百合夫人の胸に熱い棒が突

きとおつたような感じがした。こんな感情はじめてだつた。もし

かしたら、これを嫉妬というのかもしれない。そう思うと、小百合

夫人は顔があからんだ。

はじめて会つた男、どこの誰とも知らない男の情事を嫉妬するな

んて、おかしいことではないだろうか。女は嫉妬深いという。あか

の他人に嫉妬するほど嫉妬深い男はいないのだから。これを女の嫉

妬深さというのだろうか。

小百合夫人はその男が、これから新世界のあの宿屋へ帰えつて、

床柱に縛つてきた女の縄をといて、どうやつて愛撫するのかと思う

と、それを何かしら汚濁した水の悪臭のように顔をそむけたい気

持と、妙に惹かれる気持と交錯したものを感ずるのだ。

「僕にもし天賦の職業というものがあつたら、それは画かきです。

しかし、口をのりするものが職業なら、それは又別にあります。あ

したと言つても無理でしょう。一週間目の夕方此処で会つて下さい

あなたの宿屋は此の近くに僕の知つてゐる家がありますから、今、

名刺を書いてあげましょう。僕は顔を出したくないのです。」

そう言う男は立つて行つてカウンターから紙とペンをかりて来

た。

「判はないけれど、僕の字でわかるはずですよ。東京からいらしたこ

とにしておきます。あなたは東京弁だから……」

そう言つて、はじめて少し明るく男は笑つた。そして、紙を半分

に切ると、片方の方へ旅館のあり場所を地図で書きしるしてくれた

——貴船一郎——

それが男の名前だつた。

喫茶店を出ると、男は小百合夫人に残る心をむしろ自分で冷たく

制するように、

「では、氣をつけて……。来週金曜日の夕方に……」

そう言う男と、くるつと小百合夫人に後を見せて、足早に去つて行

つてしまつた。

【読者通信】

（八七頁ヨリ）其の後、性格相

入れず離婚同性への思慕やみが

たくアベノ附近の男娼へ大体女

装は嫌いなのですが最後のなも

のとして」と前後十数回遊びま

したが何時も心に残る不快は如

何とも仕方ありません。小生は

又女性とも遊び得るのですがそ

れは男娼以下の値しかなく只事

務的な仕事に過ぎません。小生

の最も心のひかれる男性の条件

は①毛深く野性的②中肉中背③

年令三十才前後④容貌には関心

なし⑤受能何れも可強いて言え

ば能動の方⑥責めに対して関心

なし。多分にベニスズイドでな

いかと考へます。お便りお待ち

します。

（大阪 M生）

○ 昨年中もそうでしたが本年に

入つてからの貴誌は実に洗練さ

れた編集ぶりです毎月手にする度

に胸がドキドキする位自分でも

その魅力に圧倒されるのです。

本当に私達の希望をぐつと掴ん

で放さないやり方には心にくい

ばかりです。きつと編集にたず

さわつていられる方々には斯の

道の達人の方ばかりだと思いま

す。一度お伺いしたいと思いま

すが巻末の但書きもあり遠慮し

ております。どうか今後共私達

の夢と憧れをかなえて下さるよ

う願ひます。

（愛知 森 草平）

KK通信大增頁

見本一部二十円
半年分、百円

本誌の愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いの機関誌として昨年十月号より発行しましたKK通信は号を追って充実、第六号からは一躍倍に増頁、こゝに第七号を迎えました。本誌をお読みになられた方は是非KK通信も併せて御覧下さい。

特別會員募集

愛読者の強い要望に答えて特別會員制による諸行事を企画しました。詳細及び申込用紙はKK通信第七号に同封してあります。

原稿募集

- 一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
- 一、内容は本誌に適當と思われるものでしたら如何なものでも結構です
- 一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
- 一、発表作品には発行後相當の謝礼を差上げます。
- 一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
- 一、締切日は特に定めません。
- 一、読者の体験告白文は内容及びその長短は問いません誌上匿名は御自由です。奮て御応募下さい。

(奇譚クラブ編集部)

◎編集方針について

読者のお問合せをお待ちします

尙本誌の内容編集方針について読者の御意見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい

- 一、縛られた女の写真に関して (辻村 隆)
- 二、男子同性愛の件について (染田 玄)
- 三、縛られた女の絵について (喜多玲子)
- 四、編集方針の一般について (箕田京二)

◎本誌の旧号在庫について◎

本誌旧号は昨年八月号以降より毎号若干保有して居りますが、七月号より以前は全部売切れでございます。昨年度の方は一部送共九十円、本年度の方は一部送共百円にて急送申し上げます。KK通信第四号以前品切れ。

◎御願ひ◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封をお願いします。但し文書輻輳の節は御返事の多少の遅延は御猶予下さい。尙理由の如何に拘らず直接御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承願います。

先ず書店へ

御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文献的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円

毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御買渡れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には實められる女の写真三枚一組一年分御申込の方には八枚一組サービス品として贈呈申し上げます。その外KK通信毎号贈呈

奇譚クラブ

第七巻 第四号
毎月一回一日発行

四月号 定価 百円

昭和二十八年三月二十日印刷
昭和二十八年四月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷人 上田 庄之助
発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。